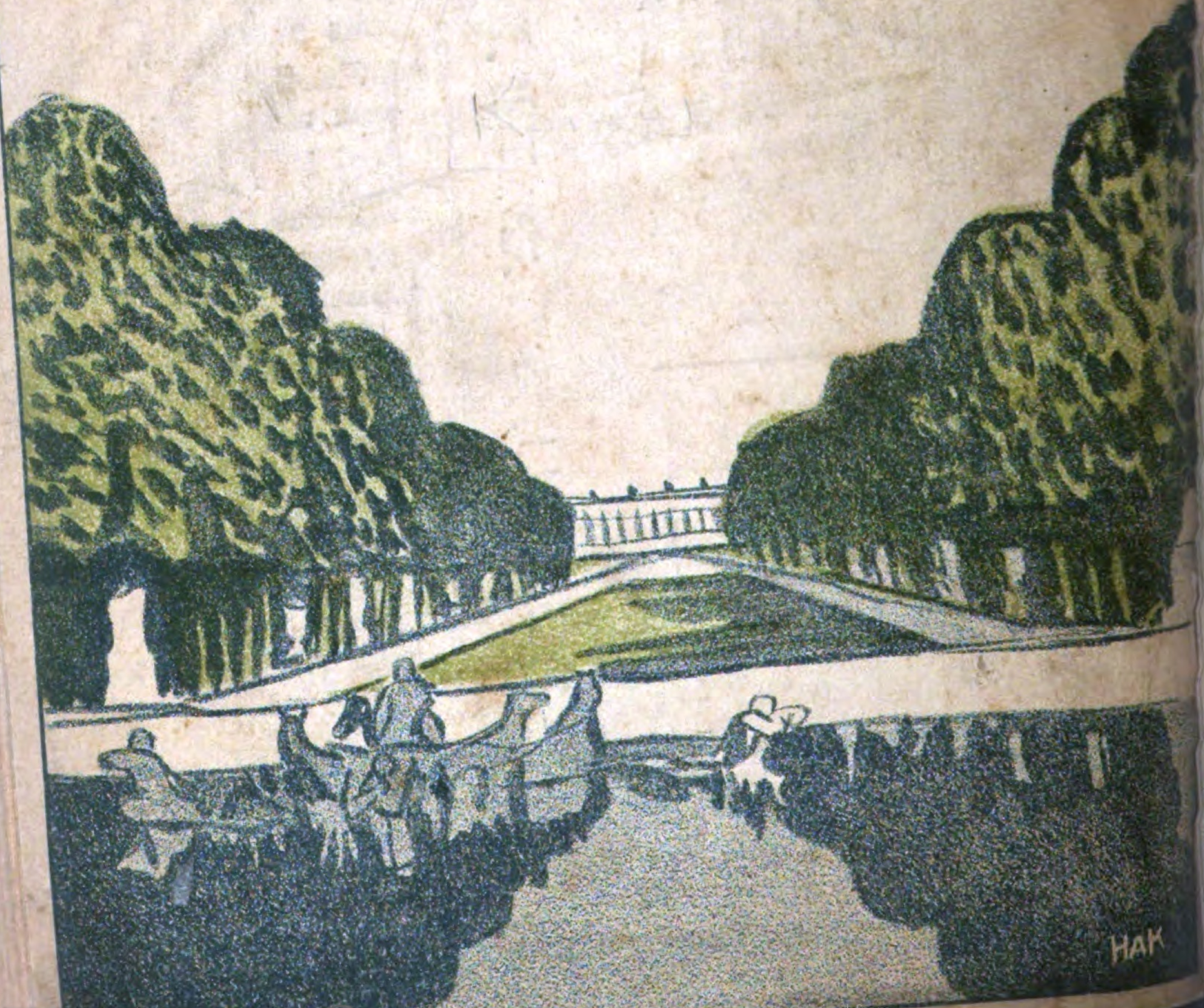
改造

五月號



拾壹版

山本實彦著

我觀南國

（洋裝菊判頗美紙數四百二十頁）

定價壹圓五拾錢

送料十二錢

◎寺崎廣業、黑田淸輝、小杉未醒、和田英作、藤島武二、町田曲江、岡本一平七畫伯挿畫

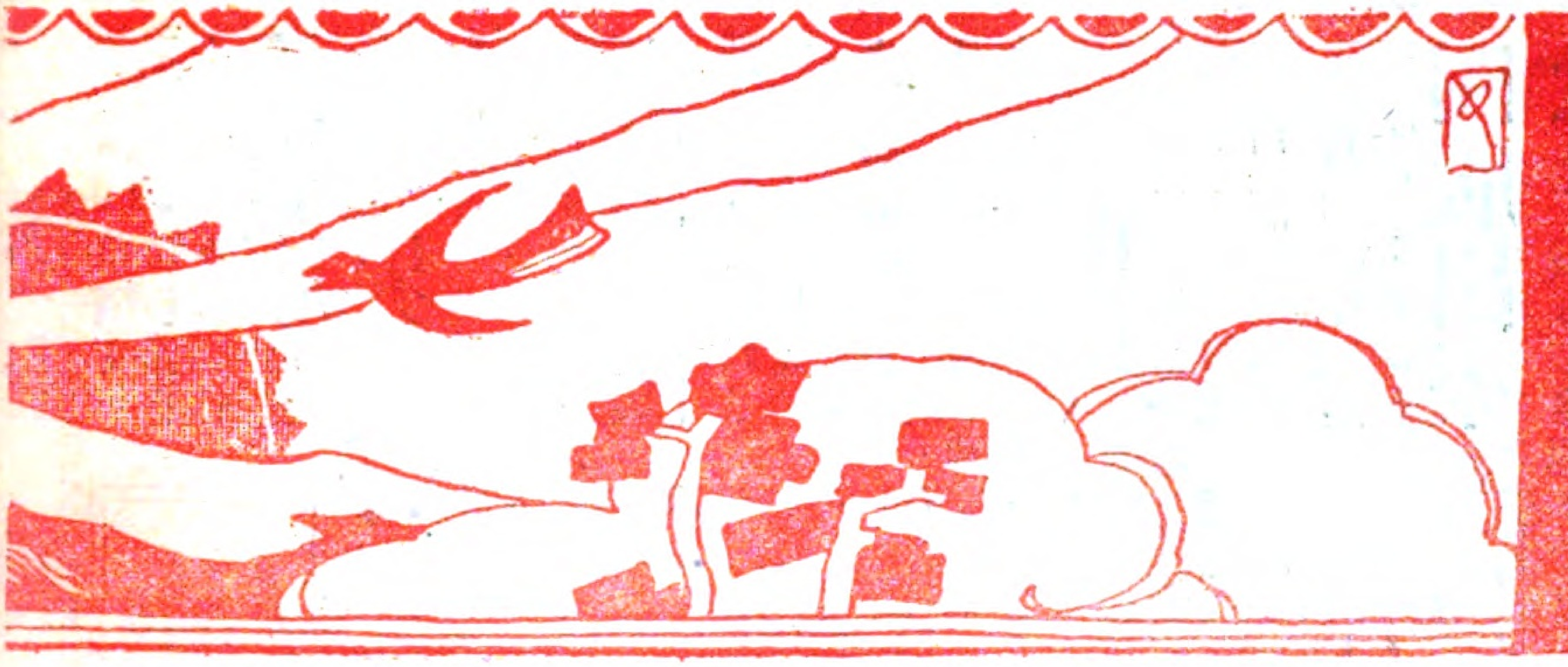
内容

▲スパルタと薩摩
▲箱根蘆の湖と池田湖
▲ドリアングレーと平田三五郎
▲神都川内
▲元帥「馬鹿半八」
▲宮守は閥族蛙は民黨
▲薩摩琉球の文學美術
▲天馬の說
▲春波四百海里
▲吐月峰蛇話
▲大久保とクロンウェル

▲書記官島より飯蛇へ
▲琉球の小赤壁
▲首里城とエヂンバラ城
▲舞姫カマデー
▲琉球史上の人物
▲糖業の沖繩
▲女工の天下
▲嗚呼海底の女
▲南九州の旅
▲靈の國日向
▲小村と伊庭

▲臺北大屯山上の瞑想
▲東京から臺灣
▲雪の上海
▲香港丘山の美觀
▲新嘉坡から瓜哇
▲瓜哇の首府
▲和蘭政府の壓迫振
▲醜業婦から蘭人の妻
▲瓜哇に雄魂なし
▲瓜哇王と語る
▲底力論

東京南品川東淺間臺二四六
發行所 改造社
電話高輪一一九〇
振替東京八四〇二



改造第二號目次

社論



（創作）

本誌第壹號目次

改造第貳號



──社論──

嚴肅なる政治を要求す

政治に活氣あれ眞面目なれ

我國には宗教らしき宗教がない。よし宗教はあつたにせよ、其教義には權威なく、布教家には見識者もなければ大人格者もない。また、我國同胞にどれだけの、信仰心があるかが疑問である。

政治家は互に權略を弄し、策士を以て任じ、策あり、略あるの大嘘つきが大臣にもなれば、總理にもなる。單に政治家のみでなく、商人でも掛引きの名人でなくては幾百萬、幾千萬圓の長者たるは難く、愚直愛すべきものに限つて、一生を陋巷で通さねばならぬ。外交官でも正義とか、人道とか、ただしは强い信念、剛直な意志の持合せの國士に限つて斥けらるゝ。銀行員も會社員も相場乃至は鑛山に投機でも試みる者でなくては、上級の社長や頭取になれぬような社會狀態である。上の好むところ下之を模倣せざるなく、番頭、丁稚の

徒も、些の道義的觀念なくして、掛引を以て唯一の商術と心得て居る。結局虛僞を以て商業上の六韜三略として居るやうな嘆はしい狀態にある。

故に日本人を指して無宗教、無道德、無教育の國民と稱せられても、何の抗辯が出來やう。かく日本人は個人として虛言を平氣で吐くほど不道德である。道德心の不足せるものに正義の觀念の强き筈がなく、正義の觀念なき人に威望の伴ふ例はない。獨り國民のみならず、政府も、國家も正義の道を踏んで一貫して行くものでなくては、永遠に榮ゆることは困難である。また、人として不義の權道を步いて、濁富虛榮に誇るべきものでもなからふ。

日本國民は前述せる如く、殆んど無宗教の國である。宗教が無い國だからとて眞理はある。正義はある。道德は存在している。しかし道德の標的を何れに求めるか、宗教に求めることが困難であり、不能であつたら國家に求める外はない。理想の高い、正義、公道に向つて終始する國家は完全なる宗教の如く嚴肅なものであつて、また慈愛、正義の標的にもなり得るものだと思ふ。

民本政治は近代の傾向である。しかしその我國に於て論議さるゝものゝうちで隨分と眞面目を缺くものもあるし、又論議する人格に對して敬服の出來難い者もある。吾人は眞に武斷政治、藩閥政治、官僚政治の惡弊を痛感するものであるから、これ等の惡政治を掃蕩すべく、新時代の靑壯年者がモット眞面目に、モット嚴肅なる態度を以て、ヨリ元氣强く舊政治家の城砦に突擊せんことを祈るものである。

そこで話は前に戻るが、昔の武士は虛僞を以て、士君子の齒すべからざる惡德と排斥した。そして一死を賭して、正義のために、また正義の擬制であつた主君の爲めに盡した。實際廉恥の念の爲めには、身命を鴻毛の輕きに比したものであつた。これは舊時代の舊い道德的觀念から迸出したもので、現今の道德觀から批判せば、是非の論も立たうが、その動機の至純、至善であつたことは爭はれぬ。

國家の行爲は嚴肅なるを要す

今日のやうに、國民思想問題が紛糾して來たとき、殆んど無宗教に近い我國民は奈何なる見地に立ちて、國民としての義務、人間としての責務を果さねばならぬか。如何なる方面に向つて活躍の歩武を進めたらよいのか。

何事をするにも其衷心に、國家の一員であると云ふとと、光輝ある帝國の一分子であると云ふことは忘るまじきことである。然らば自分の國籍を有せる國家が、假りに正義、公道に反したことをしたときは、それに服從する義務があるかと云ふ疑問が浮んでくる。人類の一員として、善惡の批判に依つて動く人性としては眞にあり得る疑問である。しかしながら、我國は未だ曾つて正義、公道に反して干戈を動かしたこともなく、我が陛下は仁義、愛敬の標的であらせられる。道德の標的は陛下若くは國家に求め得るが、不正、不義は國是として排斥してあるから我國家に對しては正義、公道に反した場合を想像するは難いのである。

思想界の混沌たるにつれ、國家的に觀察して行くものと、超國家的に見たる是非の議論は、一層喧囂を加へてくると思はれるが、吾人は我帝國の至純、至高なる目的の前には、斷じて不正、不義が働かれる、ものでなく、我が國もまた、國家の最高目的に向つて、嚴肅なる行爲をなし、一擧一動、威力の伴ふやうな、社會的に意義ある行動をなして進まねばならぬ。

もしも一歩を誤つて、國家の行爲が覇道を帶び、道義を顧みなかつたときは、國家の前途は暗黒となり、國民の生活には憂愁が漂ひ、國家に對する信頼が薄くなつてくる。そして宗教的に求めんとする、完全なる道德の基準もなくなつてくるのである。我が國民の信仰は歐米のそれと相違して、理想の國家

にその中心を求めんとしてある。それであるから國家の行爲が最善で、道義の軌道を外れない時に限つて、對國家的信仰が完全で、そして宗教的である譯である。しかしながら今後宗教の徹底的普及につれて幾分對國家的信仰が變遷せぬとも限らぬ。しかし宗教的にいくらか變化して行くのみで、國民としての國家觀には寸毫も變化はないと考へられる。

完全なる威力といひ、嚴肅なる國家の前途といひ、その源泉は、一に百千年に通ずる正義、人道の政策を奉ずるにある。かりにも國家の執れる行爲にして詐謀、權略、不正、不義に亘つたならば、我國はたとへ、物質的に領土は擴大せられても、有利なる利益は獲得されても、國民道德の歸趨を失ふて、國家の行爲には權威を缺き、そして何等の威力も伴はなくなる。之に反し、一時物質的に失ふ所があつても、外邦より侮蔑さるゝが如きことがあつても、正を踏んで恐れざる、道義の上に立つ國家ならば、その生命は永遠であつて、その國民の國家に對する歸服も、現在以上に信仰的に繋がつて行くのである。その信仰が繋がつてこそ、七千萬同胞が一死を鴻毛の輕きに比して、我が光輝ある帝國のために、團結し得るのである。

青年政治家の倔起と原內閣

國民的內閣の觸れ出しで生れた原內閣は、近く武官制の關東都督を改め、文武何れよりするも都督たり得る組織として、一面輿論に適從するの傾向を示したが、その任命せる長官、社長の顏觸れを見れば、何れも新しき氣分を喚起する新進者に非ずして、却つて、官場に試驗濟みとなれる、暮色蒼然たる手合である。折角の官制改革も、五月の空に一抹の陰氣を漲らしたに過ぎないの感あるは遺憾である。現內閣によつて嚮に講和使一行が任命されたときも、アヽ既に時代の人ではなかつたかの嘆を發したが、

今また、かくの如き古兵を新社會に紹介するに至つた。

現内閣は始めての政黨内閣のことゝて、出來るものなら、大目に見て置きたい心地もするが、原君によりて理想あり、元氣あり、精彩ある政治を見るとは殆ど絶望に歸した。全く情實に囚はれたる政治の行き方である。西園寺、原、加藤、犬養、寺内の時代は既に逸走した。現在政局の衝に當れる人々と日本民衆の思想とは全く交渉がなくなつて居る。何だか死屍のやうな政治家によりて、政治を玩弄せられて居るやうな氣もする。何等の目標を置かず、何等の使命もなくて、大海へ開帆せし汽船日本丸は何處の岸へか赴かんとする。無定見、無方針の原船長は七千萬國民を乘せたる大事な船を、果して何處かの岸に運び得るであらふか。勿論總理大臣に國民を指導する全責任がありとは言はない。

七千萬國民の、貴重なる血液や、油汗の結晶とも見るべき租税はいかにして使用さるゝか。その使途に對しては吾人は精細なる抗議をなすの權利があり、またその監督に當る權利がある。その使途の良否即ち政治の良否であり、その使途の責任者即ち内閣である。現内閣は成立以來、つとめて民心を納れていくらかの事功を樹てた。しかし仔細に政治の跡を看來れば、何處にも眞面目と元氣とを缺いて、やゝもすると黨本位に陷りつゝある。文部行政にせよ、遞信行政にせよ、内務行政にせよ、たゞしは内閣の高等政策を見てもその通りである。

現今の日本はいかなる重大時機であるか、區々たる黨利に趨り、情實に促へらるゝ時ではない。大處、高處より達觀し、正觀して或場合には巷説に耳を假さずして、邁往千里すべきの時である。

勞働問題も徹底的に解決せなくてはならぬし、普通選擧法案も近く解決する必要がある。講和會議に於ける重要議案もその通りである。而してこれ等の諸問題は原内閣の威望と決斷によりて解決が出來るか。原内閣にして解決不可能ならば、一日も早く挂冠して然るべきである。されぱとて、この議會に熟

柿主義とかを持して、正面から堂々の陣を張れなかつた憲政會が後繼内閣を組織して、以上の諸問題を片付くるだけの信望と威力があるか。そしてその資格があるか、これ疑問である。さうなると總てのものを新しく蒔直してかゝらねばならぬ。それには新鋭の氣に滿てる青壯年者の政治的新運動に期待する以外に道がない。

然り、眞に然りである。國歩の艱難なる今日では到底憊れ切つたる古兵の手では不可能である。どうしても岩をも眞鐵をも貫くやうな大氣魄ある二十代、三十代の新手で、一搖りに押潰さねばならぬのである。

朝鮮統治方針を更新せよ

今回騷擾の責任を彼等鮮人にのみ負擔せしめるのは酷である。しかし朝鮮人今回の擧措は朝鮮人そのもの丶爲めに、果して有益であつたらふか。また彼等の要求せるが如き事に政治の局面が轉換したら、果して人道のため、平和の爲めに喜ぶべきとであらふか。曰く否。合併前の朝鮮に見よ、外は露、支から脅迫され、内は警察に威力なくして、生命は危險に瀕し、財産の安固をも保つことは出來なかつたではないか。加之、朝鮮の財政は破綻百出して、拾收するに苦むの狀態であつたのは、記憶に新たであらうと思ふ。しかし廣い人道の上から見たり、高い正義の觀念から判斷したら日本政府も、日本國民も惡い一部分の責任は負擔せねばならぬ。朝鮮は我屬領にあらずして我が併國の延長である。英國が印度に對し、加奈陀に對するのとは自然にその行き方が違はねばならぬ。であるから彼等に對しては互にいたみ合ひ、助け合ひして行ねかばならぬのに、事實は之に反して萬事彼等を「ヨボ」扱にし、文官の任

用だとか、事業の經營だとか、皆劣等人種に對する待遇をしている。尤も文化の程度、經濟的方面より判斷して内地邦人の遣り方の無理ない所もあるが、我等も歐米人からかく差別的冷遇され、虐待さるゝによつて、人種差別撤廢などの案を提出しゝそして精一ぱいの力瘤をいれた譯だ。それに同文、同種で同一國民でありながら、シックリと兩者の心を合はせる事の出來ないのは、太甚だ遺憾事である。

我が對朝鮮策は根柢から誤つてゐる。第一が教育方針根本の錯誤から來たものである。朝鮮は獨立國として數千年の歷史を有するもの、それに彼等に對して忠君一點張りの教育を施しつゝあるは如何なる理由であるか。その結果はいかん。そして外部からは、丸で之に背反せる憲兵制度による嚴重なる取締方針を以てしてゐる。矛盾、撞着極まれりと云ふべしである。朝鮮今回の騷擾の原因の總ては知らず、されどかくの如き根本に於て誤れる方策を以て之に臨みながら、その原因の發見に向つて草の根を分け、山の奥を深く探究するなぞ滑稽笑ふべしである。その眞因を知らんとせば、須叟く朝鮮學童の教科書の一頁を繙くにある。

かく根本的に統治策を誤りながら、その病弊の由つて來れる所を知らざるは憫むべしであるが、勿論憲兵制度を採用したため、鮮人の惡感を挑發したのも原因の一たりしことを否定するものではない。また宣教師等の行爲を是なりと認めるのでもない。しかしながら以上の諸原因以外彼等の同情と理解の缺けていたのも事實である。唯だ尤も注意を拂はなくてはならぬのは、騷擾が起つたからとて、朝鮮人が現狀の政治に滿足しないからとて、又は外人の監視が嚴重であるからなぞと遠慮して、姑息な彌縫策を講じ、周章てた應急策を以て當面を切拔くるに腐心するが如きは、愼まねばならぬ。須叟く帝國百年の長計から打算し、人道、正義の上に立脚した、徹底した改革を斷行して、彼の悅服し、信賴する政策を選ばねばならぬ。彼等の文化の程度は年と共に進み、經濟的方面に於ても一段の進境を見ることゝ思は

れるが、その時は我國民は進んで彼等に參政權を與ふることをも盡力し、我政府またかくの如き考案を以て彼等に對して貰ひたい。彼等鮮人も亦自ら自治的訓練を今日より心懸けおくの必要がある。

政治は人生の花であり、實でもある。政治を有せざる人種ほど、憫むべきものはない。內地邦人もこの點を諒解して、出來るだけの同情を表し、官憲も苛察は避けてもらいたいものである。

それから內閣と總督府との意思疏通を缺ること、否、內地政治家が朝鮮及朝鮮人に關する智識を缺ぐ結果から來たものもあらう。これには二つの原因がある。第一は官制上の不備から來たものである。朝鮮總督は臺灣總督と違つて、內閣總理大臣の監督を受けていない、唯だ政務に關して上奏をなすとき、奏任文官の進退を決するとき、所屬文官の叙位、叙勳を上奏するとき、內閣總理大臣を經由するのみで、總ての政務、事務悉く全權を帶びておるのである。

臺灣總督の內閣に於けるが如く監督を受けておれば、自然法制上の事にあれ、實際的の政治、事務振りにあれ、內地にて問題となるの機會が多いのであるが、監督機關なきため、宛然一王國の如き狀態を呈しておるのである。

第二は統監たり、總督たる人物が、威望、勢力の點に於て、內閣總理大臣に對して、隱然たる一敵國をなし得るものか、若くは聲望却つて總理大臣を凌駕するの實力あるものがある。伊藤公、寺內伯の如きはその一例である。朝鮮は殖民地でない。母國の延長されたものであれば、中央の政令も一絲亂れず徹底する方策を執り、その行政、司法萬般の方面に不條理、不徹底のなきを期せねばならぬ。それには朝鮮總督の官制改革である。次に朝鮮在住の日本官吏が世界的思潮を解し、咀嚼する能力の極めて低いのにも原因することだらふと思ふ。

現內閣は既に關東都督を廢して、武官制を執れるによつて、列國から誤解を招いた侵略主義の疑を解

き、一面武斷政策、官僚政策に弊害多しとの內地の輿論を納れた譯であつた。朝鮮總督の改革の如きも、唯だ輿論に迎合するが如き、輕き改革たらしめずして、根柢から自信のある勇斷をしてもらいたい。

次に朝鮮人に對しても一言なきを得ぬ。人類として世の中に棲息して行く以上、よく共同生存の意義を辨別し、國家てふ威力で結合して行かねばならぬものであれば、それ相當の經濟上の負擔もあらふし、軍備の施設も必要であらふ、現在の朝鮮でそれが出來得るか。正義、自由、平和など言ふても、その一面に武裝せる威力の存在せざる以上、何等の權威もなく、何等の拘束力も生ずるものでない以上、自らの力量を深く顧みて貰ひたいものだ。世界の大勢は、まだ鮮人の考ふるが如く、しかく理想論や書生論で行くものではない。誤られたる傳統的の國家觀や、一知半解の學生の煽動に乘ぜられて、輕擧妄動するやうでは、幸福にと思つたことも、不幸に轉じ、再び、苛酷の壓制に逆戻りするが如きこともなしとせぬ。世界の一隅には甘く見せかけて、幸運を呪咀せんとする惡魔は潛んでいる。明治四十三年八月以前の朝鮮人の內治外交に對する惱み、生活上から迫害を受けた苦痛と、現在とを較照して前途を靜に勘算して見たらよかろう。帝國は其間に決して不義不德を働くことなく、現在また、英、米等の植民地に對する以上に、鮮人の權利を尊重し、仁政を布くを以て朝鮮統治に當りつゝあるのは事實であるから。

英米の帝國主義を破れ

カイザー不正の慾求を滿たすべく起された、歐洲大戰亂は聯盟軍正義の旗風に追ひまくられて、漸く終奄するに至つたが、又これに代る怖るべき、新帝國主義は獨逸以上の威容を示して、出現するに至つ

た。そして、苟も利益のある所には何者をも犠牲に供して、小弱國の權利を褫奪し、憫むべき小國民を經濟的に鏖らんとする、經濟的帝國主義者が出現するに至つた。

戰爭を意味する帝國主義が、世界の平和、人道のために大罪惡であるが如く、平和主義を標置して、原料品、市場を獨占せんとするの帝國主義も、人道主義や恒久の平和を絶叫する者から見れば、同じく世界の秩序潰亂者として同罪の被告である。もとより吾人は帝國主義なるものを根本に否認せんとするものではない。獨立國として國民の發展と國民の安全を期する上よりして已む可らざるものとするも、米國の如く、廣大にして豊饒なる沃土、山野に充滿せる無數の寶石礦物を包藏せる以上、自國の供給にして不足を感ずる所がなかつたならば、これを原料品の缺乏せる諸國に供給するこそ、人道の上から論じて當然の事である。

そしてウヰルソンは千九百十八年一月八日付教書に於て「平和條約に署名し、且其の維持に協力せんとする一切の國民間には、出來る限り短時日の間に一切の經濟的障害を排除し、以て均等なる商業上の條件を設定すべし」として先づ列國を威嚇して居る。その態度既に乃公は平和の解決者としての一切の鍵鑰を把握せりと云ふような横柄振を發揮している。米國は原料品國として自給自足し得るは勿論、南米の寶庫を擁せる世界最强國の一であるから、生産にも何一つ不自由なく、奢侈品から食料品まで贅澤を盡し、國民の總てが枝を交へ、穗を竝ぶるの幸福を擅にしておる。そして一旦事があつても、軍需品にも、戰爭器具にも、何等他國の助力に俟つの必要がない。

米國政府は、各國に向つて經濟的均等の商業上の條件を設定すべしと聲明した、併しながら今回の國際聯盟に對しては、一向に經濟上の障壁を撤去せやうとはしない。中小國の徒も鳴りを潜めて傍觀して居るのみである。經濟上の競爭は、やがて肉彈戰爭の第一歩たるに心づかないかの如くである。カイザ

Ｕの如く潜水艇や、飛行機や、地雷火、ダム〳〵彈など、野蠻の武器を並べ立てゝ文明を嚇威し、文明を呪咀し、世界の秩序を破壊して、自己の不正の慾望を達成せんとした英雄的狂行爲は、かくして無殘の最後を見るに至つたが、然らば、正義、人道、平和、自由を招牌として、南北米の大生産地を獨占し、その富源を悉く封鎖して、同じく經濟的優越の覇者として、小弱國を脅威しつゝあるウヰルソンに對しては、神の前でいかなる審判を與ふべきか。

若し、ウヰルソンにして眞に人道の擁護者であり、眞に平和の愛好者であつたならば、國際聯盟の條項に經濟上の障壁撤去の案を明確に記入して、小國に安心と慰安とを與へ、また人種差別撤廢案にも、斷乎たる態度を以て奔走努力すべき筈である。

それから、英國にしても、誠心誠意世界の平和の爲めに盡す念は毛頭ないのである。それが證據は人種差別撤廢案に對する、ロイド・ジョージの態度の糢糊として、何等決定的答辯が見られぬのがそれである。單にそれのみでない。英國では平和條約締結後十年間。濠洲及新西蘭に於て該地に産する亞鉛羊毛の全部を買占め、埃及にては棉花、ビルマにては米の輸出を管理する策を決定してしまつた。そしてその他の植民地及自國から産出する非鐵金屬は、或期間内を一切政府で管理することゝして、經濟鎖國の主義を斷行してしまつた。

我が國の如き自給自足で立つて行けぬ國は、獨逸が戰時中列國の經濟封鎖に對して執つた如く（一）必須原料品の嚴格なる節約（二）生産の擴張（三）數多の代用品の使用の三手段を以て獨立して行けるか。曰く否。然らば英、米の經濟的鎖國主義を打破するより外に道は求められぬのである。（四月十四日稿）

咬豆茶話

△今回の内閣ほど、閣議で議論を鬪はさぬ内閣も尠いと云ふ噂だが、何でも、原の差金は、頂からピリまで、通過するそうだが、いつその こと、一大行政整理を斷行して、内閣を一省にしたら、どうだと皮肉るものがあつた。唯だ、農相の山本だけは、一寸原にも憚られて居るゲナ。

△陸軍閥と、外務閥とは、イツも犬と猿で、反が合はぬが、支那問題でも、陸軍が北方援助を遣れば、外務は中立だと出る、西伯利でもその通り、陸軍がホルワット、セミヨノフ、カルムイコフ援助をやると、外務はヴォルゴドロスキーの肩持ちをやる。所が、此頃は、原と田中が情意投合し、兩人一致連衡して上原イヂメを、企劃してるとの巷評がある、マサカ、今になつて增師問題の、仇討でもあるまいに。

△ヨセばいゝのに、權助もとう〱、關東長官まで成り下つた。麒麟も老いては、何とやらの、御多聞に洩れず、さりとはあんまりに情ないぢやないかと、彼の昔を知るものが、落膽していたつけ。權助サン、確乎頼みますぜ。

△參謀本部から、陸軍大學校長になつた。宇垣一成は、田中の智慧袋で、陸軍切つての人望家だが、此男少々膽つ玉もある男で、或陸軍の將官なぞは、田村、松石以來の大物と、賞めそやしておるが、田中の音ん兵衛大臣と、何處まで、道連になつて行けるかを、疝氣に病み岡燒もするが、ナーニ一成は、そんな野暮天ぢやネイやと、冷かし居る粹男もあつた。

△長閥と、薩閥は矢つ張り暗鬪を繼續しておる長閥立花が關東に榮轉するかと思へば、薩派の與倉がその後釜に据るなぞ、陸軍は何處までも、情實の府で、困つたものだと、會津のさる男が。憤慨して居た。

△堅物の下村宏はヤットコさ、久方振りの念願が成就して、法學博士の稱號を克ち得たが、その推薦者の或者の曰く、イヤ奴も、緣の兄弟の岡實が、一歩お先きに博士號を失敬したので、氣の毒でならなかつたヨ、それで今回はその氣の毒が手傳つて。最高點で當選した譯だ。下村はそれで難かいのだらふが、京大の米田は、實力、識見優に博士になる資格がありながら、僅に二三點の差で、落選したのは殘念であつた。イヤ博士といふ、金箔はよつ程、重寶なものと見え、大阪の砂川雄俊なぞは、今度で二十回も辯護士會から推薦されたものだが？博士推薦では最後であつた。今回も矢つ張り、落第のイの一番で、あつたとは無殘の極。

論説

世界改造の哲學的基礎

——勞働問題、文化主義、人格主義——

文學博士 桑木嚴翼

一 緒言

世界改造は今の流行語である。凡ての流行語には必ず何等かの濫用誤解を伴ふものであるから、此語に對して或は一種の嫌厭を感ずる者があつたとしても、必ずしも之を固陋とか執拗とかとのみ目すべきものでもあるまいが、然し此語に卑俗な意味が附隨するといふことによつて、直ちに此語自身の包含する眞意を沒却無視することは固より正當とは言はれないであらう。世界歴史は或意味に於て常に世界改造の過程を示すものではあるが、然し現今に於ける程大規模に於て又眞率な形に於て此事の唱道せられたことはあるまい。固より提唱された種々の意見が如何許實際に現れるか、といふことは豫知することを得ないが、とにかく從來多くは夢想に過ぎぬと思はれた論議が、堂々たる實際當局者の口に上つた、といふことは、決して漫りに冷笑し去り若しくは徒らに猜疑の念を以て遇すべきことではないと思はれる。政治家の中には往々、此の如き論議が實際家の口に上つたことを訝る者もあるが、是れ畢竟彼等が平生思想の勢力を無視するに過ぎ、當面の政策を講ずることに汲々として其根柢に存する精神の推移に想ひ到らないからである。政治家は或は口を齊へて自由と言ひ進歩と稱するも、其の所謂自由も進歩も單に

外形枝葉の事に過ぎざることが多く、而して是以上毫も人心の機微に觸るゝものが無いと信じて居るのである、といふことは其が此の如く苟くも理想上の事に關する問題になると、全然人間に有り得べからざることのやうに判斷することを以て證せられる。思ふに今日の所謂世界改造は最早單なる外部生活の事ではない、而してかく其事が既に逐日政治の範圍を脱するといふことは、之を說くに當つても亦先づ其改造の基礎より撿出するの要あることを示すものであらねばならぬ。

私は今此改造を以て、單に外部生活の事ではない、と言つた。然し今現に最も强く人々の注意を惹きつゝあるものは、寧ろ此外部生活の事であるのではないか。戰後の經濟問題、勞働問題等が今日最も多く人々の心を勞する所であるとすれば、之を以て如何にして外部生活の事でないと言へるであらうか。甞て人は宗教を說き、同情を唱へ、以て勞働者の慰安を圖り、經濟上の不如意を諦めしめんとした。然し今は此の如き間接の方法によりて滿足する能はざる程、人々の生活は切迫して來たのである。私自身嘗て哲學の傍、文藝の書を雜讀することを娯樂として居たが、今は是等の書よりは寧ろ社會實際の問題を論ずるものに多少の興味を感ずるやうになつた。斯くて文藝の一ディレッタントは社會問題の一ディレッタントとなりつゝあるのである。此の如きことが世間の一傾向であるとすれば、今日の改造は正しく此生活問題の不安に關するもので、結局外部に關するものに過ぎないであらうか。然らば現今の所謂改造も、過去に起つた諸社會改良の聲と同じく、毫も敢て新とするに足らないことになるであらうか。故に若し新に改造の基礎を建立するを要するとして而して進んで之をなすが爲には、先づ是等諸社會生活問題が從來の外部生活問題を以て解釋し去られざるものであるといふことを明にする所から論出せねばならぬ。

二　勞働問題

顧ふに貧富貴賤の差別は古より見る所で、而して又之に對する適當なる妥協を試みることも常に人々の努むる所であつた。然し如何に無盡藏の資力を以てしても、富貴と同一の滿足を貧賤に享けしめることの不可能なる事は明である。施與も救濟も到底富貴と貧賤との差別を撤することは出來ない。否、富貴が富貴たる特權を保持する爲には、必ず貧賤を其狀態に止めて置かなければならぬ。此の如くして外部的に滿足を與へることは到底不可能である爲に、轉じて內部的に何等か慰安の途を講じ

ようとするものが生ずる。所謂理想論の中には、此の如き事情の下に一種の諦め的政策として生じたるものがあることを否み得まい。此の如くして心の貧しき者は福なり天國は即ち其人の有なれば也、とか、富める者の天國に入るよりは駱駝の針の孔を穿るは却て易し、といふが如き敎訓が說かれるのである。固より此の如き宗敎上の理想論は、貧者慰安の方便のみとして說かれたものではなく、眞に然るべき理由ありとして說かれて居るのではあるが、然し信未だ篤からざるものが卒然此言に接すれば、又或は斯る感想を抱かないとも言へない。左に右、宗敎上の信仰を欠く爲か、或は實際生活上の辛酸なるによるか、人々は最早此の如き慰撫によつて滿足するを得ないやうになつて來たことは事實である。私は又此の如き失敗せる敎訓の一例として、更に彼の勞働神聖論の如きものを擧げることが出來ると思ふ。如何に巧妙に勞働者の尊むべきことを說いても、現在其が社會上劣等の地位にあることを改めざる限り、何人も衷心甘んじて其言に服することは出來ないではあるまいか。此の如くして人々は一切の形容を去り辭令を斥けて、端的に其生活の改善を欲するを示すやうになる。オーエン、ゴトヰン等の唱道した社會主義が、今日に於て幾分か空想的外貌を呈するものとせらるる所以は、又是等諸家が漠然たる仁惠論を基礎として社會改良を試みたのに歸することは辯を俟たぬ。

更に又此の如く貧賤者の自覺を助長する者は、近代に於ける實證主義の全盛である。實證主義は學術研究の方法としては、たゞ事實的證明のみを許して毫も思辯推測を用ゐず、其の期する所は常に事實の記述によつて實利の增進を圖ることである。隨て之を其の實際生活に於ける應用に就て考へれば、生活に直接關係ある物資の供給を重要視する思想を招致するに至ることは怪しむに足らない。實證主義は必しも唯物論ではなく、理論上の唯物論は必しも實際上の唯物論を伴ふものではないが、然し人々の確實に認識する事實は所謂物質現象に關するものが多く、近世の科學も主として之に對して其因果關係等を決定するとを得、更に其方法を敷衍して所謂精神現象にも及ぼさうとして居るから、實證主義即ち自然科學萬能主義は、自から社會の根本的說明を物質的基礎よりするに至ることを避けられぬ。オーエン等の理想論に對してマルクス等の科學的社會主義の期する所も亦自から此に存する。而して今日の世界改造の企圖は直接若しくは間接にマルクス說と關係して居るから、其と共にマルクス主義の中心問題たる生活の經濟的解釋を脫却することが出

來ないやうに見える。是に於て我々の問題は、愈外部的立脚地に屬することにならねばならぬのであらうか。

三　マルクスの學風

私はまだマルクスの大著を研鑽するの遑がない。其他凡て此種の問題に就て毫も深く究めた所がないが、試に少しく學び得たる所に就て察すれば、其說が剩餘價値の說と所謂唯物史觀とを基礎とする點に於て理想主義を擺脫し、勞働階級の爲に眞に闘る所あらんとするものであることは明である。其の私淑せるフオイエルバツハが「人は其の食ふ所のものなり」といふ言を喜んだ通り、マルクスも亦人生問題を其の經濟的方面から解決したもので、或箇處では明に、ヘーゲルの如く理念によつてのみ世界の發展を說明せんとする企圖を非難して居る。今もし其が歷史上の事件を悉く貧富の爭、即ち勞働者と資本家の階級鬪爭によつて說明せんとするものであれば、其の中には確かに眞理もあり、少なくとも斬新奇拔と稱すべきものもあるであらうが然し之を以て其說明の全體とするには多少の疑惑を存し得る。其の剩餘價値の說も、其の巧妙なる說明中に或は幾分の空理も含有しては居ないか、といふ懸念がある。然し是等の疑問は或は單に素人考に過ぎぬかも知れぬから、私は今まだ深く此問題に立入らうとしない。唯是等の經濟說は一見唯物論的で實證主義の一面と酷似する所があるやうであるが、其說の系統は之をフオイエルバツハより更に其源たるヘーゲルに溯り得とすれば其がヘーゲルの理念說を駁するだけ其丈け、之と關聯する所があることを示して居る、といふことを指摘し得ると思ふ。圓轉滑脫なるヘーゲルの辨證法は、常に自ら矛盾を生出しつゝ自ら之を解除するを試みるから、本來物質を理念發展の一段階に過ぎずとした哲學から、反て物質を實在とする思想の生ずるのも怪しむに足らぬと共に、其の物質本位の說明が自から自然科學研究の結果を無反省に擴大した十八世紀の佛國唯物論や、十九世紀中葉に於ける獨逸の唯物論者ビユツヒナー、モレシヨツト等と趣を異にする所がある、といふことも認めざるを得ない、或は極言すればモレシヨツト等も、其が獨逸形而上學によつて幾分なりとも影響せらるゝ限り、十八世紀のラメツトリや其他全然哲學的素養なき人々の所說と異なつて居るとも言へるであらうが、其はとにかく、我々はフオイエルバツハに於て諸所にヘーゲルの辨證法を想起するが如く、マルクスに於ても亦其趣を認めざるを得ないであらうと思ふ。マルクスはたとひ唯物論

を唱へたとしても、是れたゞヘーゲルの理念形而上學に代ふるに物質形而上學を以てしたものである。故に其が勞働といひ資本といつて一切の理念理想を語らざる如き態度を示す裡には、實は是等經濟的事實の名によつて一種の理想を説いて居ると見るべきではあるまいかと思はれる。

　マルクスを動かしたものは單なる抽象的論議の興味のみではない、實に當時の社會組織の缺陷である。隨て其が當面の急務として勞働階級を特に重要視し、反動的に其の窮厄の地より一躍して權力を得しめんとすることを努めて居るから、其が赤裸々に勞働階級の今日受けつゝある分配の不平均より逃れしめんことを力説して、恰かも此種の經濟問題の他何物もないやうに説いて居るが、かしこに物質形而上學の存することを知り得るが如く、我々はこゝには又勞働の理想的觀察を認め得ぬであらうか。從來の如く勞働を神聖なりとし、或は資本家の温情に依賴する如きことは、現象世界の他に基本たるべき實體や理念等を立つる如きもので、畢竟空夢たるに過ぎぬ恐れがあるが、勞働と理想とは此の如く二元的に區別せらるべきものではなく、物質即理念とも稱し得るが如く、勞働即理想に他ならないといふ見解も下される。即ち、從來の如く勞働を以て單に物質的手段とのみ解する立場に止まれば、如何に筆を以て之を讃美しても、要するに机上の空言たるを免れないと思はれようが、既に勞働と理想とを一元的に解釋することを得るとすれば、勞働といふ語に新な内部的意義が伴ひ、而して勞働階級が資本階級に對して拮抗するとは、畢竟現在に生命ある理想が過去に生存せる理想に對して鬪爭するものと看做し得る譯である。

四　勞働理想の一元論

　所謂勞働と理想とを一元的に解釋するとは如何なる意味であるか。曰く、勞働を單に生活の一手段と看做す限り、勞働問題は勞働の目的に關する論議を伴隨し來らないが、既に勞働問題を以て生活の全部を解決する端緒とする上は、此勞働其自身の中に既に其の過程によつて到達せらるべき目的が包含せられねばならぬ。勞働者が資本家の經濟的壓迫を受けることは苦痛であり又不合理であるには相違ない。然し勞働者の事業が經濟活動の手段の一部たるに止まるとすれば、其が其目的の爲に或度の壓迫等を受けるとは苦痛ではあるが、必しも不合理ではない、といふとがあり得る。勞働者の壓迫が不合理ならば資本家の壓迫も亦不合理でなければならない。故に單に階級戰爭の意味で

資本家を呪咀するのはまだ適切でないと思はれる、何者、其は所謂水掛論に過ぎぬからである。然も今日に於て特に勞働者の側の聲に聞くべき點が多いとするならば、是は單に勞働者の待遇等が悪いといふ如き一時的の事情に止まらずして、勞働者に對する從來の見方の誤謬を意識し、勞働の目的を勞働者の活動以外に求めないやうにするが爲である、とせねばならぬ。是に於て始めて勞働問題も單に外部生活に限られず、直ちに理想問題と結合し、然も其の空漠たる所を補ふを得るのである。

然らば如何にして勞働者が其自身の活動中に目的を發見するを得るか。是れ勞働なるものを以て勞働者自身の人として爲すべき全體であると見る立場に在つて初めてなし得ることである。(或は是が勞働神聖論の歸着すべき眞義かも知れない)此の如き立場に在ることは即ち人が自己を自由なりと意識することである。而して此見地よりすれば、勞働は勞働者が自己の自由を以て生活の自己目的を達する過程に他ならないのである。隨て勞働に對する分配の問題は即ち正義自由の問題と連結し、表面上物質的關係の事に過ぎないが、其裏面には人が自由を得んとする欲求を示すものに他ならないことになる。此の如く勞働問題を導き入れることによつて從來の單純抽象なる理想論は複雜具體となり、而して勞働を理想と結合することによつて、勞働問題其自身は結局自由の問題を離れては成立しないことを示すに至るのである。

勞働問題を斯く解することによつて其が今日の世界改造に關係する所以を示し得ると共に、之より推知して世界改造の基礎を定めることが出來る。凡て或る判斷或る知識或る行動等の基礎となり、是等のものをして論理上可能ならしめる所のものを其の「ア・プリオリ」即ち先天的要素といふ。今日の勞働問題に於て人々の第一に要求する所の自由、即ち各人は平等に待遇され其範圍内に於て選擇の自由を有する等の事は、此問題に於ては亦其アプリオリとして考へられねばならぬ點である。是故に今日の改造問題に於て其基礎となるものを求め行けば、結局勞働問題等の外部生活を通じて現はるゝ内部生活發展の要求に他ならない。人々の内部生活即ち其の自我が自由なる發展を遂ぐることを文化と名づける。隨つて世界改造の先天的基礎は、文化を第一義とすることに存せねばならぬことになるのである。

五　文化主義

我々は此に文化主義の語を導く機會に到達した。一見すれば

此語は頗る自明の理を說くに過ぎざる觀がある。何者、何れの時代何れの社會も、苟くも蠻野未開の狀態を希望せざる限り、皆文化主義に屬するやうに見えるからである。然し其內實を究めれば、文化を以て他の事業の手段とする場合も少なくないことを發見し得るであらう。例へば軍國主義を以て文化主義に對せしめる場合の如き、固より軍國と雖も全然文化を欠如する譯ではないが、一切を軍事上の見地から考察する餘り、人の自由發展を阻害する場合も無いと言へぬ。或は又、實際生活に重きを措くに過ぎて、苟くも現實を脫する如き文化を顧みない傾向のものも政治其他の方面に於て存在し得る。勞働問題經濟問題の如き、時としては單に其表面の意味に解せられて、文化の興隆と沒交涉になることがあり得る。是故に文化主義は決して其が卒然想像せらるゝ如き自明の理ではない、寧ろ先づ文化の概念より論出して其の基礎を確立するを要する程、論理的に不定な意味を有するものなのである。

文化といふ語は又人文とも稱し、自から文明と異なつた意味に用ゐられて居る。蓋し文化も文明も字義より言へば差別はないが、文明といへば普通に英語の「シヰリゼーション」を聯想し、文化といへば獨逸語の「クルツール」及び英語の「カルチユア」を想起するやうになつて居る。而して此二者に就ては人々異なつた解釋を施し、獨逸の學者は或は、文明を以て物質的機械的方面の發達の意に解し、文化を以て高尙なる精神的產物例へば藝術宗教學術の如きものを包括する名稱とするが、之に反して英米佛等の學者中には「シヰリゼーション」を以て人道的平和的文明の意とし、「クルツール」を以て國家的武力的文明の意とし、而して獨逸が其の「クルツール」に誇りて之を世界に宣傳するが爲に戰爭を開始し、更に其手段として殘虐到らざる所なきことを指摘して、遂に此の如き蠻行其ものを獨逸の「クルツール」として嘲罵するに至つた。然しながら「クルツール」若しくは文化といふ語其自身には固より何等惡意を有せざる筈であるから、高等なる文明を表す語として之を用ゐるも毫も不當の事とは思はれない。本來文明を分つて物質的と精神的との二とすることは種々の誤解を伴ふ恐れがある。文明は凡て人の所業であるから、何れも精神的ならざるものはない。所謂物質的文明なるものを以て毫も精神的文明に關係なしとすることは、昔日の形而上學的謬見の名殘りに過ぎぬ。物質と精神とを形而上學的に二本體とすることが誤りである如く、實際の經驗上に於ても物質的現象と精神的現象は相關係して其差別を附けにく

いことが多い。物質上の進歩發達が所謂精神界に刺戟を與ふると共に、一方精神界の活動が所謂物質的文明を促進する、といふことは許多の事例を以て證明せられる。其故に所謂精神的文明は單に精神界の現象なりといふ理由で物質的文明と區別せらるべきものではないが、之を人の理想的活動の意に解すれば、他の實際的手段の活動に關するものと對立せしめ得る。此意味に於て普通の文明と區別して文化といふ語を用ゐることは、議論の進行上便利と思はれるのである。

然らば高等なる文明といふ意味に於ける文化は、抑も何を以て其の高等なる所以を示さうとするか。之が爲には先づ其と全然反對の意味を有する概念と比較することが適當である。文化に反對なる概念は即ち自然である。元來クルツールといふ語は耕作の意を有するから、土地を自然のまゝに止めずして加工することを意味する。自然の土地其自身には本來何等の價値はない。此自然に對して人爲的に限界を附し、種子を下し培養を施すを待つて始めて之が價値を有するものとなる。此の如くして文化は當然或る價値を有するものと考へられるが、所謂價値は普通解せらるゝ所によれば人々の時々刻々に於ける欲求と外圍の事情とに依存するものであるから、其點に於て相對的たることを免れない。若し文化が此の如き相對的價値を其內容とするとすれば、其文化は到底世界改造の先天的基礎とするに足らないであらう。何者、相對的なるものは常に變動するもので、而して變動するものは決して他の基礎となるを得ないからである

プラグマチスムを奉する者、心理主義を執る者、其他一般に經驗論者は一切價値を其發生の方面より論ずるが故に、價値は次第に發達し容易に變更するものであるとする。然らば我々が價値ありとして追求し渇仰するものは、畢竟皆一時の滿足を與へるに過ぎぬであらうか。思ふに價値の觀念が如何にして我々の心中に生ずるか、其內容が如何なる變遷を經過するかといふ點を見れば、此の如き相對論の眞理を認めざるを得ないであらう。然し我々が此の如き變遷發生を以て正當なる變遷發生の途に在るものと解し得るが爲には、是等相對的價値の基礎に或る絕對的價値の存することを假定しなければなるまい。固より相對的立場から絕對的に到達することは到底不可能であるやうに見えるが、此に數學上の論法に擬して、多角形の極限として圓を擬へ得る如く、相對の極限として絕對を想ふことが出來るであらう。絕對的の意味に於ける「絕對」は人知の範圍外であるが、相對的意味に於ける「絕對」は必しも不妥當な觀念ではないとすれ

ば、こゝに我々が相對的價値の世界を通して絕對的價値を想ふ端緒が開かれたと見るべきではあるまいか。

此の如くして想定し得たる絕對的價値を更に具體的に決定するには、なほ許多の論議を要することであるが、最も簡單なる分類は之を眞善美の三者と見ることであらう。或は更に宗教的價値を加へ、若しくは更に法律經濟等の價値をも或る條件の下に、即ち多少相對的意味に讓步して其中に編し得ることも出來ようが、要するに是等を以て絕對的なりとする所以は、是等が歷史上又現實上必しも人々によつて一定不變のものと認められたといふ意味ではなく、たゞ論理上諸の眞なるもの、善なるもの、美なるもの等に對して其標準たるべきものとして要求せられる、といふ理由によるのである。換言すれば、相對的經驗的意識の中に含まるゝ普遍妥當的要求として、眞善美の絕對價値は我々の認識の對象となり得るものなのである。故に絕對價値は昔日の神の如く又形而上學的實體の如く實在するものではなく、たゞ論理的標準として妥當するのみである。「シカアルコト」即ち實在にあらずして「シカアルベキコト」即ち當爲である。プラトーは之を「イデア」といひ、カントは先驗的統覺及び意識一般等の語を以て之を表はした。此の如き意識の要求は當然要求する意識にも亦經驗的相對的以外の意味を假想するものであるから、カントの所謂先驗的統覺は又先驗的自我と稱して經驗的自我の基礎を確立するものと思惟されねばならぬ。絕對價値は是に於て人々の自我をして自我たらしむるもの、即ち自我の基礎或は先驗的自我と結合するものとなる。而して此の如き自我を又特に人格と呼べば絕對的價値は即ち人格の發現の形式となり、此價値を基礎とする文化主義は即ち人格主義とも稱せられ得るのである。

六　人格と自由

此の如き人格の觀念乃至先驗的自我、絕對價値等に關しては二樣の反對を豫期し得る。一は純然たる經驗的立脚地よりするもので、之に對しては我々は既に其答解の一端を示して置いた他は舊時の形而上學的立脚地よりするもので、此の如き自我等は單に論理的抽象に過ぎないから、何等の實力を有たない、といふのである。固より此の概念は形式的であるから、之を以て直ちに實際問題を解決することは出來ないが、我々の初から期待する所は、此の如き解決其ものに非ずして、寧ろ此解決をなすを得べからしめる基礎理由を提供することにあつたのである

而して此理由も或は絶對不變といふことではなく、比較的最高度の絶對不變といふのに過ぎぬかも知れぬが、とにかく現在の他物と比較すれば絶對的標準若しくは規範となり得るものである。然るに形而上學者の要むる所は、此の如く標準を形式的とすることを以て足れりとせず、更に之に實質的意義を附せんとすることにある。即ち論理的方法で求め得た概念を直ちに形而上學的意義に使用せんとするのである。是に於て所謂先驗的自我は單に自我の經驗的作用に對する統一形式に過ぎなかつたのが、轉じて實體と看做されて諸現象の背後に實在するものとせられる。是れ即ち論理的と形而上學的とを同一視する見方で、論理的方面より見れば內容を豐富にしたものと言へるが、實際的方面より言へば、實在を論理的に局限するものとなるのである。今日多くの哲學的說明が非難を受ける所以は、一は此の如く本來形式に過ぎざる概念が其範圍を超越したからである。此の如き例證の最好適なものは彼の意志自由の說に於て見られる意志自由は道德問題に於て必須なる概念であるが、然し意志は之を現象的實體と觀る限り常に因果律に支配せらるるものである。而して之を形而上學的實體と解すれば、其の自由は直接に論理的行爲と稱する現象界の事件とは沒交涉である如く思はれる。然し又一種の形而上學說たる彼のベルグソンの自由論も行爲の跳躍して底止する所なきことを說く所に興味はあるが、必しも倫理問題の解決には便利でないやうに思はれる。然し我々が所謂形式的解釋によれば、意志の自由は畢竟するに現象的因果的意志作用の規範として論理的に構成したる概念に他ならない此自由意志を論理上の根據として道德の可能が論議せられるので、必しも此自由が經驗的に行はれつゝあるといふのではないカントは之を「爾爲すべし、故に爾爲し能ふ」といふ句で言明した。人の自由は事實ではないが要求である。然し其要求は一個人の私より發した要求ではない、一般に此の如き要求を爲すものの、公けの要求として人々の意識に於て妥當するものである。此の如き要求以上の實體、即ち自由なる特種の靈魂或は良心の如きものを認めんとすることは、今日の科學の許さゞる所なるのみならず、又此の如き固定的形而上學的本體の存在は反て我々の自由なる發展を阻害するものである。然しながら此の如き要求をも認めず、たゞ事實を事實として認容する立場よりしては如何にして其自由を求むる態度方針の正當なることを保證するを得るであらうか。相對論者例へばプラグマチスト等は此に至つて社會一般の公認といふことを口にする。若し社會一般と

いふことを認めるとすれば、我々は更に進んで何故に或る要求を社會的なりと判別し得るかと問ふことが出來るであらう。此の如くして識らず知らず、一種のアプリオリを認むる立場に移り行くのである。畢竟彼等がアプリオリを蛇蝎視するのは、之を以て一派の「絶對」と同一視し、内容上にも種々の規定あるものとするが爲であるが、アプリオリは本來形式的基礎に他ならぬから、之を承認することは必しも思想の自由を抑壓することにはならないのである。

此の如くして我々の所謂先天的基礎は、先天的なる性質を保持して飽くまで形式的たるに止まつて居るものである。即ち改造の基礎として文化を擧げ、文化の基礎として先驗的自我若しくは人格を擧げるが、其文化も人格も共に形式的基礎以上に決定する所はないのである。而して此の如く形式的に限る點は、形而上學的陋習を脱せざる人より見れば空虚の如く見える所であらうが、然し經驗論的相對説より見れば之すらなほ固定的な形を呈するものであらう。私は此基礎を認める必要ある以上、相對説の非難には耳を假すことを得ないが、然し此基礎を形式的に止めることによつて其内容に自由と豐富とを許容することが出來、隨つて相對論の所説と、其の進歩的なる點に於て決して背馳したものとはならないのである。

七　文化の普遍性

此の如く今日の世界改造は、社會問題經濟問題を中心とする點に於て一見外部的のやうであるが、此等問題の基礎として文化問題の存し、而して其奥に人格問題の潜む所を見れば、之に觸れずして單に世界の某地を何所に屬せしむるとか、或制度を存置撤廢するとかいふことは未だ以て根柢ある事業と稱することは出來ないと思ふ。或は又此點に理會なく、卒然之を昔日の樽俎折衝の範圍を脱せざる外交政策上の問題とし、昔日の國家對立の思想を基礎として徒らに權謀術數を事とし、以て漸く得來らんとする人類進歩の曉光に面を背く如き者も、亦以て此大事を論ずるの資格を欠く者である。然し私は今時事に渉りて某々の論議の是非を説かうと欲はない。たゞ以上の改造基礎論即ち文化主義及び人格主義より當然伴隨し來るべき二個の系論に就て一言しようと欲ふ。

其一は即ち文化主義に所謂文化が形式的意義に止まる限り、其文化は必しも一國の文化、一時代の文化といふ意味に止まらない、といふことである。文化主義は文化の形式的方面に其先

天性を求めるが、其實質内容に就ては毫も一定不變の要素あることを認めない。隨て特に、或國に於て發達した文化を以て唯一の高等なる文化とは考へないが、又其文化が自個從來の文化と殊絶するといふ理由で之を排斥しない。我々は此點から見て今日の論壇に於て幾多の謬論が存在することを注意せざるを得ないのである。

或る特種の文化を一定不變のものと見る結果は、先づ自己の屬せる國土に於て過去に存せる文化のみを理想とする思想を生出し、而して之に伴隨して苟くも此文化に對して一致せざる文化があれば之を排斥し去らうとするに至る。曰く特有の文化、曰く外來思想、此の如き分類を設けて理否正邪の別の如くせんとするのである。然しながら外來が飽くまで外來たるに止まる間は、其は實際の文化生活に何等の影響を與へ得ざるもので、特有の文化が眞に特有の意義を具有するとせば、其は勿論保存すべきものである。故に此區別は其外形上頗る穩當のやうに見えるが、さて之を實際上嚴密に區別し得るかと言へば、大に疑なきを得ないことになる。或人に取つて特有と見立て保存せらるゝものが、既に他の人に取つては何等の權威のないものになつて來ることもある。而して甲かなほ外來と思ふものも乙に取つては全然自國的のものと看做される場合もある。極めて卑近なる日常生活の物品の如きもの丶如き、時々刻々に變化して、終に昔日の遺物を以て外來視するやうになることは珍らしくない。衣服の如き言語の如きに於ても其顯著なる例を認め得るであらう。過去數千年の歷史に於て既に此の如き變遷を經たとすれば、今後幾萬年の悠久なる歷史に於ける變遷を何人か今より斷言し得るものがあらうぞ。然も又我々は此變遷の中になほ若干人性に固有なるもの丶容易に變化し去らぬことをも認める。然らば我々は又此の如きものが一國の文化に就てもないと斷言するとは出來ない。要するに眞に特有なるものは如何なる變遷にも動搖せざるもので、容易に動搖するものに實は特有とするに足らぬものである。固より人意が加はつて多少其動搖を左右し得るが、結局は眞に動搖せざるものに眞の特有を置くことに歸せざるを得ないのである。其他は所謂外來文化なるものが常に附加して益其内容を豐富にするものなのである。外來文化を拒るゝことと疫癘の如くするものは、會以て自己信念の薄弱なることを表示するものに他ならない。彼等は何故に自己の特有文化を主張しつゝ然も惴々焉として其輕視する外來文化の侵潤を恐るゝのであるか、彼等は意氣軒昂連りに自國の名に於て自己の

說を主張せんとする。然しながら是れたゞ彼等の威嚇に過ぎないのではあるまいか。私は彼等に告げたい。我々は容易に自己從來の文化圏內から脱却し得るものではない。多年歐洲民族の中に住しても猶太民族はなほ其特色を保持すと言はれて居る。況んや英佛獨伊各境を接し人を交ふるも、其間截然たる區別を存する。我々は如何にしても結局日本人たることを免れない。或は其の所謂日本人たる內容が論者と全然同一でないかも知れないが、論者の內容とする所のみが正當であるといふことは果して何によつて證明せられるであらうか。此論據となるべきもの、何たるやを論究することは暫く問題外とするも、とにかく他國人と明に區別せられる所を維持し得る限り、論者の言は杞憂に過ぎぬと言はねばならないと斷言したい。

文化の內容を一國土に限つて求めない精神は又、或る外國の文化のみを尊崇し、之を標準として他國の文化を論する如きことを拒斥する。今日英米佛の國人には獨逸の文化を以て單に機械的として取るに足らざるものゝ如く評するものがある。過去に於て我々は獨人の書中に反對の批評をしたものを多く見ることを得た。我國人中又之に從て或は獨を抑へ、或は英米等を輕ずるものが多い。固より各國相互の批評は美醜妍媸を明にする上に於て必要ではあるが、我々は之を聞くに當つて特に細心の注意を要する譯である。單に獨逸の戰爭に於ける行爲を見て其哲學文藝を擧げて悉く取るに足らざるものとする如きの陋は敢て辯を俟たず、又獨逸の學術に親しむの餘り英米等の學界を無視することも誤りである。比較的多く獨逸に反感を有する米國の哲學者ペリーの如きも、獨逸には學術、佛蘭西には流行、英國には商業等の俗諺に一面の理があると說いた所もあるを見ては、（勿論ペリーは反獨派の一人として獨逸流の學術に多くの欠點を認めて居るが）戰爭の景氣や先入主となる偏見より、直ちに一國の文化を貶し、或國の文化を輕ずることの妄は明に知られるであらう。戰爭氣分を以て文化を論ずるものは、獨逸を貶すると共に英米佛等を一齊に賞揚するが　然し英米と佛國とは決して同一ではなく、英米相互と雖も一致しては居ない。佛國は古典文化を傳へたことを以て誇りとして居る。此文化は近代に於て一大變動を見て居るが、然し決して其根柢から脱離しては居ない。此一例は例へば佛國の耆宿たりし故ブートルー氏が英國に於ける講演に於て、思想と行爲とに關する見方を獨逸流と古典流とに別ちて、自己の思想を後者に寓した事を以ても知られる。然るに米國學者の著を見れば、例へばデューイ氏の

言說にも其他の著書にも（例へばスポールディングといふ若手學者の『新理性主義』の如き）、古典的哲學或は古典的論理學と新哲學或は新論理學とを對立せしめて居る。今若しブートルー氏にして米國哲學に對する眞情を吐露せしめれば、其か古典の雅致なきことを厭つたであらうし、米國哲學者にして佛國老儒の言を聽かば、是亦過去の聲としたであらう。ペリーも米國人が從來佛國文化を研究し理會して居なかつたことを告白して居る更に又英國と米國との哲學者には同じくプラグマチスムを說くにも、均しく新實在論を說くにも、其間著しく差別があり、英國の方は概して古典的形態を脫しない。私は之を思想の距離と名づけて嘗て少しく評論したことがある。此の如き距離を接近せしめる企圖の次第に行はれることは希望せざるを得ないが、然し現在に於ける此事實は、各國文化の批評に對して深奧の用意を要することを想はせるものではあるまいか。甲の文化を本位として乙の文化を評論する如きことは、畢竟文化主義の形式的先天性を知らざる弊に歸せざるを得ないのである。

　此の如き文化の發展と雜多とは、當然其文化に對する理會の必要を考へしめる。思想には距離があり、文化には容易に移り難き性質がある。故に我々は文化主義の堅實なる基礎を求めんが爲には、其諸相に對して深刻忠實なる理會を圖らなければならぬ。凡て我々の經驗は皆主觀的基礎の上に立つものであるから、理會の公平とか客觀性とかいふことは頗る困難と言はねばならぬが、然も苟くも文化に就て言を立つる者は此の用意を避けてはなるまい。即ち各國の文化に就て原本的研究を試み、徒らに自己の理想や希望を以て迎合的解釋をなさず、ベーコンが自然の解釋に對して豫料を棄てよといつた精神に基つかねばならぬ。個人間の紛爭も國際間の戰鬪も其根本に於ては此の如き公平無私の理會の足らざるに因することが少なくない。歐米各國の間にも自然科學或は文學藝術に於ては此理會を促す方便は比較的に發達して居たが、哲學的學科に於てはやゝ之に缺くる所が多かつたと思はれる。英米人の獨逸哲學に對する批評に對しては我々の首肯する能はざるものが多いが、又獨逸哲學の一派のみを學んで他を顧みざらんとする態度の一方にあることをも悲しまざるを得ない。世界改造の基礎たる文化主義を建立せんが爲には、文化の本質を攻究して其の普遍的意義を會得しなければならぬ、而して之をなすが爲には先づ其端緒として文化の理會より始めねばならぬ、といふことは實に幾度繰返しても過當とすべからざることである。

八　人格的平等

文化主義の第二の系論は、其が人格主義なることより生ずることである。文化は論理上國土時代の經驗的内容を超越せる先天的基礎の上に立つもので、而して之を有する者は又是等經驗に對して論理上先たねばならぬ所の先驗的自我即人格である。故に文化といひ改造といふ、先づ此の如き人格の存在を豫想するものである。而して此の如き人格の上にこそ、平等觀が成立しなければならぬのである。此事は即ち文化主義の國内及國際のデモクラシーに對する關係を規定するものなのである。

國内に於て人々が社會的平等の待遇を受け、政治上同等の權利を有すべきことは今日の大勢である。所謂勞働問題も、畢竟此問題に聯結する所に於て内面的意義を有するものである、といふことは既に述べた通りである。然しながら所謂平等といひ同權といふ、是れ固より凡ての事情に對して言ひ得べきことではない。人は社會上差異ある職業を有すると共に、其より受くる報酬に於て差別あることは當然である。若し人々が同じく耕し同じく紡がざるべからずとせば、是れ再び蠻野の狀に復するものである。是故に社會的差異が或種の不平等不同權を來さゞるを得ないことは社會進化の理法上當然と思はれるのであるが然し是はたゞ其の經驗的内容の上に就て言ふべきことである。如何なる人も、其が人格たる限り皆同等の價値を有すべきものである。而して所謂人格とは人々が文化に對して參與する資格より定まるものである。此資格其自身には人々何等の差別もあるべきではない。如何なる職業の人も其職業に於て全力を盡せば、即ち其の人格が發現せられたことになるのである。人々が既に此人格を具有する上に於ては、何れも皆平等なるべき筈である。然も往々にして經驗上の差別に拘泥し、或は形而上學的假想體を立てゝ是等人格の存在を認容せざるが爲に、過去に於ける諸弊風は生じたのであるとすれば、今日に於て此意味の平等主義が人心を風靡することは、實に當然の事として欣ばなければならないことなのである。

所謂デモクラシーなるものは此の人格を基礎とせるものでなければならぬ。而して此人格主義を基礎とするとによつて往々其流弊とせらるゝ平凡主義と無法なる無差別平等とから區別せられるのである。もしデモクラシーが社會上の平等を期して事實上多數を占める劣惡者の水平線に人を引下ぐるならば、是れ到底世界の改造とか文化とかいふ問題に入ることは出來ないで

あらう。然しデモクラシーが若し人格を以て其の水平線の標準とすれば、此精神を社會に行ふことは即ち其時代に於ける高度の文化に民衆を引上げる意味の平等主義といふことであらなければならぬ。此の如き平等主義にして始めて民衆の儀表たる天才の存在を認めることを得べく、文化の自由に發展して所謂「生ける跳躍」をなすことを認容し得られるであらう。而して此の如くして始めて一派の人々の曲解するが如き、無法なる無差別とデモクラシーとの間に判然たる區劃を設け得るであらう。

世界改造の基礎は人格主義にある。從て國際間にデモクラシーの精神を行ひ、所謂國際聯盟、民族自決等の主義を現す爲には其等國家民族は皆人格的基礎を有するものでなければならぬといふことが伴つて來る。單に國を立つるが故、單に横目縱鼻なるが故、といふことを以て平等の待遇を要求し同一の權利を享受するを望む譯には行かない。且又或國家は、其の一部の當局者が人格主義を無視して其國家を優越ならしめんとしたが爲に、今や其民族を擧げて其制裁を受けつゝある。然し其制裁の基礎は必ず此人格主義を標準とすべきものである。若し其國家に對して怨恨を懷く者が之に報いんとして畫策することがあれば、其は又其の罰せんとする國家の轍を履むものである。或は此間私利を謀つて自國の大を望むものがあれば、是又改造の任に當る資格なきものである。其他又何等人格的基礎を示さゞる人類が急に同一の權利を主張するも亦謂れなき事といはねばならぬ。私は是等を事實の問題として論究するだけの準備を缺くから、今は其詳論に入らないが、曾繙讀せる一二の書籍、例へばエルスの『四年目に』の如きに國際聯盟等の精神が國內の輿論に容れられざることを記するを見、ノーマン・エンジェルの『大迷妄』に幾多好戰家と論辯する所あるを見て、或は今日所謂世界改造のなほ前途遼遠なるものあるかを想はざるを得ないが、然も既に一善事か提唱せられたる曉に、之を助長せずして徒らに之を破壞し曲解せんとするとの、果して眞の道に合せるものなるかを疑はざるを得ないのである。要するに國際間の平等も亦人格主義の上に立つもので、國々皆過去一切の僻見陋習を撤去するに非ずんば未だ以て眞の改造に資するに足らざることを信ずるものである。然も此曙光は既に見え初めたのである。たとひ一時黑雲に蔽はるゝこともあるも、終に其の榮燦宇宙を遍照するの期の近きにあるを信ぜざるを得ないのである。

參照。『新小說』四月號「思想の距離」『丁酉倫理會倫理講演集』五月號「文化主義」『大阪毎日新聞』及『東京日々新聞』一月號「所謂外來思想と思想の統一」其他

平等觀を以て新社會を造れ

――（華族制度と治安警察法の廢止）――

法學博士　神戸正雄

（一）平等と差別の矛盾

平等觀、之に對して差等觀といへば、其は思想上には全然別異對立の觀念で兩立すべからざるが如くである。併し實際にては此が純なる形にては採用せられず、多くは此二のものが結合せらるゝ所である。平等主義を採るといひつゝも、尙ほ別に差等主義をも交へ用ゐて居り、差等主義を採るといつても、多少は平等主義をも交ふることになる。啻に實際界にて然るのみならず、思想界にても然りであつて、平等主義を唱ふる人が、實際案外に差等的の態度をも有つて居たり、差等主義の人にも矢張り平等的の處があるといふのが常である。論理的に此等を見ると、矛盾といひ、不徹底といふて攻撃しなくてはならぬことになる。頭の鋭き人から見れば、世の實際政策は勿論、思想家の言動が矛盾撞着だらけといふことになる。併し少くとも實際界では此種の事につきて徹底を得ることは難く、むしろ矛盾不徹底なるの外なきものである。社會上の問題を處理するにつきては、單一人の心の安定を得させることでは足らず、何うしても多數人の心の滿足を得させなければならぬ。然るに人々の心の異ることは、恰も人面の異るが如くで、其の一致することが難いことが多く、隨つて之を纏める爲めには多少矛盾不徹底と見らるゝ位の處に落着ける外なきことになる。先づ社會上の事は大體、然ういふものと見て良い。

（二）舊思想舊制度の破壞

斯く社會上の事物には不徹底なるが多いといへば、最早一々の問題につきて其を孰れか一方の主義に近づかしむる運動は無意義のやうであるが、處が夫の二の主義の混在といふても、其混在の程度又は具合は決して一樣でなく、そして其が時の事情

により變遷するものであり。又處の事情によりても多少異るべきものである。各國内部事情の變化によつても變動するものであるが、外部の情勢の影響を受けて變化すべきものでもある。又之を變更するの必要をも生ずるものである。實際政策を攻究する人々は常に此點を顧慮して、其變更の必要なきや、如何に之を變更すべきやを思索しなくてはならぬ。此點より見て、目下の我邦にては大に人心を革新し、制度方針の如きものをも變更する必要に迫つて居ると思ふ。此新しき世界に處するに於て、嫌でも應でも大變革を行はなければならぬと思ふ。若も此際强いて自己の歴史にのみ拘泥し、自己の目前の小利又は感情にのみ捉はれて、舊思想方針を墨守するならば、世界の落伍者となつて終うであらう。斯かる事に關する注意を今頃になつて爲すのは、實は既に時機の遲い位であるが、併し之が注意を爲さざるには勝ること萬々で、速かに之を自覺し、速かに變革に着手しなくてはなるまい。是れ茲に一文を草して天下の注意を乞はんとする所以である。

（三）平等は世界の大勢也

目下世界は大戰の影響を受けて、社會的に大混亂を初めつゝある。其の如何に結着するやは今より豫斷するを許さないが、大體、勞働者の地位の向上であることは爭はれない。即ち國の内部に於て一層大なる平等の行はるゝ傾あることは確かである。そして他面に於て國際間には國際聯盟が成らうとし、其結果中小國も益々其地位を昂上して大國に近づき、從來よりも一層大なる平等が行はるゝこととならうとして居る。斯くて國の内部にても國と國との間にても平等の主義又は原則が認められんとするのが大勢である。未だ其確定決着には到つて居らぬけれども、大勢は其處に在る。日本としても到底此大勢に反抗することは出來ない。

（四）絶對的平等と社會主義

處で此平等主義擴充の大勢も決して徹底したものではない。絶對的の平等主義が此人類世界に行はるゝことは遠き未來は知らず、近き將來には望み難い。宗教的に考ふるならば凡べての平等といふことが考へらるゝが、人間の心理は宗教にのみ支配せらるることは難く、人々が斯く徹底的に考ふるに至ることは仲々六つかしい。で實際界にては若干の例外があり、多少差等觀の交へらるゝを免れない。例之、國の内部にて勞働者の地位

が昂上するからといふて、社會主義的の組織が採られたにしても、事實上各人の能力に差等あるに拘らず、各人に對し全然平等の待遇する譯には往くまい。又夫の近頃獨逸にて宣言せらるる如く、獨占的事業のみを國營とするといふに止むる半社會主義が行はるるに於ては、固より未だ資本家を全滅することとはならず、資本家と勞働者との對立が殘り、そして資本家は其資本の性質に基き勞働者よりも一層有利なる地位に在ることになる。況や從來の資本家制度の下に單純なる社會改良の行はるるに止まる場合には、到底事實として社會階級の間に多少不平等の存續するを免れない。併し其にも拘らず時勢の趨く所は從來の低級なりし人々の地位の昂上するといふことであつて、彼等が是迄よりも一層地位を高めることになることは爭はれない。絶對の平等ではないが、相對的に一層多く平等的になるといふのが大勢といふ譯である。

(五)　國際聯盟の理想と實際

國際間にても亦然りで、中小國地位の昂上、各國の對等といつても、其絶對平等ではない。現に國際聯盟の重なる問題は五大國の主として定むる所であり、其中でも又段階が出來て、三大國又は四大國の定むる所となる。矢張り國の內部にて人々の能力に從つて差等の生ずると同樣に、國と國との間にも實力により差等の生ずるを免れない。小國又は低級國が共に不平があるならば、須らく其實力を進むることを計る外はない。人類社會の問題は理想のみにては支配せられない。其が力を伴ふ所に初めて實現を伴ふ。併し固より又實力のみにて何事も行へるといふものではない。矢張り其に若干の理想の背景がなくては行はれ難い。今日及近き將來には、中小國と大國との間に事實上の差等の存することは已むを得ないが、併し國際聯盟の組織の成るに於て、大國と雖も其力を思ふ儘に中小國の上に加へることが困難になるといふことはある。或大國は之が爲めに從來の如く中小國に對して壓迫を加ふることが出來ないことになるが、併し他の大國をしても之を加へしめざることを得る譯で、其處に埋合せは附いて居る。例之日本が從來の如く支那に向て勝手のことが出來惡くはなるが、併し同樣に支那に向て英米が勝手のことをするのを抗爭することも出來る。其は或程度まで道義上出來るのである。日本としても亦遠慮なく爭ふこととすべきである。或は又此國際聯盟が出來ても人種による差別扱を除くことにつき英米の反對するのは怪しからぬといふが、其處等が理想と實際

との大懸隔ある最顯著なる場合であつて、理想としては黄白人間又は白人と有色人との間に差等のあるべきでない。然るに實際に於ては人種反感は頗る强きものであつて、今日の處では到底、其消滅するまでに至つて居らない。此は人々の感情に基くものであるから、何といつても容易には取除き難い。恐らく今度の國際聯盟の規約文の前文位に人種平等の理想を一言することが出來やうか。其れが出來れば其れが大成功といつて良い程であると思ふ。

（六）英米二國の專橫と日本

國際聯盟が出來れば、大國と雖も從來の如くには中小國に對して勝手のことをし得ざることとなるといふたが、其も矢張り全く德義上の拘束を受るといふだけで、力の大なる大國は何とか口實を設けて或吾儘を行ふことが出來る。そして此戰後の世界では獨露の無力となる運命に在る以上、英米二大國の勝手に處理せらるる危險がある。彼等が政治上に中小國を合併することについては遠慮するとも、其大なる資本力を以て經濟上に中小國を支配せんことを計り、且つ自國領土內には自給主義に據つて門戶を閉鎖しやうとする傾があり、そして日本の如く領土狹く資源も資本力も乏しき國は益々外部より驅逐せられて萎縮せざるべからざることとなる危險がある。經濟上にも政治上にも壓迫せらるることになる危險がある。日本としては此點を最心配し斯かる運命を作らざるやうにしなくてはならぬが、所詮其は力の競爭になるのに、日本の力の未だ之を抑制するに足らぬ以上は、日本國民としては今後非常なる努力を以て力の養成を行はなくてはならぬ。特に其につきては支那其他未開の富源の利用につき一層の便宜を得なくてはならぬのに、近時、日支關係の益疎隔するのは遺憾至極である。其につけても從來の日本の對支態度に遺憾の點のあつたことを反省するを要する。

（七）日本人は頑迷なる差等主義

人種反感は感情で打勝つことの困難なるものといふたが、併し若も日本の地位が眞に昂上して世界の何國よりも以上たることが出來るならば、即ち日本の力が一位であるか、文化が一位であるならば、日本に對する白人の感知は餘程變化するであらうと思ふ。此點から考へても日本人は非常なる奮發心を起して實力を養ひ文化を進めて、自力に依つて夫の差等待遇問題を解決しなくてはならぬ。加之一面から見ると、日本人自らの異人種

に對する態度にも改良を要するものがある。日本人は白人の人種差別待遇を難ずるけれども、日本人自ら其隣人並に屬領地人たる支那人朝鮮人に對して差別的態度を持つではないか。其ればかりでなく、國內に於ける特殊部落民に對しても大なる差別觀を懷き、更に華族と平民とを差別扱し、勞働者や婦人を劣等視して居るではないか。其れでは到底我の主張に威力があり得ない。自ら品行の修らざる者が他人の不品行につき勸告したとて、其に威力のないと同樣である。吾々は此點につきても大に反省を要すると思ふ。

（八）支那人に對して平等なれ

人の感情の發露であるから仕方がないといへば其れ迄であるが、日本人が從來、朝鮮人に對し又支那人に對して示したる態度は決して理想的とはいへない。支那人を見ては「チャン」といひ、朝鮮人を見ては「ヨボ」といふ。呼ばれたる支那人、朝鮮人は良き心持はしない。抑々彼等が弱き國の民なりとて、彼等も人間たる以上は、我に於て其人格を認めて其を尊敬するといふ念がなくてはならぬ。日本人は多く佛教徒であるといふが、然らば佛教からいふても、相手の凡べての人にも佛性ありといふ見地から、當然彼等の人格を尊敬しなくてはならぬ。弱を助け强を挫くは日本の武士道といふが、其からいふても支那人や朝鮮人に對しては殊更ら情を懸けなければならぬ。然るに此に對して事實唯だ〳〵輕蔑の目を以て迎へ、之を虐待して憚らざるに於て、又其人格を尊重せざるに於て、何とて彼等の尊敬又は敬愛を受くることが出來やうや。彼等は我に反抗し、我より離反しやうとし、以て我行動を邪魔することとならざるを得ぬ。實は大局より見れば彼等も日本を盟主として白人團に對して對抗を計らなくてはならぬ。此が彼等の永遠の利であり、日本に取りても此を利とする所であるけれども、遺憾ながら日本人の在來の態度が其盟主たるだけの又は其將帥たるだけの人格を備へないからして之を實現することが出來ない。そして此今日の好機に際しても見す〳〵其基礎を立つることが出來ない。で日本人は將來東亞に於て又結局世界に於て重きを成さうと思へば先づ其隣國人に對する態度を一變しなくてはならぬ。此の如きは實は大難事で、偉大なる敎育家によつて有力に國民を敎育するのでなければ行はれない。仲々容易の事業ではない。

（九）朝鮮人に參政權を與へよ

啻に國民の隣國人に對する態度を改むるのでは足りない。現に政府の朝鮮、臺灣統治の方針をも改めなくてはならない。從來の日本の此等殖民地統治方針は軍政的壓迫的であり、土民をして大體政治には參與せしめざる方針であつた。けれども此の如きことは到底永續すべきものでない。今日の世界の大勢からいへば彼等にも漸次自治の道を與へなくてはならぬ。彼等に役人となる範圍を擴げ、彼等に參政權をも與へなくてはならぬ。彼等が彼地方に於て參政するを得るのみならず。彼等に帝國議會にも若干の代表者を送つて其意思を表明するの機會を與へなくてはならぬ。勿論從來の武人政治を止めて文人政治と爲し、適才ならば土民をして其最重要なる政治上の地位を占むることをも得せしめなくてはならぬ。加之、彼等が內地に來つても、各種重要なる地位の得らるるやうにするが良い。斯かる例が段々開かるるに及んでこそ、彼等の不平不滿は消散するであらう。彼等の中の反亂援動の主動者を處罰するを以て得たりとするは恰も病氣を治すのに賣藥を用ゆるが如きものである。根本的に其を治するのには何うしても右の如き大改革を行はなくてはならぬ。斯の如きことは又本來、彼等の人格を尊重する以上は、當然爲すべきことでもある。一方日本人が白人に對して平等待遇を要求する以上は、他方、國の內部にて右の如き事をも行はなければ徹底しない。又此をするでなければ彼等の十分なる滿足を得ることが出來ず、永く其反亂を憂ひなければならぬのみならず、支那本土民をしても日本と共同せしむることが出來ずして、日本は經濟上の發展に於て非常なる困厄の地位に陷らなくてはならぬ。今日、支那人が日本より離反せんとしつつあるのは、彼等が同じく他國の屬國となるとしても、日本の其となつて臺灣、朝鮮の轍を踏まんよりは、米國の其となつて「フィリッピン」の如き自由なる境遇を選まうといふ彼等の心理狀態からである。日本人は何時まで其地位の行詰につきて盲目であり、其根本的原因に注意しないのであるか。

（一〇）支那に與へよ取るは不可

啻に臺灣朝鮮統治方針を改むるのみでは濟まない。對支方針をも一變せよ。從來日本は支那に對して取ることのみに焦慮して、與ふることを忘れて居つた。其れ故に一時は其れで日本も或利を得た。併し其は小なる利に止まる。もつと大なる永遠の利

を得たいとならば、先づ大に與へなくてはならぬ。佛教でも布施を最高の德といふて居るし、耶蘇教からいふても與ふることを得る者は幸なりであつて、先づ大に與ふるの態度で行かなければ我が大なる發展は出來ない。支那の關稅改正といひ、領事裁判の撤廢といひ、駐屯兵の撤去といひ、凡そ彼等の希望することは我が或相當の犧牲を拂つても、率先して其の達せらるるやう盡力するが良い。其盡力に對しては又直ちに報酬など要求せぬが良い。何うも從來の日本の對支政策が餘り功利的で、事每に何か取らなければ手柄にならぬやうに考へて來たのが大誤りである。實は今日其罰が報ゐつつある。日本は是から先き大に望を持つならば、むしろどし〳〵與ふることに注意するが良い。

尚又、支那勞働者排斥の嫌ある明治三十二年勅令三百五十二號の如きも、之を改正して汎く一般外國人勞働者に差別なく適用するを得るやうにすべきである。其は支那人に對して敬意を拂ふ所以であり、隨つて若干支那人の感知を良くするのみならず、動もすれば米國人より受くる、日本も亦移民につき差別主義を採るではないかといふ非難を避くるにも足る。

（一一）特殊部落民を愛護せよ

次には日本の内地に於ける特殊部落民に對する態度を改めなければならぬ。昨年の騷動以來、若干の覺醒をしたが、まだ〳〵本當に覺醒しない。今日の儘であれば矢張り彼等の不平不滿が時々勃發しなければならぬ。朝鮮の禍根の殘るが如くに此にも禍根が殘る。特殊部落民の年來の職業の比較的不潔なるものなりしが爲めに彼等を輕蔑するといふこともあるが、此は全く間違つた見方で、職業に上下の別があるべきものでなく、勞働は凡べて神聖であり、人の嫌ふが如き種類の仕事に當る人は却つて一層の尊敬を受けなければならぬ筈である。或は彼等の血液の不純なることを以て輕蔑又は排斥の理由とするが、其とて確固たるものでない彼等にも不良なるがあれば、普通民にも不純なるがある。一概にはいへない。或は彼等の特殊の疾病、不良なる慣習といふものが擧げらるゝが、其等は衞生及教育の力で改良するを得るもので又大に改良しなくてはならぬ。何れにしても彼等を排斥し輕蔑せざるべからざるの確固たる理由はない。矢張り彼等も對等の人格者として敬愛してやらなくてはならぬ。其につきては、彼等の住居區域の偏在するのが、彼等を區別せしむる基礎になるから、宜しく彼等の住居を解放して、全國到る處に分散して生活せしむることとすべきである。そして

彼等をして盡に普通民と雜混して區別すべからざるに至らしむべきである。何れにせよ吾々としては彼等に對する感知なり態度なりを變ずることにしなければならぬ。其が出來ないやうでは米國などで日本人が特殊部落扱せらるゝのに對して、大きな聲で反對することは出來ない。

(一二) 華族制度廢止を高唱す

我邦の內部に於て一方に特殊部落といふ輕蔑を受けたる一團のある反對に、他方に華族といふ特權を持たる一團がある。少數の彼等は種々の特權をもつが中にも、貴族院を構成する上に、他の一般人よりも有利なる關係を有つ。或ものは當然其議員となつたりして餘りに甘過ぐるので、嫉視の標的となつて居る。其にしても其れだけの人間としての價値あればまだしもであるが、格別之れ無くして斯かる特權をもつといふに於て反感の標的とならざるを得ぬ。此は彼等に斯かる特權を與へないことに努めなくてはならぬ。又其華族たることも代を累ぬる每に一階づつ落して、結局平民となるやうにしなくてはならぬ。斯かる特別名譽の表章は人々の功勞次第で與へられても差支はないが、其が子孫に及び過ぐるのは良くない。親が偉いからとて子孫必ずしも偉らくはなく、華族を世襲するが爲めに祖先の名を却つて辱しむることゝもなる。むしろ累下して餘り永く續かないやうにするのが安全である。或は斯かる特別の族制を全く止めても良い。斯くいへば皇族は如何といふこともいはるるが、日本の皇室だけは日本の國體上特別なもので、其と華族とは比較すべき譯のものでない。華族が皇室の眞似をしやうといふのが洵に不都合なことであつて、皇室は特別、其他の者は華族も士族も平民も新平民もない。一切平等であるべきである。皇室の下に皆な平等なる國民であり、彼等は皆な皇室の藩屛であり、國家の擁護者である。華族を以て皇室の特別の藩屛なりなどいふことをいふと、時勢が進展して來ると、華族に對する反感よりして、累を皇室にまで及ぼすことになる。で華族はむしろ漸次廢止するやうに導きたい。又其特權をも廢止して今日の士族同樣何等の特別のものでないやうに導きたい。又今日は段々と人々の華族に對する尊敬の念が殆んど消滅に近きつつある。彼等自らも此を自覺して、むしろ民衆より强要されない前に、早く其地位を拋棄したら何うかと思ふ。

(一三) 治安警察法十七條の廢止

其れから婦人のことは玆に暫らく措く。特に取敢えず勞働者の地位を昂上したい。勞働者本位の社會を作るといふ考もあるが、其には私は贊成しない。資本家といふものも資本といふ物的力の保存者增殖者として特殊の功績を有つもの故、此地位を脅かすのは不當である。唯だ勞働者の今日に於ける憐れむべき低き地位をもつと高むべきである。そして資本家と對等の處まで進めなくてはならぬ。今日日本の勞働保護法律は、其勞働時間につきても夜業につきても婦女幼少年保護につきても最低賃金制につきても何につけても不十分である。歐米に比して後れて居る。其等も漸次改良しなければならぬが、特に不當なるは勞働者をして勞働者の正當の利益を保護する爲めに勞働運動を爲すことを得ざらしむることである。治安警察法の第十七條の爲め、其の同盟罷工、特に勞働組合に依るが如き同盟罷工の出來ないことになつて、彼等の運動が妨げられて居る。其結果、勞働者は然らざれば得たるべき相當の報酬、勞働條件を得ることが出來ないことになつて居る。此制限の存することは全く勞働者を劣等視するもので、今日の時代の要求には適はない。假令同盟罷工の結果は良いものではないにせよ、現代の經濟組織の下に、資本家の如く飽くことなき利慾を有つ者に對しては、時に勞働組合に依る同盟罷業に出づるの外ないことがある。勞働者を資本家と對等の人格者と認むる以上は、之を承認しなくてはならない。此の如きは既に歐米にては通例認められて居る事でもある。其を日本獨り認めぬといへば、歐米からいへば日本は其勞働者を人間扱して居らぬ。然る本國にて人間扱されざる人民は入國につき差別扱を受けても仕方がないではないかと曰ひたいことにならう。又然る人間扱せられず、低き勞働條件の下にある勞働者にて作られたる日本品は彼等お互の如く人間扱した高い勞働條件の下にある勞働者により出來た品物と對等扱することは出來ない。日本品には差別的に高い關税でも課さうかといふことにもなる。日本が今後益々國際的に發展する上からいふても、此勞働者の待遇は改良しなければならぬ所である。日本も良い加減に其地位を自覺しなくてはなるまい。特に資本家も其自らの利益からしても自覺しなくてはなるまい。

（一四）　平等の理想を原則とす

要するに平等といふことは全く理想であつて、之を實際に於て徹底して行ふことは難きものであらう。平等といひつつも若干の差等をも認むることは避くべからずではある。併し平等を

原則とすることに出來る。差等を原則とするといふことも出來るが、何れかといへば平等を原則とする方が大きな見地からいへば正しい。其が哲學的に又宗教的に其方が一層高遠の理想たり得るやうである。加之、今日の時代精神も其平等にある。之に反抗することは難い。日本も之を採るより外なく、之を採るを至當とする。政策としても、亦各人の心持としても平等主義を原則とすることにならなければならぬ。勿論原則であるから例外のあるのは已むを得ぬ。併し其例外が餘り多くなつては原則が無意味になるから、成るべく例外を少くする心持で行かなくてはならぬ。此原則を內外に施せば日本の地位は自ら高くなる日本の國礎は自ら堅くなるが、反之此原則を無視して居ると、國內は混亂を累ね、外部よりは壓迫を受けて、萎縮衰微するを免れない。我邦人は朝野を問はず此點に深く考慮を致し、速かに其實現を期しなくてはなるまい。

尊氏と直義に就て

文學博士　渡邊世祐氏より

(前略)其節御約束申上し原稿幾度も立案試みたるも意氣乘らず面白く參らず誠に相濟ます約束を無にすると思ひ焦思すればする程餘裕なく良き考へを運ぬるを得ず(中略)**印刷として心に染まぬものは衷心不安を感ずる次第**に就き是非に御延期を願い度候(中略)明日出發關西に向ひ行遊旬日歸路十五日甲府に立寄り武田信玄の頌德演仕り十六日歸來仕り心を靜にして必ず執筆約束を充す考に候間不惡御宥恕云々(下略)

記者　博士が斯の如く熱心に吾人の爲めに執筆せらるゝの厚誼は讀者諸君と共に感謝する所次號に現はるゝ玉稿を鶴首して俟たん。

經濟生活の改造と勞働力の活用

法學博士　河津暹

一

予輩は前號誌上に於て我國民の經濟生活改造の必要について大體論を試みた、本號に於ては勞働力の方面から少しく同問題を論述してみよう。

前號に於て論述した趣旨は詮ずる所我國の經濟生活には甚だ不經濟不合理の習慣制度が存するが爲に、小にしては我等の生活費を高め大にして我國の經濟發展を阻害すると少くないが故に之を排除することを努めなければならぬ、近頃世の先覺者がこの點に注意するようになつたのは誠に喜ばしい、其の缺點を根抵から排除し盡すことが出來なくとも、之を排除することが多くあればある程、又之を排除することが早くあればある程我國にとりて利益があるから之を努めなければならぬといふにあつた、本論に陳べようとするとも亦之に過ぎないのであるが、問題の範圍を稍局限して勞働力の方面から論究しようといふに外ならぬのである。この問題は自然我國現下の時事問題となつてゐる勞働問題とも相當關係してゐるから勞働問題に對する予輩の私見をも併せて述ぶることになる次第となるのである。

我等の一家の經濟にしろ、一國全體の經濟にしろ、詮じ詰めれば勞働力と資本力とを活用して其の目的を達成せんとするに外ならぬ、して見れば我等の勞働力を活用することは一家の經濟にしろ、一國の經濟にしろ、重大なる意義あることでなければならぬ、世の中で或は生産に重きを置くべきか、分配に重きを置くべきかと稱し、寧ろ分配に重きを置くべきものであるの思想の下に現今の社會組織を呪ふものが少くないようである。成程今日の經濟組織は甚だ不完全であつて分配甚だ宜しきを得ぬ、從つて社會多數のもの〻不平を醸しつ〻あることは予輩も之を否定はせぬ、然し乍ら其の事實から直ちに分配に重きを置

いて生産は之を輕視して差支ないといふ結論を生ずるのは少しく早計であるといはねばならぬ、分配の公平が我等の社會生活をして安定を得せしむるといつた所で我等は先づ何を分配するのであるかを考へて見なければならぬ、結局我等は過去一年なり、一營業年度なりに、勞働力と資本力とを活用して得たる生産物を分配するのではないか、これ等の力を活用することが少く、從つて其の生産したるものが少くあつたなら、假りに明敏なる企業家が分配を公平にした所で、資産のない、所謂腕一本、脛一本でやつて行かうとする多數勞働者の得る所は極めて僅少でなければならぬ、奚んぞ生活の安定を望むことが出來よう、して見れば我等は分配について省察を加ふるに先ち、我等の勞働力、資本力を活用して生産物を成るべく多からしむる道を講ぜなければならぬ、予輩は生産が主であつて分配は副であると主張せんとするものである。分配のみに重きを置いて、生産を輕く視るべきものではない。過激思想が勝を制して、分配の不公平を生ずべき習慣制度を打破した所で、其れが人民の生活をして如何程幸福ならしむるを得べきかは崩壞後の露國の狀態を見ても思半に過ぐるものがあるではないか、但し、分配が甚だ不公平なることと今日の如くんば、多數の人民が生活の安定を得ることが出來難いが故に、十分に其の經濟力を發揮することが出來難い、從つて生產の結果を最も大ならしむることが出來難い、故に分配の制度を改善することには予輩固より異論はない、唯、分配の公平のみを目標として生産を多からしむることを省みないか、若くは甚だ輕視することは贊成し兼ねるのである。予輩はこゝに此の點について現代の社會組織を根柢より顚覆せしめようと考へてゐるものと爭はうといふのではない、唯、經濟の發達は勞働力、資本力を活用することに由りて初めて望み得らるゝことを一言したまでに過ぎないのである。

一國の勞働力が資本力と同じように其國經濟にとりて重要であることは改めて論ずるまでもないが、我國では其勞働力を十分に活用してゐるかゞ注意しなければならぬ問題である十分に活用しつゝあるかは兎角、勞働力を濫費しつゝありはしないかゞ先づ研究しなければならぬ問題である、予輩の見る所では我國の社會組織等が宜しくないが爲に折角の勞働力を濫費しつゝあることが甚だ多いと考へる、經濟生活を改造するの要はこの事實上濫費しつゝある勞働力を保存し、之を活用する方に向ける一着手であるといふことになるのである、この問題は獨り我國で重要である許りではない、世界何れの國にとりても重要で

あるのであるから、經濟生活に關し早く理解、覺醒をした歐米諸國では近年頻りに經濟力保存運動をなしつゝあるようである、特に歐洲戰爭はこの運動の火の手を揚ぐるに與つて大に力があつた。他山の石であるから此經濟力保存運動について一言して置きたい、予輩は例を北米合衆國の同運動に採りたい、我國でもこの頃よく話題としてゐる同國の禁酒令の如きは、他にも原因はあるが、この保存運動の結果の一であるのだから、同國の例を引くもあながち不適當ではないと信ずる。經濟力保存はグレーが其の論文「保存の經濟的可能性」の中に論じてゐるように現在と未來の爭鬪が其の骨髓をなすものである。現在からいへば我等が利用することの出來るものは出來る丈利用し、消費するのが利益であるかも知れぬが、それでは未來に於て利用消費すべき源泉を涸盡するのであるから、現在の利益、享樂、消費は之を或程度まで抑制して未來の利用に充てようとするのである、約めていへば經濟力を濫費しないように努めるといふのに外ならぬ、此の保存問題は予輩の承知してゐる所では森林の保存に起つたようである、同國の如き土地廣漠にして森林の如きは無盡藏であるかと思はるゝ所では森林の保存の如きには殆んど注意もしなかつたのであつた。所でハイゼ教授は此事を以て國家の爲に一大事であるとなして自然富源の保存を絶叫するに至つたのである、同教授の自然富源保存論は我國にも翻譯があるからこゝに其内容を紹介する必要はあるまい、所で自然富源の保存といへば森林の保存に限るものではない。否其よりも大切のものがある、一國の富源を抽象的に分類すると(一)滅亡せざる富源(二)滅亡し而も之を恢復することが出來ない富源(三)恢復することが出來るが生産費を要することが多い富源(四)恢復することが出來而かも生産費を多く出さずして收益を得らるゝ富源となすことが出來る。森林の如きは第三種の富源であつて之を恢復することが出來るものである、が石炭鐵、金銀等に至つては之を採掘し消費すれば之を恢復することの出來ない富源である、恢復することの出來ない富源の方が恢復することの出來るものより保存に力を用ゐねばならぬ道理であるから、鑛物等の富源保存すべしといふ論を生じたのである、然し富源といへば必しも自然の富源に限るべきものではない、勞働力の如きも資本力の如きも之を濫費すべきものではない、十分に之を保存して置いて活用すべきものであるこゝに於て保存の目的物の範圍が擴大したのである、苟も經濟力の保存、活用に妨害となるべき習慣制度其他一切のものは之を芟除しなければ

ならぬといふのが此の運動の目標となつたのである、飲酒の風の如き國民の勞働力を減殺する上からいつても決して稱すべきものでないのであるから、保存運動をずるものは宗教上から、又婦人側から同じ運動をなしつゝあるものと相呼應して禁酒令を出さしむるに至つたのである、勞働力の保存といへば獨り禁酒を勵行する許りではない、我等の生活の各方面に省察すべき問題があるのであるから、同運動者はこれ等多方面に向つて活動をなしつゝある。勞働能率增進運動の如き其の起源は既に一八八〇年頃にあつたのであるが、經濟力保存運動と合體して其の歩武を進めつゝあることは予輩がこゝに紹介を要せざることであらう。以上は北米合衆國に於ける經濟力保存運動の梗概を叙述したに過ぎないが、この運動は一面から見れば經濟生活改造運動と見ることが出來る、予輩が經濟生活の改造を唱ふのも主として我國經濟力保存の立脚點からなしつゝあるのである。

二

經濟の發展我國の比に非ず、經濟力の利用亦我國の比にあらぬ歐米諸國に於てすら、勞働力の保存、經濟生活の改造が熱心に主張せられ、着々其實行を見るのに獨り我國民が經濟生活の改造の如きは學者の空論であるとして之を顧みないのは浩歎すべきとではないか、我國人口の稠密なると驚くべく、而も其の增加率も甚だ高くあるのに其勞働力の活用について省察を加へなかつたなら、これ等人口の甚だ多いことは消費力の甚大なることを意味するに止り、我國經濟の發展を妨げ、甚しければ我國經濟をして破壊の淵に導くに至るかも未だ測り知る可らざるものがある、近頃食料品增加の諸計畫があるのは誠に喜ばしいのであるが、食料の增加率は大體からいつて甚だ局限せられてゐるものであるから、勞働力の活用、若くは保存と比較して甚だ價値の少いものであるといはなければならぬ。予輩はこの意味に於て勞働力の活用に重きを置くものである。働くに追ひ付く貧乏なしとは勿論我々個人の經濟からいつたことではあるが、誠に眞理である、我々が貧乏の苦痛から免れようとするには勞働力を活用することが必要であるが、一國も經濟上の困難から免れようとするには同じく經濟力を活用することが肝要であるといふことが出來る。

所で勞働力の活用と經濟生活の改造との關係に移るが、一國の立場からいつても社會多數のものは勞働者階級であるが、我國勞働者の狀態は果して其勞働力を十分に活用してゐることが

出來るといへようか、之が我等が潜心研究しなければならぬ問題である。之に關聯して論ずべきことが多くあるがこゝには、我國で多數の勞働者を雇傭してゐる所で其勞働力を十分に活用してゐるかといふことと、勞働者の生活狀態が其の勞働力を活用するに適してゐるかの二點丈を少しく論ずるに止めて置かう。

第一の問題についても近年は聰明なる事業經營者の中には注意するものが漸次多くなつて來たようである、曾て或機會に鐘淵紡績の藤正純と話をしたことがあつたが、同氏は戰後に於ける工業問題の中では勞働者の勞働能率をば如何にすれば最も增進することが出來るかといふことが最も大切であるといはれて、其の增進策についての腹案を洩らされたことがあつたが予輩も上來陳べ來つたような趣旨で甚だ大切のことであると思ふものである、其の大切であるといふのは一面には今日多くの工場等に於てなす所は勞働能率の上からいへば其の勞働力を十分に活用せしめてゐぬといふことを意味するのである。其の勞働力を十分に活用せしむるには所謂科學的經營法を採用することが最も安全で實行し易いことであらうと信ずる。現今工業界等に於て普通なしつゝある所が科學的經營法に比して劣つてゐることは明白であるが、其れに拘らず、其の不完全なる組織が存在して勞働者をして其勞働力を十分に活用せしめないでゐるのは如何なる原因に歸するかといへば、テイロア氏が其著「科學的經營法の理論」に陳べてゐることが正當であると信ずるから、こゝには其の趣旨を敷衍して紹介して置かう。

第一は勞働者が一生懸命に働く時には結局勞働者の多數のものを失職せしむることになるのであるから、勞働者はいゝ加減に油を賣る方が自分達の利益であると考へてゐるものがあるといふのである。この考の間違つてゐることは明である、若し勞働者が一生懸命に働いたが爲めに其製品の價格が低廉になつたとすれば、取りも直さず其社會の購買力に餘裕を生ぜしめた結果があるのである。社會の購買力に餘裕が出來たならば、其れ丈新しい需要が起る譯で、從つて勞働者に對する需要が增加する譯である、即ち各勞働者が其勞働力を十分に活用したが爲に多數の勞働者は利益をこそ受け不利益を被る理由はないのである。從つて勞働者側から科學的經營に對して苦情をいふべき理由はないのである。

第二勞働者をして劃一的羈絆の下に活動せしめないのは其勞働者の年來の技巧、熟練を保護する所以であるから、勞働者は却てこの舊制度を喜ぶものであるといふのである。之も甚だ理

由のないことで、若しこゝに科學的經營法に由つて比較的廉價に比較的迅速に生産するものが顯はれたなら、年來の技巧、熟練の如きは其勞働者の利益を保護する保障とはなり得ないことは明白である、其れよりも科學的經營法の下に各勞働者の所得を增加する道を講ずるのが寧ろ利益であるといはなければならぬ。

第三資本家側からいつて勞働者をして成るべく低い賃金で、苛酷の勞働條件で勞働せしむるのが生産費を增加せしめない所以である、從つて資本家は成るべく舊制度を維持せんことを努むるのはこゝに歸すと。此理論もよく考へて見れば採るに足らぬ論である、早い話が資本家が勞働者を勞働せしむるのは其の勞働を買ふのではなく、其の勞働の結果を買ふのである、して見れば、縱令科學的經營法に由つて勞働者の勞働時間が短縮しようが勞働條件が改善されようが、之と同時に勞働の結果がより以上に增加さすることが出來たらば資本家は爲に利益をこそ受け不利益を受くる道理はない、故に資本家が科學的經營法を採用した結果、勞働時間が短縮しようが、勞働條件が改善されようが之に對して苦情をいふ道理はない。但し、勞働時間の短縮勞働條件の改善が勞働の結果を多くするといつた所で、何時間の勞働等が勞働の結果を最も多くするものであるかは、其國の事情や、其國勞働者の智識、體力等に由つて異る所であつて一様にいふことは出來ないのである。巴里の媾和會議では米國の委員ゴンパースが八時間勞働の原則を承認させようと主張してゐるが、歐洲諸國なり北米合衆國なりの事情には適應することであるか否やは予常判斷に苦むのであるが、我國の勞働者に之を强いんとするのは適當ではあるまいと信ずる。故にこの議には贊成することは出來難いが、我國情に適する勞働時間、勞働條件を基本として科學的經營法が汎く採用せられんことを切望して已まないのである。科學的經營方法といふのは歸する所勞働する者をして最も經濟的に、最も有効に其の勞働力を發揮活用せしむると同時に之に相當する報酬を得せしむるにある。科學的經營法は既に學問の體裁を備ふるまでに發達してゐるから、こゝに之を說明することを避くるが、其の原則を我國情に適應せしむるが爲に工夫することが肝要である。

科學的經營法の原理は獨り勞働者のみに應用するものではなく、事業經營の幹部の勞働力使用についても應用することが出來ると思ふのである。我國實業界の大立物になつてゐる方々は數種若くは十數種の事業に關係してゐるものがある、これ等の方は精力絕倫ではあるに相違ないが、事實上其の力を十分に發揮

することの出來るものではない、外國の事業家などには其の類例のないことであるといふ。これは曾て聞いた話であるが、我國有數の實業家某が世界漫遊中佛國に行かれた時の話である、同氏は十數種の事業に關係せられてゐるから其名刺には之を列擧してあつた、其の名刺を以て佛國の某大實業家を面會に行かれた所が、佛國あたりではかくの如く多數の事業の經營に當ることは想像することも出來ない所であるから、これは怪しの者であると誤解して、辭を設けて面會を謝絕し、我大使館に照會して來た、我大使館では其實業家は怪しの者ではないのは勿論、我國ではかくの如き事情になつてゐるといふことを說明して漸く會見せしめたことがあつたといふことである、これは佛國の實業家の考へる方が正しいので、我國でやつてゐる方が間違つてゐるのである、我實業界人物が多いようで乏しいものであるから、材幹あるものに種々なる事業の經營を行はしむるに至るのは已むを得ないとはいへ、其の力を十分に活用せしむる所以ではないのである。かくの如き風は勞働力活用の精神からいつても改めねばならぬことである。

我國では官といはず民といはず繁文縟禮の風が依然として殘つてゐる、何事も規則に拘泥してゐる、これも或程度までは已むを得ぬことで、規則を設けて之に由らしめないと常識のない連中が何をやるか知れぬから、常識敎育が十分に普及せざる間は已むを得ぬことではあるに相違ない、然し乍ら、今日行はれてゐる所は餘りに形式に拘束せられてゐる感がある、從つて其の形式に表面合致させ乍ら、事實は之に非常に隔離してゐることを平氣で行つてゐるといふのである、近い話が會計法規等を研究して見たまへ、會計事務等に關係するものは曲事をするものであると前提してゐるもの丶如く、形式上から拘束を加へてゐる、其れなれば其の規則が表面裏面間違なく行はれてゐるかといへば、決してそうでない、表面は其規則が行はれてゐるようであるが、事實は之から大分離れてゐる、會計法規計りではない、多くの會社等の店則の如きものも前提として店員等は惡い事をするものであると見て作られてゐる感がある。形式で抑えて行くとが生じて來るのである。繁文縟禮は我國社會を通じて行はれてゐる所である。前號に陳べた虛禮虛儀の盛行も畢竟此邊の所から來てゐるのである。形式に拘束するとは勿論、勞働力活用を鈍ならしむること少くはない。予輩は社會の事務執行を簡捷ならしむるを希望して已まないのである、事務執行を簡捷ならしむるにはこゝに三個の希望を陳べて置くの必要があると思ふ

(一)事務執行に關する規則等を成るべく簡單になすこと
(二)事務執行に關聯するものゝ責任を明にして、其の責任に成るべく一任すること
(三)常識の訓練、發達を促進する方法を講ずること

これである、これ等のことの多くは我等の經濟生活の改造に少からず關係があるからこゝに陳述した次第である。

三

國民の勞働力の濫費については一考する必要がある、其の濫費を成るべく抑制することが出來たなら、經濟生活の改造を行ふことが出來る譯である。之についてカルバー氏が詳論したものがある。同氏の説明に由ると國民の勞働力を濫費する原因を列擧して見ると、(一)怠惰(二)無智(三)不正直(四)奢侈(五)不品行(六)亂心である、抽象的にいへば之れで盡きてゐると思ふからこれ等の諸原因につきて多少の解説を試みて置かう。

第一怠惰といふのは勞働することが出來るのに拘らず勞働しないことである、其國全體からいつて其れ丈勞働力が活用せられないことになる。所で怠惰といつた所で自ら二の場合を想像することが出來る、其者は勞働しようと思つても勞働する機會がないから已むを得ず怠惰である場合である廣い意味の失職の場合である、これは或は其者にも罪もあるであらうが、多くは社會に罪があるのである、例せば經濟社會が不景氣になつたが爲に勞働者の一部分が解雇される場合の如き其の勞働者が不熟練であるとか其他の缺點があるにもせよ、其の職業を失はなければならなかつたのは經濟社會が不景氣になつたからである、若し不景氣にならなかつたならば決して其の職業を失ふことはなかつたのである、其の者に同情すべき理由が十分にある、社會は之を救濟する道を講じ、これ等の勞働力を活用せしめなければならぬ、尙他の場合は勞働する力もあるに拘らず自ら好んで勞働をしない場合である。我國の隱居の制の如き尙勞働することが出來るものが其の勞働、職業を抛ちて風月を樂しむのである、これは我家族制度から起つて來るのであるが決して爲すべきことではない、我等は勞働することが出來る限りは適當なる位置を求めて働かねばならぬと信ずる、獨り隱居の制計りではない、勞働することが出來るものが、何とか理屈をつけて悠々閑日月を消してゐるものが少くはない、其事は社會全體から見ても大損害であるといはなければならない。この種の習俗は根抵より打破しなければならぬ、經濟生活の改造とも見ること

が出來よう。

第二の無智といふのは勞働力を適當に活用することを知らないが爲に結果に於て勞働力を濫費することになるのである。前に陳べた如くに資本家が無智なるが爲に勞働者をして極めて少い賃金で勞働せしめたり、苛薄なる勞働條件に服さしたりするのは即ちこれである。此種の弊害は畢竟當事者の無智なるが爲に起るのであるから、是等の無智、不理解は成るべく排除して、我等の勞働力を十分に活用する道を講じなければならぬ。

第三、不正直といふのも説明を要するまでもなく、勞働力を活用しなければならぬ義務があるに拘らず不正直の爲に活用しないことである、この原因から來る勞働力の濫費は決して少くはない、我國で兎角問題になる粗製濫造の弊の如き他に多くの原因はあるにもせよ製造家等の不正直であるから來ることが多いので、之れが爲に目前多少の利益があるようではあるが其實信用を害し、販路を失ひ、折角今まで骨折つたことも水泡に歸せしむることになるのであるから、之を根抵から改めなければならぬ。

第四第五に揭げた奢侈不品行が勞働力の濫費であることは上に數々陳べた所であるから改めて論ずるまでもない、見渡すと我國の習俗の中でこの種の弊害が蟠つてゐることは痛歎しなければならない、享樂主義から來るか、虛榮心から來るか因襲から來るか其の由つて來る所は種々であらうけれども勞働力の濫費たることを失はない、世の中では奢侈不品行をなすものに對して或程度までは其者の手腕ある證據であるかの如く思つてゐるものもあるが之は甚だ間違つてゐる話である、生活に對する理解が缺如してゐるから起ることである、之を改めなければ、社會の發展は期して望むことが出來ないと思ふのである。これ等の弊害は道德上からも痛擊しなければならないのであるが、經濟上からも之を攻擊しなければならないのである。我國の如き先進諸國に比較して經濟力の乏しい國では少しでもこれ等の經濟力を濫費しないように努めなければならないのである以上は、種々の形に於て、種々の動機から世間に行はれてゐる奢侈不品行は之を撲滅するに十分努力しなければならぬ、經濟生活の改造は決して閑事業ではない、活事業である。亂心に至つてはこゝに説明するを要しないことであるから省いて置く。

以上陳べたように經濟生活の改造は勞働力の保存、活用といふ立場から見ても緊要のことであるから、世の識者は須く經濟生活の改造革新の爲に努力せられんことを繰返し願ひ置くのである。

未來の航空を論じて日本の現狀に及ぶ

工學博士　濱部源次郎

先人の航空夢想

古き記錄を尋ね歷史を辿れば、空に翔りし神、空に翻ばんと試みし人々の古譚を見出すこと甚だ多し。イカルスの使ひし膠の翼が希臘盛夏の陽光に晒されし危難の音斷の如き、希臘神話の多くの頁を埋め、古き闇黑時代に於ける阿弗利加蠻人の傳說中にもペルー人、東印度人、バビロン人の飛空に關する敎文の遺る多く、希伯來人の經文中神聖なる神の使とし云へば必ず羽とか若しくは飛ぶ力の伴はざるはなし。我日本の祖先も同じく飛空を以て超人爲的とせしか、雲を呼んで空に顯はるゝ神あり、劍を踏んで天に翔る神あり、龍に乘り或は鶴に跨る仙あるなり。蓋し航空は人類先天的の欲望にして、飛行の術は人爲の極致最後の理想なりしが如し。然るに現代に近くに隨ひ此夢想を實現せんと企つる空想家漸く多きを加ふるに至れり。

或種の羽も速く鼓翼することと鳥の如くせば、人も重力に逆らひ飛行し得らる可しとは多くの人の信ぜし處にして、千八百七十八年ヘルムホルツが自身の筋力のみにより人は體重を空氣中に支持し能はざるものなることを數字上說明せしに拘らず、矢張り此方法は航空夢想家の始め依て恃みとせしところなり。佛蘭西の鎖匠ベスニアは二本の棒を兩肩に支へ是に翼を作り附け手足を以て强く上下に鼓翼せんと考へ、翼は下すとき書籍の表紙の如く擴がり上ぐるとき自然に疊み込まるゝ裝置を考案せり。ベスニア自身は飛行の冒險を爲すに至らざりしが、高處より一度空中に飛び出さんか此裝置を以て自身の重量を空中に支へ遠き距離を滑走し得可しとの强き信念を有せしが如し。後ベスニアの門弟二三此裝置を以て飛行を決行し何れも失敗に終り傷けり。其一人は伊太利人にして大なる革製の翼を作りベスニアの方法に則り操縱し、スコットランド王ゼームス第四世の面前に於て、スターリング城の高窓より飛下りしが、矢張り裝置に對して重量の過大なる數理に抗する能はざりしか、空中に顯

轉して墜落せり。然れども彼等は此失敗を機械的缺陷に歸せんとせず、飛ぶに鷲の羽を用ゐず不淨の皮革を用ゐ神聖なる航空に對する充分の敬意を拂ふを怠たりし天罰なりとせしは殊勝の心掛けなるかな。

翼に依つて飛ばんとする人々と競ひ他の方法により天に翔ばんとする他の一派あり。即ち直接の浮揚を志すものにして其一人を佛蘭西の僧侶ル　ペール　ガリアンとす。此僧アルプス山頂に登りて空氣の谿底と比し著しく稀薄なるを感じ、若し之を氣密の囊に藏し谷底に持下さば大なる浮揚力を得可しとせり。又他の僧フランシスコ　ラナは眞空が空氣より輕きを知り、大なる輕き銅製の眞空球を作り、此數箇を籠に取附け浮揚するの考案を出せり。

ガリアンの當時綿布若しくは絹製の囊に油を塗布し、空氣の漏れざる一大氣球を造らんとせし其勇氣や感歎の外なし。之に山頂の輕き空氣を充すは易けれども、假りに豫想の如く持下して尚は其輕さを維持するとせば、其持下しや幾段骨の折れし事ならん。而して持下して更に浮力の增し來らざるを發見せばガリアンの愕きいかならん。空氣は一平方吋の面積に一四、七封の重さを有すとの事實より起算して銅の眞空球を作りしラナが眞空の案外輕からざるに失望せしたる可し。不幸是等の人々の知識に物理學的基礎を缺きしため、今人に其愚擧を嗤はるゝに終りしと雖ども、是等の思想が今日航空の基を爲すを見れば嗤ふもの蓋し又後人に嗤はれんか。

現在の航空界

今より十五年以前ウヰルバー　ライト及オルヴヰル　ライトの兄弟が永き研究と實驗を終り、空氣より重き機體に搭乘し空中に飛び上り一世を驚倒してより後の飛行機發達は進步せる諸科學に促進され隨分急速なるものなりき。特に最後の四年半は歐洲大戰の影響を承け、各國必死の努力に因り異常の發達を遂げし事は周知の事實なり。

然るに戰爭結末を告げ世界が平和を樂む時代ともならば、一に軍用として發育され來りし航空機は大部分其用途を亡ひ、戰爭中簇生せし航空機製造所は他の軍需品製造を目的として興りしものと同一の運命に逢ひ或は閉鎖し或は規模を縮少し、大多數は自然に淘汰され僅々活き殘る小數の工場を以て辛ふじて航空機の命脈を保つ如き有樣となり終らんか、從ては其進步發達も此處に一頓挫を來すなきか。

今次の戰亂は航空機の必要を陸に海に證據立て、軍事上に於ける其効力は深く人々の腦裏に刻み込まれし事なれば、何れの國も航空機の發達を自然の運命に委し去らんとするはなかる可し。既に各國は戰爭中養成し來りし幾萬の飛行家を亡はず、航空機製造所を衰滅せしめざらん爲め、戰後經營の一大問題として各方面に利用の途を墾き需用を喚起するに苦心を拂ひつゝあるの跡歷然たるにあらずや。

或人の曰く、今次大戰の遺せし賜物に唯二つあり一はデモクラシーの普及にして他は航空の發達なりと。戰後世界の改造は國際聯盟、仲裁裁判、國際軍備、軍備制限、海洋の自由、堡壘撤廢等の方面に向つて進むと同時に他方空中を交通する一新機關の發達は世界を著しく縮圖し、延いては國際協定にも一大改造の問題を提供するに至らんか。

未來の航空機

今後の航空は二期に渡りて發達す可きものにして、最初第一期は戰亂より平和に移る過渡期の有様を呈す可く、戰爭中使用されし多數の飛行機、航空船及飛行家を其儘並びに戰爭に向て準備し及建造しつゝありし航空機を交通の方面に轉用せんとす。此期間に於ては航空は安全及經濟との能率に缺くるところあるを免れず。第二期に入れば一に軍用として發達せし航空機關をして將に改造されんとする世界の新文明へ貢獻する處あらしめんとし安全と經濟の上より航空機並びに航空諸設備に改造を施し。平和の利器として健實なる發達をなす可し。現在は其第一期たる過渡の時代の入口にあれども同時に第二期に向つての準備的施設は着々として各國の企圖しつゝあるところなり。

英國海軍省の航空船建造計畫中には二百五十萬立方呎の容積を有ち六十噸の荷物を搭載して八千哩の航空に堪へ一時間六十五哩乃至七十哩の速力を出し得る如き大航空船をも含み今年末には竣成する豫定にて、其後引續き更に大なる超ツェペリン航空船建造の計畫ありて、是等を海上巡邏及展望用の任務に服せしむる爲め海岸に排置駐屯せしむるとの事なり。又民間の事業としては倫敦のエーアクラフト　トランスポート　エンド　トラベル　コンパニーは巴里のコンパニー　ゼネレー　トランシエーリーネと共同經營の下に倫敦巴里間二百四十哩に天候の許す限り毎日定期旅客輸送を開始し賃錢は往復共に百五十圓にして平均二時間半乃至三時間を要するとの事なり。倫敦の同會社は又諸威のエーア　ルート　會社と共同して諾威のスタヴァン

ゼルより英國蘇格蘭のアバーヂーンに至る海上三百二十哩間に空中郵便遞送線を創始する計畫あり。又本年八月には倫敦と南米ブエノスアイレス間六千哩を連絡する航空船に依る商業空中航路を開始する計畫ありて、途中西班牙及伯剌西爾の二箇所に着陸して六日間に到着し、片路の賃銀五千圓の豫定にして船上の客室は汽船に於けるが如く贅美を極め、現に其切符には熱心なる申込みありと傳へらる。其他英國の避暑地にありては既に各會社遊覽飛行の權利を獲得せんと爭ひ居れり、此舉は獨り英國のみならず米佛其他の國に於ても海水浴場には遊覽乘用飛行機の備へらるゝ多く、危險は少くして水中を游泳するよりも愉快に且つ冷しく遊樂機として恰適のものならん。飛行機使用の初期に於ては此の如き遊樂用としての起業經營盛んに興ることなる可し。又英本國と印度及濠洲とを連絡する空中交通系を創設する事は早くより英國に於て重要視されしところにして、既に濠洲より新嘉坡及ズンダ灣に至る航空路の各驛地圖を作製し遠く甲谷陀、カラチまで同航路を追ふて試驗飛行を爲せしとは前に英國航空總監サイクス少將の言明せしところにして、目下巴里に於て英國の自治殖民地各代表者と協議しつゝある國際航空條約案が聯合國側の協定を見たる上は、此廣汎なる交通系に於て郵便通商の定期飛行を開始するならん。近く英國航空次官シーリー少將が下院に於て述べし所によれば、英國政府は國防の爲め航空隊百二箇隊を常設する計畫にして、一方埃及カイロより印度に至る空中郵便開始の事は極めて好望にして阿弗利加より印度に至る全航空路は既に測量を遂げ目下喀土穆よりカイロに至る航空路に就き測量中なり、航空大臣チャーチル氏も航空省を舉げて專ら本件の爲めに努力せんとしつゝあり、豫算案に規定しある定額三千萬圓よりも更に多額を商事飛行に利用するを得可ければ、軍事飛行に關する準備に既に遠く列國を凌駕せる英國は航空術發展上に於ける今日の位置を維持して失墜する事なきを確信すと。蓋し此意氣込みを以てせば英國の手のみに依る空中航路開拓丈けにても逐次大に見る可きものあらん。

佛蘭西は既に昨年八月巴里、ルマン、シントナザール間に空中郵便遞送路を開通し平均三時間を要する由にて郵税三十錢を課し居れり。其他巴里、リヨン間二百四十哩、リヨン、マルセーユ間百六十五哩、マルセーユ、ナイス間百四十哩の三空中郵便航路も目下計畫されつゝあるところにして、是等は頓て成立す可き倫敦、巴里、羅馬及コンスタンチノープル間の聯合空中郵便交通系中の佛蘭西領を形成するなる可し。又佛蘭西より國

外に向てコルシカ島に至る飛行艇に依る空中郵便航路を開始せんとし、阿弗利加に於てモロッコ及アルゼリアに數線の空中軍事通信系を開始しあり、更に又佛蘭西マルセーユよりアルヂェーを經てサハラ沙漠を越しチンブクツに達する長距離線は目下測量中に屬し、中ビスクラ、ワルグラ間二百四十哩、ワルグラ、イニフエル間二百十一哩及イニフエル、インサラー間二百二十三哩は既に開通せられあり。

伊太利國にてはサーヂニア島に到る海上百五十哩を飛行艇を以てして平均二時間に連絡する空中航路は早く一昨年六月二十七日に開通を見、一昨冬より昨春に渡り一時中絶せしが、昨年三月より又開通し居れり。ナイス、ゼノア間百哩、ゼノア、フローレンス間百二十哩、フローレンス、羅馬間百四十哩、羅馬、ブリンヂシ間二百九十哩は目下測量中にして、是等の空中系は聯合空中郵便交通系の伊太利領を形成するものなる可し。其他ベニス、トリエスト間七十哩、ベニス、ポラ間八十哩、アンコナ、ヒウメ間百三十哩、アンコナ、ザラ間九十哩、ブリンヂシ、カタロー間百五十哩、ブリヂシ、ヴアロナ間百哩の六線は墺地利と休戰調印の後直に組織に着手されしものなり。

獨逸に於ては伯林、ミユーニヒ間三百五十哩に天候の許す限

り毎日定期空中航路を早くより開始し旅客及郵便物輸送に從事し、平均四時間半を要して一哩の賃銀二圓を徴しつゝあり。其他大都市を連絡する郵便物逓送及旅客輸送の空中航路は多數に開通されあるとの事にして、特に此頃同國の橋梁、鐵道、電信等が戰爭により破壞され交通の障碍を感ずること大なるを以て政府は數百の飛行機を使用して布令を傳達しつゝありと言はる。

墺匈國にては兩都維也納、ブダペスト百四十哩を連絡する毎日定期郵便物空中逓送が昨年七月五日開通され郵税二圓を課しつゝあり。チンマルク國にも毎日定期空中郵便線三線の計畫さるゝあり。諾威にては同樣三線の空中系計畫中にしてノルウエーデアン エーア ルート會社の經營に委するとの事なり。又西班牙に二線の空中交通系計畫されスパニツシユ會社之が經營に當り、希臘にては一線は既に昨年八月開通され更に他の一線計畫中にあり。此の如くにして歐洲大陸を中心とする新交通機關の利用は急速の勢を以て發展せんとしつゝあるなり。

轉じて米國航空界を觀んに、米國政府は本年七月一日より始まる次年度の航空費として四億萬弗の豫算を計上し、其中には價格一箇百五十萬弗の最大航空船四箇、二十五萬弗を價する中

型のもの十二箇、七萬五千弗の小型船十二箇を新たに建造する案の出來あり。又政府の一事業として全國に亘く多數の飛行場を設備し所謂空中航路脈を形作らんとし、其計畫は稍組織的にして遞信省所管の二幹線を劃せり。第一線中華盛頓、ヒラデルヒア、紐育間二百十八哩は既に昨年五月十五日に開通し日曜を除く毎日定期郵便物遞送を實施し、華盛頓より紐育まで平均二時間三十分を要し、紐育より華盛頓まで二時間五十分を要し、郵税は十二錢を課し特別配達には別に二十錢を徴し居れり。之を擴張して紐育よりボストンを經てモントリールに到る線、華盛頓よりアトランタを經てキー　ウエントに到らしめ、更にキー　ウエントより延長して一方はハバナを經てパナマに達し一線はウエスト　インヂースを經て南米に出づる一大幹線を米國東海岸に沿ひ南北に走らしめんとす。此幹線の支線としてはヒラデルヒアよりピツツバルク、華盛頓よりシンシンナタ及アトランタよりニユーオレアンに連結する計畫あり。第二線としては紐育、ベレホント、クリーブランド、シカゴ間七百五十哩は日曜を除く毎日定期郵便物遞送を開始する運びとなり、平均九時間を要する豫定にして郵税は前述のものと同一なり。此線は延長されてオマハ、デンバー、ソルト、レーキ　シチーを經てサンフランシスコに達する計畫にして、此幹線に屬する支線はシカゴより南下してセントルイ及カンサズ　シチーに到り、他はシカゴより北西に出でセントポール及ミネアポリコに到り、並びにクリーブランドよりピツツバルグに到る及ソルト　レーキ　シチーよりシアトルに到るもの計畫さるゝあり。民間に於ても米國飛行機製造業者組合の事業として米國東海岸の諸都市とクリーブランド、デトロイツト、シカゴ等の中部都市々を聯絡する各空中線に沿ひ十哩毎に着陸場を設け、郵便飛行機のみならず一般定期商業用飛行機の中途故障を感じ着陸を強要さるゝとき着陸避難の設備をなさんとの計畫あり。

大西洋横斷飛行は目下の問題として横はり列國間特に英米兩國にては頻りに此計畫を進め、飛行界に一新紀元を劃す可き大飛行の先驅を着けんと努力しつゝあり。

前に歐洲各國を視察して歸れる米國エーロプレーン　エンド　モートル　コーオペレーションの支配人は若し米國にして大西洋横斷飛行を決行するにあらざれば英佛伊若しくは獨逸に先鞭を着けらるゝの遼からざる可きを憂へ、若し個人にても團體にても此横斷飛行を試みんとする者には横斷可能なる飛行機の設計及建造の求めに應じ材料及勞力の實費を以てコーオペレー

ションは歡んで之に從事する旨を發表せり。米國海軍中佐ジョーンス　タワードは海軍省主管の下に行ふ大西洋横斷飛行計畫に必要なる材料の蒐集及人員の募集事務の開始を命ぜられ、之に使用す可き飛行艇は特に其目的に向て建造されたる堅牢なるものにしてクバーチー發動機三基を据付け千二百馬力を有すと。又米國海軍中佐ベルリンガーは近く擧行さるゝ大西洋横斷飛行計畫準備のためノーフオークより華盛頓に赴けりと。其熱度の高潮推測に餘りあり。然るに佛蘭西飛行中尉フオンタンは既に阿弗利加西海岸に於ける佛領ダガール港より南米伯剌西爾のペルナンブコに向て大西洋横斷飛行の決行に出發せりとは倫敦三月十八日發電に見るところなり。此の如き外電は屢々繰り返さるゝところなるが、何日かは成功さるゝなる可く、歐米兩大陸間空中の絡繹たる壯觀を見ること遠き未來にあらざる可し。

京阪間僅かに二時間

從來軍用として異常の發達を遂げたる飛行機が商事及遊樂(スポート)用として用ゐらるゝ事の微なかりしは主として其價額及維持費の餘りに高價なるが爲めなりとする人多し。商業用として各個に飛行機を備へん事は現在に於て或は高價に過ぎん。然れども遊樂用として富の程度の低き我國の如きに於ては贅澤に過ぎんも、歐米に於ける他の遊樂機に比すれば必ずしも高價なりと云ふ可からず。例へば自働車を所有するに比すれば買値も高く維持費は尙遙か嵩む可しと雖ども、歐米の富者がヨットを所有し夏期航行して娛樂となし若しくは商用にも使用するに比すれば買値、維持費共に廉く、小型の發動機艇を所有すると其費用稍や伯仲せん。單に費用の概觀に於てのみ上述の如くなれども飛行中快を採る事の大なる到底他の遊樂機關の比にあらず、假りに通過道程のみに割當てたる費用を以てして其能率を對比せんに飛行機は決して高價なる遊樂機にあらざるを知る可し。然るに歐米に於てすら遊樂用として未だ汎く用ゐられざるは飛行安全度の充分ならざるがためならん。現在の進歩せる程度に於ては飛行場を離れ遠く飛び出しさへせざれば殆んど危險の無かる可きなり。然れども單に飛行場の上空を飛ぶのみにては恰も競馬場内のみを乘廻すと異ならず誰しも其單調に厭き、飛行場を遠く離れ或は田舍の景色を瞰下するの快を貪り若しくは都市間を飛行せんとするの欲望を生ず可く、又左もなくば遊樂用としての價値は充分に發揮されざるなり。然らば此遠距離飛行を

安全なるものとせんには如何の途を採る可きか。其方法は恐らく下の三つに歸着せん。

（一）飛行機並びに發動機を完成し、是等故障の爲め中途着陸を強要さるゝ恐れ無きものと爲す。

（二）設備の整ひ目標の明瞭なる着陸場を空中線に沿ひ多數に設け發動機其他に不意の故障を感じたる時直に空中滑走に依り安全に着陸し得る如くす。

（三）飛行機の構造を改め少々粗き地面へも着陸して破損顚覆の恐れなきものと爲す。

第一の方法は到底急速に到達し得らる可きものにあらず漸次研究の歩を進む可きなり。然らば現在の進歩は幾何の安全を保證し得る程度に在るか。今東京大坂間の一例に就て一考せしめよ。此間の道程は鐵道線路に沿ひ約三百五十哩にして汽車を以てせば十二時間を要す。若し此間を高速飛行機を以て直行せば二時間餘の行程にして恰も手頃の飛行距離ならんか。此線中高速飛行機の着陸に適する如き充分の廣さを有し且つ平坦なる着陸場は目下極めて少く、若し中途故障を生ずるときは何れか附近に稍平坦なる原野を求め強行着陸を敢行するの外なく、然るとき少くも機體に多少の破損を承くるを免れざる可し。晩近歐米の統計よりせば機體及發動機の相當良きものを撰み百回の往復中一回の強行着陸を見る事稀ならんか。然りと雖ども百回の往復中一回の強行着陸に遇ふ恐れありとせば商業用若しくは遊樂用交通機關として危險度は未だ少なりと云ふ可からず。從て（二）の要求の起る所以なり。

飛行場

軍用飛行機は時として一萬呎以上の高空を翔り敵を脫れ又敵を攻撃するを必要とする事あれども、平時の使用に於ては然る必要なく、且つ此の如く高く飛ぶ事は飛行家の苦痛と動力の甚大なる消費とに於て經濟上堪へ得るところにあらず。高き山嶽を越す時の如き他は常に約五六千呎の高さを翔るを普通とせん。今一哩（五千二百八十呎）の高さに飛行しつゝある飛行機が不意に故障を感じ着陸を強要さるゝ場合を想像せんに最低の滑走角は概ね六分の一乃至八分の一の間にあるを以て、六哩乃至八哩の距離を半徑として設ける圓内に着陸場を見出し得ば空中滑走を利して安全に着陸することを得可し。依て空中線に沿ひ十哩乃至十二哩毎に着陸場の設け在らば、文事飛行の安全は稍完全に保證さるゝの理なり。米國飛行機製造業者組合の計畫の

如き此計算に基くものならん。要するに現在に於て着陸場の稀少なる事は飛行機の一般使用に對する大なる障碍たるに相違なし。然れども多數に着陸場を設くる事は經濟上の問題にして、政府及國民の大なる覺悟と決斷に俟たざる可からず。若し政府が一大英斷を以て空中航路を制定し。目標及信號を完成し、特別の航空地圖を作製し、着陸場を設備し、氣流豫報局を設立し、飛行場を總て國民の公有物と爲し恰も港灣の如く開放し、陸海軍及郵便物空中遞送に所要とする如き特別の部分を除きては全部を一般の使用に供するか、若しくは或制限を附して一般使用に公開せば、飛行機の使用は商業用と遊樂用とを問はず實用時代に入り、一方之が實用時代に入らば漸次各地方に着陸場の數を增し或は都市所有の飛行場の經營も興り、又私有飛行場の經營の如きを好恰の投資物件となるの日ある可し。

着陸の安全

多數の着陸場を設くるは最も望ましき事なれども、小數年月に其實施を見んは何れの國に於ても到底望み得らる可きにあらず。過渡期を脫する第一階梯として近くは(三)の方法に向ひ改造の步を進むるならんか。普通の荒野に比較的安全に着陸し得んには着陸速度甚低き機を設計するか若しくは機が地面に觸れてより速く機體の停止し得らるゝ考案に依らざる可からず。

地面に觸れてより機體の慣性力を殺して急に速度を落す爲め制動機の種々試みられしあれども、制動機を適用するとき左右兩輪へ加はる壓力に不平均の在るとき機體は急に方向を轉じ甚危險なり。又逆轉推進機を用ゐ空氣制動を爲すも好き思ひ付きなれども、一段發動機の停止せる後は其使用の途無きを奈何にせん。

又機の上若しくは下に垂直に向く推進機を取附け離陸及着陸に際し之を運轉して地面に垂直に昇降せんとする所謂ヘリコプターの考案あれども未だ實用の域に入らず。飛ぶに安全なる飛行機の製作に成功せる今日進んで着陸の安全を研究するは目下工業家の急務なりとす。

着陸場と速度

安全着陸の面白き工風なき以上、着陸速度の低き飛行機を設計するより他に途なけん。着陸速度一時間六十哩の飛行機に對しては三千乃至四千呎四方の着陸場を要するに比し一時間三十哩のものに對しては八百乃至九百呎四方の廣さを以てして足

る。要するに着陸速度を半分にせば機體の地面に觸れてより停止するまでに要する地面の長さは四分の一となり、面積としては十六分の一となる理なり。又着陸するとき地面に對する衝撃は矢張り其速度の平方に比例するが故に、高速飛行機の着陸には地面は至て平坦且つ滑らかならざる可からず。之に依て見るに高速飛行機を安全に着陸せしめんには非常に廣濶なる地面を要し之を平坦に均すに莫大なる費用を要するのみならず維持費とても蓋し鮮少ならざる可し。故に着陸場の設備費及經費を節減せんには着陸速度を低くす可きことを知る。加ふるに米國等に於て山林巡邏用として設計しつゝある如き低速にして且つ特殊の着陸裝置を有つ飛行機を以てせば飛行の中途着陸を强要さるゝとも稍平坦なる自然の草野を見出し着陸して大なる損傷なきを得ん。

飛行機の最高速度は約ぼ最低速度に準ずるものなれば、着陸速度を低くせんとする要求より自然軍用飛行機の如く突飛に高速なる機を使用すること少くなる可し。且つ又特殊の近距離郵便物運送に從する小型の高速飛行機を除きては概ね積荷量大なるを欲し、加ふるに動力消費を少なからしめんとし速度の大ならざる機を建造するに至る可し。現今に於ても爆彈投下用として造られし大型のハンドレー　ペーヂ及カプロニー飛行機の如き何れも一時間九十哩內外の速度を有つを普通とす。尙進んでは翼の反りを飛行中任意に變へ得る如き機構を具へ飛行速度を餘りに落さずして着陸速度を充分に低め得る改造の工風も顯はるゝことなる可し。

航空營業に適應する改造

飛行機が軍用以外の實用に適用さるゝに至りては、先づ第一に郵便物運送用に最も汎く用ゐらるゝ勢あり。次に發達す可きは旅客及荷物の輸送に向ての使用ならん。此何れの目的に對しても設計の方針が從來の如く專ら軍事上の見地より爲せしと稍趣きを異にし概ね大型のもの多く使用さるゝに至らん。例へば乘客用としては三十人乃至五十人乘以上のものにあらざれば營業上收支相償はざる可く、又總て經濟の問題最も重きを有すが故に交通機關として動力一馬力に對する積荷量多きを望むは自然の趨勢にして、今次の戰場に於て用ゐられしものにては夜間爆彈投下用飛行機が約一馬力當り十四封の積荷力を有し、一人乘戰鬪飛行機は僅かに一馬力當り七封の積荷力を有するに過ぎず。一馬力當り七封と云ふが如きは到底平時使用す可きものに

あらず。今後商事用としての設計は一馬力當り十四封程度ののを最低積荷力となす如き標準とならんか。遠距離飛行に對し燃料補給を屢々要するときは其平均速度を除すこと大なるを以て、單に輸送力に就てのみならず輸送速度の上よりしても一馬力當り載荷力を增進するの必要なる自ら明かならん

　飛行機の型大となり翼の長さを增すとき地上滑走中の運行其他取扱甚だ不便となり、從ては着陸離陸に際する危險を增すが故に翼の長さを短縮せんとする苦心の拂はれ、翼の能率を少々犧牲とするも幅を淺くし、或は三葉若しくは追翼等の型を採用するもの行はるゝに至らん。大型となれば着陸の安全を要すること益々緊切となるが故に今日の幼稚なる着陸裝置を改造するの考案は最も必要とするところなり。

　尙ほ微細に渡り此新交通機關の一たる飛行機の利用に就き詳く考覈するときは、其設計に改造を加ふ可き點、進んで研究改良に努力す可き諸問題は實に枚擧に遑あらざる可し。

獨逸の過激派の名稱スパルタクスが羅馬の奴隸から出た事は今更云ふ迄もなく世間公知の事實だが此の名稱は始めてリープクネヒト一派が用ゐる樣になつたのは千九百十七年の一月リープクネヒトが此名の下に匿れてパンフレットを書いたのに始る▲勿論秘密出版でタイプライターで押したものであつた筆者は毎號人が變つてローザルクサンブルクフランツメーリングなども筆を執つた▲誰れも彼れも轡を揃えて鋒先鋭くシャイデマン一派の煮切らない態度を攻擊して居る▲シャイデマンは多年蹴飛された事を忘れて其靴の裏を甜める犬だと罵倒し又戒嚴令と云ふ口輪を箝められて鼻をクンクンと音を立てて居るなどと嚴しく書て居る▲玆に面白い事は羅馬のスパルタクスが遂に志を遂げなかつたのは獨逸系の一團が軍の節制に服しなかつたのに因する事だ

デモクラシーの經濟的基礎

山川均

一

近代のデモクラシーは、近代の文化と共に、希臘から來たと云はれて居る。けれども希臘の哲學者等が、デモクラシーの定義を立てる必要を感じたのは、之を他の『クラシー』から――之を君主の政治や貴族の政治から――區別する爲めであつた。ディーモスの政治は、最早や唯一の政治ではなくなつて居た。定義立てられた希臘のデモクラシーは、最早や唯一の政治組織ではなくて、政治組織の一つに過ぎなかつた。吾々は、眞白の背景のうちに、最も明白に眞黑のものを見るやうに、デモクラシーの概念が明白になりかけた時は、デモクラシーが漸やくデモクラシー以外の政治組織や　デモクラシーの精神に反した社會生活を背景とするに至つた時であつた。人間にデモクラシーの觀念の無かつた時に、デモクラシーは最もよく人間の生活に浸み渡つて居た。

希臘は吾々に、デモクラシーの定義とデモクラシーの制度とを遺產とした。けれども政治のある前に、人間には生活があつた。政治組織のある前に、人間には社會生活と社會組織とがあつた。そしてデモクラシーが『制度』となる前に、人間はデモクラシーを生活して居つた。若しデモクラシーを以て、一つの政治制度を指すものとしたならば、希臘は吾々にデモクラシーを遺こしたと謂ふことが出來る。若しデモクラシーを以て、社會生活の一原則であるとしたならば、希臘は寧ろ、前の時代からデモクラシーを讓られたものだと謂はなければならぬ。希臘は吾々にデモクラシーの制度を遺こす爲めに、デモクラシーの生活を何者から承け繼いだであらうか。

そしてリユヰス・エチ・モルガンは之に答へて、それは氏族制度であると云つて居る。

二

古代社會の研究を以て知られてゐるリユヰス・エチ・モルガンは、希臘のデモクラシーが氏族制度と共に生れたことを指摘して、次の如く云つて居る。

『アゼンス人が、領土と財産とを基礎として新しい政治組織を創定するや其政府は純粹なるデモクラシーであつた。けれども、其れは新しい理論でもなければ、又アゼンス人の特別の發明でもなく、氏の制度の舊きが如く舊るい馴染の制度であつた。デモクラシーの思想は邈々たる太古より、彼等の祖先の知識と慣行との裡にあつたもので、今や一層精巧にして、多くの點に於いて、一層改良せられた政府となつて現はれたのである。』

然らばアゼンスのデモクラシーに於ける、ソロンの功績は何であるか。モルガンは次の如く答へて居る。

『普通に、ソロンはアゼンスのデモクラシーの創定者と見做されて居るが、或若者はクリステネスとテシウスとに其事業の一部分を歸して居る。けれどもテシウス、ソロン、クリステネスの三人は、デモクラシーを創定する爲めではなくて、政府の構造を氏族組織から政治組織に變更しようとする、アゼンス人民の三大運動に各々關連して居るものと見做せば、一層事實の眞諦に近づいたものである。何故ならば、アゼンスのデモクラシーは其孰づれよりも古いからである。彼等は、氏から承け繼いで現に行はれて居つたデモクラシーの原則を變更しようとしたものではない。彼等は各々其時代に於ける、國家形成の運動に貢獻したものであつて、國家の形成には、氏族的社會に代ゆるに政治的社會を以てするの必要があつたのである。』

然しながらデモクラシーがアゼンス人の特殊な發明品でなかつた如く、氏族制度も亦た同じくアゼンス人に特有な制度ではない。總ての人類が、嘗ては氏族制度の社會に生活して居たことは、古代社會に關する現在の智識の及ぶ限りに於いては、最早や疑ひのない事實であつて、其活きたる實例は、多くの現存野蠻人の間にも見ることが出來る。斯くしてデモクラシーは、人類共同の遺産であつたと謂はなければならぬ。

氏とは母系の祖先（後には父系の祖先）を同うする近い同血族の社會であつて、其成員は悉く平等であつて、氏ノ上と武將とを選擧し又は罷免するの權、死者の遺産を共同に相續するの權、氏の會議に於ける發言の樣を平等に持つて居たと共に、防衛、扶助、不正なる加害に對する賠償救濟の義務をも相互に負つて居た。彼等は外部から氏に加へられた不正を、自己に加へられた不正を見做したと共に、氏の成員の一人が外部に加へ

た損害に對しても、共同の責任を感じた。彼等には氏の利害を離れて各自の利害といふものはなく、各自の利害を離れた氏の利害といふものをも考へることは出來なかつた。各自の爲めの全體、全體の爲めの各自といふ原則は、當時の社會生活の一切を表徵したものであつた。

三

社會の制度と思想との上に現はれた斯ようなデモクラシーは、當時の經濟狀態に基づくものであり、當時の經濟組織の必然の結果として生ずべきものであつた。更に詳く云へば、氏の內部に行はれたデモクラシーの制度と思想とは、此時代の人間が如何にして生活の資料を獲得したかといふ、生產の方法と生產の組織とに基づくものであつた。此時代には、私有財產の制度は未だ現はれて居なかつた。個人の私有に屬したものは、各自の特殊の趣味や用途に適つた身の廻り物や、各自の日常の使用に必要な僅少の所持品に過ぎなかつた。斯ような個人的の所有品が增加して、私有財產が漸やく重要を加へて來てからも、社會的生產の機關――其最も主要なものである耕地や山林――は依然として共同の所有であつた。彼等は原則として、共同の生產機關を共同に利用して、共同に生產した。彼等が技術上からは個人的に生產した場合にも、其生產は社會全體の爲にする社會的の生產であつた。彼等の間には貧富の差別はなかつた。よし貧富の差別を生じた場合にも、貧富の差別は、富みたる者に貧しき者を支配する力を與へるものではなかつた。貧富は經濟上社會上の征服と被征服との關係とはならなかつた。彼等は依然として平等であつた。

斯ような經濟上の組織が、社會の全體と其成員との、渾然たる融和の上に立つ制度と思想となつて現はれたことは自然であつた。如何にして活きて居るかと云ふことは、如何ように活きるかを決定する。生活の條件は生活の樣式を決定する。當時の經濟組織は、必然に、社會全體の運命を決定することは、其社會を組成する成員全體の意志であり、其權利であると共に義務であるといふ思想の外には到達し得られぬものであつた。そして社會生活の隅から隅まで浸み渡つた當年のデモクラシーは、其必然の結果であつた。彼等はデモクラシーを知らなかつた程に、其の生活はデモクラチックであつた。彼等はデモクラシー以外の『クラシー』を知らなかつたのである。

斯ような血族的社會のうちに、人間は歷史前の幾萬年、若し

くは幾十萬年を生活した。若し傳統といふ言葉が、事物の現狀を謳歌する爲めの口實ではなくて、人間の社會生活の原則を指すものとしたならば、斯ような意味でのデモクラシーは、慥に人類間の傳統であつたと云ふことが出來る。歷史は或意味では、此の傳統に復へらうとした人間の努力の記錄である。そして幾度びか此の傳統に復へることが出來た。少くとも、部分的には此の傳統に復へることが出來た。

けれども希臘人のデモクラシーも、羅馬人のデモクラシーも、中世都市のデモクラシーも、近世商工階級(ブルジョアジー)のデモクラシーも、原始的時代のデモクラシーの如く安定的のものではなかつた。幾度びか恢復せられたデモクラシーは、僅かに數百年にして、或は數百年ならずして凋落した。そして近世のデモクラシーは、最も多く安定性を缺いで居ると謂ふことが出來る。

原始のデモクラシーが特殊な安定性を有して居たことは、要するに、其根抵であつた當時の經濟組織の鞏固を語るものである。原始デモクラシーが(一)經濟上の平等を基礎とする、各人社會的平等の上に立つて居たことゝ、(二)單に政治上の制度に止らないで、社會生活の一切を容包し、社會生活の一切に浸潤した社會生活上の原則であつたといふことゝは、當時のデモクラシーに異常な力と安定とを與へたものである。

四

人類史の大部分を占める蒙昧時代と野蠻時代との悠久たる年月を通じて、吾々の祖先が、如何にデモクラチックの生活をして居つたかを窺はしめる事實と材料とは、殆んど無數に引用することが出來る。

ニユギニアのパプア族は蒙昧時代の上期、若くは野蠻時代の下期にあつて、彼等は火を使用することは知つて居るが、火を作ることを知らない。三年の間パプア族と生活を共にしたミクルコ・マクレーによると、彼等の間には原始共產制度が行はれて居る。彼等は其日々々の用に足るだけの食物を得る爲めに共同に働き、子供をも共同に育てゝ居る。彼等の間には何等の首長もなく、爭ひと云ふほどの爭ひは起らない。夕方からは精一ぱいおしやれをして踊る。蒙昧人の常として、パプアも踊りが好きである。村落ごとにハパアラ又はバレーと名づける集會場があつて、未婚の男子の住居となり、一般社交の會場となり、公共事務を協議する議場ともなつて居る。

私有財產の進步は、勢ひ原始デモクラシーの基礎を危うくす

ものであつたが、其れと同時に、貧富の懸隔から生ずる不平等を緩和すべき、種々なる制度や慣習が行はれて居つた。ドールが『アラスカ及び其資源』のうちに誌るして居る見聞の如きも其一例である。アラスカのエスキモーの間にも、原始共産制度が行はれて居つて、漁獵の獲物は氏の所有であるが、中には私有制度に移つて居る種族もある。斯ような種族の間では、富者は一定の期日に氏全體の人民を集めて饗應した上で、其財産を悉く分配する。ドールは曾て富裕な一家族が、十挺の鐵砲と、十揃ひの晴衣と、二百筋の誦珠と、十枚の狼の皮と、二百枚の海狸の皮と、五百枚の海貂の皮と、無數の毛布などを分配した上に、着ていた晴衣までも襤褸に着更へて分配したのを見たと云つて居る。リンクは富の蓄積の主要な目的は、一定の時期に分配する爲めである、そして時としては、貧富の懸隔を防ぐ爲めに、財産を破壞する習慣さへも行はれて居ると云つて居る。

五

人口の增加による血族關係の弛緩と、私有財産の發達による原始共産制度の分解とによつて、氏の制度は本來の强さを失つて來たが、共同生活の傳統は、共産村落の時代となつても尙ほ大部分は保たれて居た。スラヴ民族の共産村落に就いて、ヘンリー・メインは斯う云つて居る。

「各村落は、共同の所有者にして同時に親類同士の一團であつた。そして共同の所有に係はるものは慣行の上でも分割せられて居らず、理論の上でも分割すべきものとは見做されて居らぬ。土地全體は全村民の共同の勞働によつて耕やされ、其生産物は年々各世帶の間に分配せられて居る。そして其分配は、時としては各世帶の必要を標準とすることもあるし、時としては又、耕作者に對して用益權として收獲中の一定額を與へるが如き規定によつて行はれることもある。」

カビイル族の共産村落について、ルツルノーも同じことを云つて居る。カビイル族の共産村落では、土地の耕作は共同耕作から各家族の耕作に移つて居るが、曾て共同耕作の行はれて居た多くの跡方がある。そして家屋は今日も村ぢうの男女の手傳ひによつて建てられる。斯ような手傳ひは日常のことであつて、耕作の爲にも收穫の爲にも常に行はれて居る。共有地の割當て、租税の割當て、公共事業に對する勞役の割當ては、村民の會議によつて決定され、道路、寺院、噴水、灌漑用の運河、野楼、村落の墻壁等は各村落の手で經營せられて居るか、街道や大きな寺院、大きな市場などは、數村落を集めた種族全體の手で建造せられて

居る。又各村落には各々鍛冶があつて、彼等は共有地の一部を與へられ、村落全體の爲めに農具の製造や修理をやつて居る。耕作季節が近づくと、彼等は家ごとを廻つて農具の修理をする。新しい鍬を作ることは、最も尊ぶべき仕事であつて、到底金錢や其他の報酬によつて酬はれるものでないと考へられて居る。

カビイル族の間では、既に土地以外の私有財産が發達して居るので、勢ひ貧富の差異がある。けれども富者と貧者とは、外觀からは區別することが出來ぬ。貧乏人が手傳を求めれば、富裕者も其の畑で働くし、富裕者も貧乏人の手傳を求める。貧乏人の爲には、人民會議は共有地の一部を當てがつて、時としては村民全體で耕作する。又た貧民は肉類を買ふことが出來ぬから、人民會議は寄附金又は科料等の積立で肉類を買つて分配する。更にまた、市日以外の日に、牛や羊を殺した富裕者は、必ず村ぢうに其事を觸れ歩るかせる、そして病人と姙婦とは自由に望むだけを與へらる。

斯ように共同村落の時代では、一面には私有財産の發達が、各人の社會的平等の基礎を危くし、共同生活の思想を危くし、從つてデモクラシーの基礎を危くしようとして居るにも拘らず、此時代に於ける最も主要な生産機關たる土地は依然として村民の共有に屬して居た。共産村落は、實に此の土地共有といふ經濟組織を基礎としたものである。そして土地の共有の行はれて居る間は、貧富の差別は必ずしも經濟的の征服、社會的の征服となつては現はれなかつたのである。

六

斯ような經濟組織の基礎に立つた共産村落の生活が、依然として、純粹のデモクラシーの傳統の上に立つていたことは云ふ迄でもない。從つて共産村の公共の事務——即ち政治——が最もデモクラチツクに處理せられて居たことは云ふ迄でもない。ピータア・クロポトキンはカビイル族の人民會議に就いて斯う云つて居る。

「カビイル族は共産村落の民會の權威を外にしては、何等の強權をも知らぬ。民會は野天に開かれることもあるし、又は石造の議席を備へた特別の建物で開かれることもある。成年の男子は總て會議に加はり、其議決は明白に滿場一致によつて決せられ、滿場一致を見るまでは何時までゞも討論が續けられるのである。共産村落には、民會の議決を強行すべき何等の強權もないが、而かも此制度は苟も共産村落のある所、必ず存して居た……。民會は又た、執行機關として也老・錄

事、會計係を選擧任命し、各自の租稅額を決定し、共有地の割當てや、有らゆる種類の公共事業に對する勞役の負擔を決定したのである。』

モルガンによれば、最初の氏の血族的社會から、後年の政治的社會に達するまでに、政治の形式には三大階段があつた。第一は各氏の氏人によつて選擧せられた氏ノ上會議の政治であつて、第二は氏ノ上會議と軍事上の總指揮官との協力による政治であり、第三は氏ノ上會議と軍事總指揮官と人民會議とによつて行はれる政治である。政權が漸く氏の首長の掌中に歸してからも、デモクラシーの原則は、氏人の首長選擧の權と罷免の權とに現はれて居た。モルガンの云つて居るように氏の會議はデモクラチツクの會議であつた。何故ならば、總ての成年の男女は、會議に上ぼされた一切の問題に發言權を有したからである。會議はまた、氏ノ上と武將とを任免し、祭司を選擧し、氏人の殺害に對して赦免又は復讐し、氏族以外の人を氏に採用するが如き、當時の社會に於ける最も重大なる任務を行つて居たものである。

七

然しながら、血族的社會に於ける經濟上の平等と、從つて社會上の平等と、是等の生活上の事實を反映した共同生活の觀念との上に立つて居た原始時代のデモクラシーは、血族的社會の崩解せざるを得なかつた。そして血族的社會は、私有財產制度の發達の爲めに、勢ひ崩解せざるを得なかつた。

牧畜と農業との發達は、家畜と土地との形に於いて生產機關の私有を可能とした。それと同時に、牧畜と農業とに於ける生產技術の發達は、人間の勞働の能率を增進して、各自の生活を支持するよりも遙かに多くを生產するようになつた。そして此の生產力の增加は、生產機關の占有者に、他人の勞働によつて生活するの機會と方法とを與へたものであつた。そして斯ような『勞働の搾取』の最初の樣式は奴隷制度であつた。

私有財產制度が主要な生產機關を迄で冒した時、原始共產制は根底から覆つたものである。社會は最早や、經濟上に平等な個人の集團ではなくて、經濟上の征服者と被征服者との、權力の關係となつた。そして斯ような經濟組織の變革は、勢ひ共同生活に對する思想の變化となつて現はれざるを得なかつた。『各自の爲めの全體、全體の爲めの各自』といふ——觀念——觀念といふよりも事實——は、勢ひ原始共產制の崩壞と共に崩壞せざるを得なかつた。デモクラシーは其の基礎を失つたものである。

斯ような生産方法の變化は、必然に原始共産制度を崩解せしめるものであつて、原始共産制度の崩壊は、また必然に、其れを基礎とした原始のデモクラシーを崩解せしめるに充分なものであつた。デモクラシーは血族的社會と共に、何等の外部からの力を待たずして、必然に倒るべきものであつた。けれども外部からの力は尙ほ其上に加つた。種族と種族との接觸、民族の移動と混淆、鬪爭と征服とは、一面には血による團結の力を弱め、一面には社會の階級的分裂を助長したものであつた。

八

テシウスとソロンとクリステネスとの現はれたのは、希臘の氏族制度が宛かも此狀態に達した時であつた。希臘人はホーマー時代に於いて、既に野蠻時代の上期に進み、政治組織に於いては、モルガンの所謂第三の段階に達して居た。即ち政治上では氏(ウジ)の首長の會議と、軍事總指揮官との外に、人民會議が現はれ、經濟上では土地と家畜との私有財産が大に發達して、氏族制度は、旣に爛熟のうちに其凋落を前影して居つた。氏族制度は最早や同血により平等を保障する代りに、血統により貴族制度を築いて居た。テシウス、ソロン、クリステネスの事業は、一面に於いては、既に廢頽した氏族的社會の遺物たる制度と慣行とを振ひ落して、新たに政治的社會を打建てることであり、一面に於いては、氏族的のデモクラシー、社會的のデモクラシーを政治的のデモクラシーとすることであつた。斯ように血の關係と氏の制度とを基礎とした希臘人の社會を、領土の關係と財産の關係との上に建て直ほした點に於いては、クリステネスの事業は大化の革新と意義を同じくしたものであつた。

氏族制度は其うちに發達した私有財産制度の結果として、血統を基礎とする平等の社會から、血統による貴族政治の社會となつて居た。然るに一方には、流通經濟の發達は商業の勃興となり、商業の發達は商人てふ富の階級を除々に形成して居つた。希臘のデモクラシーは、此の新興の富の階級が、血統による貴族に對する政權の要求として起つたものである。クリステネスの立法が、氏(ウジ)の血族的單位に代へるに、デイームなる土地的單位を以てし、デイームに姓名と財産とを登錄せられるとを以て市民權の條件としたのは、氏族的社會組織の殘屑を一掃して、土地と財産との上に立つ政治的社會組織の基礎を確立したものであつて、血統による貴族の支配に對する、新興富力の階級の要求を代表したものであり、其勝利を象徵したものであつた。

斯くて希臘のデモクラシーは、デモクラシーの起元であると共にデモクラシーの終焉であつた。氏族的社會のうちに瀰漫した、經濟上の平等と社會上の平等とを基礎として、一切の社會生活を包容した社會生活の上のデモクラシーは、クリステネスの立法によつて明白に其終焉を宣告せられたものであつた。けれども其れと同時に、氏族的社會のうちに死んだ社會的のデモクラシーは希臘人の手によつて、政治的のデモクラシーに蘇生した。

其れと同時に、曾ては何人によつても意識せられぬ社會生活の原則であり、共同生活の傳統であつたデモクラシーは、明白に意識せられたる要求となり、主張となつた。デモクラシーは初めて、權力者の階級に對する、新興階級の主張となつた。政治的デモクラシーは、其起原に於いて、階級鬪爭を離れては理解すべからざるものである。

九

然しながら、原始デモクラシーが安定性を有して居た理由は、やがて政治的デモクラシーが安定性を缺いて居た理由である。エンゲルスの云つた如く、アゼンスの國家は、氏族的社會のうちから、進歩した國家——即ち民主的の共和國家——が直接に生まれた稀有の實例であつた。從つて其うちには、比較的多くの原始デモクラシーの面影を留めて居た。アゼンスの市民は宣戰と講和を決し、行政官を選擧し、裁判官として行動した。アゼンスのデモクラシーは近代のデモクラシーよりも遙かに廣汎なものであつた。けれども、畢竟アゼンスのデモクラシーは、政治上法律上の限界を一歩も出でないものであつた。アゼンスのデモクラシーが最も光輝を放つた時代に於いても、其の界限は精密に政治上法律上の平等であつて、經濟上社會上の平等を基礎としたものでもなく、經濟上社會上の平等を齎らしたものでもない。アゼンスのデモクラシーには明らかに界限があつた。そして——從つて——其安定性と永續性とにも明らかに界限があつた。エンゲルスは斯う云つて居る。

「……斯ような國家が、如何にアゼンス人の社會狀態に適合して居つたかは、富と商工業との急速なる發達によつて明かであつた。社會制度と政治制度との基礎をなした階級の區別は、最早や貴族と平民とではなくて、奴隷と自由民、異邦人と市民との區別であつた。其の最盛期にあつて、アゼンスの自由市民の總數は女子と小兒をも合して約九萬人であつたが、奴隷は男女合して三十六萬五千人、異邦人——即ち

外國人と解放せられた奴隷――とは、四萬五千人であつて、之を成年に達した市民に割當てれば、一人に對して奴隷は少くとも十八人、異邦人は二人以上に相當する。斯く多數の奴隷のあつた理由は、彼等の多くは大工場に集められて、監視の下に勞働して居つたといふ事實で説明することが出來る。又た商工業の發達は、少數者の掌中に富の蓄積と集中とを來し、自由市民の大衆は益々貧困となり、彼等は自己の勞働を以て奴隷と競爭するか、然らざれば滅亡を待つの外なかつた。そして奴隷と競爭することけ卑しむべきことゝ考へられて居たばかりか、成功の覺束ないことであつた…デモクラシーがアゼンスを亡ぼしたのではなくて…奴隷制度が自由市民の勞働を逐放したのである…」。

アルキビアデスの時代には、アゼンスの市民は二萬人であつて、奴隷の數は其二十倍、四十萬人に達して居た。況んや多數の工匠は、自由民ではあつたが、市民權を有しなかつたと云はれて居る。之に加ふるに、自由民の半ばを占める女子は、男子の支配の下にある性的の奴隷であつた。原始デモクラシーが經濟上社會上の完全なる平等の上に立つて居たのに對して、アゼンスのデモクラシーは此の驚く可き、經濟上社會上の不平等の上に立つて居た。そして此の驚く可き、經濟上社會上の不平等を、永久に支持する爲めにアゼンスのデモクラシーは生まれて來た。ペロポニサスとマセドニアとの二つの戰爭がなかつたとしても、經濟上の基礎を缺いた希臘のデモクラシーが、其内部から崩解するのは必然であつた。血統に對する富力の自己主張に初まつた希臘の政治的デモクラシーが、畢竟富力政治に終つたのは怪むに足らないことである。

十

デモクラシーは羅馬人の氏族制度のうちから起つて、土地と財産とを基礎とする政治上のデモクラシーとなつて倒れた。中世に於ける自由都市のデモクラシーが比較的安定性を持つて居たのは、其共産的の經濟組織が、生産と消費とを支配して、市民の經濟上の平等を確實に保障して居た間であつた。そして商業資本の勃興と共に、デモクラシーは勢ひ大商人の寡頭政治に終らなければならなかつた。

近世のデモクラシーは二つの起元を有して居る。近世のデモクラシーが歐羅巴に成功する前に、何故に亞米利加大陸に成長したであらうか。シムス教授は次の如く答へて居る。

「…けれども近世デモクラシーの制度の眞の生誕地はアメリカであ

つた。成るほど英國から、移住民と共にホイグ主義が渡來した。然しながら此思想よりも、デモクラシーの成育に取つて一層有力なものは、新世界に於ける生活狀態であつた。土地の使用が自由であり、社會が自由であり、束縛すべき傳說もなく、そして幸運と機會と敎化と手段とが殆ど平等であり、人々が自ら自己の法則となり、また法則の泉源となるような、斯ような邊境の地には、自づから政治上、宗敎上、實業上、社會上の民主的制度が生じて來る。アメリカには斯ような制度が生まれて來た。其れは久しい以前に、世界の部分に生まれそうなものであつた。何故ならば、其れは既に姙まれて居たからである。然るに實際に於いては、米國以外には生まれる餘地がなかつた。…アメリカでは古化のエーヂアン沿岸の邊境に於けるが如く。開拓者の小團體は、自己の上に自ら至上權を行び、或場合には純粹デモクラシーの制度を立つるの餘地と機會とを持つて居たのである。」

新世界の經濟的土壤によつて、デモクラシーは自づから彼所に成長した。之に反して、舊世界にあつては、デモクラシーの要求は、封建的特權に對する新興商工（ブルジョアジー）級の自己主張として現はれたものであつて其最も完全な標型は、之を佛國大革命に見ることが出來る。斯くて『米國の人權宣言は外敵に對する人權の主張であつたが、佛國の人權宣言は、特權階級に對する人權の主張であつた』。斯くてデモクラシーの階級的色彩は、氏族制度のうちから直接に生まれでた希臘のそれに比して、近代のデモクラシーに至つて一層明白となつたのである。

十一

近代社會に於ける階級とは、云ふ迄もなく經濟的の階級である。それは血統によるものでもなく生得によるものでもなく、唯だ其人が生產組織の如何なる部分に屬して居るかによつて決定せられさるものである。斯ように近代の階級とは、純粹なる經濟的の階級である。そして近代のデモクラシーは精密に、此の經濟的階級の所要に應じて、精密に此の經濟的階級の色彩を帶びて生まれたものである。近世のデモクラシーは、經濟的階級の意義を離れては、全く其意義を解することの出來ないものである。

然るに、封建的特權に對してデモクラシーを主張した當年の新興階級は、今や當年の支配階級に代つて自ら支配者の地位に登つて來た。そして新しきデモクラシーの要求が、却つて自己の階級に對して、新興の階級によつて叫ばれるようになつて來た。玆に於いてか、彼等は其デモクラシーに新しい衣裳を着せるの必要に迫られた。所謂ソリダリテー（全社會の共同連帶）

の思想は此の所要に應じて生れたものである。ソリダリテーの思想は專ら佛國の紳士閥（ブルジョア）學者によつて唱道せられたものであつて、一面に於いては、商工階級的民主義（ブルジョア・デモクラシー）の階級素性を蔽はんが爲めに、一面に於いては、自己階級に向けられて居る新しき階級の、新らしきデモクラシーの要求に對せんが爲めに發明せられたものである。ソリダリテーの思想そのものが、既に資本階級の階級的武器として生まれたものであるとしたならば、此の思想はブルジョア・デモクラシーの階級的色彩を緩和するものではなくて、却つてブルジョア・デモクラシーの利己心と階級的意義とを證據立てるに過ぎないものである。日本の所謂進歩した思想家が、ブルジョア・デモクラシーと共にソリダリテーを輸入して其新しさを競ふて居るのは、笑ふべきことである。

十二

資本階級の出現は、必然に勞働階級の出現を伴ひ、資本階級の成長は、必然に勞働階級の成長を伴ひ、資本階級の階級的完成は、必然に無產者勞働者の階級的完成を意味するものであつた。斯くて資本階級の政權が――即ち資本階級のデモクラシーが確立した瞬間には、既に勞働階級のデモクラシーが其脚下に現はれて居た。近代のデモクラシーが、最初から安定を缺いて居たことは、著るしい事實である。そして近代のデモクラシーが斯ように安定を缺いて居るのは、畢竟するに經濟上の基礎を有しないからである。デモクラシーは法律の前に吾々を平等にすることが出來る。斯くて吾々は、デモクラシーの政治制度を持つことが出來る。けれども吾々はデモクラシーの生活を持つことは出來ない。或る生物が、如何にして生存するかは、やがて其生物の形態と生活狀態とを決定する。その如く、或る社會が如何にして生活の資料を生產するか、――言葉を換へて云へは、其社會の生產組織の如何は、やがて其社會の形態と、一切の制度とを決定するものである。從つて或る政治上社會上の制度は、之に照應する經濟組織の反映であり、之と反對に、或る一定の經濟組織は、之に照應する政治上社會上の制度となつて必然に反映すべきものである。經濟生活の上に平等のない所に、唯た政治の界限にのみ人爲的なる平等を立てようとした近代のデモクラシーが、必然に安定を缺いたのは怪しむに足りないところである。

然しながら、眞のデモクラシーは其基礎として、人間の完全なる平等を要求するものであるとしたならば、眞のデモクラシ

ーの實現は殆んど望みがないと謂はなければならぬ。進歩とは單純より複雜に進むの過程である。現に今日の人間のうちから、精密に同一の肉體的構造を有する二人を選ぶことは不可能である。否な精密に同一な器官を有する二人を選ぶことゝするも不可能である。吾々は精密に、同一の容積を同する二つの頭蓋骨を見出すことすらも出來ぬ。

況んや精神上の要素を考慮に入れたなら、個人と個人との間の平等の空想は、忽ちにして倒壞しなければならぬ。吾々は平等の能力を有する二人の人間を發見することは出來ない。吾々の趣味、吾々の嗜好、吾々の性向は、文化と教養との發達と共に益々複雜となつて來る平等は唯だ單調と平板とである。原始人類の平等は、單調と平板とから來た平等である。文化の最低度にあつた、そして唯だ文化の最低度にあつたが爲めの平等である。

然しながら、斯くの如き意味に於いては、原始の人類と雖も、決して平等であつたとは云はれない。そしてデモクラシーが斯くの如き個體の平等を要求するものとしたならば、デモクラシーの理想は、忽ちにして現實の前に倒壞しなければならぬ。

十三

原始時代の人類は平等であつて、文化の人類は不平等であるとは屢々聞く所である。然しながら、個體としての人類は今日不平等であるように、過去にあつても不平等であつたと謂はなければならぬ。少くとも歴史の黎明期から今日に至る數千年の間には、個體としての人類には、少くとも著るしい進化の跡の殘つて居ないことは事實である。少くとも數千年といふが如き短時間の事實を考慮して居る場合には、人類の進化といふ言葉は、生物的個體的の進化を指すものではなくて、常に社會的の進化を意味するものである。其の社會的の要素の重大に較べた時、個體的の要素は、殆ど計算の外に閑却することの出來得る程に輕微であると云ふ事實は、やがて人類の進化が、他の生物の進化に比して著るしい特徴を有する所以である。そして斯ような社會的の要素は、文化の進歩と共に、個體的の要素に比して益々共重要さを加へて來る。

胡桃の皮を嚙み碎くことの出來る强い齒と、胡桃の皮を嚙み碎くことの出來ない弱い齒とは、原始時代に於てこそ、或は生存競爭の上の大なる不平等であつたかも知らぬ。けれども社會的

要素の重要が益々加はつて、個體的要素の重要が益々減じて來た今日の社會では、强い齒と弱い齒との相違は、必ずしも生存競爭の上の不平等とは云はれない。此意味から云へば、個體と個體との間の不平等は、今日よりも原始時代に於いてこそ、一層甚しかつたと謂はなければならぬ。そして斯ような個體の不平等が、原始時代の社會的平等を妨げなかつたことは、注意に値ひする事實である。

斯ように個體と個體との間の、器官の差異は、必ずしも人間の社會的平等を破るものではない。けれども人間は其生得の器官を人爲的に擴大し、延長するの方法を知つて居る。人間は『道具を作る動物』である。更に進んでは『道具を作るべき道具をも作る動物』である。そして凡ての道具は、カール・カウツキーの指摘した如く人間の器官の擴大、若しくは延長と見做すべきものである。原始時代の人間の持つた一本の棍棒が、肉體的器官の延長である如く、宏大なる工場のうちに運轉する驚くべき複雜と精密とを有する大機械も亦た、人間の器官の延長と見做すべきものである。そして人間を不平等にしたものは、生得の器官の相違と優劣とではなくて、此の人爲的の器官、延長されたる器官――即ち道具と稱する社會的の器官であつた。少くとも今日の社會生活にあつては、一本の指の無いことは、必ずしも、其人から生存の機會を奪ふものではない。けれども生産の道具を有しないことは、其人から生活の資料を生産するの機會を奪ふものである。少くとも今日の社會生活にあつては、個體的生物的の不平等は、之を社會的要素より來るところの不平等に比すれば、殆んど全く打算の外に置いてよいものである。そして吾々が人間の平等といふ時には、其平等とは常に社會的要素としての平等を指して居る。更に經濟上の平等といふ時には、其の『經濟的』なる言葉そのものが、生物的の要素を指さないで社會的の要素を含蓄して居ることは固より自明である。斯くて人間の生物的平等の不可能を立證することは、必ずしも、デモクラシーの運命を決定するに足りないものである。

十四

原始のデモクラシーは、氏（ウヂ）の共産制度を基礎とする經濟上の平等の上に、社會上の平等の上に立つて居た。否な原始のデモクラシーとは、氏の經濟組織の上に立つ社會生活そのものであつた。デモクラシーは社會生活の凡てを包容し社會生活の凡てに包容せられて居た。デモクラシーは一つの制度ではなくて、凡

ての生活であつた。

斯ような原始のデモクラシーは、其經濟的基礎の崩解と共に必然に崩解した。

デモクラシーがアゼンス人の間に、ロマ人の間に復活した時には、彼等の社會には最早經濟上の平等と、從つて社會生活の上に平等は失はれて居た。デモクラシーは斯ような平等の主張ではなくて、新興の富力階級が、血族上の貴族に對して階級的の支配を爭ふ政治上の要求となつて現はれた。社會生活の上の原則は、今や政治の上の制度となつた。社會生活の平等は、今や法律の前に於ける、法律の前に於いてだけの、平等に局限せられて來た。

然しながら希臘の社會に、多くの氏族的社會の面影を留どめて居たように、其デモクラシーには尙ほ多くの原始的色彩を存して居た。希臘のデモクラシーは、近代のデモクラシーに比すれば遙かに廣汎なものであつた。

デモクラシーの歷史とは、要するにデモクラシーの限定の歷史である。社會生活の一切から、益々狹少なる區域に限定することである。そして此傾向は、近代の商工階級（ブルジョア）のデモクラシーに至つて其極點に到着した。法律の前に於ける萬人の完全なる平等と、經濟生活の上に於ける驚く可き不平等、政治の領域に於ける『人民による人民の支配』と、經濟の領域に於ける『階級による階級の支配』是等の兩つのもの丶間の深淵は、ブルジョア・デモクラシーの特徵であつて、やがて其の弱點と不安定とを物語つた居るものである。

近代のデモクラシーの不安定は、更に新らしく勃興した階級の新らしきデモクラシーの要求となつて現はれて居る。デモクラシーを其本來の廣さに引直そうとする要求となつて現はれて居る。現代のデモクラシーに安定がないとしたならば、其れは勢ひ政治上のデモクラシーを社會生活の上に擴大することであるが、さもなくば、現代のデモクラシーを一層縮少することでなければならぬ。ヒレイル・ベロツク氏は、將來の社會を先見して、全人類の奴隷制度であると云つて居る。ヒレイル氏によれば現代の社會は、產業組織の民主化を指さして居るものではなくして、反對に、奴隷制度の復興を指さして居るものである。

デモクラシーの復興か、奴隷制度の復興か。此問題に答へることは現代の歷史的使命でなければならぬ。（四・一三）

地方長官番附

（前内務省重要なる人の見たるもの）

Aハ優良知事、Bハ可、Cハ劣、Dハ最劣

井上	東京（A）	木田川	奈良（C）	依田	山形（C）	佐竹	香川（B）
笠井	北海道（B）	山脇	三重（C）	名尾	秋田（C）	馬渡	愛媛（A）
馬淵	京都（B）	宮尾	愛知（A）	湯池	福井（B）	阿部	高知（B）
林	大阪（A）	赤池	靜岡（B）	土岐	石川（B）	安河內	福岡（B）
井上	神奈川（A）	長野	山梨（C）	東園	富山（B）	新妻	大分（D）
有吉	兵庫（A）	堀田	滋賀（C）	阿部	鳥取（B）	澤田	佐賀（A）
太田	新潟（B）	鹿子木	岐阜（A）	西村	島根（B）	川口	熊本（C）
渡邊	長崎（C）	岡田	埼玉（A）	赤星	長野（A）	香川	岡山（D）
堀內	宮崎（C）	中川	群馬（B）	森	宮城（B）	若林	廣島（C）
橋本	鹿兒島（C）	折原	千葉（C）	川崎	福島（A）	中川	山口（B）
鈴木	沖繩（D）	力石	茨城（C）	柿沼	岩手（C）	池松	和歌山（C）
昌谷	樺太（C）	平塚	栃木（A）	大津	德島（B）	下村	臺灣（A）
道岡	青森（B）						

不良內務部長｛伊東喜八郎、杉山四五郎、島內三郎
（遊蕩兒）森藤嘉平

欲望を出發點として人生問題の解釋【二】

帝國大學教授　木村泰賢

五、無限欲(無限生命)

欲望を基礎としての吾人の人生觀は遂に生命論に及び、而して人生のあらゆる事象は要するに、生命が自己の要求を實現するための爭鬪と妥協とによる創造に外ならぬことを述べた。然るに、こゝに到りて問題となるのは、然らば、生命がいかなる程度までその特徵づけられた要求を發揮するを極度とするかといふことである。詳しく言へば生命はいか程まで、自己を持續し擴大し自由を得れば、それで滿足すべきかといふ問題である。吾人は之に對して無限と答へる外に適當な答へ樣を知らぬ。蓋し限りなく飽くことなきは欲望の自らなる特相である限り、この欲望を原動力としてそれに推されて進む生命の要求も亦無限であるべきは理の當然であるからである。吾人に「無限」といふ理想のあるのも、發生的に言へば、こゝから來るもので、所詮、

永恒の壽命、無限の擴大、絕對の自由を屬性とする統一的大生命を實現せざる限り、吾人の生命的要求は決して滿足するものではないと言はねばならぬ。從て、人生最終の歸趨も亦この統一的大生命の實現にあるや、言ふまでもない所で、大觀すれば、人生の活動は——意識的たると無意識的たるとを問はず——凡て之を最後の目標として踏進し開展してゐるものと言ふことが出來るのである。吾人はこの統一的大生命を暫らく絕對的生命、又は理想的生命と名けたいと思ふ。勿論こは眞に暫らくの生命である。吾人は之に依つて必ずしもかくの如き大生命が、與へられた事實として、人類に先つて存在してゐるといふ古風の意味を含ませて言ふのではない。寧ろ率直に云へば、それは人類の活動によりて最後に創造的に實現せらるべき一大模型であると見た方が至當と思ふものである。乍併、その型たるや、決して壁に張りつけた繪圖面の如きものではなく、吾等の生命の內部

に活動しつゝありて、見樣によつては永遠のかなたにありて、吾等を鼓舞し推動してゐるかとも思はしむる程の力を有する點に於て、假名であるとしても、絕對的生命又は理想的生命と名くるを恰當と信ずるのである、從て、之は、決して宗教的生活の理想を以て、直ちに現實的生命の理想を律しやうとした假定的論法ではない。宗教的理想も確かに、この理想的生命實現の一方式ではあるけれども、仔細に見來れば人類のあらゆる施設は凡て之を中心とするもので、學問の發達も國家の成立も、その內的意義を尋ぬれば同じくこの絕對的生命の理想を目標とする點に於て、毫も宗教的理想と異る所がないのである。たゞ之を自覺してやつてゐるのと、自覺せずしてやつてゐるの相違と、之を個人的に實現しやうとするのと、全體的に實現しやうとする方式の相違に過ぎぬと言ふべきであらう。

そこで、この絕對的生命その者の本質や、之を實現した當體に關する議論は、あと廻はしとして、先づ學問、國家、宗教の三部門に涉りて、絕對的生命の見地からその意義を尋ねて、前述の旨を明にして見たいと思ふ。蓋しこの三部門は所謂文明の主要素であるから、是等を同一原理によりて說明し得るとすれば、總てそれに依りて文明の最高方針を確定的に統一し得ることになるからである。

六、學問の意義

學問即ち廣義の科學の起源に關しては、種々の議論もあらうけれども、要するに二原因に歸着するものに外ならぬ。一は事物の理を知つて之を直接に生活に利用しやうとする動機からで、他は純求理心、即ちたゞ智識欲の滿足を得んとする、言はば好奇的動機からである。この意味に於て學問の價値は必ずしも應用許りではなく、亦、所謂無用の用たる邊にも存することは否定し得べからざる事實である。乍併、更に進んでその純求理心、即ち好奇心の起源も發生的に考へて見ると、矢張、廣義の意味に於ける實用を豫想してゐることは、抑々智識その者は元來、生命の伸路を開くの光明として生命中に湧き出てたものであるといふ事を思ひ出せば容易に首肯し得る所であらう。從て一見、現代生活に何等の交涉を有せざるが如き學問でもその起源や意味を尋ねて見れば直接、間接に生活に無關係なものは一つもないのである。星學の目的は單に天體現象の眞相を研究すれば足れりとするが如きも、その天體現象が吾等の住む地球に關係する點に於て、實際生活に至大の交涉を有する許りでは

なく、その初は、寧ろ之に依て人事萬般の運命を明にして未來生活の方針を立つる爲めの意義の方が多かつたことは東西の天文學史の吾等に敎ふる所ではないか。歷史の目的は過去に於ける國民若しくは民族生活の現象を明にすれば足れるが如きも、實は之に基いて現代を解釋し、進んで未來の仰路を確實にする所にその意義があり。古代の死語の研究も直接の動機は好奇心にあるかも知れぬけれども、實は其研究の成果によつて歷史を通し、文法を通して現代に接觸する所に最後の意義が存するのである。之に就て、最も面白き例は歐洲に於けるサンスクリット研究の成果が學界に齎らした効果である。日本や支那に於てこそ、佛敎の研究に關連して梵語の研究も多大の意味を有したれ(その癖、餘り進步しなかつたが)、百有餘年前にありて、歐洲で印度の古代語を研究するといふが如きことは、全く好奇心の發動に過ぎなかつたのである。しかし、その結果として得たる所は、散斯克利語に盛られたる思想的影響は別としても、少くも歐洲人と印度人とが、もと、人種に於て言語に於て宗敎に於て同一であつたといふことで、之に依て人類學、言語學、宗敎學等に一大改新を來たしたるのみならず、政治上に於て歐洲人が印度を支配するに當りて、どれだけ役に立つたかは實に計り知るべからざるものがあつたのである。その初め殆と偶然、手を染めたと言つて然るべき程の死語の研究も、最後には斯の如き實用的意義を帶びて來るが如く、其他の學問にありても、例令、一見何等の生活的意義を有せぬとしても、何處でか、何時かは役に立つものであるといふ事は到底、否定し得べからざる事實である。たゞ智識の範圍は實際的實現の範圍より常に廣いので、諸學問は、即今、凡て實用に役立つと限らぬ點に於て、世には實用の學もあるやうに思はれるけれども、實は凡ての學問は、その背後に——直接なり間接なりに——實用を暗示し豫想してゐるものであるといふことは呉れ〲も忘れてはならぬ所である。此の意味に於て、一國がその文敎を盛んにし國民生活を豐富ならしめんが爲めには、單に手取早く應用され得る學問許りを奬勵することなく、何時、役に立つか分らぬやうなものをも奬勵することは極めて必要なことゝ言はねばならぬ。何んとなれば、手取り早き實用學はその場の役に立つ點に於て必要であるけれども、所謂、非實用學は、豫期せざる所に偉大なる實際的効果をもたらすの期待を有し、軈てそは國民生活に深き根底あるを示すことになるからである。

　とにかく、かく考へて來ると、凡ての學問は廣義の實用學で

あるといふことになるが、然らば、一體、何を目標とした實用學であるかといふに、そは外でもない、例の絶對的生命實現の準備としての實用學であらねばならぬ。即ち吾等の生命を益々持續し擴大し、自由の範圍を擴ぐる爲めの準備で、諸學問は凡て、この統一的理想の何れかの部門を擔當して、その實現を計るの機關として發達したものに外ならぬのである。所謂、實用科學の如く具體的にその方法を講究するあり、理論科學の如く抽象的に之を講究するあり、說明科學の如く、あるがまゝの相を示さんとするあり、規範學の如くあらねばならぬ方針を規定せんとするあり、種々の分擔があるけれども、要するに凡ては自然に對し、他の生物に對し自己の欲望に對して生命の伸路を開拓し以てその自己實現を資助せんとして起つたものに外ならぬ。殊に十九世紀以降、長足の進歩を遂げた實驗科學と之に伴へる諸種の發明とは眞に目眩しき程にて、之に依りて吾人は、前代に比して、いかに多く生命の要求を滿足せしむることが出來たか計り知らぬ程で、汽氣力や電氣力の應用などに到れば、昔人はたゞ神通奇蹟としてのみ空想した事柄が漸々として目の前に展開せられるの壯觀を示すに到つたのである。たゞ、不幸にして其進歩たるや餘りに急激に失したる結果として、餘他の文化との平衡を失ひ、殊に人類最高の統一的理想を示すべき從來の哲學や宗教との間に、稍もすれば背戾を來たすことになつた爲めに、現代の文明は、諸種の點に於て著しき不調和を來たし、吾等の生活は或る意味に於て從前に比して却て不安動搖を感ずるやうになつたことは蔽ふべからざる事實ではあるけれども、併し、大觀上、こは要するに、過渡期に於ける免るべからざる矛盾であつて、決して一部の哲學者や宗教家の言ふが如く、根本的に之を呪咀し悲觀すべき性質のものでなく、矢張最後には絶對的生命の實現に欠くべからざる役目を持てゐるといふことを忘れてはならぬ。たゞ文明を健全に導く爲めに吾等の常に注意せねばならぬことは、一面に於ては科學のみを以て、人類の最高理想を實現し得べしとするの極端を制止すると同時に、他面に於ては哲學、宗教、道德等に對して一大刷新を加へて出來得る限りその間の矛盾背反を和ぐることである。現今に於ける文明の不調和は凡てこの矛盾に胚胎すると言つても然るべき程であるからである。而して之が爲めには――學問といふ立場からすれば――現今に於ける學問の方針に對して少しく變更を加ふるの必要があらうと思ふ。蓋し現在に於ける學問の仕方は次第に專門的に分化して、學者はたゞその題目として撰擇した部

分を研究して他を顧みるの遑なしといふ有樣であるが、これは一面からすれば、確かに學問を發達せしむる上に於て必要な方法ではあるけれども、他面からすれば、之に依てあらゆる學問の根底に横る最高の意義を忘却し、その結果として、遂に學問の群雄割據とも謂ひつべき弊害を免れぬことになつてゐるからである。そこで、この弊を救ふ爲めには、部分的專門的研究は勿論大に奬勵しながらも、亦、いかなる部門の研究者に對しても、その背後に潜める學問の全體的意義を知らしめ、依て以て、諸學の最高標的を常に失はさらしむる樣にするの必要があるのである。此意味に於て、吾人は、學問の目的は最高なる人間的完成の實現にありと喝破したスピノーザの說に眞に味ふべき學問的方針が指示されてゐると見るものである。

七、國家の意義

抑々國家成立の經過や條件に關しては、その道の學者の間に種々の意見があるやうではあるけれども、有體に言へば、吾人は其等の學說の是非得失に關する定說のいかになり居るかを知らぬものである。乍併、吾人は當面の立場よりして、差し當り國家成立の發生的條件なるものを、二方面から觀察し得るものと思ふ。而してこの二條件の共同によりて初めて眞の國家が成立し得るものであると考へてゐる。而もその本源をたゞせば、何れも生命の維持發展を基礎とするや言ふまでもない所である。先づ第一條件は、言はゞ方便的條件とでも名くべきもので、生命が自らを維持、發展するに都合がよいといふ理由から——勿論無意識的ながらも——國家といふ團體的體制を編み出した方面を指すのである。前に述べた如く、生命はその生存を完うせんが爲めには、自然と戰ひ、他の生命と戰ふの必要がありて、具さに困難を經ねばならぬ。乍併、あらゆる個々の生命が自然と他の生命と、而して自己の欲望と絕えず戰ふといふことは、到底堪へ得る所ではない許りではなく、かくすることは戰に勝利を得る所以の道でもない。こゝを以てか生命が或る一定の度に進めば、無意識ながらも、利害に關する自然的必要からして、少くも同一種族の間丈には協定が出來上つて、共同生活によりて、相互の生存を扶助し、一致して他の生命や自然に對抗してその全體の生存を完うせんとするに到る。已に動物の中にても蟻や蜂の如き共同生活を營むものは、この條件の本能的發現と見ることが出來るが、殊に人類となると利害の打算も理知的になるので、意識的にこの事を感知して、一定の民衆の間に統治權

を設定して、政治的に統制力を有する團體を組織したのは即ち國家成立の一面觀であらねばならぬ。此意味に於て吾人はホッブス氏や佛教の經論などにある契約說——民衆は初め相互に爭ふてゐたけれども、後にその不利益なるを悟りて、一定の共約を設けて爭はぬやうにしたといふ說——に相當の意義のあるとを認むるものである。從て、此方面からすれば、國家の單位は個人で、その結合の中心は利害關係にありて、個人がその自らの利益を主張するはその權利、團體の規約に從ふはその義務といふことになるのである。

乍併、國家の成立を以て、單にこの利害關係からのみ說明せんとするは非常の誤りである。いかにもこの意味も含んではゐるけれども、之と相俟つて、否、その根底として、もう一段深き條件の存することを見逃してはならぬ。これ即ち前に述べた方便的條件に對して、言はゞ第一義諦的條件とでも名くべきものである。即ち、それは例の生命自爾の要求に基くもので、生命がその持續と擴大と自由とを屬性とする統一的大生命を種々の方面から實現せんとする中にありて、特に社會化の形をとつた最高の示現として國家が成立したものと見るべきである。蓋し、國家は之を方便的觀察よりすれば利害を中心とした共同生活の一形式に過ぎぬけれども、之を自然狀態として觀察すれば、要するに家族の擴大したもので、その本源に戾して考ふれば、生命自らに備はる繁殖力の然らしむる必然的現象に外ならぬのである。即ち之を目的論的に云へば、假令、此の生命には、いかに無限を求むるの切なるものあるも、之を具體的事實として見る限り、その占有し得る時間も空間も極めて微々たるもので、從てその自由活動の範圍も非常に限定があるので、生命の力はこゝに自己を具體的に持續し擴大して、より自由の活動を營まんが爲めに、自らを增殖して漸次に家族より部族に進み部族より國家に進みたるものと解さねばならぬ。而もこは單に自然的國家にのみ宛てはまる理論ではない。協約的形式による國家の成立にもその根底にはこの精神が流れてゐるもので、否、この精神が顯はるゝに及びて協約的國家も初めて眞の魂のある國家たることを得るのである。從てこの見地からすれば、國家成立の根本條件は、外的事情に存するものではなく、寧ろ、一個の生命が絕對的生命に進まんとして自らの中より內面的に開展したもので、國家は言はゞ一個の生命の延長に外ならぬと言はねばならぬ。この意味に於て、國家は有機體であるといふ說も是認せらるべきもので、又種々の學者の謂ゆる國家

意志とか、國家我などの存在も認めらるべきである。而もそは單に國民の輿論とか決議とかいふが如き一時的現象として表はれたるものではなく、民族の歴史を通して永劫に生長する生きた魂として恒久的に實在するものと認めねばならぬのである。從て亦、この見地からすれば、國家内に於ける民衆各自の關係も、前の方便的條件を立場としての場合と可なりに趣きを異にし來るも勿論のことである。前の方便的條件の立場に止まる限り、その關係は要するに利害を中心とした結合以上に出づることが出來ぬに反し、この立場よりすれば、その結合の契機點は利害以上に存し、利害よりは寧ろ同情が本質となり、闘爭の緩和よりは寧ろ調和が主位を占め、對立よりは寧ろ融和が本位となつて、以てその有機的結合が生じたものと見ねばならぬ。何となれば一個の生命が統制を本位とする限り、而してその繁殖の愛を基礎として行はるゝ限り、その延長たる國家的結合も、統制と愛とが本質的連鎖であらねばならぬからである。これ即ちいかなる國家もその人民に對して、少くも道徳的義務として、各個人の利害關係以上に、全體のために何等かの犠牲を要求し得る根據で、又實際上、國家の發展のためには、時に何物にも代へ難き生命をも犠牲にしても悔いざる所謂愛國者の存する所以である。蓋し國家のために、その身を殺すといふことは、所詮、現實的生命がその究竟目的たる絶對的生命の進展のために犠牲になるといふ意味で、言はゞ小なる自己が自らを捨てゝ大自己に生きんとするやり方で、生命自衛の法則上、自然の義務を履行することに外ならぬといふことになるからである。

乍併、こゝに記憶せねばならぬことは、生命の社會化は永久、國家で止まるものと解釋してはならぬことである。現今の狀勢では暫らく國家はこの方面に於ける最高の示現となつてゐるけれども、第一義諦的條件からすれば、要するにその過渡期の産物たるに過ぎざるものである。蓋し第一義諦的條件からすれば眞の理想的國家たるものは、先づ完全なる有機體として悠久の歴史を背景として、人種、言語、風俗宗教等を同じうしてゐるものであらねばならぬ。而して國家自身と國民各自との關係は、言ふまでもなく一にして不二、不二にして二の關係で、國民各自の意志は直ちに國家の意志に順じ國家の意志は直ちに國民各自のそれを代表する底の組織を有せねばならぬ。而も實際上、過去は勿論の事、現在にありても、かゝる國家の嘗て實現したことのない所以は、(日本などは第一の資格に於ては稍完備

したものに近いけれども、理想的に云へば尙ほ非常の距離がある)、國家組織が未だ完全せぬ爲めといふよりは、寧ろ、國家の範圍だけでは、到底、第一義諦的條件を、さながらに體現することが出來ないからであると解すべきが至當である。現に今日民族自決主義などゝいふことの提唱せられてゐるのは、人種、言語、風俗、歷史等の同一を以て國家成立の基礎たらしめんとの理論から割り出されたものであらうけれども、實際に於ては異民族から成立する小國家を併合することが盛に行はれてゐる許りではなく、一方には亦、國際聯盟の提唱などもありて、第一義諦的條件に契へる國家の出現は殆ど希圖し得ざる有様となつてゐるではないか。かくの如きは、所詮、國家のみでは人類生命の社會化の到底滿足し得ざることを暗示するもので、異民族よりなる小國家の併合の如きは、之を個人に比すれば、恰も個體的生命がその持續と擴大とを計る爲めに、結婚し奴婢を雇ひて家族を形成せんとするに似た現象で、國際聯盟の如きは、個人各自が、前に述べた方便的條件に從て協約して體制のゆるい國家を組織せんとするに似たもので、要するに何れにしても、各國家が更に一大進展してこゝに總合的大國家を形成せんとするの下地と見得べきものではあるまいか。即ち國家の理想は遂に全世界を打して一國家となし、以て之を有機的に組織し改造せねば、その最高の歸趣を見出し得ぬといふことになるのである。蓋し吾人の生命は、いかなる方面に於ても無限に向つてゐる限り、その社會化だけが有限の範圍に止まるべき理由がないからである。今日に於て、かくの如きことは主張するは、未だ矢張、昔からあつた例の空想論者の轍を追ふやうではあるけれども、昔に比して、今日では何程か——少くもフリンジとして——現實味を有する許りではなく、前述した吾人の立場よりすれば、どうしても、かく論斷せざるを得ぬのである。勿論、之れは、何時いかなる次第を經て到達せらるゝの境であるかは容易に豫言し得ぬことではあるけれどもともかく、最後には——人類の要求の變更せぬ限り——いつかは到着すべきものとして之に向て努力するは個人の義務で、又總て國家の義務であらねばならぬ。かくして、餘りに空想のやうではあるけれどもいつかは星の世界をも含めて、(こゝに交通し得ると假定して)全宇宙を打して一團として、佛教の所謂、一法界を形成するに及びて、初めてこの意義が眞に到達するもので、昔より哲人の唱導した microcosmos=macrocosmos の理相も社會的に解釋すれば所詮、この意味の完成に外ならなからうと思ふ。

八、宗教の意義

國家としての絶對的生命の實現は勿論、國家自身よりすれば、一貫の生命の活動ではあるけれども、個人よりすれば要するに、協同的で而も子孫相續いての繼續事業に屬するものである。その實現は、少しも現在にありては、個人の味ひ得ざる所で、個人はたゞ他日の完成を期待して、その下敷としての礎石たるの役目をなしたといふ滿足を以て終らねばならぬ。併乍、吾人の生命の三相的要求は決して、かゝる迂遠の實現法許りでは滿足し得るものではない。即今、自己自身に於て、少くも內面的境界としてゞも、その絶對的生命を實現せんとするの要求がある。この要求に應して起つたものは即ち宗教であらねばならぬ。

抑も、宗教の起源に關しても、學者の間に種々の異論があるけれども、矢張、生命の持續、進展の要求を基礎として起つた現象であることは、餘他の人文現象と毫も異なることがない。この事は別段に、六かしく說明しないでも、各宗教の特質を調べて見れば容易に分ることである。例へば原始的宗教の例をとつて見るも、原始民族は、概ね自然や幽鬼などをその崇拜の對象としたものであるが、かくの如きは、原始人の生活は專ら受動的で自然力や、眼に見えぬ種々の事情（之を運命と名く）などに支配せらるゝこと多く、而もその自然力や眼に見えぬ事情などが一方には生活上の恩惠者であると同時に他方にはその恐るべき强迫者でもあつた爲めに、彼等原始人はそれに對して、何等かの意志あるものの如く感じ、その意志を和ぐることによりて生活上の不安を去りてその幸運を計らんとしたのは、實に彼等の宗教意識となつて現はれたものに外ならぬのである。從て原始人の宗教は專ら現世主義で、現世の長壽、幸安等をその祈願の主なる條項としたものであるが、しかし、その內部に潜める絶對的生命の要求は到底、現世的の幸安のみでは滿足し難きを悟るに及びて、宗教意識の進展となり、現世は勿論、（時には現世の幸安は犧牲に供しても）未來永劫に涉りて絶對的生命をさながらに自己に味覺し體驗せんとしたのは實に高等宗教の理想となつたのである。例へば基督教では永久生命を理想とし、全智、全能、所として到らざるなき神をその歸趨と立て、婆羅門教がその最高原理の梵（ブラフマン）に遍在、常恒、無缺自由と立てゝ、之を自己に實現するを最高の理想となし、一部の人からは寂滅主義と誤解されてゐる佛教でもその理想の佛陀の屬性を說いて或

は久遠實成（時間的無限）常在靈鷲山（空間的無限）といひ、或は無量壽（時間的）無量光（空間的）といふなど、要するに何れも生命の三相たる持續、擴大、自由を屬性とする一大生命を理想として之に憧憬し躍進するが、高等宗教の根本的持續となつてゐるのである。即ち絕對的生命の要求と理想とを離れては遂に宗教の起源も本質も說くことが出來ぬもので、吾人はこの意味に於て「有限と無限との人格的關係」といへる宗教の定義を至當と認むるものである。勿論、下等宗教の中には、その理想的對象たるべき神にも死と束縛の制限を免れぬかの如くに寫象してゐるものもあるけれども、それでも、現實的生命に比すれば三相的要求が大に發達してゐる許りではなく、その根抵には矢張、無限にまで到らねば承知し得ざる種子を含みながら、たゞそれを意識的に開展しかねてゐるに止まるもので、決して無限生命を離れて成立してゐるものではないことが、種々の特徵を調べ推せば容易に分ることとである。

從て、言ふまでもなく、人間に無限欲ある限り宗教心は必然的に人間に固有してゐるものである。佛教で人々悉く佛性ありとか、煩惱の中に如來藏ありなどといへる意味も、畢竟するにこの事で、平たく言へば人々悉く宗教心ありといふ意味に外なからうと思ふ。而して大乘佛教などにて煩惱即菩提と高唱する所以もつまりは、食欲、性欲、遊戲欲は欲それ自身を主とする限り煩惱ではあるけれども、一度その暗示する生命の意味をたどれば直ちに宗教的憧憬に轉換するといふ意味と解すべきであらう。世には宗教を以て過去の遺物と考へたり、迷信の產物に外ならぬと貶する人もあるけれども、かくの如きはこの宗教心の第一義諦的意義を忘却した議論で、斷じて正當の見解ではない。いかにも、今日まで現はれた種々の宗教現象中には、今日の學問的見地からすれば、眞にとるに足らざる所謂迷信的要求も尠からずあるけれども、其等は要するに、その宗教心を現實に翻譯し表現する上に於ての欠點であつて、宗教心其者は決して過去の遺物でもなければ迷信の產物でもなく、人類のあらん限り存續するもので、隨ていかなる形に於てか、宗教は永久に存續するものである。加之、この宗教的方法による絕對的生命の實現は、前の學問による生活の擴張や、國家を通しての生命の延長よりも、個人格に對しては一層緊切の意義を有するもので、從て、宗教は、或る場合には學問よりも國家よりも一層偉大なる力を現はすものであることは、少くも歷史の吾等に告ぐる所である。蓋し學問や國家を通しての生命の進展法は、個人的要求からすれ

ば間接で、稍もすれば絕對的生命の實現といふ意識さへ不明確なるに反し、宗教のそれは、個人の魂に直接に接觸してその意義を明にするので、絕對的生命の根本要求はさながら、そこに實現せられ完成せられたといふ強い確信を齎らすからである。此意味に於て――勿論、既成宗教の改良は必要であるけれども――人々の宗教心を尊重し、之を助長せしむることは、人類の最も深い要求を實現せしむる所以の道で、總て國民としても個人としても人格の完成上、缺くべからざる方法の一であると言はねばならぬ。この點は特に爲政家、教育家などの三顧を乞はんとする所である。

所で、こゝに疑問となるのは、學問や社會化によりては、前途尙ほ遼遠に屬する絕對的生命の實現が、いかなる根據に基いて、宗教的にのみ、即今の事實として實現し得らるゝかといふことである。勿論之に對して各宗教は、その立場に基いて種々の宗義學的解釋を與へるであらう。或は如來又は神といふが如き已に完成せる絕對的生命が活動して吾等を攝取し救濟して具れるからであるとか、或は自身の內部に備はれる絕對的生命が自らを發現する爲めであるとか、その外種々の解釋があるのであらう。乍併、是等の宗義學的解釋に就て云々するのは今の目的ではない。今問はんとする所は、そを實現し得たといふ所謂、大悟、救濟、入信等の心理的事實がいかなる心的基礎によるかといふことである。之を理解する上に於て吾等の忘るべからざるものは先づ宗教に必然的に伴ふ所の犧牲の意義であらねばならぬ。蓋し、學問による發展にも、國家を通ふしての發展にも、相應の犧牲を要求するけれども、宗教程、犧牲を本質とするものがないからである。之を種々の宗教現象に徵するに、已に原始的宗教にありても種々の形に於ける犧牲が行はれ、その重きものとなれば人犧牲さへあつたことは東西、宗教史の吾人に告ぐる所であるが、進んで高等宗教となれば、其等の外的犧牲を尊ばぬ代りに內的犧牲を重し、苦行、克己、無我等の如き、自己主張を犧牲に供することを以て宗教的得信の一大條件と見做すに到り何れにしても犧牲と宗教との離るべからざる關係を示してゐるのである。然らばその犧牲の意義いかに。

始終、繰り返して言ふやうではあるけれども、吾等の生命活動は先づ盲目的なる欲望の形で表はれるものである。乍併、その盲目的欲望の裏には生命的意義を含むことは、前に述べた通りで而も之を見出して指示の役目を司るものは、實に理性である。然るにこの理性の作用にも種々の方面ある中にて、純粹に

絶對的生命の指示と主張とを擔當する方面を稱して、吾人は特に之を靈性と名くるものである。否、靈性自身は直ちに生命の奥に潜める內面的意義で、絶對的生命の指示とは、所詮、靈性自身の自己主張に外ならぬのである。とにかく、かく考へて來ると欲望も理性も靈性も共に同一生命の發動であるから、所謂、煩惱即菩提で、互に相扶持し相並ぶべきものゝやうではあるけれども、實はその作用が、特に欲望と靈性とを對比すれば寧ろ正反對とも謂ひつべき方向に向き合つてゐると見た方が至當である。欲望の方は當面の滿足をさへ得ればそれで、後先を顧みぬといふ風のあるに反し、靈性の方は飽くまで永遠を求めねば滿足することが出來ず、從て欲望の方は敢て分斷的生活を厭はぬに反し、靈性の方は統一的全的生活に達せねば承知が出來ぬと言つた風に、殆ど兩者相容れぬかの如き有樣となり、爲めに、生命は二重性を帶ぶるかの如くになるのである。之れ實に人生に固有する最も深い矛盾で、蓋し前にも述べた如く、人間の精神は下等動物に比して非常に開展したるといひながらも、尚ほその中に原始的要素の殘留するものがありて、その非常に進展した方面の活動に伴ひかねて、言はばその活動を引止めてゐる爲めであらう。勿論、人事一般の現象は、普通理性の指示によりて、この兩極の間を苦しきながらも妥協させた結果になるものであるから無自覺的生活を送るものにとりては、この矛盾も餘り著しく感知せぬであらう。併し、非常に宗教的要求、即ち靈的要求が强烈となるや、最早この妥協に滿足し得なくなりて、こゝに即ち一か他か、全體(ガンツ)か無(ニヒツ)かの大煩悶に落ち入るのは實に求道の一大試錬であるのである。先きに述べた宗教に於ける犧牲の意義は實にここにその役目を有するのである。何んとなればこの際、宗教的要求は、爾の欲望を捨てよ然らば無限生命の門の自ら爾に向いて開かれんと叫ぶからである。禪に於て大死一番といふのも所詮この意味で、殊に道元禪師が「放てば手に充てり、一多の際(きは)ならんや」と言つた如きは最もよくこの消息を示すもので、要するに無限に生きんとせば、少くも一度は、現實的欲望的生命の無價値を體得せよといふことが宗教的實現法の第一條件となるのである。宗教に於ける解脫、自由と稱するも、消極的に云へば、この飽くことなき盲目的欲望の束縛から自らを解放したといふ自覺に外ならぬ。而もこの消極的解放が軈て積極的には無限生命の逮得といふ自覺となる所以は、元來、人心に固有する靈的要求が、何等の阻礙をも受くることなしに、極度に發展し充實し得るからである。之を喩ふれば、恰も無限に上昇

し得る風船がその力によりて繫留索を斷ちたるが如きものにて、繫留索を斷つといふことが直ちに風船の上昇となると同じく、靈的要求を阻止しゐる暫有的欲望の犧牲が直ちに、無限生命の開展の自覺となるのである。勿論宗教意識としては、この際、欲望の遺去よりは、寧ろ絕對的生命自身の發動の方を、より多く感得し、殊に他力的信仰にありては欲望はそのまゝとして、絕對生命の救濟に預り得るものとの宗義を立つれど、そは要するに宗義や感得者の意識狀態で、矢張、欲望の遺去が中心になつてゐることは、抑々純他力派が自力救濟の能力をさへ否定する程小なる自己の無價値の認識を條件とするといふ一事に徵しても疑ふことが出來ぬ。從てこの意味に於て、宗教による絕對的生命の實現は疑もなく一種の消極法と言はねばならぬ。無限の欲はとても滿たされぬから、寧ろ之を捨離し斷念する方が人世の困危を脫却する所以の捷徑であるといふ見地から割り出されたものと言ふことが出來やう。然りそれに相違がない。乍併、之と同時にその反面の補として、而も人心に固有する法則に基いて、創造したる宗教的實在の世界は——之を眞如といふも神といふも梵といふも、そはこゝで問ふ所ではない——少くも非體驗者にとりては何物にも換え難き積極的意義を有するものであることを見遁してはならぬ。その境地は學問や國家を透ふして、永遠のかなたに於て實現せらるるものとその價値に於て毫も異るものがないのである。早い話が、宗教的理想としての天國や極樂の如きは、之を地上に引きさぐれば、要するに學問や國家によりて最後に實現せらるべき境地の理想に該當するものであらうが、宗教的得信者は、少くも主觀的には、早くも已にこの境地を味ひつゝあるではないか。而もそは主觀的個人的とは言ひながら、人心に固有しゐる法則に基く限り、軈て一般的妥當性を有し得べき、可能性もあるのである。たゞ、不幸にして從來の既成宗教は、その成立した國土の歷史や、當時の學問や、その他種々の雜要素と結合してゐるのと、も一つはその靈的實在の翻譯の仕方の異るによつて、容易に歸一し難く、從て一般的妥當性に於ても大に缺くる所があるけれども、宗教の進化は遂に一大普遍的宗教を產出するに到り、各人の內面生活に大滿足を與ふると同時に軈て、將來、現實界として作り出さるべき所謂、理想的世界に方針を與ふることになるであらうと吾人は期待するものである。

*　*　*　*　*　*

以上、吾人は欲望を出發點として次第に其論究を進めて絶對的生命の假定にまで進み、之を基礎として、主なる人生現象に、少くも一と通りの解釋を與ふると同時に、その應當（ゾルレン）の方向を指示したつもりである。こゝに到りて、最後に再び論ぜねばならぬ問題は、然らばその絶對的生命自身の相は何んであるかといふことであらねばならぬ。何んとなれば、これまでは主として要求といふ立場から、言はゞ之をPostulatとして假定して、かゝつたものであるから、こゝに到りて實在（ザイン）としての相（スガタ）を明さねばならぬ段取に進んで來たからである。乍併、實をいへば、これは非常の大問題で、少くもカント流の哲學的立脚地からは不可能の問題である、と言つても然るべき程のものである。蓋しこの絶對的生命の考へは、昔より東西の哲學者、宗教家の盛に唱導し來つた所ではあるけれども、其等の考に於て最も不完全とせらるゝ點は、第一に認識論上の批判的根據を有せぬことと、第二には之を以て所與の最高實在と考へ、現象は凡てこれより派出したもので、而もその現象化は、或る意味に於て實在の墮落でもあるかの如くに考へながらも、何故に完全なる實在が不完全なる現象となつたかの理由を合理的に説明し得ぬことであつた。こゝを以てか、近代の批判哲學となるや、この絶對的生命の考を以て、要するに吾人の希求の投影に過ぎざるもので、所詮、理想的目標を説明的原理に換算した結果に外ならぬと見るやうになつたのである。然り、吾人と雖も、この批判を無視して今更、昔流の、已に出來上れる與へられた實在としての絶對的生命を主張せんとするの蠻勇を有せざるものである。乍併、少くも事實としては、この理想は前により述べ來つた如く人類のあらゆる現象の根抵に活動して、或る意味に於て、恰も遙かかなたに立ちて一切を招き寄するかの如き生々たる力を有する許りではなく、少くも幾分かづゝはその實現を見ることが出來る以上、決して之を單なる投影的産物と片附け去ることの出來ぬといふことも亦、言ふまでもない所であらう。カントは信仰に獨立の分野を與ふるがために實踐理性の方面から神の存在を許したが、吾人を以て見るに、獨り信仰許りではない、人類のあらゆる活動に意義と價値とを與ふるためには、是非ともこの絶對的生命を認めねばならぬのである。然らば之を實在問題としていかに取扱ふべきが至當で且つ合理的であらうか。これ實にこの問題を考ふる者にとりて最も苦悶の存する點であらねばならぬ。乍併、吾人はこゝでこの問題を論究するは餘りに輕率である許りではなく、正直に言へば、この點に關して吾人の〃見の

未だ徹底せざるものがあるからこの根本問題の詳說は更に他日に讓ることにして、たゞ僅かに數言を附加して、この問題の結末としたいと思ふ。

絕對的生命は、實現によりて初めて實在の意義を有するものである。單に觀念としてのそれは要するに實現のための準備としての模型に過ぎぬ。乍併、吾等は少しも模型として、絕對的生命の觀念を構成し得る所以は、矢張、吾等の現實的生命の中にそを實現し得るだけの可能力を有するが爲めで、從てそは、創造の手續を終ることによりて實在たるべきの可能性を有するものである。而してその創造の手續とは、要するに精神力の優越を前程とするもので、精神は物質に勝ち、理性は欲望を淨化し、かくして最後に一切をその模型觀念の內在的法則によつて總合し支配し得るに到つた當體を絕對的生命の實現とは名くるのである。

更に之を宇宙論的立場に直ほし觀察すれば、此事は要するに次ぎの事を豫定することによりて、初めて一般的意義を有することにならう。謂く、所與としての實在は、若し原態を考へ得るとせば、寧ろ混沌たるものであつた。乍併この混沌體中に自ら物質方面と心的方面との二方面がありて、相支持しながらも亦互に相反撥し出したのは、その分化の初まりである。かくして精神的方面が次第に優越になり遂には精神の力が物質全體をその自己の範圍內に轉換せしめねば止まざらんとするまでに到つたのは、實に人類の無限欲が代表する絕對的生命の理想である。從て、人類に到りて初めて意識的に現はれ來れる絕對的生命の理想は、實は、宇宙全體の進展上に於ける頂點であつて、その根抵には、宇宙全體を擧げて、その精神化運動が行はれてゐるものと見ねばならぬのである。直接當面の問題としては個人的要求から發しながら、宇宙論的意義を有する絕對的生命を種々の形で、畫き出して理想としたのも、實にここに起因するものであらう。從て、眞の意味に於ける絕對的生命は永遠の未來に於てこの宇宙的精神化運動が完成した時に、初めて實現するもので、かの萬有神敎觀が如實にその妥當性を有して來るのは、實にこの時である。之を目標として努力する所に初めて、人類の宇宙的意義が發揮せらるゝのである。

社會の改造と婦人の文化的教養

──我國に於ける婦人參政權問題を論ず──

本間久雄

一

最近、普通選擧論の唱へられると共に婦人參政權問題が新しく世間の問題となつた。普通選擧といふことも、婦人參政權といふことも、決して今始めて唱へられたことではない。これまで我國でも、幾度か唱へられてはそのまゝになつたことである。しかし何れも今日程熱心に唱へられたことはないであらう。前者については暫く措く。後者について、私はこゝに、我國の女流思想家數氏の意見を檢攷し、婦人參政權問題が、わが國の社會改造運動として現在の我が國に於いてどれほど必要な問題であるか、又、現時の狀態から見て、婦人問題としてそれ以上必要な問題があるとすれば、どういふのがそれであるかといふことを考へて見ようと思ふ。

婦人參政權のことについて書いた女流思想家で私の見たのは與謝野晶子、平塚らいてう、山田わか、山川菊榮、西川文諸氏である。この諸氏の意見を大凡そ纏めて見れば三つになるやうである。一は、婦人參政權の獲得が現下の緊急事であるから、是非それの獲得に努力しなければならないとする意見と、一は必要ではあるが尙早いといふ所謂尙早論と、今一つは婦人には參政權以外他の天職がある。その天職を自覺し、それの實現に努力することの方が更により必要であり緊急であるとする意見と、この三つになるやうである。そしてこの三つの中、後の二つは互ひに連關したものであることはいふまでもない。

與謝野晶子氏はどちらかといへば、右の中の第一を

代表して居られるやうである。氏は普通選擧の現代に取つて必要であることから論じおこして、婦人の參政權を得ることの當然であることを熱叫して居られる。その文に曰く、

「普通選擧の可否は、あらゆる生活の體系が民主々義化してゆく今日に於て、もう少しも議論の餘地の無い問題です。先覺者達が之を主張して我々國民の蒙を啓かれるのを聽く我々は、最も識別し易いこの問題について、直ちに正當な批判を下し、之を更に我々自身の要求として國家に提出するのが至當だと思ひます。

併し私達婦人の立場から考へて猶最も大切な條件が一つ殘つてゐます、現に我國の先覺者達に由つて唱へられてゐる普通選擧には、國民全體といふ中に私達婦人の存在を無視してゐます。民主々義は男子ばかりの生活に適用されるものと限りません。文化生活に對する平等の權利は婦人にも分配されるべきものだと思ひます。否、それは婦人に於ても男子と同じく固より享得し得る權利です。唯だ私達はその權利の回復を要求すれば好いのだと思ひます。

民主々義の世界には男尊女卑主義の道德は許されません。國民としての存在に男子と婦人との優劣を認める時代は過ぎ去りました。國家に奉仕する義務の負擔者として、愛國者として、創造能力を保有する個人として婦人の負擔する所は男子と全く平等の位地にあります」（婦人公論三月號）

與謝野氏はかう云つてゐる。即ち普通選擧は今日の民主々義的傾向の當然の歸結であり、そして婦人參政權問題はこの普通選擧の必然の歸結である。

言葉を換へて云へば、國家に奉仕する義務の負擔者として、婦人は男子と全く平等の地位にあるが故に、普通選擧が今日の男子に取つて急務であるが如く、それは又婦人に取つても急務である。更に言葉を換へて云へば、一般の婦人が政權に與ることは、一般の男子が政權に與ることの急務であると同じく、急務である。といふのである。そして氏は、この婦人參政權運動に婦人が參加することは「かの基督教婦人の慈善運動や禁酒運動や、廢娼運動以上に緊急の必要を持つてゐる」と云ひ、その尙早論を唱へる人を不徹底論者として批難してゐる。

二

與謝野氏の以上の見解と異つた見解を把持してゐる人は平塚らいてう、山田わか二氏である。この二氏は、前に擧げた、二、三に相當するので、即ち尙早論であり、又より緊急事は他にあるといふ論である。

まづ平塚氏の意見から調べると、氏は、婦人參政權問題は、理論的には、すでに世界的承認を得たものであるから、この問題について吾々に殘されてゐるとこ

ろは「與ふべきか」「與へざるべきか」の理屈の上の問題ではなく、「何時與ふべき」といふ實行問題である。即ち言葉を換へて云へば「今が日本婦人の參政權を要求する好時期か、どうか、その機運は今熟してゐるかどうか」といふ問題であると云ひ、これに對して寧ろ否定的な答へを與へてゐる。

平塚氏に取つては、婦人の參政權獲得といふことは今日の社會に取つては、婦人の立場から必ずしも緊急事ではない。氏は云ふ。

「私共はどうしても今參政權を得なければ困るといふほど實際上の必要に迫られてゐるのならまた格別ですが、正直のところ、それほど緊急問題ではなく、却つて他にもつと重大な、そして緊急な問題を澤山控へてゐる際ではあり、又世の參政權論者がいふやうに參政權を有たなければ、婦人が社會改造の事業に從ふ道がなく、從つて婦人問題解決の道もないかといふに實際は決してさうでなく、政治を通じ、立法を通じてなし得る社會改造の範圍は寧ろ極めて狹いものである上に、參政權さへ得ればすぐ婦人達の考へが行はれ、思ふ通りに法律が改正されもし、制定されもして、母や子供や婦人勞働者は保護され、公娼制度は廢止され、禁酒法は實施され、結婚制度や教育制度も改善されるといふ譯ではなく、婦人が議員の大半を占めるやうにならない限りは矢張り婦人の思想や見解が社會の輿論となつて來ないことには實現の見込みはないのですし、さうであつて見れば參政權を得るよりも自分達の思想を社會に宣傳して、輿論を喚起する仕事の方が大切な位です」（中外四月號）

氏はかういふ立場から、現在に於いて婦人が參政權を得るといふことは、その效果は極めて少ないものたるを脱れないので、もし今日直ちに婦人參政權運動を起すものがあらば、それは「深くものを考へないものの輕擧か、さもなければ盲動に過ぎない」と云つてゐる。そして尚、附け加へて「婦人が直接政治家として、婦人自身と社會とを利するところよりも、母親として思想家として、教育者として、宗教家として、又は藝術家として、社會人類を改造し、文化に貢獻し得るところの方が遙かに大きく且つ價値ある」ものであると云つてゐる。與謝野氏の見解とは餘程の相違のあることは以上の引例によつても明かであらう。

山田わか氏もこの問題について平塚氏と略々似た見解を持つてゐる。といふよりも婦人と參政權問題について一層否定的な見解を持つてゐる。平塚氏のはそれほどでもないやうであるが、山田氏のは、婦人に取つて參政權問題の如きは根本的に不聰明な問題であると云はんばかりの語氣が見えてゐる。今日の我國に婦人參政權を要求するのは、歐米のある先進國がさうであ

るからと云つて徒らにそれを模倣する氣まぐれの沙汰である。歐米の諸國が今日の運動を起したのは、それを起すだけの永い間の必然の醱酵期を經て來たからよいが我國にはまだ何等それを要求するだけの必然的努力を費してゐない。從つて我が國の現在に於てこれを唱へることは單なる外國の模倣である。況んや他により爲すべき仕事の澤山にある今日に於てをや。山田氏はかう云つてゐる。

氏は更に進んで政治に携はることの婦人に適しないことを述べて次のやうに云つてゐる。

政治上の力はたゞほんの外部の力で、有効に使用出來た處が其の影響する處は唯社會の表面だけですが、婦人が其の天賦の力を自覺し利用して男子を制裁したならば世の中は其の根本から改善されるに相違ありません。自分の優れた點を打ち捨てゝ劣つた體力、智力、尤も智力は早晩取りかへすであらうと思ひますが、について男子の眞似をし男子の中に入つて働かうとすることは賢こいやり方ではありません」(中外四月號)

次に氏の所謂婦人の天賦の力とは何であるか。これについて氏は次のやうに云つてゐる。

「人間の母子關係の永く續くといふことも種族の善のため企圖されたものであると思ひます。動物の子は生れると間もなく完全になります。生れるや否や既成品です。ですから千年以前の犬も今日の犬も同じです。反之、人間の子は材料です。教育の仕方によつてどうにでもなります。いはゞ粘土のやうなものでこれを瓦にするのも貴重な磁器にするのも母の力次第です。天は人間の母子關係に永い期間を持たせて此處に進歩の可能性を與へました。優良な種族を造る任務を婦人に負せました。粘土なる子供を瓦になり磁器になりして社會へ送り出すのが婦人の最大の仕事です。故に婦人の賢愚は直ちに國民の賢愚です。此點に一朝氣がついたならば婦人の仕事が如何に社會的であるか。其責任が如何に大なるものであるか。又婦人の修養が如何に必要であるかゞ了解出來ませう。(同上)

以上の引例は餘りに多きに失した嫌ひはあるが、婦人の參政權運動を現在に於て實現することの不利益であること、及び婦人には參政權運動以外別に天職のあることを唱へてゐる方の主張の如何なるものであるかはこれによつて大凡そ窺ひ知られることゝ信ずる。(尚山田氏の意見は本誌前號の創刊號に出てゐるから併せて讀まれることを望む)

三

さて婦人の參政權運動に關する以上二つの見解に於いて、吾々はその何れに與すべきであるか。婦人參政權運動を以て目下の急務と見るべきであるか、それとも目下の急務は別にあると見るべきであるか。我國に

於ける目下の婦人運動の立場から見て、何れがより緊急な、より必要な問題であらうか。

婦人參政權問題は、原理としては今更らいふまでもなくすでに世界的是認を經たものである。殊にこの大戰後この問題は非常に急激に發展し、一體に保守的な英國に於てさへ、婦人が參政權を得ることの當然であることが一般の輿論となつた。これは實際極めて急激な發展であつた。少くも五六年前までは、僅かにその可否が喧しく論ぜられたに止まつてゐた。婦人問題について全體として常に最も進歩した意見を持つてゐるアメリカ合衆國に於てさへ、その可否が切りに論ぜられたに止まつてゐた。例へば四年ばかり前のアメリカの雜誌『リテラリー、ダイゼスト』が「婦人參政權可否問題」と題する特別號を出して、アメリカ全州の著名なる新聞社一千に宛てゝ、(一)婦人參政權運動に對する貴社の贊否如何(二)貴社所屬州に於て一般の市民は、贊否何れの態度を取りつゝありやといふ二問題の回答を求めたことなどはそのよい一例である。そしてその結果によると一の問題について贊成を表したのは、その中の三八一通、不贊成は九七通、未決定が三八通であり、又(二)の問題即ちその社所屬の州一般の意向については、贊成が二一三通、不贊成が一三三通、未決定が一五六通であつたといふ事實に徴しても、アメリカ全州が婦人參政權運動といふことについて、いかに贊否が喧しく論ぜられつゝあつたかといふこと及び一般的にはいかに贊成の方に傾いてゐたかといふことを知るべきである。尙以上の回答の中で『ゼ、ノオス、アメリカン』紙の贊成意見は最も要領を得たものであるから、序でにこれを擧げて讀者の參考に供する。すなはち同紙の贊成意見の理由とするところは次の五ヶ條であつた。

一、何となれば吾々は民主的政府の所持者であるから。

二、何となれば婦人の道德的影響が公的生活に於て必要であるから。

三、何となれば吾々は婦人の家庭整理の本能を市的事業に於ても必要とするから。

四、何となれば近代の工業的乃至商業的生活は、婦人を家庭の保護から奪つて了つたので、婦人は更に改めて政權の保護にたよらねばならなくなつたから。

五、何となればそれは正義であるから。

上の五ヶ條は何れも十分に肯綮に中る理由である。

婦人の參政權運動に反對する人は往々にして男女の優劣を説く。しかし、仔細に考へると婦人は何れの點から見ても決して男子に劣つてはゐない。『婦人參政權運動略史』の著者ユージエーン、ヘッカー氏は、その書

の中で神學上、肉體上、社會上及び政治上、知識上乃至道德上の立場から婦人が決して男子に劣つてゐない所以を細論してゐるが、實際その通りで、男子に比して何等劣るところなき婦人が參政權を求めることに反對すべき所以が毫末もない。よしんば、さま〴〵の點で婦人が男子に劣ると假定しても、それであるからと云つて、彼女等が參政權を求めてわるいといふ理由は毫末もない。況んや事實に於て毫末も劣らないに於てをやである。

理由として乃至原理としては、婦人が政治に與る權利を主張することが當然であるのに加へて、今次の歐洲大戰で婦人の實力は愈々認められた。戰爭中に於ける婦人の活動によつて、婦人も亦男子のするだけのことはなし得るといふことを認められた。たとへば英國だけについて見ても、鐵道事務員、驛夫、電車の車掌、列車掃除人、郵便配達、汽車の機關手等これまで男子にのみ限られてゐた職業が充分の成績を以て婦人によつて爲し遂げられたことが證明されたが、かういふ些細なことばかりでなく、もつと大仕掛な病院の經營、耕作事業等の社會事業まで、婦人の手に成し遂げられたことが多大であつたので、いかに保守的な英國の社會も婦人の實力を認め、つひに昨年末下院で二十五に對する二百七十四票の多數で婦人の參政權法案が可決されたのは諸君の知られるところであらう。又アメリカでは、たとへ上院に於て失敗したとは云へ、下院に於ては昨年末やはり大多數を以つて全州の婦人に政權を與へることが可決されたことも讀者のすでに知られるところであらう。かくの如くして、婦人參政權問題が、理論に於ても傾向に於ても今や世界的な是認を經たものであることは少しの疑いを入れぬところである。

四

しかしながら、この婦人參政權問題は我が國の現狀に對しては、どの位の程度に於て緊急事であらうか。英米その他の國に於て緊急事であると同じ意味に於て、我が國に於ても緊急事であらうか。これは可なりの興味ある且つ考ふべき問題でなければならぬ。

すでに前にも幾度か繰りかへしたやうに婦人の參政權問題は原理としてはたしかに、誰人も反對するに及ばないほど明白な問題である。これは與謝野晶子氏の云つてゐるやうに、その實現の一日も早かるべきこと

を誰人も希望すべき問題である。その實現がいかに早くても、これで早過ぎるといふことのない問題である。この意味から云へば、その尙早論は成り立たない。

しかしこの問題が解決したからと云つて、言葉を換へて云へば、法律上婦人に參政權が與へられることゝなつたからと云つて、直ちにさまぐの婦人問題が解決するとは云へない。少くも現在の狀態に於ては、さまぐの婦人の慈善運動や禁酒運動や廢娼運動などが、婦人の參政權獲得と共に直ちに、或ひは容易に行はれ得るものであるとは云へない。無論いくらかは好都合ではあらう。しかしながら、さういふ法律や制度が定められたからと云つて、理論的にそれに伴つて釀し出される效果が必ずしも擧るとは限らない。何となればそれは結局制度の問題ではなくて、寧ろそれを運用し、活用する「人」の問題であるからである。言葉を換へて云へば婦人參政權を持つ婦人そのものゝ人間的價値の問題であるからである。

この立場から見れば、現在に於ける我が國の婦人が、參政權を得るといふことにどれ程の效果があるか頗る疑はしい。第一に我が國の婦人は自發的にこれを要求してゐない。自發的に要求しないところに、效果の擧る筈はない。たとへ擧つてもそれは偶然的な效果に過ぎない。これについては山川菊榮氏の意見を引合に出す必要がある。

氏は「佛蘭西革命に際してスタエル夫人、ローラン夫人の如き有產階級の婦人が『婦人に參政權を與へよ』と主張してゐる間に、無產階級の女房達が『パンを、パンを』と叫んでヴエルサイユに押し寄せたのは何故であつたか、又日本に於ても生活の壓迫が先づ參政權の要求を喚起する代りに、或は女一揆を或は同盟罷業を以て應へられたのは何故であつたか」と自ら問ひ、そして自ら次のやうに答へてゐる。

「民衆にして參政權の獲得を以て直接生活を改善する最大捷徑なりとしたならば、他の一切の運動の前に本能的に先づこれに趨るのが自然にして且つ必要ではあるまいか。家族が多ければ多いほど、貧しければ貧しいほど、より痛切に必要を感じ、より熱心に參加せざるを得ざる性質のものでなくては、卽ち眞に無產者の利害を一致した運動でなくては、無產者の蹶起を促すことは困難である」(中外四月號)

氏はかういふ立場から、參政權運動が無產婦人より有產婦人により多く必要であると結んでゐる。氏のこの見解に意づけられてゐる、有產無產の區別觀には、私は必ずしも全部贊成するものではないが、しかし以上の氏の言は充分味ふべき見解である。我が國の一般

婦人――無產婦人――が、自覺的に參政權を求めてゐないとは、とにも角にも爭はれない事實である。それならば、我が國の有產階級の婦人が、これを求めてゐるかといふに、この方でも恐らく彼等は心からこれを要求はしてゐない。或ひは得たい位には思つてゐるかも知れないが、どんなことがあつても、これを獲得しなければならないといふやうな強い要求に驅られては恐らくゐまい。英米の所謂サフラゼットがこれまで屢々試みたやうな大仕掛な示威運動までして所信を貫徹するほどの要求は恐らくあるまい。目的のためには手段を選ばずといふ位に切迫した要求に驅られて、さまざまの暴擧を敢てした英國のパンカースト一派の所謂ミリタンツと呼ばれる團體の運動の如きは日本婦人の恐らく夢想だもしないところであらう。上下おしなべて日本婦人の參政權要求は今日のところ、一般的には、殆んど取り出していふに當らないほど稀薄なものといふべきであらう。

要求の上ですでに稀薄である上に、事實に於いて現在の我國の婦人は政權に與るに恐らく値しない。尤も私は男子の悉くがそれに與るに値するといふのではない。又、私は今現に政治に與りつゝある所謂政治家が悉くそれに與るに値する人間であるといふのではない。しかしながら、一般の男子に比べて我が國の一般の婦人は、これに與る價値が甚だ少ないといふことは容易に斷言し得ることであると私は考へる。

かういふのは、我國の婦人の能力が我が國の男子のそれに比して本來から劣つてゐるからだといふのでは決してない。前にも述べた通り、婦人は能力に於て、或は實力に於て、男子に劣るものではないことは在來充分に證明されてゐる。少くも英米その他の國々の婦人がその能力上男子に比して劣らないことは充分に證明されてゐる。そして能力上から云へば、西洋諸國の婦人も我が國の婦人も異なるわけのないことは云ふまでもない。たゞ、婦人が男子と同じく本來具有してゐる能力で、これまでの永い年月の間、使はれず、磨かれなかつたために、男子のその同じ能力に比して、少くも現在に於ては甚だ劣つてゐる、乃至甚だ鈍つてゐるといふことは有り得ることである。參政權その他の社會的運動に對する我が國の婦人の要求の稀薄であるのも、かういふ方面に關する婦人の能力が、永い年月の間、磨かれたことなく、無活動のまゝに閉鎖されてゐた爲めとも見ることが出來るではないか。

この點に於いて、我が國の婦人はこれまで可なり不幸な位置に置かれてゐた。今更改めて云ふまでもないが、過去二三百年の我が國の婦人を律したものは、今日から見て、最も頑冥な思想の結晶である『女大學』であつた。「女大學」は我が國の婦人に取つて法律でもあり道德でもあつた。「女は唯和ぎ順ひて、貞心に情ふかく靜かなるを淑しとす」といふのを教義とする『女大學』、「婦人は別に主君なし、夫を主君と思ひ敬ひ愼みて事ふべし、輕しめ侮るべからず。總じて婦人の道は人に從ふにあり」といふことを教義とする『女大學』。さういふたゞ〳〵從順乃至屈從を以て唯一究竟の道德とする『女大學』を以て我が國の婦人は過去二百年を支配され、而もやはり今以て支配されつゝあるのである。

難者或ひは、過去の我が婦人はたとへさうであつても今日の婦人は決してさうではないといふかも知れない。しかしながらこれは事實を無視した言である。世の風潮の進歩と共に無論そこに、いくらかの進歩はあらう。しかしながら、例へば今日の所謂賢母良妻主義の女子教育のいかに保守的なものであるかを見たものは、恐らく、誰人も、今日の女子教育の根本主潮が、依然として『女大學』式であることを否み得ないであらう。そして又いかに新時代の女性でもこの種の教育を受けた以上、政治問題などに對して、彼等がいかに無興味であり、無知であり、同時にそれに關係することに於て無價値であるかは、誰人も容易に推測し得るところであらう。私が、今日の日本婦人が參政權運動に與ることに無價値であると云つたのはこのためである。

五

以上のやうに觀察して來ると、婦人參政權問題に對して吾々の取るべき態度も自ら明かになるわけである。卽ち、この問題は理論として乃至原理としては明かに正しい主張である。從つてその主張の實現乃至貫徹のために努力することが、いかに早くても早過ぎるといふ憾みは斷じてないのである。

しかしながら、たとへ參政權を得ても、それをいかに利用するか、いかに效果あらしめるために活用するかといふ實際問題となると、今の日本婦人の多くは、無價値なものであるといはなければならない。それならば差當りは、どうすれば良いか。これが最も重大なる

緊急事でなければならない。

私は、これについて、婦人の文化的教養といふことを力說しようとするものである。卽ち個々の婦人が、文化的に教養され、人間としての水準を高めることを高調しようとするものである。これからの婦人が文化的教養を備へて、人間としての水準が高められゝばそこから自らさまざまの運動が起るに相違ない。參政權問題の如きも無論その一つであることを妨げない。

私は又婦人は政權に與るよりも別な天職を持つてゐるといふ說にも直ちに同意することを敢てしない。今日の我が婦人參政權の要求には、山田わか氏の說の如く、外國の模倣といふところが多分にあるであらう。しかしながら、山田氏の如く「政治上の力はたゞほんの外部の力で、有效に使用されたところで其の影響する處は、社會の表面だけだ」といふ理由から、婦人が參政權運動に努めるのを不聰明なやり方であるとは私は考へない。又、私は同氏の如く、子を生み、子を育てることのみが婦人の最も大なる天職であるとも考へない。私は又今日直ちに婦人參政運動をおこすことを以て、平塚らいてう氏と共に、餘りに現實の事實を無視した輕擧であるとすることに躊躇するものではないが、同時に、婦人が直接政治家として立つよりも母親として、思想家として、教育家として、宗教家として、又は藝術家として立つ方が、一層社會に貢獻するといふ同氏の說には贊成することが出來ないのである。

政治の力は決して山田氏の考へてゐるやうに單に社會の表面だけに影響するものではない。又、子を生み、子を育てるといふことは、單に母親だけに委せらるべきことではない。子を生み子を育てることに對する一切の義務は、母親と同じく、乃至それと同じ程度に於て父親も荷つてゐる。從つて育兒が婦人のみの職分であるとは云へない。子に對する男女の關係は徹頭徹尾連帶責任でなければならない。又、男女の能力が、もしも本來に於て優劣なきものである以上、現在に見る如き男女の政治上、社會上の能力の優劣は、本來的のものではなく、單なる境遇上の結果であるならば、婦人が母親として、思想家として、教育家として、宗教家として立つのが、政治家として立つより、一層有效であるといふことが云ひ得ないことである。私が平塚、山田二氏に一面贊成しながら、一面贊成し得ない所以はこゝにある。

政治も宗教も藝術も科學も其他人間一切の文化的の營みは、それ自身に於て優劣はあり得ないと共に、男女に取つて、その能力上氣質上、それ／＼絶對の關係にあるものである。言葉を換へて云へば、政治家として立つよりも思想家として立つ方が、より多くその當人に取つて、社會に取つて貢献するといふ男があるやうに、教育者としてよりも政治家としての方が、より多くその當人に取つても、社會に取つても有意義であるといふ婦人があるかも知れない。要は男女それ／＼の個々人の問題である。それは實に男であるが故に、女であるが故に、といふ性的區別を絶した「人間」としての個々人そのもの丶問題である。

婦人の文化的教養といふことを、私が今力説するのも如上の理由からである。婦人は何よりも先づ、個人としての文化的教養を積まねばならぬ。前に述べた通り全體として、今日の我が婦人は男子のそれに比して、文化的教養が甚だ劣つてゐる。文化的教養を備へた一個の人間として、男と比肩することなしには、斷じて社會の向上や改造は望まれない。これまでの社會は殆んどすべて、所謂「男の造つた」社會であつたが、これからの社會は、男女の協力になる合作でなければならない。將來の社會の一切の營みは男女が、相互に對等の義務と責任とを分ち得るものであるべきである。このことは今更云ふまでもない。そしてかやうな男女の協力に待つ社會の一員としての義務と責任とを荷ひ得るためには、何よりもまづ婦人の文化的教養を高め、人間としての個々人の人格的水準を高めなければならない。かくすることによつてのみ、社會改造のために、婦人は始めてその力を盡し得るのである。

婦人と文化的教養――これこそ現在の婦人運動に於て最も力説高調さるべき緊急事でなければならぬ。

社會問題批判

純益分配制度の確立

——勞働者は産業界のデモクラシーを要求せよ——

早稻田大學教授 安部磯雄

我國勞働組織の改善が、啻に勞働法制の實施に依りてのみ達成せらるゝものでなく、勞働組合の完備に勞働者夫れ自體の質の改善を先決問題とする事は、前號に陳べた如くである。故に今回は勞働組織の主要部分を占むる資本家對勞働者の根本的解決方法に對して少しく論及し度いと思ふ。

資本家對勞働者の紛爭軋轢は多くの場合、或は總ての問題が利益分配に關するのである。而して此紛爭を一掃するには純益分配制度を確立しなければならぬ。純益分配に對して制度を設くるのは日本の勞働問題解決法として最も適切な事であつて、政府も最近多少此方面に考慮して來た樣に思ふ。卽ち內務省の救濟事業委員會に對して過般內務省から諮問した時、委員會は純益分配制度の設定に就て答申したるやに記憶して居る、隨つて政府でも旣に此制度の確立と云ふ事が問題になつて居るのは事實であり、又社會各方面に於ても昨今稍研究されて來た樣である。夫れには外國の實際を調べて見ると、日本の勞働問題に關する智識の程度及勞働者の狀態が果して如何なるものであるかを大體知り得るであらうと思ふ。

純益とは何ぞや

純益分配制度を陳ぶるに當つて、先づ純益の性質を明かにする必要がある。純益とは資本家が其事業に要する一切の費用、所謂事業費なるものを總收入より控除し、且つ資本に對する利子及積立金等を引去つて、猶剩餘したる利益である。日本の事業界では此利益を如何に處置するかと云ふに、槪して資本家が之を獨占する、偶々其幾部を分配しても、夫れは賞與金として恩惠的に分配さるゝのであつて、勞働者は之を取る權

利はない、傭主の恩惠である以上、賞與の多寡に依つて不平も言はれず、其分配方法も勿論規則に依るのではなく、何等の拘束があるのではない、總て悉く傭主の獨斷に依るものである。若し利益分配の方法が政治上に於ける立憲制度の如く、一定の拘束の下に行はれて、資本家の投じたる事業費、資本金の利子、積立金の三者を控除したる全純益を公平なる方法に依り分配する時は、勞働者は滿足して働き得ると同時に、其生活狀態の不安を除去する結果、從來屢々惱まされる資本家對抗運動の如きも其跡を絶つに至るのである。利益分配主義は日本でも多少行はれて居ると思ふ。例へば增田義一君の實業之日本社が曩に此主義を採用すると云ふ事を公にした、今日でも續いて實行して居るであらうが、斯る例は他にも全くない譯ではあるまい、一定の拘束に依つて公平に純益の分配さるれば、勞働者は資本家と同樣に利益を受けるのであるから不平を起す餘地がない、隨つてストライキ等の手段に訴ふる必要はなく、寧ろ勞働者側でも原料や機械の取扱ひも叮嚀になり、又各自其利害に關する爲め充分放心して從業し、精勵する結果監督者を要せぬ事になる。此種の利益は產業の發展上極めて著大なものである。

利益專斷の疑惑を除け

純益分配制度を我國の產業界に行ふには、恰も政治上に於て立憲制度を布き國民の不平を除去したる如き官僚政治家の奮發が、資本家の間に起らねばならぬ。

純益分配の實行は先づ資本家が此大襟度を持し、勞働者に對して資本家專斷の疑ひを去る必要がある、即ち資本家は會社の帳簿を勞働者に公示して勞働者を安心せしめねばならぬ、然らざれば利益分配を行ふ甲斐がない、此點が日本の資本家に耐え得るや否や、或は資本家が斯る方法を執る事を以て、資本家自らの威嚴を損ずる樣に考へ居る者が未だ決して少くはないと思ふ。此思想は純然たる君主專制の舊思想であつて產業界がストライキの懸念を去り事業の安定を得て發展するには立憲的思想に基く利益分配の公正を示す爲に此方法を執らねばならぬ。然らば問題は如何なる割合に依つて純益を公平に分配し得るかと云ふに在るが、其方法は歐洲も米國等も千種萬別で一定して居らない。或は單純に假令ば五萬圓の利益に對して資本家と勞働者と折半し二萬五千圓宛分け取る事が最も理想的な分配法だと做す說もある。併し之は一見頗る公平なるが

如くにして實は必ずしも正當な分配法ではない。分配法として比較的計算の妥當なりと思はるゝは次の如き方法であらうと思ふ。

正當なる純益分配の標準

即ち資本家に對する利子と勞働者の受くる賃銀を對等に計算の基礎として分配率を決定する方法である。資本家は資本に對する利子であるが勞働者の賃銀は人間に對する利子であつて之は素より對等のものでなければならぬ。乃で假りに資本金百萬圓の事業に就て考ふるに金利は時の相場に依て多少の變動はあるが平均年六分と假定して資本家は六萬圓の利子となる、其會社の製造業に從事する勞働者の一個年に於ける賃銀は通計十八萬圓の支出とすれば資本金利子六萬圓に對する賃銀の割合は一と三との比例を保つ、而して會社の純益金が一年二萬圓とし之を一と三の和たる四で割る時は五千圓なるが故資本家は五千圓の配當を受け勞働者は三の割合で一萬五千圓を受ける事になる、之を多數の勞働者に分配するには賃銀の多寡に依て按分比例するのが最も公明正大な遣り方であると思ふ。斯る分配主義を實行し得るものは勞働問題の上に多大の效果を收め事業の發展上稗益する處が尠くないのである。

併し玆に一つ考へなければならぬのは此方法にも多少の缺點のある事である。謂はば此分配法は勞働者側は利益ある時には一定の約束に隨つて分配を受くるが、反對に損失を招いた場合は如何にするか、勞働者は資本家と共同責任の地位に立つて其損失を負擔し得るかどうか。勞働者は結局負擔に耐えないとすれば此分配法は片手落ちであり、或は一種の慈善、形式を代えた賞與制度、恩惠主義に過ぎない事となる。

如何に勞働者が負擔に堪えぬと言つて利益ある時のみ唯分前を貰ふのは勞働者自身の品位に關する。勞働者を可愛がつて頭を撫でる恩惠主義は封建時代に行はれた所謂仁政と云ふものである。之は舊世紀の遺物でデモクラシーの思想は斯る恩惠的仁政を以て人民に對する最大侮辱として居る。然らば如何にして損失の場合共同負擔に耐え得るの基礎を造るかと言ふに、其缺陷を補ふ第二段の方法は純益分配の際に當つて、普通ならば現金で配當する處を其全額若くは一部を渡さずに積立て或一定の金額に達するを俟つて其會社の株を買はせるのである。勞働者全部が等しく假令一株でも所有して株主となり總會に發言し得る事となれば利益

を受くると共に損失をも負擔する譯になる、從つて勞働者の面目も保たれるのであるが、尠く共一會社に三分一位の勞働者にして株主たる者がある樣でなければならぬ、此方法が完全に實行さるれば資本家對抗のストライキ問題抔は決して起る憂ひがなく資本家と勞働者との調和、今日の勞働問題は總て根本より解決せられるのである。

佛國に於る利益分配の實例

最後に私は佛國に於て實際遺憾なく此主義を實行して居る適例を觀て非常に感服した事がある。元來純益分配主義の宗家は佛蘭西であるが、今日より三四十年前巴里に餘り遠からざるギースと云ふ處にゴダンと云ふ人の工場がある。主としてストーブ其他の家庭用鐵器の製作を營み千七百人餘りの傭人を使つて居る。ゴダンと云ふ人は極めて立派な考を持つた紳士で傭人の爲めに寄宿舍を造り低廉な料金で之に住はせ又は小學校、幼稚園、劇場等を私設して傭人の子弟の教養勞働者の慰安の途を圖つて居るが、此人は當初から純益分配主義の實行者で資本金は六百萬法即ち我二百四十萬圓位であるが漸進的に傭人の株主を增加し千八百八十年頃は全資本額の三分一（二百萬法）の程度が勞働者の所有であつたのが今日では殆ど全部勞働者を株主とするに至つた。而してゴダンは死するに先つて一種の憲法を造り株券全部を會社の勞働者に賣り老人となつて退く者は若き勞働者に自家所有の株を讓る事、會社の株券は其會社に勤務する者以外に賣り渡すを嚴禁する事等を定めた。夫が爲めに該會社員は今日では全部勞働者であり且つ株主になつて居る。之が產業界の所謂デモクラシーである。日本でも資本家は大に此點を考へなければならぬ。尤も一時に之を實行せんとするには、日本の勞働者に準備がない、故に初めは利益分配を先づ實行して漸次株に代へる方針を執るならば二十年間位にして容易に其目的は達せられる。日本の資本家が五十萬、百萬の金を所謂慈善事業に投じて仕たり顏するのは餘り結構な遣り方ではない、夫よりも先づ自家の會社工場經營に對し純益分配主義を實行して生產能力の增進と資本と勞働との根本問題を解決し一面最も手近な勞働者より救濟する事に努力しなければならぬ。之れ聽て我國勞働組織の基礎を成すものであつて私の切に我國資本家に對して一考を望む所以であり且つ亦其奮發を期待する所以である。

多數の家族を有する勞働者に對する特別手當給與制度

法學博士　矢作榮藏

佛國の工業會社は、戰時中多數の家族を有する勞働者を救濟する爲めに、特別手當給與の制度を設けたるもの少からず。例へば下セーン州の佛國鞣皮材料製造會社は多數の家族を有する勞働者に、特別手當を給與する組織を設けたり。此會社は之に屬する二の工場に於て、男工四百四十五人、女工十人を使役す、此の特別手當給與制度は千九百十六年十月に設けられ、千九百十七年一月一日より之を實施せられたり。此手當は有妻者たると無妻者たるとを問はず、佛人勞働者にして戶主たるものにこれを給與す、而して千九百十六年一月一日以來引續き會社の業務に從事するものに對しては、直に此の特別手當を支給し、其後雇傭せられたるものに對しては、一ヶ年間繼續して會社の業務に從事したる中よりこれを支給するものとす。

此の特別手當は、十五年以下の子女二人以上を有するものにのみ之を支給す。

十五年以下の子女二人あるときは　毎月　十五フラン
仝　上……三人……三十フラン
仝　上……四人……三十五フラン
仝　上……五人……四十フラン
仝　上……六人……四十五フラン
仝　上……七人……五十フラン

子女の內十五年に達したるものあるときは、其子女に對する部分だけ手當を減額するものとす、但十五年以下の子女尙ほ七人以上ある場合は此の限りにあらず、十五年以下の子女死亡するも、特別手當の給與は尙ほ三ヶ月間繼續するものとす、戶主死亡したる場合に於ても、子女に對する特別手當は、引續きこれを給與する故に、此場合に於ては此特別手當給與の制度は、保險料の拂込を要せざる生命保險なりと云ふも可なり。此特別給與を受くる戶主が、勞働に伴ふ災害にあらざる他の原因によりて死亡したるときは、其家族の母は會社より左の如き手當を支給せらるゝものとす、

十五年以下の子女二人あるときは　毎月　四十フラン
仝　上……三人……五十フラン
仝　上……四人……六十フラン
仝　上……五人……六十五フラン
仝　上……六人……七十フラン

仝　上……………七人……………………七十五フラン

家族の父及母共に死亡したるときは、特別の事情發生したるものとし、取締役の決議によりて其處分を決定するものとす。

戸主の死亡が第三者の責に歸すべき場合に於ては、其第三者が其家族に仕拂ふ損害賠償の年金額だけ特別手當を減額するものとす。

戸主が勞働に伴ふ厄災によりて死亡したる時は勞働者の未亡人及子女は千八百九十八年四月九日の勞働に伴ふ厄災に關する法律によりて定められたる賠償金を受くるが故に此特別手當は之を支給せざるものとす。

右の外は此會社は勞働者の家に出產ありたるときは最初の二人の子供だけに限り現物又は現金を以て一回百フラン宛の手當を給す、此特別手當を受けんと欲する勞働者は工場事務所に戸籍謄本を差出し且家族の出生死亡の屆出をなさざるべからず。此手當は每月二十五日現在の家族の狀態に從ひ每月末之を支給す、此手當は原則として戸主が會社の勞働に從事しをる間のみ之を支給す但軍事上の教育又は動員の爲に召集せられ又は會社の承認したる醫師の認知したる病氣又は勞働に伴ふ厄災等の理由により勞働者の意思に反して欠勤したる場合に於ては引續き手當を支給するものとす。

手當は事務所より勞働者の住宅に送達するものとす、會社は支給する特別手當の使用法を定め且其使用を監督するの權利を留保し其目的を達するに必要なりと信ずる總ての手段を取ることを得、此特別手當は特に子女の利益の爲に之を給與するものなるが故に會社は十分に子女の利益を保護することを力め戸主が公又は私の救助を受けたるときは會社は勞働者が其救助を受くる間此特別手當の給與を廢止又は中斷することを得。

千九百十七年に於ては四個の勞働者の家族は子女の出生に際し各百フランの手當を受けたり。

現在此會社より特別手當を支給せらるゝ戸主の數九十二人にして之に屬する子女の總數二百七十五人なり其內三十九人は各二人の子女を有し二十九人は各三人、十六人は各四人、三人は各五人、四人は各六人、一人は七人の子女を有す又特別手當を支給せらるる未亡人の數は九人にして之に屬する子女の總數は二十六人なり其內、四人は各二人、二人は各三人、三人は各四人の子女を有す、此の九人の未亡人の夫たりし戸主の內、八人は戰死し一人は病死したるなり、

工場事務所は此特別手當給與制度實施以來未だ特別手當の給與を廢止又は中斷するの必要を感じたることなしと云ふ。



逍　遙　遊

法學博士　和 田 垣 謙 三

逍遙遊とは何ぞや、書齋裏の讀書子が、行き當りバッタリ的にParcourirするなり、Driveするなり、Spatieren gehenするなり、腦中何等の豫定なし只水到渠成を待つのみ

米人の眼に映じたる日本旅館の經濟的計畫

"The Japanese inn has no dining-room, or perhaps it would be better to say that it is all dining-room, for the guest dines in his sleeping-room and sleeps in his dining-room, each being the other when it is not itself, or vice versa, and both serving as parlor when each is neither. I hope this is clear, and that the beautiful economy of the scheme is apparent."

p. 76
Over Japan way
Alfred M. Hitchcock
1917

右　譯

「日本の旅館には食堂がない、否寧ろ食堂でない室は一つもない。

客は寢室で食事をし、又食堂で睡眠するが故に、寢

室が寢室でない時には食堂となり、食堂が食堂でない時には寢室となり、而して食堂が食堂でも寢室でもなく、又寢室が寢室でも食堂でもない時には、食堂も寢室も應接間である。見事に經濟的なる室の利用法は讀者之を了解せん。」

邦語には one や itself や vice versa や Neither の如き簡便なる文字なきが故に、譯文に於ては簡潔なる原文の妙を寫す能はずと雖も、我國旅館の設備、否不設備を皮肉り得て妙なり。

紐附きの机

「立派な鼻緒の附いた漆塗の木履が、始めて米國に輸入された時、其の木履たることを知らざる人々は、一體何に用ひる物であらうと、首を鳩めて種々評議の結果、必定日本の肩章であらうと一決した。足に附ける物を肩章とは、冠履顚倒、否肩履顚倒で、いかにも面白き穿き違ひではないか。」

右は拙著「西遊スケッチ」中「雜記帳の中より」の一節なるが、近頃耳にせしは或る外人が我國の下駄を評して紐を附けたる writing table (机) の如き摩訶不可思議の代物なりと云ひしことなり。

木履が肩章と見え、下駄が机と見ゆるは奴さん著眼點高しと謂つべしである。

萬年筆と島國根性

オノト萬年筆
ハーミット萬年筆
三S萬年筆
ボーイ萬年筆
パイロット萬年筆
シルバーオスラム萬年筆
フラム萬年筆
ケンブリッチ萬年筆
ロイテルルーター萬年筆
ストロングリーアル萬年筆
クレバー萬年筆

三笠萬年筆
トラスト萬年筆
モリオン萬年筆
ノーブル萬年筆
エーロー萬年筆
フオース萬年筆
アラビアン萬年筆
カント萬年筆
キユーピット萬年筆
パンリー萬年筆
ラーヂ萬年筆
マース萬年筆
ルーナー萬年筆
スワロー萬年筆
スワン萬年筆

Fountain pen（直譯すれば泉筆）を萬年筆と譯したるは近頃氣の利きたる譯し方なり。さればこそ萬年筆の語は萬年筆其のものと共に廣く我が社會に行はれ、萬年筆の流行と共に之が製造に從事する者日に多きを加ふるに至れるが、其の製法は孰れも似たり寄つたりにて互に眞似合ふに過ぎざれども、唯其の名稱に至つては互に新奇を競ひ、余の知れるのみにても前記の如く其の數二ダース餘の多きに達せり。

獨り萬年筆に限らずたま〳〵世上の嗜好に投ずるものありて賣足の少し早きものあれば、猫も杓子も附和雷同して互に押し合ひへし合ひ、其僞造に腐心し、斯くて萬年筆は眞似筆となり、或製造家の如きをして「販賣方法にも不正の競爭行はれ、定價は有つて無きが如く、小賣業任意の割引販賣をなすもの多くあり」云々と廣告するの止むなきに至らしめ、遂に共倒れの悲境に陥るは、これ敢て我が日本にのみ限られたる現象には非らざれども、其の最も甚だしきを見るは、世界廣しと雖も、島帝國の右に出づるものなし、これ亦所謂島國根性の發露にあらずや。

法醫工文理農等と法醫文理工農商

東京帝國大學各分科の順序は法醫工文理農となつて居るが、其は法醫工分離否と音相通じ、苟も綜合大學である以上各分科の連絡を保つことが必要であるとは、予が嘗て大學教授會に於て試みたる駄洒落であるが、今回教育會議にて確定したる大學案によれば、綜合大學の場合に於ては、從來の六分科に商の一科を加へることになり居り、而して分科の順序は文理法醫工農商となつて居る。分科の順序が從來のと變つたので、折角の洒落の種が滅茶々々になつたことかと一時はガッカリしたが、更に考一考する時は文理法醫工農商は、分離法醫効能小に通ずる、現に教育會議決議の希望事項の中に、綜合大學にありては充分に各分科間の連絡を保たしめ、綜合の實を擧ぐるに遺憾なからしめんことを望むの一項がある。又決定案の中に一分科大學の研究科に入りたる者は、他の分科大學に就き研究するを得しむることの一項がありて、分業は可なるも分裂は否なりとの一大眞理が、現在の分科大學の順序にも、亦新大學案の其にも暗々裡に指示されて居ることは、單に一場の駄洒落に止らぬ。

本文はもと商科獨立の説ありし時草せるものなれど其後經濟科と改稱せらるゝことゝなりて、この駄洒落の種は自然消滅に歸せるも割愛に及びず即ち舊稿の儘を。

無題錄

▲本誌創刊號に掲載した幸田露伴氏の長篇「運命」を讀み終つた田山花袋氏「何と云つても」幸田君ならでは出來ぬ大作だ一句一章熟讀賞味して眞に味のあるものだつた殘念なる哉今の若い人達には漢學の素養が足らぬからあの大作の妙味が解せぬ」と云つて居た

▲佐藤春夫君は却々流行り出したので稿債山積の有様なので東京に居ては……と今度本郷の家を畳んで松戸に假居したが何でも秋迄に二百枚の力作を發表するとのことだ

近代的に改造されし角觝

栗島狹衣

▲數奇な運命に弄ばれた吾人などは學校の門を出る時に立てた方針であつた仕事が、見る〳〵中にグレ蛤になつて、『あれもやり』『これもやつた』といふ風に、遂々思ひもよらぬ仕事が一生のものとなつて、其度毎に變つて行く境遇の變轉が餘りに急突な餘りに滑稽じみたものとしか感ぜなかつた、その中に二十年間更に休みなく、更に撓みなくやつた仕事は、『年に二度宛見る角觝』で、その角觝の批判をする新聞記者の仕事であつた、その二十年間に見た角觝の氣分、吾人には今日まで何の變化もないやうな氣がしてゐたが、フト氣が付いて見定めると、恐ろしい革命が、狹い土俵の上に渦を卷いて動いてゐる、その渦に卷かれて彼等力士が、段々に改造されたのであつた、小屋掛のものが鐵骨の國技館に變つたのは、形からの大きな改造だけれども、斯うされた處で、大體見物の配置や、土俵の裝置や、そんな事は別に改められた趣も見えない、併しいつまでも小屋掛ではならぬ、大建築場にしなければならぬと思ひ立つた角觝社會の人達の頭腦は、その時明かに無形の怖るべき改造力を動かし得たものであつた、さればこそ角觝といふ吾が國千何百年以來の仕事は、形の上でも心の上でも一向に進まなかつたが、吾人が知つた、過去二十年そこ〳〵の間に、多少形の上からも改造し、夥多しく心の上に改造された、驚くやうな革命の精神が渦を卷いて、無形の中に『人間味』を發揮して來た、それが偉大な偉大な改造である、自由で虛僞のない角觝術といふものが力士共物の競技精神になつて來た、いひ換へれば自己に生きて、衒ふやうな芝居氣を放れて來たともいへる、從つて武士的精神だのといふ裝飾は破壞されて仕舞つた、吾人はたしかに夫れを認める、これが改造されし角觝であつた。

▲『國の形や心を芝居の舞臺で見る』といつた哲學者の言葉にはたしかに芝居以上の妙味と仕科とが含まれてゐた、それと同じで芝居より以上に、吾々國民の諸種の階級の人々をあつめ得る角觝場には、明かに現代國民性の發露を見る事が出來る、角觝場にあつまる多數の人々は、勝負に就ての競爭心から、第一に人間の利己性をムキ出しにする、初めは飾つてゐても段々に生地になつて來る、酒を飲んでも十分に醉拂つて、グダ〳〵になつて太平樂を吐いて、警官にだつて喰てかゝる、芝居の方ではまだ

氣取てゐる、役者も虚僞な演出法をやつて氣取つて見せる、力士の方になると、ムキ出しな見物に共鳴するやうに矢張りムキ出しになる、芝居で襟元をつくろつた女が、角力場でクランクランに酔拂らつて、おどり上つた事實を幾度も見た、この點から見て行つても、國民性の地金を暴落させるのは角觝場にかぎるこの意味で角力を見て行くと、近代の角力術の進歩に、すくなからぬ改造の痕が、鋭い人心の斧の刄で、深酷に刻まれたのが歴々と見える、文明の潮流に棹さした形式が、鐵傘型の大建築を生んで、近代人の好尚に合致するやうな形式が整へば、小屋掛けの踈雑な中で舊套を繰返してゐるよりも、凡べての情緒が新らしくなつて行くのは當然である、夫等周圍の改造的情緒が角觝を新らしくし、角觝を内面的に改造して行く。

▲二十年近く近間で見て來た角力にも、此兩三年の間に、大邊な内面的改造の實蹟を認めて、見物人たる多數の國民と、競技者たる多數の力士とが、どういふ風に進み合つて行つたかを明かに知つた、初め晴れた正月の冬空に、嫋々と打込む櫓太鼓の響を聞いた時は、特殊な體格を持つた、偉大な力士達が、實力と實力とを飽くまで鬪はせて、力の盡きた一方の力士が、惡戰苦鬪の末に、恰も大森林中の古木が、斧に觸れて仆れ落つるやうに莊大と神秘との示現を感ぜしめた、全く雄渾な男子的な、而も日本固有の武士道といふものに、ピッタリと合つた心持が、單純な吾人の心に、十分な滿足を與へ一種の稚氣を帶びた興趣が湧いてゐた、斯うした勝負の印象が、小屋掛時代の角觝期から、國技館時代の角觝期に渡つて、ありくと腦裏に描かれてゐる、而もそれは角觝道の全盛と稱せられてゐた時代であつて、角觝批評家は之を大技工時代などと唱へてゐる、それは雄大な力士達が揃つてゐて、力技の全力を傾注して、十分なる鬪技を爭つて見せたからで、表面から見ると、眞に大技工の爭ひに違ひないのであつた、併し内面から見て行くと、其處には何の複雑な意義も存在してゐない、近代の傾向に迎合した、皮肉な、辛辣な純然たる心術的興味は少しもなかつた、近代の角觝術を指して、小技工的時代だといふのは、力技の上の表面に現はれる活動が小さく細かく閃動するからなので、力以上の心的技工は却て偉大な雄渾な意味になる事を一般批評家は認めておらぬ、吾人も曾てはそれを認めなかつた、大力士の割據した大技工時代を、角觝全盛の黄金期と認めて、近代式の小細工な技工を、斯道頽廢の悪風だと痛罵した事もあつた、尤も大技工から移つて來る潮先は、如何にも角觝の武士道味を沒却して、埒もない缺陥ばかりが、吾人の目に不快な感を與へてゐた、所が今日では角觝の意義が違つて來て、武士道抔といふ羈絆から脫した、新らしい競技精神の力技が、近代人の鑑賞に投じて來た事を知り得たから、いはゞ角觝の因襲は取除られて、以前の角觝といふものとは別箇の競技が土俵といふ區劃の中に活動する事になつたのであつた、『武士道』抔といふ因襲を棄てゝ見るべき自覺

を得た吾人は、近代の角力に對する、適當な見地を發見したのであつた、而して其處に改造された、大きな意義を知得したので、角觝に向つての復興的議論や、古典的議論を撤廢した、今の角觝を見る可き心得が、現在はチャンと吾人の頭腦裏に描かれてある、夢幻式な武勇談に比しき技を、これからの力士に强いるのは無理であつた、改造された角觝には、鋒と喰入つた近代人の人間味が、躍如として土俵に閃動するのを望まねばならぬ、これからの興味はそれより外にはない。

▲吾人が始めて回向院の土俵に角觝を見た時は、初めに壯快な力鬪の有樣を見て、男子らしい氣分に醉つてゐたが、いつしか單調な趣味に飽きてどれもこれも同じ技で勝負を續けてゐたより外に、何等の印象も殘らなかつた、併し何となく男子の通有する壯烈氣が沈澱してゐて、時にはそれが心の表面へ浮いて來る、血のおどるやうな肉のうづくやうな氣になつて、もう一度角力を見てみたいと思つた、今度の季節に出會た時、又出掛けて棧敷の隅から覗くやうにして見てゐる中、力士の名前や勝負に就ての技術の興味を知りかけ遂には其技の術名を覺えて來た、こんな時代が一二度續くと、追々角力を故實的に研究し初めたり、四十八手といふ技の説明をもとめたり、力士達の得意、非得意、を知つたり、やがては進んで土俵の掛引なんかに目がとまつたりして來た、三年後には一寸黑人筋といつたやうな案配で、チョイ〳〵角力道の通をいふ樣になつて來た、こゝに新らしい興趣が湧いて來て、漸く角力批評家の資格を生じたのであつた、丁度小錦が横綱の末期であつたが、豐滿な彼がニコ〳〵しながら土俵へ上つて來る此日に對抗する相手方の玉ノ井とは恐らく段違ひのものであつた、然るに競技になると、小錦一流の突張りで盛に敵を突きすくめて行くと、相手の玉の井は頗る面喰つた態度で、土俵を右に左に交しつゝ逃げ廻つた、小錦が追ひ込んで來る一刹那に、その突き出す手を引いて體を斜に開いた、これは引落しの一手であつたが、此一手に引掛つて、小錦は物の美事に、芋俵でもころがすやうに土俵の砂の上にコロ〳〵と轉げた、喝采拍手は四面から起る、角力場はエライ狂亂の空氣に包まれて凄絶な光景が天地を包むやうな氣がした、此大番狂はせで單調を破つた光景が、多くの人の好奇心を買つて年々に番狂はせの多い事を希望して來た。

▲假りに角觝の時期を、舊時代と新時代との二つに分ければ、吾人が見た年代に於て、小錦から梅ケ谷、常陸山、大砲、太刀山等に至るまでが舊時代で、大錦や栃木山、鳳など出て來たのが新時代である、舊時代の角力は、偶像崇拜であつた、新時代へ來てからは、明らかに偶像破壞の天地に入つた、偶像を崇めた時代には、又不思議にも偶像とあがめられる御本尊の力と、其他の者との力の相違は正しく大に違つてゐた、此時に當つては所謂『番狂はせ』は、興味の中心點であつた、新時代に於ても番狂はせの興が皆無になつたのではない、けれども偶像たり御本

尊たる代物の存在を認めないから、今の番狂はせは舊時代の番狂はせとは、全く意義の違つたもので、本當にいへば番狂はせでもなんでもない、舊時代の崇拜物たる御本尊は、其時代の他の者が到底之を凌ぐ事が出來ないものとして、絶對强の位置に崇拜しておいたから、之れがたまく\倒れでもしやうもんなら正しく番が狂つた勝負として、其時代の人々を驚歎せしめた、而して其强者は强いものとしてそれを崇め尊んだのである、小錦の全盛時代にも、彼は殆ど絶對强者として、他の者は其足下にひれ伏してゐた、梅ケ谷にしても大砲にしても、當時の對抗者は强い者に極てゐた、又全く强くもあつた、殊に常陸山に至つては、恐らく何者といへども凌げるものではないと信じてゐた、それがたまく\倒されると、こゝに大きな番狂はせが生れて來て、見物の興味は其事件にのみ集注した、これが一種の偶像崇拜となつて、角力の趣きに一貫された興味が備はつてゐた、新時代へ入つたならば忽ちにして、其崇むべき偶像は破壞され、滅多矢鱈な技量の競爭が、自由と放逸な天地を展開し初めた、それは絶對强などといふ代物がないので、力士全體の力が平均し必ずしも强いと思ふやうな者が無くなつて來た、鳳の如き横綱に、決して負けぬ絶對强者ではない、栃木山が强いといつた處で、どの方面から見ても强いといはれない、大きな欠陷が天頭に見えてゐる、彼は努力の功で其强味を懸命に保持してゐるので、常陸山や太刀山の强さとは相違がある、從つて栃木山は新時代の偶像として、他から崇拜されるほどのものでも無い、大錦の如きは猶更そうである、これは時代の要求から起つた自然の趨勢で、時代から生れた一つの大きな力が、力士の力を平均させて、純技工の上に活きて行くべき、紳心術的競技力を促進させた結果である、されば今日の角力に番狂はせ抔といふべき性質のものはない筈だ、栃木山が倒れても、大錦が倒れても、鳳が倒れてもこれを番狂はせだなどと騷ぐのは間違つた見解である、彼の常、太刀、梅、大砲等の御本尊様達が倒される時は、必ず怪我で傷くのであつて、疎忽から起つた破綻が見えるし、驕慢から生ずる油斷が見えてゐた、然るに今日の栃木山にしても、其倒される場合には、決して些の疎忽もなく些の驕慢もない、油斷から負けたなどといふ例を吾人は一遍も認めておらぬ、負く可くして負け、破らるべくして破られてゐた、だから恐らく今日の新時代の力士達は、栃木山の如き强者に對しても、これを偶像として尊敬し崇拜しておる者は一人もあるまい、何うかして勝てまいかと工夫する者はなくて、何うかしたら勝てるものと自信する者が多數である、常陸山や太刀山や、此等に向つて行くと、多數の對者は匕を投げて、棄鉢に闘つてゐたが、今日栃木や大錦や鳳に對抗する手合にしても頭から棄鉢になつて行く者は一人もあるまい、此意味に於ける舊時代は立派に偶像崇拜の時代であつた、之れと反對に新時代はそれを破壞した時代といへるだらう、それは時代の思潮がさ

せたわざで、内面的に動いて來たある物が、大きな改造を企てた結果に外ならぬのである、

▲横綱といふ偉大な名譽は、舊時代にあつては、御本尊たるべき者の權威であつた、明確に時代の第一人者たる事を表示してゐたから、横綱に絶對强の意義が明示されて、之れが王者の冠の如く輝いて居た、されば横綱を得た初期の土俵に、其位に負けて傷く事があり、怪我を多く生ずる事があつた、それは其責任の重いのに氣後れが來て、思はぬ破綻を生んだのであつたが、それも新時代に移つてから、横綱の貫祿に多大の相違が出來、責任なんといふものは極めて輕いものとなつたので、位負けといつた風な失墜は少くなつて來た、横綱は其時其時の選手に與へる選手號で、一時代に數人の選手ある事を妨げなくなつた、之れを一時は横綱の墮落のやうに思つても見たが、それは墮落でも何んでもないので、時代が新らしい力士を生み、新らしい力士が新らしい制度を生んだ丈けの話しである、横綱を因襲的の第一人者稱としておくのは、今に於ける大きな矛盾で、同時に數人に附與するも妨げない制度を、角觝當事者が斷行したのは、時代の精神にかなつた、遺口であつたと思ふ、舊時代のやうに横綱が、眞實の絶對强であれば、これを同時に數人も拵へておく事は、尤も予盾した道理にもなるし、全く商略上の要求にもなるが、新時代のやうに絶對の强者が無い上で、或る時その時の優勝者に對して、横綱と命名した選手號を附與する事は何の差支も何の權威もない事になる、優勝する事が二三度になれば、世間が其選手號を要求して、其優勝者に一つの固定した地位を與へて見たくなる、それに迎合する角力當事者の心持ちは、固より多數の人氣を攫取したいといふ譯だから、商略上の掛引になるのは勿論だけれども、そうさせる一般見物者の方から見て行けば、斯ういふ傾向が、自由になり、勝手になつた現代の角力味と一致したからの話ではあるまいか、舊時代の場合でも、梅と常陸と大砲と、同時に三人の横綱を生んだが、これは三人が一つの絶對强者を象作つてゐたのであつた、三人の力は常陸が第一としても、先づ平均したものだといはれない事はなかつた、新時代の三人横綱は絶對强の立場からいへば更に無い事であるけれど、横綱の意義を變へて、競技者間の優勝者に與ふべき、其時時の金牌であつて見れば、三人でも四人でも、乃至十人でも差支は無い、舊時代の因襲を固守した時ですら、世間の要求には勝てないで、同じ力の三人を横綱に推して、見物者の滿足を來さしめたが、それよりもつと以前の舊い時代にすら、二人横綱の峙立を見た事さへある、文化文政度の鬼面山不知火の二人横綱は、此二大力士の抱主たる大名の要求から、已むなく推選したものではあるが、之れがある少數者の要求として、世間から促進した結果で無いとはいはれない、まして世間の力が强度の壓迫を持て、角力社會といふ特殊の團體を支配する現代に、その大勢と爭つてまでも、因襲的態度を保つべき

ものではないから、今日の角力當事者が、それに應じて三人四人の横綱を作つたのは、深く考へれば更に不思議でもなかつた殊に横綱の意義を取替へた處に正しく改造的新意があるだから太刀山の隱退を以て、舊い武士道的の角力味とは、斷然絶縁したものといはねばならぬ、新時代はそれから新人の要求に本付いて展開されたので、角力の本義を取替へて觀察し、横綱の意義を變へて考へれば何の不足も何の不平も起るものでない、横綱の横利を一手で賣つてゐる吉田家とかいふものも、鳳を横綱にするについては、余程苦情をいつたらしかつた、併し東京の敏腕な角力當事者連に說伏させられて、之を許し之を賣つた時に、もう新時代の鑄型に篏められてゐたので、それから日下開山の意義を自然の間に變へて、時代の要求に迎合した趣意を作つて、四人でも五人でも拵へ上げる自由を與へた。

▲某雜誌でチラと見た事であるが、吉田家の司人たる吉川善門とかいふ人の話に『今の力士の人數も二千有餘人ゐて、昔の倍も倍も五倍になつてゐる、それに横綱は一世に一人と限られた傳もない、場處に優勝して、横綱になる德望の人なら、何者にも附與して差支へがない』といつてゐるが、二千餘人の人數から割出したとなると粗造濫造であるし、何者にも附與して差支へのない規定だといふのは胡馬加しである、日下開山と唱へられてゐた横綱號は、決して嚴格な意義からは數人を許してゐない、但し本當に力の同じやうな者であつたら、之を一つの大きな力と見て已むなく同時に二人以上にも許したのであつた、こんな場合には或度議論が沸騰する、既に鬼面山、不知火の時でも、梅、常陸の時でも、多少世間も論んじたし、司家側の方でも議論したが、梅が横綱になつた後に、それと同等否それ以上の力を持つた常陸に、横綱號を授けねばならぬのは、正當な優勝本義から推してもわかつた話だ、此等は二人の力を一つの力と見るだけの價値がある、併し新時代の方になると、鳳でも栃木でも大錦でも、三つの力が揃つた一つの力にはなれない、それで力士の人數が殖えたから、横綱も殖して行くのだといふ、極めて簡單な議論では、據りが付くべきものではない、それよりか正直に横綱の本義を變へて、舊時代に極めた規則を破壞したのだといふ方が明白だ角力の横綱は勝負から割出した絶對強者横である、嚴格な意味からいへば、其一時代に一番すぐれた强者に對し、たつた一人を推定するのが本義であつた、だから二人横綱拵が出來るまでは、秩序整然たる規定の事歴を殘してゐる、時には苦しがつて五條家から許可を得たり、住吉神社から許可を得たりして、變則粗製な横綱を拵へてゐた事さへあつた、凡べての點から論じて吉田善門とかいふ人のいつた事は、あれは無責任な話に違ひない、多少の誤謬が傳へられたに違ひない事實は吾人のいふ如くに、新時代が斷然たる所置の下に、舊時代の規則を打破して、横綱の優勝權を安價な簡易なものにしたのである、世間から壓迫されて改造した新時代の轉化が、武士

道的に象り英雄的に作り上げた横綱を破壊させて、自由と勝手と開放と而して安價と平易とを投げたのである、角力術の上にも肩肱張つた窮屈もなくなつたし、横綱權を許可しやうとする司家にも、非常に好都合な事が生じて、虛僞や虛飾の時代は、何事にも去つて仕舞つてゐる、角力道の上にも、偶像破壊の力は迫つ來て、舊時代の鎧兜を付けた武者繪式の幻影は、次第〱に消えて行くのである、吾人の如き舊い時代から通して見てゐる者には、其處に不滿足や不平も生じて來るが、新時代に生れて新時代を見てゐる人達には、それで何の不思議も欠陷も見出されない、併しながら錦繪のやうな舊時代の角力味が、今に吾人の快感を呼び起すと同時に、新時代の人達にも、その面白味を語つた時、矢張り膝をすゝめて快哉をよんだのを見ると、武者繪式の美しさは、丁度芝居の歌舞伎式で、人間何者を通しても、その美しさには憧憬の念を禁じ得ないものと見える。新時代の角力味が、舊時代のそれに對しては、歌舞伎芝居に於ける創作物の新らしい芝居で、これからが其發展を見るべきものと信ぜられる。

▲舊時代の角力の追懷は、絢爛の美に醉ふやうな氣分で、名優のやつた歌舞伎芝居が　いつも目の前にチラついてゐるやうに思はれるのと同一だ、新時代の角力は、現在見てゐる時の辛辣味が、互の競技者に火の如く燃立つてゐるのを見てゐるのが愉快なので、追懷して見て、それが美しかつたといふやうなのは極めて少い、舊時代の角力の中でも、常陸山の全盛期に、之を破らうとする對抗者の意氣は、非常な勢を以て常に緊張されてゐた、全く其時代の常陸山は角力界の大本尊で、彼の後には絶對强の後光が燦然として輝くのを見た、梅ケ谷や大砲が之れと立向ふ場合は、どうも常陸の勢威に氣押れて、十中の七八までは、常陸の勝になるやうな氣がしてならなかつた、併し梅や大砲と云ふ大剛の代物は、流石に彼を破るに就て、それが番狂はせであるやうな、見物側の不穩を喚起しはしないが、どうも强い力が常陸の方にあるやうに思はれてならなかつた、だから梅や大砲を除いた相手、即ち荒岩にしろ海山にしろ、常陸に對抗する當時の意氣は、素晴らしい緊張を以て、全力傾注の有様を見せてゐた、それが今日の角力のやうに、內面から活いて行くやうな心術手段でなくて、眞の實力を正直にぶつけて行くといふ遣口であつた、荒岩の如き精悍無比な人は、鋭くまで其精鋭な腕を振つて力戰苦鬪の上に勝利を博そうとしたのであつたから、敵を陥穽しやうといふ譎詐もなければ、術の上に工夫する去勢法といふものもなかつた、それ故に荒岩の如き、その時代の摩利支天とよばれた人でも、其摩利支天振りの奮鬪は、眞向から行く正攻法であつて、術の運用は決して虛偽ではなかつた、對者が常陸山であつても、それに十分耐えて行ける丈けの力を以て、先ず正面から當つて行つた、だから相互の力がシツクリ合つて、土俵の上に活く太い線が、壯大な男性的快感を惹起し

て、何ともいへない雄渾な氣をそゝらせ歌舞伎芝居の演技が、下座の音樂とシックリ合つて、舞臺の上に綺模樣をあらはして行く時の快感と少しも違はない美しさであつたから、いつまで時日がたつても忘れない、思ひ出して見ては其美に醉はされてゐる事が出來るのだ、荒岩が常陸山を外掛に掛倒した時、それは回向院時代で一番印象を殘した事實である事は、今も角觝批評家の間に猶喧傳されてゐる、此時でもそうだ、荒岩の正攻法と常陸山の正攻法とが、たゞ瞬間の差で、一歩先きに攻めかゝるのであつた、荒岩が一歩先きに攻めかゝつて、得意の左をグイと差込んだ、それを常陸山が泉川に撓めて、金剛力にグイと持て行く、荒岩がドツコイに踏張つて、此咄嗟に右を筈に頭を下げて構へた、これで荒の正法に本づく守勢の腰を固めたのである、常陸山はそれでも撓ますに引立てゝ持つて行つた、常陸の力が勿論強かつたから、荒岩はズル／＼と退つて西の土俵際に迫つた時は、最早彼に勝算の無い立合とも思はれた、然るに荒岩は此咄嗟に敵の力を利用して、彼が十八番のスクヒ投といふのを打つて土俵を廻つた、これは前から作戰でなくて、この咄嗟の作戰である、この呼吸が今と昔と違ふ所で、舊時代の力士が、正直過ぎた實力の活きであつたといふ事になる、無論今の力士にした處で實力は實力に違ひないが、其實力を用ひる呼吸が違つてゐる、又實力を運用する上に就ても、舊時代の力士は、持久、耐久といふ用意を以て、先づ敵に破れない力から研究して行つた、然るに今の研究のやり方は破れないといふ方面の用意よりも、絶對に敵を破らうといふ方面の作戰から立てる、耐久とか持久とかいふものよりも、突破とか粉砕とかいふ事を、先づ最初から考へてかゝる、だから作戰が狂ふと、自分が粉砕されて仕舞ふが、舊時代の遣口にはそれが少なかつた、今荒岩が土俵に詰つた時にも、始めからの作戰でない、咄嗟の作戰、それが日頃から自然に修養されてある實力上の持久性が、美事に敵の猛進を喰止めておいて、さて急速に得意のスクヒ投を打つて廻つた、これが非常に利いて、常陸の體は夥だしい傾斜を見だが、そこが常陸其人の偉大な持久力で、傾斜の度を忽ちに回復させて、すぐに殘して追ひ進んだが、此時は彼と吾と入れ替りとなつて荒の體が東になり、常陸の體は西の方から進んで行つた、而して猛牛のやうな常陸のおそるべき力が、又もや荒を壓迫して、東土俵の俵ぎはへ詰めて行つた、荒が又もやスクヒながらに廻つた時は、彼の持久に耐える腰の修養と、其天分の俊才とを感ぜずにはゐられなかつた、而して今度は荒から追ひ擊ち攻め付けたので、常陸の體は俵に詰つて、一寸絶體絶命に陷つたが、それでも彼れは潰れなかつた、こんな根強い實力の活きは、到底今日の人達には見る事が出來ない、此時荒岩は必勝を期して、左足を外掛に乘しかゝり、右の筈を外して、常陸の咽喉を攻めつけて、眞額一文字に土俵外へ押し倒した、このキマリ手は掛け倒したので、もとより足の力が八分の強烈な攻め

手であつたのだ、實に此一番は二十有餘年の角力見を通して、忘れる事の出來ない絢爛美であつた、丁度團十郎の藝の最強度に達した時、その緊張した根強い力が、今に吾人の胸裏を去らないと同じである、故に今日のあつけない立合が、何となく物足りない感じを起させて、角力道の敗頽を殆ど唾棄したくなるほどにも感じたが、次第に吾人は新らしい道を發見して、今の角力には術の上の細かい變化、内面的に閃動する心術の活き、それから生れて行く、人間の自己主義、時代に適合した人間味のあるものとして、大正年度の角力見に、新領土の發見をした事を喜んだのである。

▲吾人が發見した新らしい領土に立つて此一兩度の九段の場所を見ると吾人が唱へる『角觝の改造』が、ここに美事に建設されてゐるのを認めた。栃木山の角觝振りから見て行くのに、正に彼は當代の强者であるが、常陸や太刀の强味とは餘程違つて彼には彼の武器たる筈の押手と、それから生ずる腕力の捻り倒しとの外に、持久に活用すべき自然の强味に乏しい、常陸や太刀山には彼等自らの武器があつて、それで大抵押し通して行くが、それで通らない場合に、敵がフト逆襲して來る際、その力を禦ぎ通す持久の强味があつた、栃木山にはそれが乏しい、併し夫れが近代式の鑄型に嵌つてゐるので、持久して永く戰ふよりも迅速に突破して行くのが、近代式の遣口である、栃木のやうな舊時代の力士に似通つた剛力士にも、さういふ欠陥があつて、豫定の攻口が一杯になつて來た時、フト敵に逆襲されると、飛んだ處で脆く破られて仕舞ふ、けれども栃木　元氣と實力とが緊張してゐる時には、豫定の攻口を一杯にしない中に、敵は物の美事に紛碎されて仕舞ふ、以前に栃木が黑瀨川に破られたり、鶴渡りに投げ倒された時は、栃木の元氣と實力とが、自分の攻口を一杯に張らせるまで緊張してゐなかつたのだ、然るに此三四場處前からは、元氣と實力とが緊張して、敵を攻めるのに豫定通りの攻口を一杯にやらぬ中から、敵は彼の剛力に突破されて仕舞ふ、去年の五月に朝汐が勝つたのは、朝が舊時代から修養して來た力士丈あつて、持久の力が非常にあつたので、栃木が初めに攻めて來た筈の手を怺え、土俵際に右差の掬を見せたから、栃木との體が入れ替りとなつて、栃木は一寸豫定の攻口に狂ひが來た、こゝで栃木が諸を入れ、朝が上手から挾み付けて禦いだが、栃木の戰法は初めから筈で押通す作戰であつたので、諸差になつて寄身になると、少々戰法の手順が違つて來た、朝汐がここまで持久して、兎にも角にも土俵の中央に體勢の淀みを見せたのは、彼が實力主義の修養から生れて、勝身覗ふよりも、負身を禦ぐといふ戰法に馴れてゐるからなのであつた、併し此時に栃木が勇を皷して寄り立て、朝は怺え切れずなつて正面の土俵ギハへ詰められて仕舞つた、これで朝が負けるのが順であつたけれど、其處をまた美事に殘して土俵を廻つたから、再度栃木の戰法に蹉跌を生んだので、持久戰に馴れ

ない彼は、大に苦戰の狀態に陷つたが、それでも元氣にまかせて寄詰めた時、朝が東土俵の俵ギハに體を開いて、引落し氣味にスカシたので、餘り深く差してゐなかつた栃木は、前へ引かれて泳ぎ出して仕舞つた栃木山が勝身に急なる近代の力士型になつてる事は、この負振りで肯づかれた、それは新時代と舊時代の手口の相違を明かに說明して、意氣の違つてゐる事を、細かく形に見せてくれたものであつた、併し栃木を破るには此手口の有利なる事も、一般好角家の間に肯定されたが、さてこゝまでウマク持久戰をやつて行く者が少い、殊に新時代の戰法から行くと、これは手馴れない損なものにもなるので、此戰術は不必要なもの〻やうにも解釋されてゐる、何ンにしても作戰の筋を立て〻置いて、豫定の行動といふやうに進んで、勝身々々に持て行くのが、自己の本意を貫く、現代の主義に合致してゐるのである、されば負けまいとするよりも、飽くまで勝たうとする攻口が、有利でもあり、正法でもあると信ずる現代力士が、持久、耐忍の力を養成するのに缺けるのは萬已むを得ざる時代の要求であるのだ、大錦の如きは勝身の戰法を立て〻一氣に進んで行くと、必ず何物をも突破し盡すといふ遣口であるが、さてそれが一つ外れて仕舞ふと、脆いやうに負けて一敗肝腦地に塗れるといふ悲慘を呈する、九州山にしても、鳳にしても、皆勝身を急ぐ事は現代の風になり切つてゐる、對馬洋のやうな力士が、たまには持久力のあるやうな取口を見せてゐるけれども、これとても舊時代の修養とは趣の違つた遣口で、守つて守りぬくといふやうな昔風の堅實味は更に無い、矢張り其點になると淺瀨ではあるけれど、攻め立て〻勝身に行く場合になると、それは〳〵鋭い切味を持つて、敵をまくし立てる處に現代のうつくしさを持つてゐる、芝居氣のあつた取口を見せて、土俵一杯に精氣を漲らせるなどといふのは、現代の功利主義には沒交涉の仕事である、勝てばい〻ので勝つ事に於て何物をも間に入れない遣口は、技術の上にも鋭敏な働きを工夫して、昔の角觝の手口に無い技までが、今はドシ〳〵と案ぜられてゐる、足で業をする事も有利で、捻り棄て〻、敵に寸隙をも與へぬ呼吸も有利である、新らしい手口から生れて、機先々々を制して行くのが、正に現代の角力の色彩であつた、かくて改造されつ〻ある角觝の上に、新らしい興味を發見して、其興味に醉つて行くのが、現代角力見の取るべき道である、今は矢鱈に昔の綺麗的美に心醉して、角力の廢頽を罵倒する必要などは無くなつて仕舞つた、英雄的の力士の輩出を望む事は毛頭至難事で、而も最早舊時代の仕事である、これからは功利に鋭い、敏感な力士の輩出する事を希望しなければならない、新時代は生れて來たと共に、新時代の見方も生れて來た事を忘れてはならぬ。

▲新時代の角力に就ては、物言とか苦情とか、勝負の判定のつかない場合の捌き方を、ハッキリと極めておく必要があると思ふ、改造されつ〻ある角觝に對して、今に殘つてゐる勝負の判

定法は、甚だ不完全で、甚だ非文明である、これは何とか文明的な、簡單な多趣味な方法を考へねばならぬ、一番簡單な方法としては、一時實行した協會捌きの遣方が、見物に取つては迷惑でないいゝ方法のやうであつたが、本當に勝負の判定をやるといふ上からいふとどうも氣が抜けて仕舞ふ傾きがあつて、功利主義の今の角力には釣合の取れない、そこで何うも力士達の側から見て其方法を嫌ひ出したやうである、意氣の抜けない場合に於て、双方から有利の議論を闘はして、一つでも勝星をせしめておきたいのが現代の心持ちにかなつたものだから溜りにゐる控力士が肩肱張つて口角沫を飛ばすといふのも、却々興味深くも思はれる、併し見物側からいへば、愚論を永く續けられて時間を無駄に馬鹿らしく待てゐるのは甚だ愚擧である、そこで之を威伏する最高權威の者を捜し出して勝負の判定に對する最後の斷案を下さしめねばならぬ、それが又容易にあるべきものでない、併し檢査役といふ判定者にもつと權利を與へ、何うしても最後の斷案は此人々の見解に服すべきものとして、吾人はこゝに一つの新らしい方法を案出して見た、

　物言に對しては、行司が軍配をあげた場合、その反對の側から苦情を持出すと、四本柱に控へた檢査役なる人々が、之を採用する場合には、必ず立上つて土俵の眞中に協議を凝らし、それから東西の控へ力士に相談して、どちらにも有利のやうに裁決をする、自己の見地から男らしく獨斷する檢査役などといふものは今の檢査役中に一人か二人しか居らぬやうだ、大抵は東西を調停する仲裁人の地位に立つてゐるものである、

斯ういふ風であるから、いつまでも双方の喧嘩はやまない、仕舞には檢査そのものも、重荷を負はされたやうに感じて、徒らに見物の惡罵に任せる事になつて仕舞ふ、それであるから吾人は斯うしたらと思つてゐる

　物言の付いた勝負になつたら、必ず東西何れかの控へ力士から苦情をいひ立てる、行司は東西の力士の中から、代表者を土俵に上げて苦情の筋道を説明させる、四本柱は其時までは動かないでゐる、行司は補助員二名、即ち三人の行司に依て、この苦情代表者たる力士の申條を聞取り、さて力士を溜へ返したら四本柱の檢査役に總立になつて貰つて、土俵の上で圓陣を作つて、三名の行司が聞取つた力士の理由を聞き、當時軍配を取つた行司の意見を更に聞き取つて其行司をも一寸退場せしめ、檢査役各自が見た意見と、補助で見てゐた行司二人の意見とを參酌し、合議の上で立派に判決を下して仕舞ふ、この判決に對して不服は絶對に無い事にする、つまり行司と檢査役との權利を尊重し力士各自の意見を公表的公開的にして、彼等の論議をも尊重する事にするのだ、檢査役自身が四本柱から立上つて、東西へお百度參りをするやうな遣口は、力士をして物蔭にかくれて

勝手氣儘な熱を吹かせるやうなものになる、あれが第一に檢査役の威信をおとさせる問題ではあるまいか。

また其他にも、控への力士達に聞き合せる度數を限定するといふ論もあるが、畢竟は文明の競技術に對して判定者の權威を尊重してゐない舊時代風が、一番邪魔をしてゐる事だと思ふ、新らしい天地に新らしい競技氣分をさへ生まうとする角觝が、勝負審判の方法に就て、野蠻極まる討論組織に、少しも纒まりの付かないといふ事實を見せるのは、彼等に全體に取つての侮辱である、之れは至急に改造しなくてはならぬ、而も形の上からでなく、競技精神の心から改造して、力士達共者の紳士的態度を養成し、公平といふポイントの上に、互ひの有利を競爭せねばならぬと思ふ。

▲角力見物の多數が改善された結果として、女性といふ者が角觝に對する興味の、那邊にあるかといふ事を研究するのが、頗る多趣味な問題であると思ふ、舊時代に於ては女性は角力を見る事を許されてゐなかつた、十日間の中の最終日を俗に『おさんどん角觝』などと唱へて女性のために開放されてゐた、こんな屈辱を角觝の方から女性に與へて、平氣でゐた力士達は、所謂天下の力士といふ武士氣質を發揮して、彼等が驕慢に振舞つた時代の權威を、猶も永久に續けやうとしてゐたのであつた、併もこの撤廢は自然の要求で、譯もなく取除けられて仕舞つたが、これと同時に力士の氣質は、一種の墮落といつたやうな傾向を生じて、彼等は全く藝人となり終つた、併し之も自然の要求で、自然の結果で、力士だなど丶武士の美伊良みたいな形を、臆面もなくヒケラカシてゐる時代でもあるまい、髷はほんの裝飾といふものになつて、それが職業的標示なるに過ぎないのも、寧ろ滑稽の沙汰ではあるまいか、力士等が力技家となつて藝人的立場から、一般女性に近付いて行くのも仕方がない譯である、女性が爭つて角力場へ押掛け角力場が男と女と半數になつても仕方のない譯である、良家の奧さんで毎年々々來る顏が、どの位あるか知れやしない。彼の人々は何が面白いかと初めは思つた、けれどもそれは面白いに違ひないから、毎年〱來るに極つてゐる、藝者とか圍ひ者とか、浮いた稼業の女達は、見得もあれば外聞もあつて殊更にやつて來るのもあらうけれど、堅氣といはれる良家の奧さん達が、鯱鉾張つての見物は角力其物が極めて女性の趣向に傾いて、女性的に快感を與へて來たのに違ひない、角力術といふものが、舊時代にあつては、雄渾な放大な純男性的な快樂に傾いてゐたのに、新時代へ入つてからは、それが次第に細織な技工に入り、內面的に動く技術上の爭ひが、女性の爲めにも面白味を生んで來たに違ひない、昔ならば頼まれても見に來なかつた女が、今は渦を卷いて見物に來る、此現象から押して行つても、角觝はたしかに改造された、新時代の要求する趣味の下に、此一大競技術は、國民の一般から歡迎される國技となつて仕舞つた、これからは力士の品格や力量に

段々偉人的な特色を欠いで行くが、心から活動して行く技の上には深い〳〵研鑽が續けられて、小さくても強い力士は輩出するに違ひない、筋の働きに奇怪な力を見せて、肉の豐滿な、力の豐富な恰も猛牛の如き大力士の裏を掻いた不可思議至極な力士も生れて來やう、態度の女らしい、グニャ〳〵したやうな畸形力士も出來ないとはいへない、一寸法師でもおきあがり小法師でも勝身の早い分には忽ちに、横綱といふ優勝選手號を攫得して、角力界の覇權を握る事が出來るであらう、この場合になると體格ばかり巨大な、ノソ〳〵した、勝身を逃かすやうな代物は、鼻抓みの部類に葬られて、それらは常に敗亡者のベソを掻かねばなるまい、十年、二十年、それから先きの角力界には素敵もない現象が見えて來て、吾々の夢想だも及ばぬ事が始まつて來やう、

□新聞記者としてのナポレオン

近頃巴里で新聞記者としてのナポレオンと云ふ本が公にせられた多技多能なナポレオンの一面を研究したものだナポレオンの上手なのは戰爭許りでなく文章も亦巧みであつた直截簡明な出來る丈簡單に思想を表現して一種の文體をなして居る處は其天馬空を行くが如き天才の面目が躍如たるものが章句の間に現はれて居る▲あの時代の新聞の勢力を好く知て居た政治家はナポレオンとメッテルニッヒの二人である▲ナポレオンは何時も新聞の記事を秘書官に讀まして聞いたものであるが彼を攻擊した記事があつても泰然平氣で聞いたものだそうな▲ナポレオンは湯が好きで浴室に秘書官を呼で自分は浴槽の裡に仰臥しながら秘書官の讀むのを聞いた熱い湯が好きだから湯氣が浴室一ぱいに充滿して秘書官は讀むのに閉口したそうな

俳句

探梅の草鞋の土や渡し船　格堂
鯛網は龍宮の花の嵐かな　同
雛うつる夜の鏡を覆ひけり　蝶衣
おさがりの雛祭るや御園守　同
燕や坂路きほふ馬の耳　余子
汐干狩どこ引く潮と怖れけり　同
柴舟やよるべの岸の梅一枝　春雨
青公卿の小弓構へぬ梅がもと　同
梅白し濁りそめたる園の川　城北郎
草家子や柱に結へる凧　同
留守居して淋しくもあらず春の雨　簫子
つれ／＼に醤湯たてけり春の雨　同
鯛網や海の寶の何千兩　青雲
風呂汲むや花の吹雪の中となり　同

沖荒るゝけはひさはめく汐干かな　十四郎
苗代を濁らすほどの大雨かな　同
閉し寐て山吹の風雨思ふかな　戊子
親子して草餅つくやたうべけり　同
治聾酒やひそかにのみて酔ひまさり　菊樵
階や春泥を來し數の沓　同
春の夜や居眠る耳に法遠し　光亂射
轉るや枝を支へて真逆様　同
春の海や社の三島過ぎてより　迷堂
看經や春暁の觀世　同
早春や畑に岬す岡の木々　須磨
猫の子はあらなしの耳持ちにけり　同
ふるさとや到る處の落椿　喜舟
涅槃會に欄間の天女泣きにけり　同
紅梅に短冊つるせ鶴の首　東洋城
山吹や宇治の川上道細に　同



椿と馬酔木

若山牧水

ひさしくも見ねば見まほし海岸のかの椿原咲きたるならむ

海岸のとりどりの木のくねりたる藪の椿はみな咲きたらむ

沖津邊にひくく浪たち木の陰の砂のふかさに椿散りゐむ

椿の木くさりて落つる丹の花のくさりたまりてうづたかくあらむ

わが妻がこのめる花は秋はりんだう春は椿の藪花椿

☆

登り來し路はるけしとながめやる山のいただき馬酔木咲きたり

いただきの山のまろみにとびとびに生ふる馬酔木は花ざかりなり

禿山に生ふる馬酔木はたけひくく繁くも花をつけてをるかな

繁りたる馬酔木たけひくくあらはには見えぬその花下ごもり咲けり

めづらしき馬酔木が原を此處に見て心はさびし山のいただきに

遠山は霞にこもりわが立てるこの峰の上に馬酔木しげれり

俳句

探梅の草鞋の土や渡し船　格堂
鯛網は龍宮の花の嵐かな　同
雛うつる夜の鏡を覆ひけり　蝶衣
おさがりの雛祭るや御闘守　同
燕や坂路きほふ馬の耳　余子
汐干狩どこ引く潮と怖れけり　同
柴舟やよるべの岸の梅一枝　春雨
符公卿の小弓構へぬ梅がもと　同
梅白し濁りぞめたる閾の戸　城北郎
草家子や柱に結へる凧　同
留守居して淋しくもあらず春の雨　簫子
つれ／＼に壷湯たてけり春の雨　同
鰯網や海の寶の何千兩　青雲
風呂汲むや花の吹雪の中となり　同

沖荒るゝけはひさはめく汐干かな　十四郎
苗代を濁らすほどの大雨かな　同
閉し寐て山吹の風雨思ふかな　戊子
親子して草餅つくやたうべけり　同
治聾酒やひそかにのみて醉ひまさり　菊樓
階や春泥を來し數の沓　同
春の夜や居眠る耳に法遠し　光亂射
囀るや枝を支へて眞逆様　同
春の海や社の三島過ぎてより　迷堂
看經や春曉の觀世　同
早春や畑に岬す岡の木々　須磨
猫の子はありなしの耳持ちにけり　同
ふるさとや到る處の落椿　喜舟
涅槃會に欄間の天女泣きにけり　同
紅梅に短冊つるせ鶴の首　東洋城
山吹や宇治の川上道細に　同



椿と馬醉木

若山牧水

ひさしくも見ねば見まほし海岸のかの椿原咲きたるならむ

海岸のとりどりの木のくねりたる藪の椿はみな咲きたらむ

沖津邊にひくく浪たち木の陰の砂のふかさに椿散りゐむ

椿の木くさりて落つる丹の花のくさりたまりてうづたかくあらむ

わが妻がそのめる花は秋はりんだう春は椿の藪花椿

☆

登り來し路はるけしとながめやる山のいただき馬醉木咲きたり

いただきの山のまろみにとびとびに生ふる馬醉木は花ざかりなり

禿山に生ふる馬醉木はたけひくく繁くも花をつけてをるかな

繁りたる馬醉木たけひくくあらはには見えぬその花下でも咲けり

めづらしき馬醉木が原を此處に見て心はさびし山のいただきに

遠山は霞にこもりわが立てるこの峰の上に馬醉木しげれり



春の旅

成瀬無極

十年といへばもう一昔になる。その時分はまだ獨身の心安さに瓢然と正月元旦の午後に下鴨の寓居を出て、焼け跡のまだ生々しい大阪は上福島の下宿に高工の學生を訪ねて、その夜は一枚の煎餅布團に包まれて苦學生の様な生活をしてゐるその青年と夜更まで語り合つた。そして翌日南の國の方へ一人立つて行つたのである。和歌山の市の築土の蔭に枝も撓はに黄熟する橙や夏蜜柑に先づ南國の氣分を味はひながら、城趾を仰ぎ見るうちに俥は何時か松並木の間を駛つてゐる。根上り松を横に見て少し行くと、もう漁村の香ひが近づいて來る。干潟になれば鶴の降りるといふ芦邊を外に出島の宿に落ち着いたのはもう黄昏時であつた。母屋の方には粉黛を施した女などが出入して絃歌の聲が夜半まで絶えなかつたが、離家は閴然して、狹い前庭の松の葉越しに差し込む蒼白い月の光りも、少し古びた疊の目に冷たく沁み透るやうで、狹い往來を隔てた磯邊の岩礁に寄せては砕ける浪の音が耳に附いて獨棲の夢は破れ勝であつた。そこへ不治の疾病を懐いた青年が訪ねて來て、久し振りの邂逅を喜びながら、自分の暗い運命を嗟嘆し、二十三年の數奇に富んだ生涯を回顧して、病苦を忍びつゝ自ら筆を下してそれを書き綴つてゐると語つた。紀淡海峡を一目にする紀三井寺の勝景を説いて、

「私が御案内したいのですが、何分、あの高い石段がのみ込めませんから。」と溜息を吐いた。青年の叔父に當る人の家は城趾に近い閑靜な處に在つた。一夜そこに招かれて饗應を受けたこともある。少し醉つて濱傳ひに宿の方へ歸りながら、田邊通ひの汽船のうら淋しい汽笛の聲に何とは知れず涙を誘はれたことも記憶に殘つてゐる。

その青年は自傳を百枚餘り書いて終に斃れた。最も親しくしてゐた友人の一人が遺志を繼いで、勞働者の爲めの講演會を開いて、永遠的に故人を記念しやうと企てた。その友人も今は病んで故郷に歸臥してゐる。

上福島の下宿に苦學してゐた青年も今は一廉の役人となり、一家の主人となつてゐる。恐らく最早父とも

呼ばれる身であらう。

十年振りに家族を連れて旅してみると事毎に追憶の種ならざるは無い。しかも、何たる變り樣であらう！山河さへ斯程に趣を改めるとは誰が豫期しやう。出島から、第一隧道を拔けると新和歌浦の勝景となる筈であるが、隧道の左右には賣店が軒を並べ、その間に宏壯な旅館が建てられて、纔に海面を透見することすら困難である。江の島の入口の、あの混雜と俗氣とを想ひ出させる。出島の宿は處々に別館を設け、十年前とは全く比較にならぬ程の發展である。曾てクライストの悲劇を讀んだ、あの靜かな離室などは最早俤も殘さない。祇園邊の小婢のやうな風をして暗い道を提灯を提げて膳部を運んで來た少女は何處で暮してゐることであらう？「家庭の幸福が惠まれるやうに！」から心の中で念じて、この塵埃と汗と人いきれとに噎び返りさうな新らしい名所を辭して、舊い和歌浦の宿へ歸つた。

それは曾て詩集を懷中にして、土手のやうになつてゐる草地に橫になつて、日照ぼこりをしながら、南國の人のみが味はうといふ「甘き無爲」に耽つた處である。「和歌浦汐過ぎくれば片男波、雌波雄波のあひ引に」と小唄にある邊は、流行に眺めが廣々として、松林を亘る濱風も淸らかである。「出島小在所萱葺なるが」と歌はれた邊に三層樓、四層樓が甍を並べる世にこの昔ながらの勝地は却て閑却せられつゝある。盛りを過ぎて人に飽きられ、棄てられやうとする﨟たけた美女にも譬へられやう。曾て生活に疲れたやうな女の口から「和歌の浦には名所がござる」といふ木遣節を聞いた家は四五年前の海嘯に洗ひ去られて、今ではその跡に二階建の旅館が出來てゐる。可なり粗末な建物で、壁なども綻ちやけて處々擦り切れてさへゐるが、靜かなのを唯一の取柄にして此家に宿を取つたのであつた。けれどもあの暖かい土手の代りに長い堅牢な防波堤が出來て、ぞろ〳〵花見客の往來するのが見まぐるしい。人と自然と相親み、渾然と融和するところには常に美が在る。自然と爭ひ、鬪ひ、犇めき合ふ時多くの場合美は傷けられる。文明が自然の征服のみを志す内は、まだ眞の文明に到達しないと云つてよからう。稚い者達は海を見て喜び、船を見て喜び、後庭の草原に咲く菫を見て最も喜んだ。そして宿の赤犬が產んだ白と黑との小狗は彼等の最も親しい友達となつた。

けれども夜に入つて、この靜寂の領する家にも醜い

「人間」が闖入して來た。それは「獸性」そのものを人間化した様な男であつた。泥醉して、眞赤になつた肉體を半ば露はして、家中に響き渡るやうな濁聲を振り絞り。廊下を踏み鳴らせて歩いた。稚い者達は首を竦めて恐れつゝも、窃かに忍び笑ひした。海嘯よりも忌む可きはかういふ聲である。夜更けてから、この「獸性」は自働車を命じて市の方へ歸つて行つた。餘り多くの場合、自働車は醜い、または美しい獸類を載せる機械である。

紀三井寺は八重櫻が滿開であつた。京路では、やうやう一重が咲き揃つた頃である。花の下の掛茶屋に休んで和歌浦の全景を一目に眺めた時には流石に美しいと思つた。かの病青年の歎聲が新たに聞こえるやうな氣がする。然し此處にも卑猥な歌を臆面も無く唄つて客に酒を薦める女達があつて、永く居るに堪へなかつた。そして逐はれるやうに此土地を引き上げた。

濱寺の一夜は、怪物屋敷のやうな廣々した、淋しい旅館で送つた。翌日稚い者達を連れて濱邊で貝を拾つた。青く赤く塗つた短艇が靜かな海上を行きかひしてゐる。公園の方で小さな運動會を催してゐるのが遙かに眺められる。夏は熱鬧の巷になるといふ土地も、此頃は意外に靜かであつた。思へば、「人」を避け、「光」を外にのみ暮らして行く可く運命づけられた吾々ではある！

大阪の砂塵と煤煙とを飽きる程吸つて、態々夕暮を待つて奈良へと志したが。奈良驛で歸阪を待つ幾百の男女の怒濤の様な浸入を受けて、子等を抱へた吾々は下車する事が出來ずに再びそのまゝ生駒を拔けて馳走する電車で大阪へ送り返へされねばならなかつた。壓殺せられさうな車内に、泣かうとする子供達を賺しつゝ、油汗を流しながら、小一時間立ち續けた困難は永く良い教訓として記憶せられるであらう。「稚き者よ安かれ！」たゞこの一念で夫婦の胸は一杯であつた。夢中で飛び込んだ大阪の魔窟のやうな小料理屋で淸凉の飲物の杯を擧げながら、窃かに「全き皮膚を以て免かれえた」事を祝し合つた。

京阪間を家族と共に白切符で通過したことは未曾有である。切めて子供達の爲めに席を設けたいと希ふ親心からであつた。しかも、この車さへ大部分は「美しい獸」に占領せられてゐた。尤も、鏡を出して化粧をしたり、居眠をするだけに止まる限りこの獸は無害ではあつた。

これは唯春の海を慕つて出て、「人」に逐はれて歸つた短かい報告に過ぎない。

田中純氏の處女作「五月の朝」を選みて

▽「五月の朝」について

久保田　萬太郎

帝國劇場の五月興行に使ふ脚本を來者會が引きうけた。すなはち、來者會のなかの人たちが書いて、それを、同じ來者會のなかのわれ〳〵三人、里見君と、河竹君と、私と、それに劇場の宇野君と、四人でみることになつた。

約束の日までに十篇のものが集つた。原稿はすべて匿名といふことになつてゐたから、誰が誰だか、誰が何を書いたか、われ〳〵には擬いくれ分らなかつた。

われ〳〵は、各自、自由に採點して行つた。結果、「五月の朝」といふものが外のどれよりも點が高かつた。われ〳〵はこれを山本專務に推薦した。

われ〳〵は——すくなくも私だけはこの作の清新さに心を惹かれた。上演といふ條件をばかり大事にして、役者と見物とのためにまづ筆を執つたと覺しいもの丶多かつたのを殘念に思つた私にすると、附燒刃のない、ほんたうの作者の生活をうちに求めることの出來るこの作のやうなものを高く買はないわけには行かなかつた。

よし西洋に似よりの作があつたにしてもこの作にはこの作だけの生命がある。しかく危げのない出來である。田中君の頭腦のよさをいひたい。

ただ私は恐れる。お先つ走りの多い文壇はこれを以て田中君に新進戲曲家の名をかぶせるかも知れない。その汐さきに乘つて、大きに、此奴、今度は勘彌のために何か書くといふやうなことでも田中君がいひ出さなければ幸ひである。聰明な田中君のことだから、さういふことは萬々ないだらうとは思ふけれど、だが、蛸と芝居とはとかくわれ〳〵若いもの丶血を荒すものだから。

▽決定するまで

河竹　繁俊

二月の來者會の席上のことであつた。——山本專務さんの發

議によつて、來る五月の女優劇に、舞臺協會員並に女優の上演に適當なる一幕物の脚本を、來者會の會員に對して、懸賞で募ることになつたのは──。そして、二十何名の會員中から三名、劇場側から一名の選定委員を選擧し、その委員になつたものは、應募せぬことにした。

締切りの期日は三月の二十日であつた。期日に至つて、(全部無記名といふ規定であつた)、應募脚本が十篇だけあつまつた。數から言へば、寧ろ當初の豫期以上を得たといつてもよからう。四人の選者は──自分もその一人で、十篇の脚本を可なり愼重に拜見した。そして各自百點を滿點とした點數を附けた。脚本が選者の全部を廻つてから、各題目の下に各自の採點が記され、やがてその點の合計が算へられ、點數順に列べられた。すると、その第一位を占めたのが『五月の朝』であつた。

『五月の朝』の取扱つた材料なり、シチユエーションなりは、必ずしも新しいものではなかつた。けれども、これだけに、ある眞面目な、人生の一面を、わざとらしくなく、藝術的に取扱はうとした作は、ちよつと外には見當らなかつた。けれども、所謂 well-made play として考へた場合には、少しく難色あるを免れない種類の作ではあつた。──そこで、よほどまでは、『五月の朝』なるものを問題にしておいて、次位にある、單に上演の爲めのみには、より適當なる脚本に就いて詮索したが、うまく選者側の意見が一致しなかつた。が、結局專斷的なる山本さんの御意見をも參酌し、採點上の成績を神聖視して、『五月の朝』を採用することに決したのであつた。

自分も、最初からこの作には好意を持ち、よい點を與へてゐたのだから、多少の冒險をする覺悟さへ劇場側で持つてくれゝば、上演することに異存はなかつた。

▽素人臭い所に面白味が‥‥

里見弴

多くて年四五度より芝居を見ない、脚本を一つも書いたことのない私が、帝國劇場五月興行の上演用として、來者會の會員諸氏、──いづれも芝居や脚本に充分な智識經驗をもつて居られる──諸氏の應募される脚本に、甲乙をつける役目に當つたことは、どう考へてみても餘程ヘンなものでした。僭越のやうでもあるし、また迷惑にも感じましたが、自分が缺席した三月

の例會で、投票できまつて了つたのださうですから、止を得ずおうけした次第です。

執筆される方でも、與へられた劇場と俳優とをあたまに置いての仕事ですし、拜見する私もそれをあたまから離すことを許されない場合ではありますが、それにしても、讀むでゐるうちに胸にドキンと來るやうな作が一つくらゐ出て來るだらうと樂みましたが、どうもさう往きませんでした。あたり前だとも思ひます。情ないやうにも思ひます。が、正直に申すと、兎に角失望しました。その失望の故からでせう、つき合せてみると、選者のうちで、私の點が一番あまいことになつてゐました。

「五月の朝」の素人臭いところが、素人の私には、第一に面白く思はれました。それだけ、早速上演すると云ふ場合であつてみれば、手を入れたり何やかや面倒は多いと思ひました。そのまゝ脚本を投り出せば、役者の方で結構やつて往けさうな脚本に、私が「五月の朝」と同じ點をつけたのは、上演と云ふことを第一に考へたからです。

然し、なんと云つても、集つて來た九篇のうちで、「五月の朝」に一番フレッシュなよい味はひがありました。いろ／＼の面倒さへ解決がつくことなら、それの上演は私の心ひそかに望むでゐるところでした。幸、他の選者諸氏の見るところも多く異らなかつたとみえて、「五月の朝」が最高點になりました。私は、作者田中君と、歡を共にしたいと思ひます。玆で批評めいたことを申さうとは思ひません。

序に申します。「カナリヤ」と云ふお作の第一場を、私は大變面白く拜見しました。第二場をなんとかお直しになつて發表なさることを、この脚本の作者にお勸めしたく思ひます。

▽劇場側として

宇野四郎

■私は里見、河竹、久保田の三君と共に選者側に廻らされて居ますが、私のは三君のそれと大分意味を異にして居ます。即ち私は帝國劇場側を代表したもので、興行者の立場として應募の脚本に接した譯であります。

■有體に白せば、此「五月の朝」と云ふ脚本は、最初選者間に在つては、帝劇の舞臺に上演不適當と認められて、問題になつて居なかつたのであります。

■低級な内容を盛つた陳套的技巧を弄した脚色の芝居には、既

に斯道老熟練達の大家が居ます。私共はこの芝居でない the theatrical でない the theatre の脚本を、舞臺協會及女優の爲めに求め、今度、來者會々員の勞を煩はした次第でありました。

ロ「五月の朝」を愈々上演に決するまでに、そこには曲折がありました。之を普通興行に上場すると云ふ事は、帝劇の立場として尠らざる冒險であります。興行者の立場としては、幾多の困難を排しいろ／＼の犠牲を供せねばならないのであります。

■「五月の朝」は內容のかなり充實した、而も之を澁滯なく表出してある、鳥渡シュニッツラーの短篇小說か戲曲を思はせるやうなフリッシュな感じが私にはいたしました。誠に部分的にはいゝ處を有つて居る戲曲と拜見しました。併し脚色結構の上では、大體ではありますが、かなり非難を受けべき所があると思ひました。舞臺技巧なども何等獨創的の點を見受けられませんでした。それに作そのものが小劇場的ハンドルングのもので、實際、（上場に際して改竄をして頂く筈ではありますが、）帝劇の舞臺でどれ程までに演出し得るかゞ疑問であります。此等の點と、殆春樹耕一及秋子の三人切の芝居である點とを、他の選者の方々が劇場側に同情して下さつて、最初は「五月の朝」を除外して居たのです。

■併し缺點はあつても「五月の朝」が、收穫された脚本の中で本質的によいものであると云ふ事になつたのでした。そして我山本專務の果斷により、上場するはこびに臻りました次第です。これは偏へに新劇に對して同情と理解とを有する山本專務の、之に對して幾分なりとも寄與せんとする不斷の努力の一端であるとお思ひになつて頂きたい。

■私共劇場內部の者は、「五月の朝」を劇場上演脚本として、上乘のものとして喜びはいたしません。併し、「五月の朝」の有つて居るやうな藝術的氣稟のあるものを、常々から欲しいと思つて居ります。私共は與へられたこの脚本を、どの位までに理解會得しレヂイスールを通して、舞臺に演出するかを懸念して居ります、どうか「五月の朝」をレーゼ、ドラマなどとの譏を受けずに、作者を滿足せしめるものを拵ひ上げたいと期して居ります。妄言多謝。

「五月の朝」の役割

西山春樹（横川唯治）　仝　つね（田中勝代）
仝　秋子（晋羽かね子）　齋藤耕一（森英治郎）
老僕權造（加藤精一）　下男直造（宮島啓夫）
下婢おとき（櫻井八重子）

文藝漫録

◉凝視の行き屆いた毫しの無駄もない一行一句拔き差しのならぬ、藝術のエキス許りを發表して、所謂月評家諸君から怖ろしく神聖視されてゐるのは、白樺派の驍將志賀直哉である◉此志賀直哉は、今でも我孫子の手賀沼の畔に、浮世離れた、極めて靜かな生活を營んで居るが、『男が好くて金持で何で女が惚れぬものか』と云ふ唄の文句にもある通り、あれで若い時分には散々女にチヤホヤされたものだと云ふ◉併し乍ら根が謹嚴な性格の人だけに、幾何金に賑ひは無くともさう向ふ不見な眞似も出來ず、其の間の苦悶は丁度小說『コザツク』の中に描き出されて居る伯爵トルストイの青年時代のそれに似通つたものがあつたかに聞いて居る◉月評家諸君に云はしたら斯かくデガダン的な半面と、それに反抗しようとする道義的志操こそ、志賀の作品に非常な力と陰影とを與へる所のものであらうなどと云ふかも知れぬ、志賀直哉自身も亦當時の苦しい思ひ出を懷かしむでか、古戰場の一つなるメゾン『鴻ノ巢』へは今以て時々將棋差しに出懸ける◉對手は大抵洋畫家の九里四郎だが、其道に懸けては御大の志賀も存外脆く飛車角落して而かも負けの方が多いと云ふ、併し『鴻の巢』の主人は兎に角昔しの贔負客の事故志賀の來る日には特に一室を開けて待受けると云つた有樣、貧乏文士には眞似も出來ぬ所である◉また志賀直哉は、小說『子をつれて』の作者葛西善藏と共に、文壇切つての寡作家として知られて居るが、志賀自身の話と傳へらるゝ所によると、彼が過去十年間に使つた原稿紙の分量は、評判の新進作家廣津和郎が一年分に辛うじて匹敵する位なものだと云はれて居る◉武者小路實篤の率ゐる『新しき村』が今の日向に建てられる以前の事、甲州の山奧に土地が見付かつて大分話が進行しかけて居たが、其の後遽かに日向の方が纏まつたから、武者は阿母さんが『日向も好からうが、餘り遠方へは行つてたもるな』と切に引留めるのも聽容れず、斷乎として旅立つた◉それ以來武者の阿母さんは『いくら主義の爲めとは云ひ乍ら、去りとは餘り情なさ過ぎる』と武者のやうな文學者を子に持つた事を酷く歎いて居た、すると今度は阿母さんの常平生から非常に可愛がつて居る孫息子、即ち武者の兄さん公共子の倅が、武者に似て酷く文學好きになつて來た所から、此の分では老先が何うなる事やらと英遽に氣を揉んで居る相だ◉之とは形が違ふが、須磨子事件で手を燒いた抱月未亡人が、凡ての[illegible]背點を『抱月が文學者たりしが故に』と云ふ一事に持つて行き『何んな事があつても娘を文學者の許には嫁入らせぬ』と頑張つて居るのも、同じ服の上に立つた、そして前の例よりは一層無理解のない感情である、近頃社會の一部に聞かれる『飛行將校には嫁に遣らぬ』と云ふ聲も、同じ感情の延長であらう◉文士錄を繙つてみると未だ曾て自分の生年月を發表した事のない人が二人ある、一人は哲學者の田中王堂で、他の一人は閨秀作家の舊姓尾島現在は洋畫家小寺健吉夫人菊子さんである、處が實際は、王堂は岩野泡鳴より一つ上だと云ふから、今年四十八歲が正確らしく、菊子さんは未だ水々しいが事實は四十歲である◉これも矢張り文士錄の中で何時も居所不明の人に、中村孤月と伊藤銀月とがある、孤月は鄉里靜岡在の所は書いてあるが、現住所は人に訊かれても滅多に教へない、銀月は一時借財の爲め全然居所を隱して居た、佐藤春夫も以前は居所不明にして居たが、今年から出し始めた、それは作家として賣り出したので、原稿の注文を受ける便宜上からだ、新進作家の一人なる宇野浩二も、居所不明組の一人である、昔年洋畫家の鍋井克之も女優[illegible]田稲子と手を切るまでは大阪に姿を隱し。東京へ歸つてから暫く居所を晦まして居たものだ。

世界思潮

△英國工業界の新現象

勞働者が自ら其勞働條件の監督を爲し、又其從事して居る工業を管理せんとするの要求は特に目立て來た現象である。一オンスの經驗は一封度の理論に勝る、勞働と經營とが一致融合する實驗は、非常なる興味を以て見られる。問題の工場は航空機製造の一私立會社で二年前の設立に係り千二百人の職工を使用して居る。其半は女工で殘りの男工は、熟練木工又は機械職工である。

生産分配法

經營の方法は、最近世間に唱へられて居る生産分配法で使用人は時間を標準として賃金の分配に預るの外、工場全體の生産高の$3\frac{3}{4}$を時間割賃金に比例して一ケ月計算で受取る事が出來る。職工は皆此分配に預る權利があるから假令、月末前に解雇されても、其權利は保有する。又分配法開始後、入社したるものも、分配に預り得る。勞働者の管理支配に參加する方法は、全く區別せられたる三機關に據て實施される。

A勞働者委員會(The Workers trustee)株主としての權利を有し支配人取締役を制する

B工場協議會(The Works concil)以前支配人取締の持つて居た工場の經營を委任せられる

C工場委員(The shop commitees)紛擾仲裁の機關

勞働者委員會の組織

勞働委員は普通工場株の其半を保管する。他の半分は、工場の設立者が所有する。設立者は專務取締役に就任する。(普通株とは單に議決權を有するもの)委員は株の議決權を行使するに當り、又工場協議會の勞働者委員の意見に基いて配當金の處理をする。株は工場設立者が所有して居たものを無償で委員の手に歸した。又更らに資本金を要する場合は、出來得る限り好條件で徵收せらるゝ事に議が纏て居るが、新株は議決權を有しない。

工場協議會の權能及組織

工場協議會は工場の管理、賃金、販賣、條件、賞與、配當等の問題を議決する都ての權利を持て居る。又專務取締役は其指令又は總て決議する工場に關する政策を實行しなければならない。併し資本及財政は協議會の議を經るを要しない協議會は十名の委員から成り、內五名は專務取締の指名により、他の五名は勞働者の選擧による。勞働者側の代表者は(此點特に重要)必らずしも會社に使役せらるゝものゝ內より選擧するを要しない。其工場の勞働者によつて選擧せらるれば好いのである。又勞働の種類に據て其組合工場から代表者を出す規定はないが、現在は木工二人、機械工二人、一人の

婦人職工が委員に選出されて居る。

工場の管理

工場委員は工場各部門の勞働者により選擧せられ、時々起る各人間の紛爭、規律、其他工場管理の細目に渉て、之を處理する職務を有する。例へば職工長が職工を契約解除期限前に解雇した場合は、之を委員に訴へ出でしめる委員會は斯る待遇の不當なりと認めた場合は更らに事務取締役に之を移牒する。過誤を寬假するは、必らずしも權威を毀傷するものでないとの見地から多数の人は、再び工場に歸るを許された。普通斯くの如き事件は委員と取締役との協議に由て決定處理せらるゝのであるが、適々意見が一致しない場合は、最高審判所として之を工場協議會に訴えて批判を仰ぐのである。協議會は、更らに審査の必要ありと認めた場合は、原被兩告側から各一名の委員を選任して、事實を審査せしめ、改めて協議會の議に附する事なく處理せしめる。都ての事件は迅速に取扱はれる。審理が遲滯すると動搖を生じ、紛爭を重ねるの基因となるの恐れがあるからである。工場協議會及關係工場委員の承認がなくては、規則は効力を生じない。

工場の財政

廣義に云へば、財政の問題は事務取締役の掌る處であるが、他の都ての問題は一律に使用人の代表者と事務取締役との一致によつて行はれる。此主義に基き、使用者も經營管理に參加する爲に上り高の分配法又は株を委員に保管せしめて、其利益を感ぜしめる仕組になつて居る。初めて提議せられた時は上り高分配法(The outfout dividend)は、地方の航空委員や、利益分配法は出來高賃金の主旨に反對する或種の勞働組合から疑惑の眼を以て見られた。會社は都ての調査員を招待し、地方民の周密なる檢査を經て、全計畫を擧げて、關係勞働組合に委した其結果、勞働組合は其組合をして其方法の下に勞働する事を承認して滿足の意を表示した。想ふに、管理經營の制限の規定は、其の濫用に對する保證であると。

好良なる成績

事務取締役の側も、充分其成績には滿足して居る。總支配人は、監理費を節約し得る事に就て、他の同種の會社よりも、低減し得て、生產高增進の要求を容易に滿たし、又各人間に不平不滿の聲を聞かなくなつた、又勞働者の建設的才能と工場經營の複雜なる問題を處理する優秀なる能力には一驚を喫したと告白して居る。勞働者の工場管理は、實施されて未だ歲月を閱みしないから、其成蹟を茲に論評するのは、聊か速計に失するが、彼等が協心戮力して勞働して居る狀態は、頗る好良である。眞の試驗期に入るのは、競爭の狀態も、平常に復し、利益も不足となつてからにある。狂瀾怒濤の下に、倘平日の如く成功するか否らかは未だ實驗が濟まない。

其應用の可能性

之と同一の方法が果して、他の

會社又は工場に應用され得るや否やに就て考慮を廻らす時、此特別の場合は或種の特徴の存在せし事を記憶しなければならない。資本の額も少く、議決權を有する株は、一人に據て所有され、其人は工場を管理支配するものと密接の關係があつた。此故に變更は、迅速に且圓滿に行はれた。が併し、資本額大にして工場關係の株主は遠隔地に散在して居る場合は、實行が頗る困難である。例へば議決權を有する株の半を移して、勞働者の權利たる事は大組織の公共的會社では、實行が容易でない。又一方に於て出來上り高分配も、非常な反對を惹起する恐れがある。（殊に利益分配法や出來高賃金が深い根底を有て居る場合）だからして少くとも、範圍の廣汎なる自治の承認が之に伴はねばならない。斯る準備（左程重大ではないが）を比較的小會社に限るならば、一般になつた場合に重大視するの危險がある。又消費者に取ては使用人が、直接に價格取賣に直接利益を感ずる様になつたならして、使用人と雇主とが、利益を増進する同盟をする恐れがある。勞働者に取ては會社に對する忠誠と組合に對する義理が、相反撥すると共に進で產業上の自治を要求し來る恐れがある。此方法は、大膽なる思ひ付で、詳細なる點を工夫して實施されたのであるが、都ての特別の場合に適用する事が出來ないが、問題を解決する一助ともなり且鑑戒とするに足る

△英國の勞働界と過激派

過激派思想が、英國勞働界に浸潤波及する餘地ありや否やに就て、ウエストミンスターガゼットが論じたもので、別項の英國產業界の新現象と關聯照應するものがあり兩者を彼此對照すると、最近英國產業界の趨勢を窺知する便宜があると思ふ。筆者エーピーデウロー氏は先づ英國に過激派思想が既に多少なりとも勢力を有し、又之を奉ずるの一團ありやとの疑問に筆を起し、這度の露國革命も、佛蘭西の大革命も、結局其原因を比較探究するに、何れも、經濟上の不平不滿に發し、佛國革命に就て無理なるものは、都て露國革命に就ても、亦無理なりと喝破し、その原因の存ずる處、必らず危險あるを論じ、次に過激派の概念を明にし、英國產業界の實勢に及び、結論に入つて居る。余は過激派の巢窟の様に思考されて居る北部地方に近頃差居た。殊に最後の十二ケ月間は、イングランドやミツドランドを一個所に定着しないで東奔西走して、產業の狀態を視察したり、勞働者の生活狀態を尋ねたりした。農業地を始め、造船所、製鋼所、製鐵所其他の工場を訪問し、直接農民や勞働商店員に就て談話を聞き第三者とも、意見を交換した三個の結論に到着した。

農業に就て

農業方面に過激派侵入の危險があるか疑うか。英國には廣汎なる耕地が、英蘭地やミツドランドの南部各地に散在して居る。或場所に

於ては土地が頗るやせて居る。東部地方には不幸にして親しく行く事が出來なかつたから玆に言及する事が出來ない。小麥や大麥の收穫を増加する爲に、古い否な永久的の牧場を鋤き返へし、又不毛の地をも、開墾しなければならない。之を爲すに至らしめたる絶對的必要は、(一)勞力の缺乏(二)人造肥料の不足之である。千九百二十年になれば、既耕地を畑地となし、國民を養ふに足る眞の生活資料を充分耕作し得る樣になる。之れ實に農業の强點である。作物は一切擧げて食糧に供すべきである。余は禁酒論者ではないが、多額の食糧が、飲料の材料に供せらるゝは憤慨の至りである。アルコール含有飲料は藥用を別として、諾威の例に倣て厳格なる取扱を爲すべきである。過激派は千七百九十八年の佛蘭西、千九百十七年の露國の如く食糧の不足せる時に頭を擡げて成功する。經濟的社會的革命を誘致するものは實に饑饉である。斯る恐怖すべき時代にレエントロッキーは、舞臺を獨占するのである。

製造工業に就て

酷烈なる戰爭の必要よりして過去四年半の間に、以前は放棄して顧みなかつた種々なる品物を製造する樣になつた。クリミヤ戰爭やナポレオン戰爭の時代には敵國と砲火の裡に相見えつゝも、一方通商を續けて居た。ナポレオンは、此間にも兵士の服地を我國に求めざるを得なかつた。然るに這度の戰爭では、敵國との通商を厳禁した。從て戰前よりも、良品を多量に產出し、又少い時間と熟練の少いに拘らず、百般に渉て改良を施された。其結果、他の大工業國に比較して、千九百十九年の始めには、今迄にない希望に滿ちた位置に立つ樣になつた。故に工業も農業と等しく過激派の乘ずべき餘地かない。食糧を購買する金が充分あつて、而も國内に生產されると云ふ。だから斯國では、トロツキーやレエンは有力な人物とはなり得ない。

第三の結論

余の第三の結論は下の如きものである。只空漠たる幻影でなく勞働者中には、工業界の支配權を掌握せんとする野心を抱く一大黨閥が存在する事は否み難い。玆には農業勞働者は入らない。農民の間には斯う云た種類の運動があるとは思考されない。其多數は心密かに數エーカーの地所を手に入れて自ら耕作したいとの願望を有して居る。之には余は滿腔の同情を寄せる。是實に自由なる文字の純粹の表現であり、效果ある改造の根源であるからである。農民の間にある醇樸の思想に迄立入る事は出來ない。他の大生產業に從事する勞働者は、單に利益の分配に預るのみでは滿足しない。會社の支配に參與せん事を要求して居る。即ち貨幣の問題でなく、時間に管理の問題である。此點に就て充分の闡明を要する戰時の工業は、此等の事項に關する感情又は野心の運動量を增加した。北部の勞働者の間に醞釀せられつゝあるものは、單に賃銀の問題ではない。此問題に就て、一友人と意見を交換したが、彼は夫れこそ過激派的思想であ

ると心配そうに、云ふた。「斯る事が重り重て革命を誘致するのだ」然し、過激派とは似て附かぬものである。工業界に大勢力を振はんとする人々は、國家及其組織を一般を破滅に至らしむべき革命の放火をし様とする野心は抱て居ない。斯くの如きは、チャールスラムの物語にある支那人が甘味い豚の燒肉を喰べ度い許りに家に放火したと等しき行爲たるを知つ居る。工業勞働者の多數は余の知悉せる範圍では、過激派ではない、大低は青年であるが、過激な思想を抱いて革命熱に浮かされて居るものがないでもないが、其多くは其地方に取りては全く緣のないものである。而して安穩して居るものより教育あり又創造力には富て居るが、温和な、深い印象を止めない。最近に一人の熱烈な男と話した事があつたが、彼は、資本家に對しては、隨分峻烈ではあるが、決して過激派ではない。彼等は勞働せん事を求めた。故に若し一、工業界二、農業界の有望なる地位を利用すれば、必しも恐怖するに當らない。勞働者を管理利益分配に參與せしめ、又農業勞働者に土地を分與する事に由て過激派思想を防ぎ得ると信ずる。斯くすれば其侵入する餘地がない。

エマソンは嘗て其大論文に於て全てのもの皆未成品であつて、其全部を完成する様に諷示してあると書いた。然らば、革命を完成する過激派の他の部分は何であるか。云ふ迄もなく、夫れは反動政策である。千七百八十九年の反動はチユルゴーネツケル等が佛國の改造に手腕を振はんとして居る處を逐放して、佛國に大洪水を持ち來した、同一の反動が露國に於て慘憺たる革命の誘因となつた事は親しく目擊する處である。反動は革命に缺くべからざる要素である。彼は旗である。之を振へば牧場に悠々閑々とし横臥せる優しい牛を驅て狂暴御し難きものたらしむるのである。反動的施設が最も恐るべきものである。

▽アダムソン氏と英國新議會

英國下院の反對黨を率ゐて政府黨の首領ロイドジョージで氏と相角逐する。在野黨の首領は、ウエストアイフ選擧から出た坑夫の代表ウイルヤムアダムスン氏である。英國憲法の習慣に據ると在野黨は一度機會を捉へて内閣を崩壞すると一躍内閣組織の大命を拜するのが常である其時機が何時であるかは豫め見る事を許されないが論理上の歸結は當然アダムスン氏が此榮譽を荷ふ人たる事を予想せしめる。若し氏が風雲に際會して大英國の政權を其掌中に握る様にすれば二度目の好運に廻り會ふものである。千九百十七年の十月にヘンダーソン氏が院内の職を辭して院外の活動を爲さんが爲め其後繼者を求むるや世間はトーマス、クラデイネス氏の内一人か撰ばるべき其人であると思つたが意外にもアダムスン氏が衆望を負ふて院内總務になつた氏は勞働者出身の政治家としては寧ろ雄辯の方ではない議場を左右する熱狂的演説が得意だ。

改造日誌（自三月六日至四月十日）

六日 ▲英國の坑夫鐵道勞働者運輸勞働者の三角同盟成り共同動作を起すことを決定す▲京城騷擾再發し學生も參加す▲原首相官邸に實業家を招き開墾會社（三千萬圓）設立を決定す世論紛々たり

七日 ▲日銀總裁三島彌太郎子逝去▲米價二圓七十錢安の大暴落と成る▲獨墺土勃に對する豫備講和條約中海軍條項略々定まる

八日 ▲選擧法改正三圓案衆議院を通過す▲英佛米伊四國公使參戰借款に關して支那政府に勸告す▲陸軍中將山田隆一氏逝去▲普通選擧を唱へたる國民黨六人組除名さる▲教育會議にて今後學位は官公私立大學にて授與することに決定し博士會は廢止に決す

十日 ▲西侯巴里にて日本の立場を宣明の旨報あり▲定期米底知らずの暴落を演じ三十一圓より急遽二十圓遣りを聞き市場混沌

十二日 ▲講和會議にて對敵徵兵制度廢止の由報あり▲西侯人種案放棄の報あり▲白鳥博士學士院會員に推さる

十三日 ▲芳川顯正伯井上勝之助子樞密顧問となる▲井上準之助氏日銀總裁となる

十四日 ▲日支軍事協定全部發表さる▲梶原仲治氏正金銀行頭取と爲る▲佛國大使エドモンド、バプスト氏來任▲淺間山大爆發

十五日 對獨武裝制限は十二年を限り七萬の義勇兵を許すに在る旨報あり

十六日 ▲聯盟規約に米國モンロー主義修正案提出すとの報あり

十七日 ▲英國徵兵廢止案下院にて二四三票の差にて可決さる▲尾崎行雄氏渡歐

十八日 ▲大正八年度總豫算貴族院通過▲米續いて暴落三等米壹圓に二升四合となる

十九日 ▲支那講和委員青島還付を講和會議に要求すること頻りなり

二十日 ▲新休戰條約成立の報あり▲英米伊佛白等七個國の婦人代表者四十八名國際勞働に關して發言の要求を講和會議に提起す

廿一日 東京府主催にて一萬二千の工場主代表者協議會を開き勞働問題に關して協議す▲婦人の講和會議出席を認可す

廿二日 ▲日本人種差別撤廢案を提出すべしと傳ふ▲陝西停戰せず南北和平談阻む

廿三日 ▲濱口雄幸氏補缺選擧に當選

廿四日 ▲日本の人種平等案修正は公正なる待遇と改修せられ骨拔となれる旨報あり▲築地精養軒に上下兩院有志者の講和問題大會開かれ人種平等占領地確保徵兵制度廢止反對の決議を爲す▲姉崎博士渡歐▲樞密院に於て關東廳官制議決さる

廿五日 ▲高等學校創設案貴族院通過す▲國際勞働法規は八時間勞働十四歲以下少年使用禁止結社の自由家內工業の禁止移民の自由等廿ヶ條に亘り大綱決せらる▲墺太利新政府は宰相レンネル、外相クライン軍相デンチユに依りて成立す▲建築界の泰斗辰野金吾博士逝く

廿六日 ▲貴衆兩議院本日を以て閉會▲貴族院開墾會社を否決す▲國家社會黨同志十ヶ條の綱領を發し官憲と妥協して活動を開始す▲米國上院聯盟反對熱高く或は否決すべしとさへ傳へらる

廿七日 ▲林權助男關東廳長官に擬せらる▲匈國新政府は露國勞兵會と提攜し露國庶民階級と攻守同盟を締結し聯合國に宣戰せりとの報あり▲ウイルソン氏モンロー主義の除外例を求むと電報あり▲煙草專賣局にては職工優遇策として賞與分配會議に職工を參與せしむるに決す

廿八日 ▲德川慶久公歸朝▲川村警保局長勞働行脚に出づべく傳へらる▲新大學令公布せらる

廿九日 ▲巴里賠償委員會は要償八十億磅

なる旨決す▲最後の博士會にて十一名の新博士を産む

三十日 ▲人種案形勢不良世論囂々たり政府は更に强硬に主張すべきを訓電すと傳ふ

卅一日 ▲天津事件は米國司令官の謝罪にて落着す

四月一日 ▲陸軍に大異動あり▲滿都の櫻花爛熳として花下酔酔の人に埋まる

二　日 ▲人種案はモンロー主義と共に聯盟委員會の議題となるべき由報あり▲佛國より傳書鳩到着菅野少將長たり▲洪爵は獨に對して新同盟を提議すと傳へらる

三　日 ▲普國新內閣は社會主義的綱領を發して新政を布く▲人種案に對する帝國委員の態度軟弱を叫ぶ聲愈々加はる

四　日 日本エクアドル通商條約發表

五　日 ▲英國大使グリーン氏歸國の途に就く▲一高對三高野球戰は一高の大勝となる

六　日 ▲石井大使歸朝に決す不平の爲めなりと傳ふ▲日本波蘭政府を承認す

七　日 ▲四大國會議連日開かるゝも日本委員は全然除外の姿なり委員無能の聲日に高し▲日支參戰借款契約發表さる▲皇后陛下三井慈善病院に行啓

八　日 ▲朝鮮暴動鎭壓の爲め第八第二師十三第九第五第十六各師團出動す

九　日 ▲山東二鐵道豫備借款契約發表

十　日 ▲聯合國レニン政府に會議參加を提議しレニン贊成の旨報あり

新刊紹介

ふらんす革命夜話（高須梅溪著）

フランス革命は近代文明の黎明であり源流である其を記した本は日本にも四五册あるが多くは乾燥無味で固定した敎科書の如く些の生々した印象を與へない現代文明を味識し解釋し批判するには先づ其源流たるフランス革命の大體を見究めて置く必要があるとは著者の序である本書を讀了して此序の眞に讀者を僞らざるを知つた先づ嵐の一夜が過ぎた後に著者がツト胸に浮んだ深い〳〵革命の共鳴に筆を起して輕妙暢達宛ら一篇の散文詩を讀むが如き感じで知らず〳〵全頁を讀過した黎明の空を仰いで、沈み行く青い太陽、斷頭臺に起てるルイ十六世光明から暗黑へ逆捲く激流の中へ敗北者の最後なぞ見るからに骨鳴り血躍るの感がある著者の靈筆と史眼とを以てせねば到底斯る著書の出現せざるを思はしめる裝幀頗る美三百五十頁に亘る一言一句之れ詩ならざるはない（定價壹圓六十錢麴町飯田町一ノ二天佑社發行）

第二文藝興復論（鈴木鶯山著）（非賣品）

泰西の哲學者中嶄然聳立するはカント也。ベルグソン出でオイケンが立ちラッセル、シラー、ジェームス、デイウヰもてはやさるるも彼等のカント挑戰は猛犬が巨象に吼ゆる如し然るに無名の人、鈴木氏は未だ何人も試みざりしカントとニユートンとの間に楔狀突破を試み、カントの星雲說的考察を人間と地球とに試み、ライプニッチの所謂モナドのモナドたる電子論に立脚してカントに突擊せり氏の著によればその導くところは法華經哲學也とその成績は豫告の後著を俟つて見べきが從來になきカント挑戰の型を提示したるは此を認めざるを得ず。而して、カントが金城湯地と頼むニユートン則を彼より奪ひ去れるは此れ彼に對する最も有力な挑戰也。而かも斯かる挑戰が帝國大學より出でずして民間獨學の士より出でたるは帝國大學に對する一大皮肉也（東京大井町庚塚四九一一　鈴木傳七發行）



奧瀬の萬年筆

廣津和郎

一

秋もかなり更けた頃であつた。或日、突然奧瀬から、

『僕はまたまた突然上京した。そして牛込區××町××番地におちついた。今度は僕にしては、少しく變つた。突飛な事をもくろんでゐる。ワイフも子供も連れて來てゐる。ブラ（彼は自分の一人の弟を始終かう呼んでゐる）もやつて來てゐる。その中ブラのワイフも出て來る筈だ。云はば僕とブラとの共同事業だ。此事業が若し成功すれば、十分君等を驚かすに足りると思つてゐる。僕も亦小成金のひとりとなるかも知れんぞ。上京匆々で用事多忙を極む。いづれ少しおちついたら、お訪ねする』

かう云ふはがきが、麹町の私の宿にとどいた。

私は丁度机に向つて、原稿を書いてゐた時であつたが、そのはがきを讀むと、自然に頰笑まれて來た。……奧瀬が上京した、さう思ふだけで、

一種何とも云はれぬ味ひのある微笑が浮んで來るのである。それは、奥瀬の事を思ふと、直ぐ彼の人間の全體から發散してゐる或空氣、大變人間的な、かなりユウモアの勝つた、そして恐ろしく複雜ではあるが、その根本が飽くまで透明な彼獨特の氣分、それが殆んど、閃くやうに私の心をおそつて來て、そしておのづと私に頰笑ませるのである。――そしてそれは私ばかりではないらしい。友人達が集まつて何か話をしてゐる場合など、誰かが、『時に奥瀬はどうしたらう？』と云ふやうな事を云ひ出すと、みんなの顏が同時ににこにこと微笑に崩れる。それが少しも不快の分子など含まない、と云つて又、唯をかしいと云ふやうな感じでもない、かなり深みを持つた、快い味ひなのである。――私はそれを奥瀬の持つてゐる獨特の『德』だと思つてゐる。

『併し、これは一體彼の何度目の上京だらう？』私はペンを擱いて、はがきの上の、何處かをどけたやうな、又恐ろしく生眞面なやうな一種の風格を持つてゐる彼の字を眺めながら考へた。私が彼と知つてから、もうやがて七八年にもなるだらう。その七八年の間、彼は始終、その故郷と東京との間を往つたり來たりしてゐる。と云ふよりも、二進も三進も行かなくなつて、彼のいはゆる『遁走』を繰返してゐる。東京でやり切れなくなつて來ると故郷へ、故郷でやり切れなくなつて來ると東京へ……そんな風に彼は遁走に遁走を重ねてゐるのである。それがもう一體何回ぐらゐに達してゐるだらう？

この前に、彼が東京から故郷へ『遁走』して行つたのは、その年の春の初めであつた。

『やつぱり俺は、しづかな田舍で、ワイフや子供と一緒に暮して、ひたすら藝術を考へてゐるのが、ほんたうなのだな。都會の生活といふ奴は、俺にはどうもそりが合はないし、何の利益も與へないから

な。アスファルトの道路と、こまつちやくれた、誇りかな人間共の顔と、そんなものが、俺達の最良最高の生命に、一體何の肥料を與へませうぞ……」と彼は、客車の窓から首を出して、彼を送りに行つた我々三人の彼の友人達が、プラットフォオムに立つてゐるのを、上から見下ろしながら、半分子供が威張るやうに眼を輝かし、半分をどけた調子で、こんな氣焔を揚げてゐた。勿論そこには、生活的に二進も三進も行かない程敗北して、所謂「遁走」しなければならなくなつた人間が表すやうな意氣銷沈もなければ、消極的な泣言もなかつた。それどころか、さう云ふものとは全然反對の、溢るるばかりの快活があつた。多少酒氣を帶びてはゐたが、併し彼の聲はほがらかで、嬉しさうでさへあつた。

その多少の酒氣と云ふのも、我々が彼と一緒にその停車場に著いた時、丁度發車まで二十分ほどの間があつたので、彼の發議で、停車場前のビイヤホオルに飛び込んだために、生じてゐたのであつた。

「いよう、汽車賃を拂つて、未だ三圓何ぼの金が餘つてゐるぞ。どうだ、ビイルを一杯引つかけよくぢやないか……」かう云つて、彼は突然、停車場前の赤い灯を見ながら駈け出した。我々友人――それは横井と相良と私との三人であつたが――は、その彼の素早い發議を止めてゐる暇などなかつた。『おい、おい』かう彼の後から呼びながら、やつぱり一緒に駈け出して行つたのであつた。

彼の汽車賃も、その汽車賃を拂つた後に殘つた三圓何ぼの金も、それから又彼が停車場に來るまでの途中で、サックその他のものを、故郷にのみやげとして買つた金も、それ等はみんな我々三人が、彼のためにとゝのへた金なのであつた。けれども、それにも拘らず、我々の誰もが、彼のその『ビイルを引つかけようぢやないか』と云ふ、云はばその時の彼としては法外とも見えるぜいたくを、とがめようと

する者はなかつた。いや、とがめようとしなかつたどころではない。我々は彼のその無計算と我儘とを、彼のために喜ぶやうな氣さへしてゐたのであつた。

『何處までも奥瀬式だ。金錢などゝ云ふものは此男の眼中にないのだ。我々がそれを彼のためにとゝのへてやつたと云ふ事なども、彼の念頭にはもうないのだ。何といふ面白い奴だらう！』さう云つた浮き浮きした微笑が、『おい、待て、おい、待て』と云ひながら彼の後から駈けて行く我々三人の頰に、一様に浮んでゐたのであつた。……

いよいよ發車が近づいた時の光景を、私はよく覺えてゐる。呼笛の前に鳴るあの警鐘が鳴り渡つて、我々が彼の乘つてゐる客車の側から一歩すさつた時、横井が、

『それぢや、奥瀬、氣をつけて行きたまへ。そして、今度は專心に創作をやりたまへよ。いゝか、創作をやり給へよ』と云ふと、彼は、

『さうだ、屹度創作をやつて見る。併し何だな、我々は未だ後三年間の人生の修養が要るな。俺ばかりぢやない。横井も相良も芳川も、みんなさうだぞ。三年の修養が要るぞ。日本の文壇には創作の如何に難きを知つてゐる人間が、とんと居らんからな。彼奴等もみんな今後三年の修養が要る！』

『併し、そんな事は云つてゐないで、君は實際書くといいんだと僕は思ふよ。君が專心に創作をやるやうになれば、君の生活は確に統一されると僕は信ずるから』と横井は、友を思ふ溫い情の籠つた、眞面目な、一途な調子で云つた。『精神的にも物質的にも、屹度君の生活に統一がつくから』

『うん、よし、解つた、よし、解つた』奥瀬はこんな事を云つて、しきりとうなづいてゐたが、その

時呼笛が鳴つたので、彼は鷲掴みと云ふ恰好で、帽子の縁ではなく、その山を掴んで、それを振り初めた。そして、『やあ、みんなしつかりやれよ。しつかりやれよ。三年の修養が要るからな、三年の……』と汽車が動き出してからも、窓から半身を乗り出すやうにして叫んでゐた。……

やがて、プラットフォムを出て、停車場の建物の外まで歩いて來ると、三人は云ひ合はせたやうに、顏を見合はせて、ほつとしながら頬笑んだ。

『奥瀬は奥瀬だね、やつぱり』と私が云ふと、

『併し、彼果して創作がやれるかな』と相良が云つた。『いづれ又、遁走して來るにきまつてゐるが』

『それはさうに極つてゐるね』と横井は考へ深い調子で相良の言葉に和しながら、『けれども、僕は實際あの男が早く創作をするといいと思ふよ。實際あんなに出鱈目だけれど、併し兎に角、僕はあの男を一種の天才だと思つてゐるからね』

それには、三人ともかなり同感であつた。若し奥瀬が、彼特有のあの心と眼と皮膚と、すべての觸感によつて此人生から嗅ぎ出して來るものを、たゆまずに表現して我々に見せて呉れたら、今の日本文壇に一種獨特の光を彼が添へるに違ひないと云ふ事は、我々のかねてから信ずるところであつた。實際、彼はもつと早く文壇的に認められて、榮譽と賞讃との光に浴してゐなければならない筈の男なのだ……

私はそんな事をいろ／＼思ひ出してゐた。

『それにしても、彼の事業とは？……』私はさう考へると、更に又頬笑まずにゐられなかつた。『一體どんな事業だらう？　又贋物でも下げて來たのではあるまいか？』

その贋物と云ふのは、その前の年、その年も彼は東京から故郷に遁走して行つたが、或時、突然、彼は大きな風呂敷包を持つて、上京して來た。それは彼の生活ばかりではなく、彼の一家――彼の父も母も弟も、みんながみんな生活が逼迫してゐたので、彼は一家の急を救ふために、彼の伯父のひとりから、金を借りる代りに、その金に相當する深山の掛物を借りて、それを東京に賣りに來たのであつた。その中には、名だけ聞いても大したものである、古來の名家の書畫が多かつた。それがみんな眞物なら、それこそ大したものであつた。

「此內、半分だけでも眞物だつたら、四五千圓のものにはなるんだがな。半分はむづかしいだらうが、併し三分の一だけ眞物だつて、二三千にはなるんだ。……まあ二三千でも結構だ』そんな事を云ひながら、彼は薄汚れた青い風呂敷に包んだそれ等の書畫を、小腋に抱へ込んで、二三の鑑定家に見せてまはつた。ところが、その悉くが、贋物だつたのだ。

『四谷見附の側に、××堂と云ふ大きな骨董屋があるだらう、あすこに持つてつたら、全部で三十圓なら、頂きませう、それでお厭なら、お持歸りになつた方がお宜しいですぜ、と番頭らしい奴が云ひやがつたよ。たつた三十圓……』彼はその上京の間宿を取つてゐた相良の下宿に歸つて來ると、かう云つて、とぼけた顏を出して笑ひ出した。「遙々二百里もやつて來て、たつた三十圓か……」

友人達は彼のその書畫の成行きを知りたいと思つて、丁度相良の部屋に集まつてゐたが、彼のその失敗談を聞くと、彼に同情しながらも、やつぱり笑ひ出さずにゐられなかつた。――「如何にも奥瀬式だ」さう云つた何とも云はれない一種の味を、彼のその失敗から感じないではゐられないのであつた。

それに頭から、ひやみに同情したり、氣の毒に思つたりするには、彼の調子は餘りに明るくもあつた。

それで、彼は結局、いつものやうに、友人達から旅費を寄附され、宿料の事でかなりの迷惑を相良にかけて、再び贋物を下げながら、二百里も遠い故郷に、のこのこと歸つて行つた。

奥瀬の事業……さう思ふと、直ぐ私は彼がその贋物を下げて來た時の事を、思ひ浮べずにゐられなかつた。

「彼奴、又何か考へてのこのこと出て來たな。併し、失敗して、すつかり悲觀してしまふ人間だと、それを側で見てゐなければならない我々が隨分辛いが、失敗しても尚、さういふ暗つぽい、みじめな感じを抱かせない彼奴の事だから、まあその「事業」も好からう。それに、彼奴ばかりではなく、弟が一緒だから、或はうまく行くかも解らない」私は彼の弟が、故郷の方でかなりさうした事に經驗を持つてゐると云ふ噂を聞いてもゐたので、そんな風に結局考へた。

二

兎に角、一度彼を訪ねて、その事業の何ものであるかを知りたいと思ひながらも、原稿が忙しかつたので、私は急に訪ねる事が出來なかつた。すると、三日目の夕方、奥瀬は弟と一緒に。私の宿にやつて來た。

『今横井の紹介で、彼の友達の園田君に會つて來たよ。そして萬事好都合だつた。いよいよ僕等の事業も端緒についた』と彼はにこにこ笑ひながら、こんな事を云つた。

園田と云ふのは、工科大學出の男で、今はブロオカアになつて、かなりにやつてゐるのであつた。それで奥瀬兄弟は、横井の紹介で、その園田から、その事業の資金を出して貰ふ約束をして來たと云ふのであつた。

「一體どんな事業なんだい？」と私が訊くと、

「うん、今度ブラが、ひよつとした事から、小さな鑛山を目つけたんだよ。出るのは銀星と云ふやつなんだ。壁を塗る時にそれを入れると、ピカ〳〵奇麗に光るんだよ」さう云つて、彼は袂から、小さな紙包を取り出して、それを開いて私に見せた。それは小さな粒になつてゐる、銀色をした鑛物であつた。

「それで東京に出て來て、方々のかう云ふ物を取扱つてゐる店に行つて訊き合はせて見たんだよ。そしたら何處でも、快く引受けると云つたよ。九段下の××などでは、全部引受けてもいいと云ふんだ。……さうだつたな、おい」と彼は一寸弟を顧みて云つた。

「ええ、さうです」と無口で、おとなしい弟は、謙遜な調子で答へた。

「東京の市價は一俵八圓とかださうだ。それで七圓半なら、何處でも引受けると云ふのだ。ところが採掘賃、運賃を差引いて、一俵につき二圓ばかり利益が上るんだよ。……もつと上るかな、おい」と云つて、弟を再び顧みた。

「二圓十錢の見當です」

「そしてね、君、これからだん〳〵寒い時候になるから、今は月に荷車二臺位しか出ないんだが、來年の三四月頃になると三臺か四臺は寄越せるんだよ。荷車一臺には五十俵ばかり積めるから、一臺でざつ

と百圓餘、二番で二百圓餘の利益さ。……そして來年になると、三百圓四百圓ぐらゐの利益は十分あるんだよ」

私にはさう云ふ方面の事は少しも解らなかつたが、併し話の順序を聞いて見ると、なるほど、それはかなり確實なものであるやうに思はれた。尠くとも、此前の贋物の書畫とは比較にならない程、つぢつまが合つてゐるやうに思はれた。月に純益百圓乃至二百圓、そして來年になると、それが更に三百圓四百圓にものぼると云ふ。……我々、殊に奥瀨に取つては、それは隨分莫大な儲けと云はなければならない。

「そいつは素敵だ」と私は彼のために心から祝福する氣になつて、少し昂奮しながら云つた。「全くうまく行きさうだな。そんな事がうまく行けば、君もこれから安心して、創作に專念になれるね」

『ああ、僕もさう思つてゐるんだ。萬事ブラがやつて吳れると云ふから、僕は一切そんな事には沒交涉に、作を書いて行けるよ。……これからは大いに奮發して書かうと思つてゐる」

「理想的だな」さう云つた時には、私は自分の原稿生活の樂でない狀態を思ひ浮べて、少しく彼が羨しくさへなつた。

歸る時、奥瀨は、

「この銀屋は、ひとつ君に置いて行くかな。……これでも一寸奇麗だぜ」そんな事を云つて笑ひながら、例の鑛物の紙包を私の机の上に殘して行つた。

私の宿の二番娘が嫁いでゐる先が、左官屋の頭領なので、私は宿の爺さんに、奥瀨が殘して行つた銀

星を見せたりした。そして實際に銀星が、壁を塗る時に用ひられるものと云ふ事を聞いて、一層奥瀬の事業が、夢のやうなものではないと云ふ事を確かめ得た氣がした。

「これはたうとう彼にも幸運が向いて來たな」さう思つて、私はひとりで喜んでゐた。

三

それから間もなく横井に會つたら、彼も奥瀬のその事業の成功を信じて、非常に喜んでゐた。

「いよいよ、來月から開始する事になつたさうだ。まづ最初に一車だけ、試驗的に送らせると云つてゐたよ」と云つて、横井は昨日彼がたづねた時、奥瀬兄弟が前祝ひの酒を飲んでゐた光景を、細かに話したりした。「無論奥瀬ひとりだつたら、うまく行く筈がないが、あのブラザアが一緒だから、僕は十分行くと思ふね。……併しあのブラザアは實に好い人だね。相變らず默々として、兄貴の氣焔を聞きながら、酒の相手をしてゐたよ。奥瀬は、得意になつて、『お前は未だ若い、未だ人生の苦勞がしたりない。なあ、いいか。ははあ、俺などはかう見えても、人間の根本と云ふものを知つてゐるんだ。――修養しろよ。後三年も修養したら、お前も一人前の男になれるだらう！』なんか云つて、弟の頭から說教してゐるんだ。……實際をかしな男だね。今まで散々弟の厄介になつてゐながら、平然としてそんな事を怒鳴つてゐるんだからね。併しそこが、やつぱり彼の面白いところだよ。……兎に角、實に不思議な男だね」

我々友人の間でも、横井は最も眞實な友人思ひの男であつた。實際横井は、自分の友人の事を、常に

まるで自分自身の事であるかの如く心配してゐる。少しでも友人に取つて善い事があれば、彼は心からそのために喜び、又少しでも友人に取つて善くない事があれば、彼は心からそのために憂に沈む。實際さういふ點で、彼ぐらゐ眞實な人間を私は見た事がない。如何なる場合でも、惡意とか、嘲笑とか、嫉妬とか、競爭心とか、さう云つた分子を彼の中に我々は見た事がない。——彼を友人として持つてゐる事は、私達には全く何と云ふ幸福だらうと始終私は思つてゐる。殊に彼が奥瀬に對する友情は。まことに世にも稀なる美しい物語と云ふ事が出來る。——併し今は、そんな事を詳しく語つてゐる場合ではない。……

横井は奥瀬の此十何年かのめちやくちやな生活が、今度の彼の事業が若し成功すれば、どんなに統一されるかと云ふ事を、繰返し繰返し語つた。兎に角、物質的缺乏から起る有らゆる悲慘がなくなると云ふ事は、奥瀬よりも、奥瀬の細君、奥瀬の子供にとつて、どんなに幸福な事だらう。奥瀬の弟、弟の細君、それ等の人に取つて、どんなに幸福な事だらう。……奥瀬の妻子も弟も、實際、奥瀬に對して、あらゆるものを犧牲にして盡してゐる。物質的の報酬を得られるやうな、社會的仕事を、その十何年の間たとひ如何に一家が困つてもした事がない奥瀬、「人間の精神、それの本質を信ずる者に取つて、それ等の物質的缺乏が何でありませう！」と友人に向つても、妻子に向つても、弟に向つても、かう云つてはどうしても彼のその「厭ふべき」社會的事業に手を染めない奥瀬、その奥瀬に對して、彼等が何の不平も懷かずに、すべてを犧牲にして盡してゐるところは。全く我々に取つて、考へても涙の種であつた。——それは屹度奥瀬に、側(はた)の人間から見ては、一寸解らない、何とも云はれない「徳」がそなはつてゐ

るに相違ない。その『德』が彼等をして、何の不平も起さしめないに相違ない。……併し、それにしても、彼は彼自身の生活を追つて行くのだからそれで好いとしても、彼の家族は、もつと何とかならないものだらうか……

横井と私とは、それを話し合つた。

『今度の事は、誰よりも僕は奥瀬のフラウや子供に對して祝福したくなるよ』と横井は感激した眼付をして云つた。『隨分長い間だからな。もう酬ゐられなければならないのだらう』

そしてそんな事を語つた末、横井と私とはたうとう奥瀬に會ひたくなつて來た。そして彼の家をたづねて行つた。

奥瀬は、その晩も彼の弟を相手に酒を呑んで、氣焰を揚げてゐた。彼の家の中の感じは賑かだつた。細君もいそいそとしてゐた。子供も何處となく快活だつた。

四

それから間もなく、私は鎌倉の父の家の方へ歸つて行つた。そして一ヶ月ばかり上京しなかつた。一寸忙しい飜譯の仕事があつた。それを毎日、こつこつやつてゐた。私は一體が筆不精で、旅行などをする場合、誰にもハガキ一本出さない事がよくあつたが、その時も東京の友人達に、便りをしなかつた、奥瀬の事業が、その後どんな風になつたか、私は多少氣になりながらも、別段問ひ合はせもしなかつた。

すると、或日、奥瀬から、ハガキが一枚來た。別段用事もないので、私の近況などをたづねて來たが

その最後の方に一行、例の事業が思はしく行かない事が、割合に暢氣な調子で書いてあつた。

「なかなか、物事と云ふものは、さううまくは行かないものと見えるな」私はそんな事を思つたが、併し彼のその文句に、さう切迫つまつたやうな感じがないので、思つた通りには行かないが、併し全然失敗したのだとは思はなかつた。

私が上京したのは、もう十二月の初旬であつた。私は新橋の停車場で汽車を降りたが、そのまゝ麹町の宿に直ぐ歸る氣も出なかつたので、久しぶりで銀座の通りを少し散歩しようと思つた。そして夕暮の賑かな町をぶらぶら歩いて行くと、相良に出會つた。

「時に、奥瀬の例の事業はどんな風だね？」と私が云ふと、

「それがさ」と相良は困つたやうな笑ひ方をしながら、「やつぱりどうも駄目らしいな」

「全然か？」

「まあ、全然だな。何でも横井の紹介した例のプロオカアが、急に北海道の方の何かの會社に雇はれて、奥瀬には勿論、横井にも何も云はずに出發してしまつたのださうだ、それで例の資金の出どころが失くなつたわけなんだね」

「ふうむ」と私は云つたが、何だか餘りに莫迦げた、拍子拔けした話だと云ふ感じがした。

「まあ、お茶でも一杯飲まう」私達はその附近の珈琲店に入つて、そこに腰かけながら、その話のつづきをした。

「それで、兎に角、一車位送らせる費用はそれ程の事でもないので、故郷の方で都合させて、試驗的

に送らせたんださうだ、ところが何でも見本よりも粒が大きく、品が惡いので、東京の問屋では、七圓五十錢から二圓ばかり値切つて引取られたので、結局何もならなかつたさうだ。……尤も損も得もないさうだが、骨折損のくたびれ儲けなんだね」

「そして奥瀬は今どうしてゐる？」

「相變らず酒を飮んで氣焔を揚げてゐるらしいよ。……あの男に取つては、結局事業が成功しようが失敗しようが、大した相違はないんだからな」

その翌日の夕方、私は丁度飜譯した原稿を持つて、牛込の出版社を訪うたので、その歸りに、奥瀬の家に寄つて見た。小さな路次を入つて、彼の格子戸の前まで來ると、突然彼の細君が、格子を開けて、外に飛び出して來た。髮を無雜作に束ねただけの様子で、妙に神經的に不安な顔をして、飛び出して來て、そこに立つてゐる私を見ると、ちよつと急いでお辭儀をしたまま、どんどん通りの方へ向つて、路次を駈け出して行つた。私はその様子を呆見に取られて見送りながら、これは何かただ事ではないなと云ふ氣がした。奥瀬の細君は、一體しとやかで、柔順で、素直で、今まででも大概の女の人なら堪へられさうもないと思はれるやうな苦勞の中を、何ひとつ不平を云はずに堪へて來たので、我々友人達の中でも、常に尊敬されてゐるのであつた。曾て取り亂した様子を我々に見せた事がなかつた。それが、あんなに狂氣染みて、駈け出して行くとは……

私はかなり不安な氣持で、「奥瀬君」と呼ぶと、「やあ」と云ひながら、奥瀬が、上り口の障子を開けたその彼の様子を見ると、私は二度びつくりした。彼は髮と髭とをばうばうと延ばして、洗ひざらした搔

巻のやうなものを著てゐた。――それが、何となく普通の状態ではないやうな氣がした。

「一體どうしたんだい、何か變つた事があつたのか？」さう云ひながら、私は上つて行つた。

「いや、別に」と云ふ彼の聲を聞くと、いつもの通りに十分おちついてゐる。

「今、君、奥さんが血走つた眼をして、露路を駈け出して行つたぜ」

「いや、あれは何でもないんだよ」と彼はそんな事かと云ふやうに笑ひながら、「今外で何處かの子供が自働車に轢かれたんださうだよ。それで、僕の家の子供も外で遊んでゐるものだから、心配になつてワイフが駈出して行つたんだよ。……大丈夫だと云つても、ワイフは子供の事になると、氣違ひのやうに心配するんだ」

「それでやつと安心した、僕は一體どうしたのかと思つた」と私は實際ほつと安心した。「おまけに、君が髪ばうばうとして、そんなへんな恰好をしてゐるもんだからね」

「うつふ、これか」と彼はにこにこ快活に笑つて、「うん、髪刈りに行くのも、今は一寸不可能なんでな、併し外にも出ないから、これでいゝんだ。……さうさう、何だぜ、君、俺のあの事業は見事に失敗したぜ」

「さうだつてね」と私は氣の毒さうに云つたが、併し彼の調子が餘りに暢氣で、平氣なので、つい引き込まれて、頬笑まずにゐられなかつた。

「關口君が無斷で、北海道に行つてしまつた上に、取り寄せた品物が、品質がよくないんださうだ」と彼の說くところを聞いてゐると、まるで他人事のやうに暢氣な、何となく面白がつてゐるやうな調子

である。おまけに、これから冬になると、すつかり凍りついてしまつて、採掘するのが、非常に骨で、引合はないさうだ」

「それで弟君は?」

「ああ、彼奴も今度は頗る閉口してゐたよ。今更故郷に歸る譯にも行かないので、何かして東京でやつて行きたいと云つて、今仕事に出てゐるよ」さう云つて彼は相變らず笑ひながら、「此處の家主が面白い人間だね。僕のブラを捉まへて、「あなたも遊んでゐても仕方があるまいが、何でもする氣があるか?」つて云つたのださうだ。「何でもする氣がある」とブラの奴が答へると、それぢやと云つて、植木屋の手傳ひに世話をして呉れたんだよ。一昨日から毎朝辨當を持つて出かけて行つてゐるよ。早稲田の××邸に仕事に行くんださうだ。日給六十錢だつて」

その話は私の胸に、何とも云はれない感動を與へた。私は奥瀬の弟と云ふ人の心持をいろいろに考へた。あの無口な、おとなしい、兄思ひな、謙遜な人……併し實際、何と云ふ勇氣のある人だらう、と思つた。境遇が境遇となれば、どんな事でも、不平を云はずにしてゐる。そしてその貰つた僅ばかりの日給を持つて歸つて來て、兄の一家を助けてゐる。……

「實際、君の弟はえらい人だね」と私が云ふと、

「ああ、素直な奴だよ」と奥瀬は云つて、「併し彼奴もなかなかひと通りの苦勞ぢやないな。……かうして僕とワイフと子供三人と、それから彼と六人の家族だらう。近頃のやうに米が高くつては、米代だけだつて、大變だからな。……それに、俺と彼で晩酌をやるだらう。こいつが又大分かかるからな」

「おいおい、それでもやつぱり酒をやるのか？」と私は眼を瞠つて云つた。

「うん」と彼は笑つて、「まあ、結局やる事になるな。僕もどうも創作が書けんし、弟だつて、決してまあ愉快である筈はないからな」

「それがどうかならないものかな。もう少し我慢するとか……」

奥瀬は「うん」と云つて暫く考へてゐたが、

「併し、それを止めたところで、それが何でもないからね。……」さう云つて、そして彼のいつもの持論を持ち出した。それは物質などと云ふものの、如何に價値なきものであるか、休養が如何に必要であるか、人間の生活なんと云ふものは、そんなに苛めつけるものではないと云ふ事……そして最後には精神と云ふものは、決してそんな無力ではないと云ふ結論から、

「たとひ、僕が酒を飲んだところで、それが何事でありませう……」と昂奮した、そしてリヅミカルな聲で、彼はかう繰返すのであつた。

だが、彼のその持論は、普通の見方から云つて、論理の統一もなく、かなり出鱈目で、手前勝手なものではあつたが、併しその底に何とも云はれない一種の力がこもつてゐた。それを聞いてゐると、その力がひしひしと感ぜられて來る。彼が此社會生活と云ふものと、如何に反對な性格を持つて生れて來たかと云ふ事を感ぜさせる。現代の一般人が、一番恐れてゐる金錢上のあらゆる事が、彼には少しも恐れられてゐない。徹底的に、痛快に、彼はそれを無視してゐる。……そして彼のその徹底的な痛快な經濟觀念の缺如を、今の文明生活と云ふものと對照すると、そこに自づからなる一種の社會批評と云つたや

うなものが、頭に考へられて來る。「かうしても生きて行けるのだ、かうしても」さう云つた感じが、或心强さを胸に與へる。此物質的な世の中に、彼の如き生き方をして行く人間があると云ふ事は、決して無意味ではないと云ふ氣になつて來る。……

細君は外に遊んでゐた子供をつれて歸つて來ると、もう先刻のやうな狼狽した樣子が少しもなくなつて、いつものやうに柔順な顔付をして、私のところに改めて挨拶をしに來たりした。

五

奧瀨に一刻も早く創作を書かせたいと熱望した餘り、或時横井は、彼に向つてこんな事を云つた。

「是非書きたまへ。そして若し君が創作を書けば、その原稿が何處かの雜誌に賣れるまで、僕はその原稿料を立替へて置いてもいい」

私が或日奧瀨をたづねると、彼は横井が彼にさう云つた事を非常に喜んで、感激して、一生懸命にペンを動かしてゐた。

「あれは物の解つた人間だなあ。よくも修養されたものかなと云ひたい位な人間だなあ」と彼は横井の事をそんな風に云つてゐた。「俺達は彼奴にはかなはんな。あれは俺達の仲間でたつた一人の大人だぞ。……ははあ、未だ三年かかる。あれだけの人間に俺達がなるのは……」

そして兎に角、どうしてでも今度の創作は書き上げずには置かない、と力味返つてゐた。

それから三日經つて、私が横井をたづねると、

「實際奥瀬は困つた奴だね」と横井はこんな事を云つた。「こなひだ、俺はどうかして彼に創作を書かせようと思つて、君が何か書けば、それが何處かの雜誌に賣れるまで、僕はその原稿料を立替へてもいいつて云つたんだよ。そしたら、昨日やつて來て、その立替の原稿料の前借りがしたいと云ふぢやないか」

私はそれを聞くと、笑ひ倒ける程笑ひ出した。――そして横井と云ふ人間と、奥瀬と云ふ人間との對照に考へた。が、そのをかしさの中には、堪らなく人間的な美しい愛嬌のあるのを感じた。

「それから僕は斷然拒絶したんだよ」と横井も笑ひ出しながら、「僕は理由のない事をするのは厭だつて云つたんだ。そしたら奥瀬の奴、なるほど、それも尤もだと云つて歸つて行つたよ」

十二月ももうかなりつまつた二十二三日頃であつた。或朝、私が起きると間もなく、奥瀬の弟がたづねて來た。

もう冬で寒いのに、彼は羽織も着てゐなかつた。きちんと、つつましく、膝を崩さずに坐つて、謙遜な態度で、例の植木屋の手傳ひの仕事も、昨日まででで一先づ終つたと云ふやうな事を話してゐたが、暫くしてから、もじもじ躊躇しながら、懷中から手紙を取り出した。

「兄からあなたに手紙を預つて來ました」さう云ひながら、それを私に渡した。

開いて見ると、次のやうな事が認めてあつた。

「いろいろの事にいろいろ窮迫して、かなり困難してゐる。詳しい事は書かぬが、御察しを乞ふ。それで君に一つ御願ひがあるのだ。と云ふのは、御承知の通り、僕は萬年筆を二本持つてゐる。二本とも弟が未だ今のやうに窮迫してゐない時分に、僕に買つて呉れたのだ。一本は十二圓で、一本は八圓だ。それで、

その八圓の方が今質屋に三圓で入れてある。その萬年筆を君の所有にうつしたいと思ふのだ。——今若し君がその入質代金三圓を僕に拂つて呉れたら、僕はその萬年筆を君の所有にする。但し、質の利子は僕の方で拂ふ。そして十日ばかり經つと、僕の創作が出來上るから、そしたらその時、それを質から出して君の手許に送る、——今僕は三圓の金が必要なのだ。事情御推察の上、御承知を願ひたい——」

その手紙を讀むと、やつぱりそこにも人を微笑させる彼の或味か出てゐた。なるほど、彼はその他の總ての彼の生活に似もつかない立派な萬年筆を二本持つてゐた事を、私は知つてゐる。八圓の萬年筆は一寸欲しいやうな氣もした。私の今使つてゐる萬年筆は、それよりも少し好くない。併し書きよい事はかなり書きよい。だから、實際を云ふと、その萬年筆は、少し欲しくもあつたが、併し非常に欲しいと云ふ程ではなかつた。

それに、さうして八圓のものを三圓で彼が質に入れてゐる。それを彼が困つてゐるからと云つて、三圓出して自分の所有にするのは、頗る快くない。……私はさう思つた。それで、三圓を封入し、萬年筆は欲しくないが、兎に角、これで役に立つならと云ふ返事を書かうかと思つた。けれども、奥瀨が質に入つてゐる萬年筆の事を云ひ出したその氣持は、一寸尊重してやりたくもある。それだから、萬年筆は要らないが、三圓封入すると云ふのは面白くない。三圓封入すれば、要らないと此方で云つても、彼の方で、いや、どうしても君の所有だと頑張るかも知れない。そんな事になると、益々面白くない。そこで、たうとう私はかう決心した。今手許にこれだけしかないからと云つて、二圓を封入しよう。そして萬年筆は僕は持つてゐるから、別段要らない。若し此二圓で間に合ふなら、幸福だ。さう云つてやれば

後になつて、萬年筆の所有問題と云ふやうな面倒な事はなくなる。それが一番好い。

私はさう思つて、二圓だけ封入して、さう云ふ返事を書いて、それを奥瀬の弟に渡した。――翌日、「御厚意、かたじけなし」と簡單に書いたはがきの返事が、彼からとゞいた。

二十六七日頃になつて、年の暮の銀座の夜が益々賑かになる時分であつた。私は横井と二人でその賑ひを見かたがた、その賑かな通りを散歩してゐた。すると、往來端に出てゐる萬年筆屋の店の前まで來ると、横井が急に微笑しながら、

「萬年筆で思ひ出したが、奥瀬の奴面白い奴だね。今日弟に手紙を持たせて寄越したよ。質に入つてゐる萬年筆を買つて吳れつて？」と云ひ出した。

私は笑つて、

「僕のところにもこないだ同じ事を云つて來たよ」と云つた。

「エッ、君のところにも」と横井はあきれたやうな顔をして、「それで君、どうしたい？」

私は三圓封入しないで、二圓封入した話をすると、横井も、

「君もさうか、僕もやつぱりその通り二圓入れてやつたんだよ。やつぱり三圓入れると、後で面倒臭いと思つてね」

横井もやつぱり私と同じ事を考へ、同じやうにしたのであつた。

「合はせて四圓か。而も萬年筆は依然として彼の所有なんだから、面白いね」かう云つて、二人は聲を出して笑つた。

六

その年が暮れて、その翌年になると、奥瀬の生活は又二進も三進も行かなくなつて來た。三人の子供達をつれて、彼の細君は故郷に歸つて行つた。そして彼は今までゐたところから七八丁はなれた或下宿屋にひとりだけ移つた。彼の弟は植木屋の手傳ひではないが、やはり身體で働く仕事をするので、下町の方へ下宿した。

奥瀬の下宿と云ふのは、或寺の隣りで、彼の部屋からは、その寺の墓地が見下ろされた。によきによきと並んでゐる墓の間の草木が青くなつて、墓地のはづれにある櫻の木が花が咲いて、空がうるみを帶びた感じの好い青さになつて行くのを、彼は毎日ながめてゐた。あんまり外にも出なかつた。私達がたづねて行くと、彼は始終原稿用紙に向つてゐた。

「どうだ、書けさうか？」

「うん、なかなか書けないな」と彼は云つた。「やつぱり俺はワイフや子供の側にゐないと氣がおちつかないんでね。——それに此邊は食物が惡いから、實際營養にもならないんだよ。頭に力が失くなつて、直ぐ疲勞していけない」

「そんな事はないだらう」

「いや、營養分を攝取しないと、實際駄目だよ」と彼は自分の創作の出來ない理由を、すつかり營養分の不足に歸してしまつた。——そしてさう云ふ事を云ふ時、彼は恐ろしく眞面目であつたが、それが

又何とも云はれない愛嬌でもあつた。

春が過ぎて、初夏が來た。彼はその下宿にもあんまり居心地よくない事になつてゐた。けれども、相變らず、外にはあんまり出ないで、内に引きこもつてゐた。

「青葉の頃と云ふ奴は、實によくないね。妙にへんな刺戟を與へてね」と云つて、彼は憂鬱な顔をしてゐたが、また急に眼を輝かして、面白さうに笑つて、「毎日かうしてゐたら先日から、此障子の向ふ側にやもりが出て來るんだよ。電燈をつけると、墓場の方から來るらしいんだね。木の枝でも傳はつて來て、それから障子にぴよんと飛ぶんだね。飛んで來て障子にくつつく時、ぴしやつて云ふやうな音を立てるよ。それで昨夜あんまり退屈だから、ぴしやつて音のしたところを、此方から障子の紙越しにキリで突いてやつたら、きゆつとへんな聲を出して、また何處かに飛んで行つたよ。……そのためだらう、今夜は未だ來ない」こんな事を云ひ出したりした。

併し、たうとう彼はそんな事もしてゐられなくなつて、やがて、又々友人達――と云ふよりも、主として横井――から旅費を借り受けて、或晩、彼の何度目かの「故郷への遁走」を企てた。

その夏、私は鎌倉に行つて暮した。横井から來た手紙の中に、「奥瀨がたうとう故郷で創作をした」と云ふやうな事が、一寸書いてあつた。

九月になつて、私はまた上京した。そして或日、横井と一緒に相良をたづねて見た。

すると、今まで嘗て萬年筆を使つた事がなく、また幾ら萬年筆を使へと勸めても、强情に反對して、Gペンばかり使つてゐた相良の机の上に、オノトの金筋の入つた萬年筆が載つてゐた。

「おや、萬年筆を買つたね、たうとう」から私が云ふと、相良はにやにや笑つて、「うん」と云つた。私は併しその態度が少し變だと思つた。と同時に、私は例のいつかの奥瀬の萬年筆の事を思ひ出した。私は面白くなつて來た。

「これは奥瀬のだらう」と云ふと、相良は、

「うん」とうなづいた。

「それぢや、君のところにも彼の弟が行つたんだね」と云ふと、やつぱり、

「うん」と云つた。

「それぢや、君は三圓渡したんだね」

「うん」

そこで三人は笑ひ出した。

相良の話に依ると、つい三日ほど前、牛込の名の知れない人から小包がとどいた。開いて見ると、その中からその萬年筆が出て來た。その翌日になつて、國に引つ込んでゐる奥瀬からはがきが來て、「いつぞや、君の所有となつた萬年筆、東京の〇〇から、直ちに君の方へ送らせるやうにしたがとどいたか？」と云ふはがきが來た。それで何も彼もが明瞭になつた。

私達三人は、その奥瀬のはがきを相良の机から引き出して、繰返して讀んでは笑つた。

「どうだ、萬年筆はGペンより使ひいいだらう？」と私が云ふと、相良は、

「さうさね、そんなものでもあるかも知れないな」とあいまいな恥しさうな顔をした。（八年四月作）



漫畫の世の中

岡本一平

不思議な性慾

畫もいろ〳〵とある中に、昔でいへば鳥羽繪、只今の言葉で申せば漫畫といふのが有升。世態人情を穿つて、それに可笑味を差し添へる一風變つた風流。君等の總理大臣は今日も議會でこんな眞似をしたよ。と莊重なるべき施政方針演說の途中でひよいと宰相が臂を頸へ突込んで脊中を掻いた圖を翌朝の新聞紙へ寫して出す。國民が笑ふ。別段に何處が可笑しいといふ處も無い、この紳士は總理大臣として一國を脊負つて立ち、然もその國の上下心を合せて向ふべき方圖を、只今壇上に立つて說明するのだから眞面目で大問題だ。この位の勿體らしい顏をするのが寧ろ當り前だ。處が又一方この紳士の脊中に住む蚤も當り前だ。蚤の眼からはこの薄毛の生へた少し皺が寄つても脂ぎつてる背中を宰相の脊中とは知るよすがも無い、況んや只今演說中などゝは毛頭思ひも寄らぬ。鎌倉ハムか牛の蒸燒に生あつて少しは動く位に心得、折しも腹は北山だ、一膳頂戴しやうと、がぶり喰ひ付く。痒い。宰相が勿體らしい顏をし度がるのも當り前だ

が、痒いのも理の當然だ。そこで彼は猿臂を折り曲げて脊中へ突込み掻く時に勿體らしい顔の半面に痒ゆい顔をも合せて併用する。漫畫家は正直に双方心情の當然を寫し取つて、新聞へ出す。畫の傍に活字を訓つて

『人間としては脊中を掻き度い。宰相としては掻くのを我慢し度い。』

位な處を説明に書く。當り前の處を描いて別段何處に可笑しさを塗つたといふ事も無いがこれで國民が笑ふ。筆者は一方宰相といふ偶像の皮をペン尖で少し剝いてちらりと生身だけの證據に赤い血を見付けたから、この方で藝術家の不思議な性慾的興味を滿足する。他方に笑ひを通して筆者に響く隔意なき愛を國民より暖く感ずる。

だから一遍漫畫家になつてその味を嘗めたものは大概のよい事ではこの商賣から脱け出やうとはしない。それ程蠱惑的で濃味なものです。

東京に新聞社が十四五社もあらうが、その一々に一人か二人づゝ漫畫記者といふのが置いてあつて朝な〳〵開く頁の硬い記事の林の間に介在する變り咲きの諧謔の花園を經營して居り升。人は餘りに現實に膠着し過ぎたかけ引き、衝突、過失、慘害、强慾、悲痛の出來事なる世界の記事に心をかたくなにされられ眼を外らし度く思ひ升。其處へ丁度よく活字を掻き分けて現出して來る三寸四方程な小さな國は國內に理屈といふものがありません。善惡もありません。表裏も無ければ眞僞もありません。時々は人の顔が神から眼鼻さへつけるのを忘れてのつぺらぼうで居る事があり升。建築は心の蕩けほうだいな歪んだ線で成立つて居り升。矛盾を立派な行爲としてこの國の國民はさも眞面目そうに行つて居り升。人が斬られても浮世のやうな腥い血は出ません。傷口からは瓢逸な星が活潑に放出される丈けです。この國では又地球の引力に偏頗があると見えて、物も人も安定して居ません。車が宙に浮いて卓面はほとんど四十五度の傾斜をなして居るのにビーヤのコップは決して滑り落ちません。醉漢が背景の壁に貼り付けられた儘三四尺も床の空で空足を踏んで居る足元に四肢が瘠せたり肥つたりして不揃のかめ犬が死んだやうによく眠つて居升。片眼が顔の輪格よりはみ出しておまけに眼に大小あつて眇眼な女ボーイが紳士に媚びて居升。紳士は一方は確に肩から腕が生へてるのに一方は肩が

斷けて、肋から細い手先きがもやしのやうに言譯許り生へて居り升。紳士はこのもやしの方の手で女ボーイの後から女ボーイの右の手を握らうとする計畫らしいが其手は既に約定濟になつて居り升。先程から隣りの卓に居る不良少年が素知らぬ顔で天井へ煙草の輪を吹き作ら實はよろしくやつてるのであり升。紳士は遂に之を覿破し、他方に持てる手の紙幣を女ボーイに與ふるのを逡巡して居る點が恐らくこの國の出來事の中心でありませう。それにしても不良少年の銜へ居るラツパの如き紙卷煙草と、紳士の持つ机程の面積の紙幣とは、あまりに人の計數を無にして作つた製造物ではありませんか。

一々のこの國の物象を觀ると全く一々に調子を破つたもので觀者の心を徒らに不安にさせるばかりでありますが、若しこのもの等が綜合して生むこの國の空氣、新聞の紙面の上の空高く渦き上がるこれ等のものより成立つ管絃樂の交響、そを仔細に耽味すれば、そは又不思議にも圓滑に心の角を撫でゝ輕く微笑まして過ぐる、姪に對する叔父貫の駄洒落のやうなものであり升。そは又酸苦を溥めて心へ柔く落し込む藥に對するたんしやりべつのやうなものでもあります。そは又新婚の朝の氣づゝなさを解き流さうと恥かしさを推して努める新郎新婦のわざとやる失敗のやうなものでも有ます。

愛の溢れた餘義無さの Humour によつて階調されたる愛

線一本にした處が素氣無い根性の奴は尺度にあてがひ冷たい直線を引いて仕舞ひ升。

愛に慄く手を持つて導く線は小刻みに歩みて立どまる其處で遣る瀬無い溜息をつき升。又とぼ〳〵と立上り數歩ならぬに感に迫られてや、跳躍して弧を描き、結んで解けて流れて御機嫌を取るやうに一々しやくつてなよ〳〵と遂に紙とペン先の間へ潜んで化舞ひ升。人の心を操る線、人の心に縋れかゝる線、人の心に好意的に揶揄ふ線、道化た線、これみな愛のゑねるぎーの過剩より生ずる心の上のしこりにてその欝血したむづ痒ゆさを散らす爲めに刺す白金の針の脈の顫動をその儘藝術に傳へたものに過ぎぬのであり升。固より畸形的にして癖のあるのは止むを得ません。又それ丈け魅

力的である事も否まれません。のつぺらぼうな顏。怠けた柱の建築。矛盾を眞面目とする行爲。飄逸な星を吹出す傷の切口。引力の偏頗な地球。傾斜の卓面より落ち無いビーアのカップ。宙乘りの醉漢に不均整な犬。眨眼が顏の輪格より外についてる女ボーイ。肋からもやしの手の生へてる紳士。ラツパの如き紙卷煙草。机程な紙幣。人は一應これ等の物象を見て、現實の記事に頑にされた心の蟠りを解き解す事が出來升。勿論これ丈けで新聞紙がその貴重な紙面を分つて漫畫を載せる主なる目的、漫畫家がその製作を新聞紙にて發表する通俗的の意味も又讀者が新聞紙の漫畫に向つて望む顧客對商品としての慾求も充分酬ゐられたものと信じ升。

辛辣な線も塊も實は辛酸どころの投げ遣りでは無うて、釘付けられた愛の逸弃性の悲み、永遠に遂げ得ぬ人の世の望み、世俗に芽を齧かれた純情の蘖(しこはえ)の無念さ、狂ふ程も喘ぎ求むる興味を追ふ興味の便り無さ。顏の外に眼を描く筆者の稚も面白可笑しく悦んで描いてるのでは無い、自然の極に沮まれて懊悶した人間本來の自然の外に逸し度い心、それが現實で遂げられ無いから止むなく涙しつゝせめての心遣りに紙の上で慰めて置くのだ。相對の約束に縛られ乍ら絕對の自由を求める人の魂の矛盾の遣りどころ。

不平は筆端に籠つて卓を出にひんなりつけねば生の火焔が體內にめくり込んで、寧ろ身を燒いて仕舞ふではないか。ニイチエの言葉に『世界は萎びた。』といふのがあり升。漫畫家は相言葉に『人間を捨てるうちは窮屈だよ。』と申升。彼等は人間である事のそれすら誰かに制服を着せられた程の窮屈に感じて居るので有升。如何に無邪氣な野放圖に生命がけで彼等が憧れ居るか。この邊のところも略畫の上から觀取がお出來になる事と思ひ升。

柳の芽の吹く頃で有升。銀座通りを京橋の方より二人の男が來ました。一人は身體も強大で身熱を何か冷たい對稱を

求めて離し度いと常に憧れ居るやうな性質の男で有升。一人は頷だけは肥つて居るが肩から以下はこけて小弱です。酒氣の爲めか口を利かせると少しもつれる處が有升。二人は漫畫家です。强大の方を飛鳥井兩圓と云ひ小弱の方を川田みつるといひ升。二人はいつもぶつ〳〵呟き爭ひつゝも屹度金魚の糞のやうに繋つて歩るいて居升。兩圓は小弱のみつるを手風琴のつもりで何處へでも携へて歩るき升。少し退屈して來た隙をうかゞひ心に忍びよる人の世の寂しみを感じそうになつて來ると兩圓は急にこの手風琴を押し升。手風琴のみつるは又性凝りも無く兩圓の思惑通り押す指の壓力の多寡に伴ひ相應なる音を出し升。みつるだとて何もいつ迄も兩圓の手風琴になつて許り居たくは無い。獨り立ちして見たいが、この樂手はこの手風琴の何處をどう押せばこういふ音が出るといふ音鍵の在所をあまりによく暗じてる。でみつるは口惜しがり乍ら矢張り兩圓の思惑通りの悲鳴を擧げさせられてる。も一つみつるが兩圓に離れ得ぬ理由は兩圓が興味を追ふに大膽にて勇氣ある實行力だ。小弱なみつるも漫畫家相應興味を追ひ求むる事に就て可成り忠實なる熱心はあるけれども小弱なる體力の悲しさ、ともすれば逡巡とする。其處で兩圓の破壞力の蔭に隱れて、ついて行つて兩圓が打ち碎いた興味の殼の間から嘴を突込み、興味の實の汁を逸早く啄む。勞無くしてまんまとしてやるといふ味を兩圓によつて時々味はして貰ふ絆によつて斯く、くつゝいてる。みつるは又兩圓より敏感だ。兩圓の鈍重が察せぬ危險や獲物を眼敏くみつるは感知する。借金策の破綻や、金もうけの仕事なぞはみつるが觀て取つて兩圓に耳打ちしてやらねばいつまでも兩圓は氣が付かぬ。この利益によつて又兩圓はみつるを傍を離さず引きつけ置くのでもある。

要するに二人は兩々相待つて生きて行かれる。二人の接觸點を念の爲め驗めてみたら、恐らく皮膚は溶け流れ肉と肉と癒着し合つて、彼此の血と神經とは既に何年前から交通を始めて居るのかも知れ無い。それ程双方の氣合ひがしつくり合ふ。山と唱ふる眼まぜに應じて答ふる川の素振りは何の作爲を施さずにたちどころに現出される。

二人は日和下駄を石疊に鳴らして尾張町の此方までやつて來ました。銀座街頭の春はその瘤だらけの柳の木に白緣の粉を吹いて盆梅の蕾の枝に申譯許りの微紅を塗る。それ程未だ淺いものでありました。洋品舗の中から轉げ出た包裝紙

の屑と、樂器店の片側の造作を緒つてる大工の足元の鉋屑とは、風の戯れで一と所に吹き寄り改めてくる〳〵と可愛らしい旋風を起しました。向ふへ石壘の上の塵を渦の中に卷き取つて進み、丁度來る二人の下駄の歯手前では殊に美事な漏斗形をこしらへて見せました。

『傑作だ。生きとる。やあ素的、素的、』

とこれを見た兩圓は文藝復興期の彫刻家が希臘彫刻を發掘した時のやうな眼と聲をしました。

『川田、ちよと、敬意を表さうぢやないか。』

兩圓は斯う云つてみつるの手足を捉へ、石壘の上に四つ匍ひにさせました。そして紙屑の渦卷に向つてお辭儀をさせました。自分もみつるに並んで手をつかへ

『いや感謝する。感謝する。』

と首を上下しました。

みつるは紙屑の旋風に對して兩圓程の感銘を得ない。從つてお辭儀をするのも不自然だが之に係らうて兩圓と爭ふのが既に億劫だ。爭ふも爭はぬも無い、さう思つてるうち手足を捉へられ、四つ匍ひにさせられて仕舞つてる。で、いつもの通り早速に諦めをつけ兩圓への義理たけに、

『いや感謝する。感謝する。』

と實の入らぬ聲で眞似をしてる。そして寧ろ逆になつて眺めやる新天新地の妙不可思議な有様に驚嘆の眼を見張つた。

この世界では紺色の空を地とし薦色の土を天として居る。建物はみな屋根を土につけ土臺を天へ向けてすく〳〵と立つてる。地の磨ぎみがゝれた淨玻璃なるに對して天は部分々々に凹凸があつて處々水が撒かれた眼などが汚點になつて殘つてる。人は地の滑きを敬遠して天の濁色の上にこびり付き住んでる。そしてよく觀るとどれもこれもが逆に佇つたり歩るいたりしてる。女學生が逆になつて嬌態を作つて歩るいて來ました。天にレールが四本引いて有升。女學生は総

ぎ足でレールを越へる時に赤い絹ハンケチを天へ落しました。反對の側から中年のかみさんが矢張り逆になつて來ました。かみさんは赤いハンケチを見付て行りました。左顧右眄して見たが誰も氣付く樣子がありません。ひよいと素早くハンケチを天よりさらつて袂へ押込みました。先程より實はレールの向側でこれを女學生は見て居ました。女學生は思ひ當つたらしく一應袖の中を驗めて見ました。

勿論ありません。そこで急いで逆になつて行く中年のかみさんの後を逆になつて追つて行きました。折角傍まで行つたがあまりかみさんの態度がそ知らぬ顔過ぎるので言出し兼ね、顔を赭くしたり、袖を絡んで見たり、もの丶二町も繼つて行きましたが。それでも言出す勇氣を缺いて居升。遂に締めて横町へ怒つてぷん／＼入つて仕舞ひました。自働車が逆に走つて過ぎました。東京見物の田舍の爺さん婆さんの一隊が揃ひの黄な手拭を冠つて逆に歩るいて來ました。先頭に立つた逆の宿屋の番頭が小旗振り立て何やら說明して居升。隊の末後に近き一人の婆さんが列を離れて電信柱の蔭へ行き、何やらもじ／＼して居ました。見付けた番頭蒼くなつて飛んで行つて、矢庭に婆さんをひつ立て

『飛んでもねえ、こんな處で小便されて堪るもんか』

と怒鳴りました。婆さんはきよろんとして如何にもその譯を解せぬもの丶やうな顔付をして居ました。

電車が逆に通りました。中にぎつしり客が逆につまつて居りました。車掌臺よりはみ出して居る一人がみつるの眼の前へ來て天へ飛び下りました。お客は逆に天へ立ち損ねてよろ／＼とよろめきかゝりました。

『危ないッ』

と怒鳴つてみつるは思はず首を擡げました。

刹那に逆轉の新天新地は何處へか消へ去りました。代つて鼻の先に出て來たのは、小供の時より見古るし、聞古るした相變らずの萎びた世界でありました。逆の新世界からよろ／＼と相變らずの舊世界へよろめき出た、電車のお客どうしたかと見ると、も早ちやんと安定を保ち當り前の世界の方が無事でようがさといふ足取りして其處におもちや屋の店

先へ『ご免下さい』と入つて行きました。みつるは『ふーう』と一つ息を吹いて立上りました。見廻すと自分の周圍に思はぬ人蟵りがして居升。その人々はみつるの顔を見て憐むやうな怖れるやうな輕蔑するやうな顔をして居升。そしてみな一様に彼の脊中を偷視て失笑を堪へて居る様子で有升。みつるは怪訝に思ひ。試に背中に手を廻して見せました。紙片の一つが指に觸りました。紙片には兩圓の筆跡で

四つ這ひ研究中

片側往來止め

人類歩行改良期成同盟會

と書いてありました。みつるはまんまと兩圓の罠にかゝつて彼が鍵盤を押す通りの音を手風琴の頭の頂邊から絞り出しました。

『こンちくしようめ、の、ちくしようめ、こンちくしようめ、の、ちくしようめ、の、ちくしようめ』

と。そして、熊鷹眼で其處等を睨め廻しました。當の相手の兩圓は赤い郵便函の蔭から逞しい腕丈け出しておいで〳〵をして居ました。

水瓜の種の話

我等の造物主が天地と共に我等を造られた時に、末々共に放埒に流れぬやう自然律といふ律義な番頭を附けて呉れました。又一方あまりこずんで仕舞はぬやう生命といふ向ふ見ずな活潑な超自然的な兄弟をも生み付けて置いて呉れました。で、造物主の料簡では、人間も相等に常識がある以上、この自然律と生命とを鳥の双翼、車の兩輪の如くうまく操り、天地と共に自分等をも末廣なりに繁昌せしめて行くであらうと、造物主としては尤もな考へを考へました。俐巧でも平均のよく取れてる人間の大部分もその目算通りやつて來ました。處が多くの出來の中にちよい〳〵變り種が出來て、

うまい坪に嵌つて行かないものがありました。自然律を信用し過ぎて人間を幾何學の說明圖のやうに不風流に取扱つて仕舞ふ奴がある。この方も可哀相だが、尙可哀そうなは、向ふ見ずな生命の指す儘を眞に受けて自然律の掟を乘り越の一足飛びに彼岸に到しやうと藻搔く人々である。文學者のモオパッサンがそうである、畫家のヴン、ゴッホがそうで中ある。文學者の話しは自分等如きには烏滸がましいから差控へ升。ヴン、ゴッホ、は生命の指す儘に自然の約束なぞは眼に置かなかつた。ゴッホが觀る天地には不思議や杉の木の中よりも、烟管を載せた、椅子よりも、向日葵の花よりも、小雨ふる曠野の末よりも、眩めく太陽よりも、生命のうら若い緊が畫家の心臟をひつ摑んでぎゆつぎゆつと振り絞つた。ゴッホは總てを放擲して生命の手に取り付き彼の指す目標に向て飛ばうとした。杉の木を忘れて、その象の上へ生命の上騰を描いた。烟管の載つた椅子を畫面に忘れてその上へ生命の愛想を描いた。向日葵の花と稱してその實、生命の眩曜を描いた。小雨ふる曠野を閑却して生命の歔欷を描いた。眩めく太陽を利用して生命の灼熱を描いた。それ丈けでは尙生命は摑んだ心臟の手を放さぬ。生命はゴッホに自分の再現を求める丈けでは滿足しませなんだ。遂に千番一番のかねあひ。生命より海一つ經てゝ彼方なるあこがれの空、超絕、それへ向つての跳躍を彼に敎唆した。生一本なゴッホはほんとに行かれると思つて飛んだ。自然律が距てる石垣の角に頭を打つけた。ゴッホは狂死した。狂死するも無理ない話で有升。生命がゴッホを唆かしてやれと勸めた行爲は實は奇蹟といふものだつたので有升。基督さへも己が爲めには行はなんだその奇蹟を。凡夫が望む。望まずしては居られぬ繫縛の心。その同じ無鐵砲な超自然な、飛躍的な慾望をわが愛する漫畫家達は聯ねて持つて居るので有升。往昔エルサレムにある羊門のほとりにヘブル語にてベテスダといふ池がありました。之にそつて五つの廊があり升。その內に病める者、盲人、跛者、瘦せ衰へたる者ども夥多しく臥して居ました。これは神の便のをりをり池の水に降りて水を動かすことがあるゆゑ、その動きたる後。是先に池にいる者は如何なる病にても癒ゆるといふのでその奇蹟を、永い間辛抱して待つて居る人達で有升。

現代の興味の中毒者。好奇心の中毒者はみな漫畫の池の周圍に蝟つて一意專心、何時かはその癒されざるものを癒し

て貰ふ奇蹟が下るのを池の波を渇望して待つて居るので有升。兩國とみつるの二人も只今渇望し中で有升。

さて二人は竹川町の角まで來て曲りました。大通りの石疊の硬さが盡き、横町の春の土の柔か味が二人の日和下駄の歯をむつちりと喰ひ込みました。その快さに二人は

「ほ　ほゝう」

「ひひひひ」

と嬉しそうな顏を見合せ其處でしばらく、蹈鞴を踏み、足に泥漿をさせて居ました。

角が白亞の洋館で、それを人間の顏にすれば顳顬(こめかみ)に當る横の面へ、洋酒の廣告ビラが貼つてあり升。廣告の文句に

「文明の紳士はその能率を増進する爲め晩餐の卓上必ず▽▽▽ウイスキーの一瓶を備ふべし」

と書いてある。同じ店の頰つぺたに當る部分に、これは滋養液の廣告ビラが貼つてあり升、その文句には

「酒精は國民の血に毒を投ずる猶探也。愛國の士は須らく酒杯を抛つて、▽▽葡萄液を購へ」

と書いてあり升。

この矛盾の勸告を平氣で顧客に與へ居る、洋品店の硝子戸を透して中を伺ふと、其處は清涼飲料を客に飲ます場所になつて居て清げな卓に新婚の夫婦らしき者が、ソーダ水のコップへ自分相手の別ちなく麥藁の管を突込んで

「お前のソーダの方が甘(あま)く作つてあるさ」

「いゝえ。貴郎(あなた)のソーダの方が甘くつてよ。」

と眼に媚(こび)を湛へて言ひ爭つてる。若し求められて彼等に私が一挨拶を與へる事にならば、恐らく私は次の如くに申すであらう。

「ソーダが甘いのでは無い。お前等が甘いのぢやなからうか」と、

洋品舗の次が下駄屋で有升。桐の柾特別上等二十七圓六十八錢也といふ奴が、獨樂のやうに廻る仕掛けの圓い硝子板の

上へ載つて、きりりやきりりと廻つて居升。通行人は吃度この陳列窓の前へ立ちその二十七圓なにがしの下駄を見ると眼を見張り升。それから現在自分の穿いてる後齒の減つた泥下駄と見較べて、雌雄を決する時に於ては、到底勝算覺束なしと決定し、氣を更へてふらりと立去り升。

その隣が貸事務所で有升。入口兩側の壁に大小、金箔、眞鍮、鐵いろ〳〵の會社の看板が掲げて有升。看板の大小は勿論、中の會社の風袋の大小に正比例しません。私に私自身の觀察を申上れば寧ろ貸事務所の看版の大小は中の會社の信用の大小と反比例をするやうで有升。

その隣が小料理屋です。界隈の勤先へ勤むる腰辨氏のうちで、少し毛の生へたのになると生意氣に成升。腰辨氏の名に背いて辨當を持つて來ません。そういふのがこの家で腹を作り升。小料理屋でもその邊の呼吸はよく飲込んで居て食事料は必ずポケツト、マネーの引受額以下に見積つてあり升、謂はゞこの小料理屋は腰辨當の凝結したもので、あり合せて晩酌の凝結したものであり升。

光琳の桔梗を染め出した紺ののれんが春風に煽られると、小料理屋の臺所から物の香が送られて二人の鼻を掠めました。時は午後四時です。黄昏の藍翳が晝の黄の上に暈けかゝつて間色を呈するまことに氣忙しなくも味氣無い時です。二人は鼻をぴこ〳〵させましたが兩圓の鼻は高いが見てくれ程利きません。只今香を嗅いで、酒が飲み度くなつた許り、口をぴちやりと言はせ、頸を一つ獅齒めました。みつるの鼻は丸い分厚な肉附に似合はず、動物的な嗅覺の鋭敏さを持つて居ました。只今の物の香を嗅いで彼は急に眼を光らせました。

物の香の流れは三種の纏れより成立つて居り升。里芋を煑上げた朴直な香ひが本流の幅をなして居り升。これに注ぎ込んで粘着力を持つ年増女の濃情のやうな、美味過ぎた迷惑な香が鰆を照燒にする香であり升。最後に田舎ものゝ親切のやうな胸に重くもたれるが、手堅くて野性のある、それは田樂を燒く味噌の香ひでありました。

まだ山椒の芽は出なからう。然らば木の芽田樂とは行くまい。只の味噌を塗つた駄田樂を今頃喰ふ奴は、

『うふ。こいつあ妙だ』

齒が無くて餘のものの食えぬ――そうだ

『おい。兩圓、桔梗屋に、毬田が來て今駄田樂を誂へてるぜ』

『本當か』

と兩圓が髓を突出し口を尖らして額を寄せて來た。その額を拭き消すと、今度はこいつあどうやら一杯有りつけたといふ、にやく笑ひが下から押へても押へても込み上げて來る。二人は聞えよがしに桔梗屋の前を高聲に口慣れた唄を唄つて通り升。

『なんだあの野郎、柳の毛虫、拂ひ落せば又縋る。チャカホイ』

『來るか來るかと川下見れば、川原よもぎの影ばかり。チャカホイ』

兩圓が文句を唄へばみつるが相柏子を取る。みつるが唄ふ時には兩圓が。斯くて最初目には、目的の魚は釣出されなんだ。引返して再度のチャカホイを柳の毛虫までやつた時に桔梗屋の門口ががらりと開いて、出て來た顏は紫の錠継紅色のネクタイを結んだ麴田甫だ。そしてその麴田が

『おい。入れよ。僕、居たんだよ』

と、迷惑と懷かしさとこき交ぜてにつと笑つた口を見ると、成程齲齒で前がすつかり有りませんでした。

漫畫家の麴田は仲間中でさびしい側の男です。少年の時分より家の不運に心の芽を摘まれた。横の方から新らしく芽を出して見たが今度も生活の慘苦で干乾びて仕舞ひました。それからは無口で、他の漫畫家同様有り合せの生き方をして居升。大概のものに興味を失つた末遊戯だけにその餘燃を保つて居る。理由は遊戯は熟練の度合ひに應じて正直にその結果を見せて呉れるからと申すので有升。少年の時も青年の只今もせめて寄せる心の十分の一の愛でも人なり仕事なりが酬ひて呉れたなら彼はこうも思想に對しても感情に對しても無口になりはしなかつたでありませう。今は環投げ遊び、

智惠の環、玉ころがし、さういふ幼ない子供の持つ手遊道具を寄せ集めて日曜の休なぞには一人で寂しく遊んで居升。

こつちの熟錬の度合ひに應じて正直に成績を見せて呉れる智惠の板、玉ころがしを、僅に信ずるに足る相手として師に寄せる愛親に寄せる愛を傾注して居り升。彼は永らくの悲境に脅かされ、非常に用心深く有升。言葉に現れては、決して肯定する詞を吐きません。

　多分何々したやうです。多少何々する傾が有升。

といふのが口癖になりました。ある夏休みの事で有升。彼は彼の友人の漫畫家と總州勝浦へ遊びに行きました。二人は海水浴で游ぎました。調子に乘つて存外沖へ出て仕舞ひました。處が毬田は游ぎは達者でありません。歸りには疲れてあわや溺死しかけました。この生死の際にも彼は彼の友達に向つて波の底より言ひました。

『多少危險になつた。助けて呉れ！』

と、以來毬田の多少はいよ／＼仲間で有名なものになりました。

　桔梗屋の中二階で、三人の酒は大に彈みました。兩個の心熱的興味の追求は酒の座にも現れて酒を盃の甲良へ注いで飲んだり。鼻の穴から酒を吸ひ上げて見たり頗る目まぐるつたく有升。そして何をやつても

『ちよと、面白いのう　鼻』

とみつるの頭を逆に撫で上げ升。鼻と呼ばれるみつるは、その丸い鼻先を眞つ赤にして酒を飲み始めの時から

『どうも今日は身體の具合ひが惡ひから控へとくんだ』

と自戒を加へ乍ら一杯一杯又一杯、段々飲んで行つて大機嫌になり

『さア、矢でも鐵砲でも、ら、さアらもつてこふわ／＼／＼』

と云つた後が急に眞顔になり

『どうも、やつぱ、やつぱしどうも、かからだの具合ひがわるわるいぞ。もう控へるだ／＼』

とやつて居り升。毬田だけが日頃の無口以上に無口だ。彼が醉つて來ると多少眼が据つて人の笑ひに相槌打つて笑ふその時、例の齒の無い前の齒莖の間から隱見する舌の丸い先きが、可成り列座のもの丶心を柔めるのだが、今日はそのやうな事も無い。加へて時々溜息をつき思案顏は、毬田として開闢以來無い圖だ。眼敏くみつるが見付けてほじくり出した。

『毬田君、今日は變んだぜ。心配すんない。どうも無理に散財かけて濟まんが、又そりや返濟す時節もあるといふもんだ。まア、君、今日は久し振りだから愉快に一つやらう。まア一盃獻せよ』

『いや勘定の心配ぢや無いんだ。金は多少あるから安心し給へ』

『でもいつもより、よつぽど蒼く沈んでるぜ。何か新案の智恵の板が解せないのかい』

『ハ丶丶、そうぢやない』

『ぢや何んだい。兩國、貴樣も少し訊いて見ろ』

『毬田、君どないしたか。えー。ちよと言へよ。ほんのちよと言へよ』

『多少言ひ惡いが、その、今僕は多少戀をしてるんだ』

『何だ。戀をッ』

『戀!』

二人は期せずして立上り手をメめた、

『イヨッヨッ、ヨイヨイヨイ、ヨイヨイヨイ、ヨイヨイヨイ、ヨイ(この拍手を二度繰返へして)やアお目出度う、それで相手は感じてるのかい』

『多少感じてるやうだ』

『で何とか當つて見たのか』

『い丶や』

「判らんで感じとるとは無線電信みたいだな。一體誰かい。言へよ。言へよ」
「君達も知つてる人だ」
「知つてる人!? 判らん。言へ」
「實は松花庵の揚貴妃さ」
「エツ」
「フーム」

松花庵といふのは築地にある普茶料理だ。おやぢが食道樂で相當の身上を飲み潰し食ひ潰し、それから永らく日本國中を食行脚に廻り、支那へも渡り黄檗の普茶料理に出逢つて、始めて料理の上で生死の大事を了畢したと稱して居る。時のもの以外の所謂走りものや、暖室ものを決して膳に使はぬ。それから自分が家で喰ふ朝晝晩の食事の献立と同じ數の品を客にも出す。いくら望まれても以上には出さない。このおやぢが妙な因縁で漫畫家の一人に惚れ込んで、始終出入りをして貰つて居る。その友達といふので他の漫畫家も出入するやうになる。おやぢは漫畫家には眼が無い。技倆があるんだか、無いんだか、どんな畫を描くのやらそんな事は一切吟味せずに心から歡迎し、有り合せの品で饗應して呉れる。湯婆と推茸に、高野豆腐位な淡味を膳に控へて侑へ、氣の少ない庵の庭の踏石に生へた苔の花に、氷雨ふりそゝぐ景色を眺め乍らものさびた酒を汲む。たまにはよい。庵の女中の外に、親戚よりの預り娘が二人ある。これを出入りの漫畫家達が符牒をつけて居る。瘦せた方を西施、肥つた方を揚貴妃。何れも名前の本家程には行かぬが相應に醜からぬ代ものだ。娘達は多くは家政向の見習ひをやつてるが、客が立て込んで來ると少しは女中の手傳ひもしてやる。只今麹田が多少戀をしてるといふ相手の揚貴妃とは、さつとこんな工合の女でありました。

兎も角、相手の心を探る手段を施すのが先決問題だといふ事になりました。

三人が額を鳩めて眞劔になつて相談を始めた。顔といふ奴が元來移り氣な何處に本性のありとも知れぬ賴み甲斐無い

曲ものだ。たとへば兩圓にしろ、みつるにしろ、普段世間にむきつけて晒して居るのは、苦笑か、冷笑か、嘲笑か、兎に角、畸形(かたわ)な笑ひにその筋肉を痙攣さした變態な顔だ。毬田もその友人兩圓、みつるの顔として馴染つけて居るのは、矢つ張りこの笑ひ歪められた偽惡的な顔だ。處が今毬田の眼の前へ持ち出された二人の顔を見ると驚かない譯にはゆかぬ。ほんとに友達に同情して相談に乗らうといふ血の氣の通つた。まごゝろある、父母未生(みしやう)以前、祖師西來の意のある、浮世の塵に染まぬ、自然の親にその頸を繋がれぬ、神のやうな顔であつた。こんな有難い相を二人が隱し持つとは恐らく子供の時代を知る双親以外、誰も無からう。今は兩圓の間(ま)を離してついた目尻の下つた眼も、みつるの丸い赤い鼻もその形その儘にして、尊い二人の茶色と鳶色の瞳からは、エーテルのやうな傳波性を持つ暖い光が放たれ、それがこつちの懐に入ると、七彩の裳をひいた天女と現れ、心臓を大事に抱へ取つて柔い息を吹きかけ、外皮の皺の寄つた所を撫で延して呉れた。すると、どうして呉れるといふ快い迫つた壓迫が頸の兩筋から後頭部へ込み上げて來た。快い壓迫の先には羽毛のやうな輕いものがついて居て眼球の後の方を二つ三つ弄(なぶ)つた。澁い眼に俄に潤ひを持つて來た。電燈の灯がぼつと霞んだ。德利も、盃の赤い甲良も、ほうれん草の浸しものゝ綠も、潤ひの中に溶けあつて掻き廻した繪の具皿のやうな景色になつた。毬田は十何年振りかの涙をぼたりぼたりと、右の眼のは茶ぶ台の上へ、左の眼のは榮螺のつぼ燒の殼の中へ落した。毬田は泣聲をわざと堪へて、つき放すやうに言つた。

「やい、眞面目になるなよ、そんな顔をするとお前達の顔もみたいで無くなるから。普段の顔をして呉れ、普段の顔をハゝゝゝゝゝ」

笑ひ聲は裾を引いて嗚咽の曙染に暈け込んだ。

相談が整つたか元氣づいた三人は桔梗屋の格子を明けて町の灯の中へ染りに出た。電車へ乗つて駿河臺下で下りて其處の支那料理店から鹽煎りの水瓜の種子を買つた。明日を期して二人に裾別(わか)れた毬田は種子の入つた袋を大事そうに抱て青山の家へ歸つた。

毬田は文明批評家の酔亭の離座敷を借りて住んでる。毎晩歸りが遅いものだから酔亭の家ではいつも表門も潜り戸もさんを下して仕舞ってる。で毬田は室を分って住んでるこれも漫畫家の山上てこ變と工夫して、其高い石塀を越へる爲めに繩梯子を一つ用意した。繩梯子といっても赤穂討入りの浪士が吉良家の塀に用ゐたやうな立派なものでは無い。其に鈎だけは確りついてゐる一本の棕櫚繩の丈夫なのに間隔を置いて足がゝりの結び目を作つた許りだ。毎晩これで塀を乘り越へ牡丹畑の中を通つて離れへたどりついて寝る。翌朝は出しなに繩梯子をそつと持出して今夜の用意に塀外の樫の洞に隠して置く。誰が先づ歸つて塀を乘り越へたものが後から來る爲に好意を持つて居る晩は、又その繩梯子を塀外へ投げ出して後から來るものゝ便利を圖つて置いて呉れるが、先の奴が後の奴に好意を失つて居る晩は、自分が乘り越へた繩梯子をその儘手繰り上げてさつさと離れへ持込んで寝る。後の奴は樫の洞を探して見ても無い、其處等の大地を這つて見ても手先に見付からぬ。斯る時はゝあ入つて寝た奴今日は俺れに感情を害してゐるなと始めて感付く。明日は一つ相手の機嫌取りに一杯飲ませてやらなきやなど思ひつゝ、あけ方まで塀の周圍をぐる／＼歩るき廻つて表門の明くのを待つ。謝蕪村の句に

明月や池をめぐりてよもすがら

といふのがある。古來この句を耳にした日本の藝術家も數多い事であらうが句意の眞實をおくびの出る程身體の上に味めさせられてるのは、恐らく自分と、てこ變だらうとこれは毎度毬田が友達に向つて申す味噌だ。さり乍ら彼等と雖、蕪村の句意を味ふより床の中に入つて暖く寝る方が大正の今日切實に感ずる愉悦らしく、二人の友情が少し仲違ひになつてる時は、双方先手を打たう／＼と思つて歸りを急ぐ。友達仲間からは、てこか毬田が歸りを急ぐ時は吃度二人の間が圓滑を缺いてるのだと早速にこう斷案を下す。

序ながら文明批評家の酔亭と及びその家族なるものが頗る呑氣な事だ。閉ぢた表門を蹂躙して入る大の男二人を當然な事の様に思つて平氣で居る。何處からか入るのだらう位の想像さへ加へず毎朝酔亭が自分で離れへ起しに行く。

『おい。起きろ――。味噌汁が冷めて仕舞ふぞ――』

この家では日曜の朝餐の獻立は、必ずオートミルに半熟卵と決まつてるのに矢つ張し醉亭は

『味噌汁が冷めて仕舞ふぞ――』

をやつてる。煙草好きで酒好きの醉亭は自分が毎朝の味噌汁を樂にしてる。あの熱いのを飲むと咽喉につまつた煙草の脂が溶けて、ゆんべの胃の腑の酒が確に中和されるのが判然わかると云つてる。醉亭が一番心を脅される丈は、異國の成金文明の輸入でも無い、小乘的個人主義の害毒でも無い。床の中でお味噌汁が冷る消息を聞く事だ。取つて以て離れ座敷の二人を脅す刀に用ゐた。醉亭が宿醉で到底頭を擡げられない時は六つになる、みよ子が同じ刀をえつちやらおつちやら擔いで脅しに行く。

『もし、てこちやんに毬ちやん、起ないの、おちゆけが冷めちまつてよ、お太陽さまでお尻が焦ちまふ時分なのに』

お太陽さまでお尻が焦げちまふといふ警句はこれはお母親が毎度やるその模倣だ。

毬田が水瓜の種子の袋を抱へて歸つた晩は無事に堺が越せた。離れへ入つて隔ての壁の穴から覗いて見ると、てこ變は眼を赤くして活動寫眞のフィルムの新凸坊畫帳映畫の下繪を描いてる。これが近頃の彼の仕事だ。毬田は優しく言つた。

『てこちやん、勉強だね。明日松花庵へ行くからそしたら西施君に、貴女の爲めに勉強してるつて云つてやらう』

すると、てこが嬉しさうに溶けさうな鼻聲を出して言つた。

『よせよ、よせよ、眼がなほ惡るくなるつて彼女が心配すらい。よせよ』

持つて行つて借りる話

翌日誘ひに來た兩圓、みつるに連立つて毬田甫は松花庵の門を潜りました。打水した踏石を拍子面白く拾つて行つ

て、古雅な手水鉢——卵形の右を苦造な卸をした天邪鬼が捨いで居る。その天邪鬼の顔が誰によくてこ變のに似てるので有名な——で手を滑めて八つ手の葉を掻き分けつく運ひから茶席へ通る。必ずしも茶席の掟に從つては居ないが、茶の心持だけは建て方に香はしてある放小亭。床に卍庵彈師の水急月不流の軸、茶の花が抛り込んだやうに備前燒の變詳もない花瓶に生けてある。松花庵のおやぢは漫畫家連の爲めにこの小亭を開放しこゝへは案内なく出入して、飲んだり食つたり太平樂を並べたり畫廊をしたりする自山を興えてある。たゞおやぢの潔癖として手先の汚れたのを蛇蝎の如く嫌ふによつて、その癖丈けは通してやらぬとひどい目に遇ふ。おやぢの御託はいつでも。

「清水の次郎長つて元俠客の親分は偉かつたよ。その時分何でも喰つぱぐれの奴が親分の慈悲深えのに附け込んで、みんな親分の家の往來で行き倒れの眞似をしやがつた。始めは親分は默つて引取つてやつたが、段々、數が殖えて、仕舞ひにはそうも成り兼ねた。で、子分に言付けて以來、行き倒れの眞似をする奴は尻を一々ひん捲り褌の清潔な奴丈を引取つてやる。汚ない奴は尻つぺた一つどやかして追ひ出す。すると流石は次郎長の考へた丈けある。どう工面しても褌だけは清潔なのを締め度いといふ心掛け位の奴は吃度氣が端折つてゝ救つてやつた後も使ひやうによつては相應に役に立つたそうだよ。」

こう言ひ乍らもおやぢは窪んだ小さい眼を尖らして、相手の指先をじろり〳〵と見廾。それでも横着して立たぬと役者の尾上松助のやうな顎をがくんと一つ前へ突出して

『おまはんそんな汚ねえ手でよく大事な畫を描けるね』

と今度は眞つ向に踏み込んで來る。いかな不精の漫畫家も、いや〳〵天邪鬼の手水鉢へ手を洗ひに行かざるを得無い。

「あら、三人で、よく來たのね」

お中の知らせで揚貴妃の豐頰が出て來た。手に瓢なりの德利と土筆の佃煮とを運んで來た。坐る。兩川の顏を見るや矢庭に袂を振り上げた。

『およしなさいてばよ兩さん、又眼を細くして妾を見てさ。貴君いらつしやる度びいつも妾しの顔許り見るんですもの、怒つてよ、見てもいゝがそんに眞向に見るものぢや無くつてよホヽヽヽ』

兩圓はいつもモデルを遣つて、その大局の感じを取る時にする癖の眼を細くするのをやめて、暖けた失徴を一つした。

『や、濟まない、ちよとその、デッサン(下圖の輪畫)を見せて貰つてたんだ。揚ちやんの頰つぺた、いゝデッサンだ。や濟まない』

擧手した手を前へ延して拋物線を描いて疊へ落すと、その指先で猪口を摑んだ。取上げて揚ちやんの鼻先へ突出す。

『揚ちやん、これ何容れるもんだらうなア、さあ何を注いで容れるもんだらうなア』

『おほゝゝ。兩さん相變らずもう始めたのね。催促しなくつたつてほら注いだげますよ』

揚貴妃が瓢なりの德利を取出げて『熱ッ』と云つて一度びは丸い指先を耳朶へ持つて行き顏を顰めた。今度は用心して袂を覆ふて取上げた紅の八つ口の綻びの隙より白い腋下の肌が菱餅形に見えた。初より苦しそうに息を詰めて堅くなつて坐つて居た毬田がちらりとこれを見て取るや、眼を瞑つて唾を咽喉へ飲み下した。

眞晝の春の日ざしが障子骨の碁盤目へ暖かな椽の陰で不規則に椿の葉、南天の葉、ちやぼひばの葉のまぜ模樣を置いた。酒の香が薰じて、虻の羽音がぶーん、と聞える長閑さ。揚ちやんが嬌音を弄する。

『今日はうちのおぢさん、釣りに行つたのよ。妙でしよう。此頃時々行くのよ。鰹節の出汁だつて生臭いつて遣はせない和尚さんが、妙ぢやありませんか。何でも深川の木場とかへ行くんですつて。そこの材木の上へ毛氈を敷いてね座布團を敷いてね。風が寒いからつて脊中へ歌や詩を書いた貼り交ぜの小屛風を建て廻すんですとさ。オホヽヽお大名の乞食か乞食の殿樣だわね。それから携帶泥爐でお酒とお茶を煮乍ら竿を下すんですつて、その竿が大變なのよ。お茶箸位の長さのを何本も繼ぎ合せて、蒔繪が立派にしてあるのよ。一番先の絲を結ぶ處は鯨で出來てるのよ。それから銀の錘をつけるの。絲が切れて一つ錘を落すと二十五圓の損だつて。うちのお客さんの三人前のお勘定をふいにして仕舞ふ譯

ね、其癖ね。でもおぢさんは威張つてるのよ鱷りめぐつて成金の金庫へ窮命させられるよりやあ、木曾の川底に沈む方がどの位金も悦ぶか知れないつて。それから、可笑しいのは、おぢさんは釣つた鮒を一尾も持つて歸らないのよ。其様今日は何尾釣つた、今日は何尾釣つたつて自慢するのよ。それぢや釣つたのどうするのつて訊いたらね。一尾釣れたら『いやどうもご苦勞』と頭を撫でゝから川の中へ又逃がして遣るんだつて、何尾でもそうするんですつてホヽヽ、そいぢやいつまで經つたつてお土産に持つて歸れない譯ね。ホヽヽそれからあんまりくだら無いから、何故そんな釣方するのつてお西施ちやんと二人で訊きましたらね。『おいらは、釣の遊びをしに行くんで鮒の命を取りに行くんぢやねんだつてそれから、そんなに魚に同情を持つなら始から釣なぞしない方がいゝつて、そ言つてやつたの、するとね、人間に釣がし度いつてえ慾があるのを殺すのも佛に對して濟まない事なんだつて。魚と生れたからには命を取られない限り人間の釣の相手になり、口に鉤が刺さる折き位堪へるのも、魚と生れて來た罪滅しにいゝんだつて。隨分勝手な理屈ぢやないのホヽヽヽ』

揚ちやんは一笑に附し去つたが、三人の漫畫家の心には、折角の長閑な茶室の春の中へ生々しい黑血の滴る疑問の死屍を二つ抛り込まれた感無き能はなんだ。

一つは、逃げるには多少其他を傷けねば濟まぬ人間の慾求なるものを如何處置すべきや。二は、人間以外に生み付けられたものゝ意義、と悲しみ。

三人は硝子のやうに眼を冷く見張つて、默つてぐびぐび酒を飲んで考へ出した。そしてそれを松花胚のおやぢの遣り方のやうに解決していゝものかどうかに迷つた。

何やら濟まぬその場の仕儀になつたのを見て取つた怜悧な揚ちやんは、早速に局面展開を闘つた。

更に熱い酒とご馳走の二三品、野菜のかき揚げ、湯婆のうま煮、あんかけ豆腐、とを齎し歸つた彼女は、一わたりみんなの盃へ酒を注ぎ添へて

『おぢさんが居ないと、ほら、こんな女の喰べるご馳走許りよ。よくつて。お酒だつておぢさんが居ないとほんとにお燗番がずらうになつてこんな持てなくなるやうな熱さにするのよ。こんなのをお客に出す處でも見付かつてご覧なさいおぢさんに徳利を庭へ叩きつけられちまふから。――そりやそうと此頃てこさんちつとも家へいらつしやらないのね。眼はどうなすつて。』

『追々惡るくなる許りです、それで居てお西施ちやんに、指環を買つてやるんだつて夢中になつて凸坊畫帳を描いて居ます。時々便所へ行くのに白い紙を見詰めた眼を急に暗い廊下へ轉へるのですから、先が見えない。壁虎のやうに壁を傳つて行き升。』

『まあ。可哀そうに。本當にあの方は熱心ね。あの方に想はれたら本當に恐い樣ね。でもあの位想はれなけりやあ、女に生れた甲斐は無いわ』

無心か有心か、かふ云つて揚ちやんはぢろりと毬田の眼を見た。毬田は周章てその訴ふる如き瞳を天井へ外らした。テレ隱しに空咳を二つ許りした。揚ちやんは此處で聲を一段と秘めて

『それで貴君がた／＼てこさんがお西施ちやんを想つてるのはよくご存じですが、お西施ちやんがてこさんをどう見てるか知つてらしつて』

『アハヽヽヽ』

『アハヽヽヽ』

と兩圓とみつるは返事の代りに大口開いて笑つた。毬田も流石にニユツと唇を歪め齒の無い齒莖をちらりと出す。

『お笑ひになるの、お笑ひになるのは、てんから問題にならないといふ譯なのですか。全く違つてよ。お西施ちやんこの頃、眞實に、てこさんの事を想ひ出してよ。今日も寢てるのよ。あの何處にも取得の無い人前に出せもし無いやうな男がどうしてこう心にこびり付いて離れ無いのだらう。あんな天邪鬼をこうもいぢらしく思ふなんて自分で自分の心が

口惜しいつて、さつきも中二階で泣いてゝよ』

『ウヘー』

『そいつあ、本物の戀煩ひだ』

兩圓とみつるは頗る興醒めた顏をしちまつた。龜田は眼の前に彼女を戀してる人を置き乍ら人の戀語りを平氣でする彼女の離れた氣持ちを恨めしそうに見遣つて又下を向いて仕舞つた。揚ちやんは更に說き出す

『あなた方は始めいゝ冗談のつもりでお西施ちやんと、てこさんを結びつけたのでせう。第一はとても本物にはならないから、嫉妬が燒けなくて安心だとそれからあなた方ご連中のいつもの癖の何か美しいものがあれは蛇度反對な醜いものを見付け出して配合しなければ氣が濟まぬ癖と、それからお西施ちやんを嫌がらせる惡巫山戲も入つて居ないとは申されますまい。處が人間同志は生ものと生ものとですよ。それに、てこさんは女から見て實に不思議に牽きつけられる魅力を有つてる處があるのですよ。成程てこさんは丈も短く、人間が馬鹿で、評判の通り天邪鬼の顏です、處が女のみんなとは言ひませんが女の大部分は、たゞの樂しみよりは苦しみの中より見付け出す幽な樂しみ。たゞ可愛がられるよりは一遍苛めて貰つた後の可愛がられ方。たゞの甘みよりは苦酸を經た後の甘み、さういふ方をどの位悅び撰んで好くか判りません。女がふつふつ嫌氣がさすのは表面だけの、動か無いお人形樣みたいな、薄つぺらな顏や性質の男です。ですからご覽なさい。新聞に出た寫眞を見ればこんな立派な亭主もあるのに、何故又こんな佛頂面の運轉手と生命がけにまでなつて出來たらうと思ふいゝ所の令夫人があります。一方美男鑑の大關にも出てるやうな男が、どの藝妓にも振られて都新聞の三面記事の定連になつてるのが有升。顏でも味のある顏、てこさんの顏は理由無くして苛められ、酸苦を嘗めさせられ、厭制されてそれを天性の生一本がちつと堪へて居る顏です。女が見ると男の苦しみが醜ひまで露骨に出て居て惚々します。

淨瑠璃の中の道德を聽くやうにてこさんの顏の肉に喰ひ入る繫縛の絆の美はじさが嘸痛痒ゆい氣持ちであらうかとお

察すると女の身が慄へ出します。そして是非共でこさんをどうかしてやり度く成り升。斯ふして女は愛を引出され升。その上でこざんはあの樣に見榮も外聞も無く、惚れた弱身をすつかりお友達にも相手の女にも曝け出して迄一生懸命になつて居升。お西施ちやんで無くても、追々本氣にならないでは居られないぢやありませんか。』

揚ちやんは大氣焔を擧げた。冷たくなつた盃を一寸甞めて、嫌な顏をして盃洗へあけ、改めて熱いのを一盃飲んで扨、毬田へさした。毬田が大事なものをでも拜領するやうな形で盃の縁を德利の口へかち〳〵當てゝ慄はし乍ら酌をして貰ふのを不甲斐なさ相に、横眼で見つゝ

『それに貴君がたも責任があるのよ。嫌なものでも二つ繋いで置いて傍でやい〳〵あんまり五月蠅さく言へば、意地にかゝつてだつてどうにかなつて見度くなるぢやないの。兩さんもみいさんもどう思つて』

兩國とみつるは一言も無く默つてお辭儀を一つして頭を掻いた。

『ほゝゝゝゝ』

朗らかに笑つた女は、此處で伸びを一つした。南天の細かい葉を押分けて猫が障子に近くらしく膨れた色の薄い影が輪廓を縮めて段々濃くなつて行き、仕舞に身體の毛が障子の紙に觸るとぢやり〳〵と音を立てた。すると其處の紙の破れより三毛猫の片眼が怪訝らしく中を覗いのたが見えたが、何も鼠に似るものも居ないか影は又膨れて色を薄めて行き離て葉蘭の蔭の中へ消え去つた。夕方に近くなつたか少し寒みが身に襲つて、悲しい豆腐屋のラッパがぷう〳〵と聞えた

斯くては果てじとみつるが毬田に眼まぜをする、それと察して毬田が洋服のポケットから昨夜の水瓜の種子を取出すそれを引つたくつてみつるが

『揚ちやん、これ知つてる。』

『いゝえ』

『これ支那料理で遣ふ水瓜の種なんだよ煎つてあるんだ。種子の尻をこう持つて頭を竪に前齒の間に狹んでこちんとこ

うやるとほうら皮が奇麗に二つに割れるだらう。そこで種子の中身を舌へ吸ひ取つて食べると香ばしくておいしい。支那人はどんな身分のいゝ奴でもこれを少しも口から離さないで、始終こちん／＼やつてる。支那の芝居の土間なんかこの皮で一ぱい汚れてるんだ。揚ちやんやつてご覧』

揚ちやんが

『そう』

と素人臭く黑い種子を美くしい前歯に當てゝ、見ると存外器用に割れる。

『あら、ま、割合に氣持ちのいゝものね』

興が乘つて來た樣子だ。

兩國に尻を突かれて毬田が勇氣を起した揚ちやんの心を察取する術策は收めてこの一手に在りと思ふものからその水瓜の種子を自分も取り上げて特に揚ちやんに見えるやうに前歯の無い歯莖へ當てゝ破らうと苦心慘憺して居る。

『うつふ、はツはツはツはツ、うつはツはツはツ』

突然襖の蔭から男の笑ひが起つた。

それを聞くや揚ちやんも耐へてた詰め栓が除れたやうに

『ほつほつほつにつ　おつほつほつほつ、あゝ可笑しくつて苦しい、おつほつほつほつ』

横腹を押へて其處等中を笑ひ轉げた。

襖を開けてこれも同じ漫畫家仲間の大殿紫仙が出て來たので、この場の笑ひが說明された。それは大體次のやうであり升。

昨晩丁度兩國とみつると毬田が桔梗屋で密謀を凝らし居るその隣りの室へ入つて來たのが大殿紫仙でありました。紫仙はすつかり密謀の樣子を聞取り酒食もそこ／＼其晩は三人に判らぬやうにこつそり先へ歸り、今日は魁して松花庵へ

驅けつけたので有升。水瓜の種子を前齒の無い毬田が食べやうと藻掻く。その樣子を如何なる態度で、揚ちやんは傍で觀て居るか、若し揚ちやんが毬田に對し不親切な心でたければ

『これ妾しが破つたのよ。不潔くなかつたら中身だけ取つてお喰りなさい』

位な處はあるだらう。毬田の辛苦を默つて揚ちやんが傍觀して居たらも早脈は無いものと諦めさすより他に途は無い。

この筋書を携げて三人の役者が舞臺へ乘り込んで來た。そして筋書通りとぼけて(實地に)始め出した。紫仙は始め揚ちやんに含めて、實は徹頭徹尾三人の狂言に乘つて揚ちやんをも終始さす積りであつたが、既に知られて仕舞つてる艮の在所を決して相手に氣取られ無い積りでとぼけて掛けて行く、その獵師の可笑しさに吹出して仕舞つた。隨分笑ひ轉げた末漸く腹が癒えたか揚ちやんは紫仙に

『貴君あんなに笑はないつて誓つて置き乍ら先に吹出しちやつてさ』

と言つて美しく睨めた。

兩國とみつるは

『けつ、こいつあ一杯喰はされたなア、さうか紫仙がゆうべ隣りで聞いて居たのか』

と頭を掻く位で濟んだが、毬田は、その前では硬くなる程想つて居る女に、こつちの弱身を知られその上巧みの裏を掻かれた辛さ恥かしさに、さらでだに酒を飲むと昂奮し勝ちの彼の神經は彼の憤しみを煽つた。蒼い顏を擡げてぢつと揚ちやんを見据えた彼の血走つた眼からは涙がたらたらと流れた。

『揚ちやん。揚ちやん。この事をよく覺えてゝ下さい』

決意を示して立上り彼は障子に手をかけて歸りかけた。揚ちやんは吃驚して彼の洋袴へ轉げ付いた。

『毬田さーん、一寸待つて下さい、言ひます、言ひます、本當の事を言ひますから』

三人の友達も腕力に訴へて『いや放せ、誰がもう生きてゝ遣るもんかッ』と息を切らす毬田を押へ付けた。やう／＼取

鎮めた耳へ揚ちやんがいゝ事を私語いた。毬田がきまり悪さうにニユツと笑つて、好人物らしい例の丸い舌先を歯莖の間から現した。

事件は極めて急速度で展開する。揚ちやんも本當は毬田を想つて居たのであつた。兩圓とみつるとそれに桀仙が媒介人となつて、三人の力で出來る丈け早く二タ組の夫婦を作り上げる事に約束をした。毬田對揚ちやんと他の一と組は言はでもしるきてこ變對お西施ちやんである。

松花庵のおやぢの歸るのを待つて總ての事をぶち撒けると、おやぢはにやりと一つ笑つた。

『畫を頼んでも中々描かねえ癖にこんな事は中々手廻しが早いねえ』それから又『人の想ひのかゝつてゐるやうな娘をいつまでも家へ置いとく譯にはいかねえ。第一怨みが恐ろしいからなアは、、、』

と、毬田と揚ちやんの顔を見て

『お西施も揚も實は親元から手をついて頼まれてるんだから、縁談も俺れの一存でやつつけられるんだ。想ひ合つてるならいざこざあねえさつさと一所になつたがよからう。兩方遣るよ。關はねえから今夜からでも身體だけ持つてつたらどうだい。荷物はこれで一寸そう急にやア纏まらねえから、後で送つてやる事にして』

こうなると女の方が氣が强いから

『ぢやア今夜から行かうよ』

『そうしやうか』

お西施と揚ちやんは、支度を始めた。急ぐといつてもお化粧に取かゝると女は時間を超越する。欠伸をしては酒を飲み酒を飲んでは欠伸をして待つて居た男共が閉口し出した。毬田丈けを督促係に殘し置いて二人は表へ出た。

春の宵闇を縫つて銀座へ出た。咽喉が乾いたから最寄のカフエーへ寄つて麥酒を啜つた。それから三人は卓へ肘を突き頭を抱へて靜に街路の喧騒を聞いた。今通つて來た道にも多くの男女に出逢つた。それからこのカツフエの中にも多少の男女が憩つて居る。したが。そのうちの幾人が男は女を、女は男を、性の上に於ても、容貌の上に於ても、品性の上に於ても、趣味の上に於ても、愛情の上に於ても、相手に一分の苦情を見出さずに滿足したと思つてる程のものがあるか、無からう。大概は滿足から不足を差引いて其處にお剩錢が少しでも出ればまづ幸福な者と慰めて生きて行くのであらう。それなればそのやうな顏をしてればよいのに、滿足のお剩錢位少々袂に入れてる癖に、大滿足の金庫を背負つてる樣な顏をして他の者を不幸者らしく冷眼で見下げる。寧ろマイナスの滿足に居る奴がプラスの滿足と僞つて誇示して歩るき度がる。漫畫家には出來無い藝だ。幸にお西施も揚ちやんも正則の愛の歩み方では無かつたが、感情を僞る技巧の拙い女だけに末の見込みはある。てこ愛の爲めにも毬田の爲めにも祝してもよい代物だらう。三人はコツプを打ち當てゝ新夫人の前途を祝福した。それから瞑目して新夫等が成る可くこの際好奇心の中毒、興味中毒奇蹟病より救はれて平衡の取れた無事な生活に入らん事を熱誠を捧げて祈つた。

東京の漫畫家の團體に睡眠倶樂部といふのがあつて、會員の結婚病氣に聊の金を贈つて慰問し表敬する慣しになつてる。別段に世話といふ決まつたものは無い。世話の必要があつて世話しなけりやならない羽目に立つた人がその場限りの世話人になる、三人は早速世話人になり、倶樂部の金を預つてる鍋屋町の畫双紙問屋、鳥羽畫堂から二十圓引出して奉書で包み水引をかけた祝ひの包みを二つ作つた、それから心許りの酒肴を調へた。松花庵に歸ると、眼も覺むる許りに塗り立てた二人の女は、嬌艶な服裝をして少し苛れ氣味に待つてた。普段も醜くない代ものだがこう美裝をされると驚くべく貴重のものゝやうな感じがする。兩個が眼を丸るくして

『どう思ひ切つても、てこと毬田に遣るのは、ちよと惜しくなつた』

と云つて二人の袖で打たれた。二人の女はおぢさんに挨拶に行つて涙を滴し、化粧を繕ふに手間を取つた。女だけは悅

をかけて倅が五臺、靑山の醉亭の家へ向つた。

夜廻りの拍子木が春ながらに冴え返つて夜も一時になんなんとして居ました。案ずる如く醉亭の邸は門を閉ぢて居ました。しばらく叩いて見たが表門より玄關まで前栽を距てゝ小半町あるのと寢坊なので覺めればこそ。五人合議したが兎に角毬田の先導で塀の討入りを試る事に致して倅を返しました。今夜は、てこは機嫌よく歸つたものと見え、繩梯子を投げ出して呉れてあるのが幸で有升。慣れた事とて、毬田が投げると繩の鈎が直ぐに塀の峯へかゝりました。最初女を一人づゝ渡しました。

女はどう考へても塀を乘越す樣造に作られた動物では無いやうです。文句許りわめき立てゝ腰を持ち扱ひ兼ねて居る事家鴨を屋根へ追ひ上げたと丁度同じです。よく草双紙に時次郎が浦里を連れて塀を乘越す處を美しく描いてありますがあれは大嘘です。女は危險を感じるとすぐ塀の上で四つ這ひになり何かに噛り付き度がります。時次郎も嘸四つ這になつて、塀の忍返しに獅噛みついた浦里を引離さうと思つて苦心を重ねた事でありませう。毬田はそれでも自分のものと思つて揚ちやんの醜態に愛想をつかしもせず、勞り救け安穩に越させました。お西施はみつるが引受けて越へさせましたがお西施は

『みつるさんは他人だから取扱ひが手荒くて不親切だわ』

と散々苦情を並べました。

續いて男共が越へました。一番最後の男なる紫仙が繩梯子に取り付くと十八貫五百の大兵ゆえ、流石の繩はぷつつり切れ紫仙は大地へ轉倒しました。塀を越へて問答が初まりました。

『繩を繼いで、も一遍乘り直したらどうだい』

『上の方から切れたんだから手を伸しても屆かないんだよ』

『どうしても屆かないか』

『手は繼ぎ竿や飴細工と違ふよ』

『フム困つたな』

『困つた』

『だが、君はもう此處まで送つて來て見屆けたのだから實を云へば中へ入ら無くてもいゝんだな』

『おい、おい、薄情な理屈を考へるなよ』

『いやどうしても塀を越されなきや、さうして歸つて貰ふより仕方が無いぢや無いか。こつちは祝ひの一封もあるし、酒も肴もちやんと持込んだし、大丈夫だ、僕等二人が媒介人をやるから安心して歸つて呉れ給へ。や失敬』

『おい。おい。おい。冗談ぢや無いぜ。人が折角――』

『アハヽヽヽぢやかう仕様、この正宗の瓶を一本と肴を少し帶に結んで塀のそつちへ垂らすから、それを持つて何處へなと行つて今夜の新婚の宴を張る事にして呉れ給へ』

『一人で別にか』

と紫仙は尚も不服さうに言ひましたが他に全く致し方も無い。で不承々々、兩圓が結んで下げた酒一本と鯣二枚を受取りそれから塀を越して投げてやる蛤四五箇とを拾つて

『ぢや、目出度く遣り給へ』

『紫仙さん、有難うよ、左樣なら』

『紫仙さん、おさらばよ』と分袂れた。

離れの戸を開けて入つて寢て居たてこを起して理由を話すと悦んだの悦ばないの

『本當かい。騙しちや駄目だよ。俺れも本當にするぜ。いゝか。いゝか。本當にしてお西施さんどうも有難う』

てこはちやんと手をついて小學生のやうなお辭儀を氣まり惡るそうに一つぺこんとした。皆がどつと笑つて坐が賑やかになつた。頓て火鉢に堅炭の跳ねる音、鐵壜に湯の沸る音がし出して、

『ぢやいよ〳〵式を始めやうか。其處へ一ト組とこゝへ一ト組と、僕等二人は向ひ合せに一人づゝ中間に坐るから。それから、女が先に一盃飲んで男に獻してこれを三遍やるんだ。いゝかい』

流石一生の大事と思つて、男女とも息を凝らしてやつた。新夫新婦より受取つた盃を媒介人の兩圓とみつるは受け納め、熱い奴を二三杯立て續けに引つかけた後で、やをら居ずまゐを直した。

『たアツ、たアツ、たア——かア、さアごをやア、この浦船に帆を上げて——』

『やお目出度う。次に、エーご列席の諸君に申上升。エーこれから上山家、毬田家の新婚を祝しまして兩家の萬歳を唱へ度うムい升。ちよとご起立を願ひ升。』

『兩さん本當に立つの』

『うん——』

『よムい升か。上山家萬歳ーイ』

『萬歳ーイ、ハヽヽヽヽホヽヽヽヽ』

『毬田家萬歳ーイ』

『萬歳ーイ、ハヽヽヽヽホヽヽヽヽ』

あとは餘興だとあつて亂酒と亂舞になつた。面白くなる爲めには乾度これをやらねば承知せぬ兩圓の裸踊りとみつるの、中氣かつぽれも出て新婦を呆れ返らした。やつてるうちに兩圓もみつるも新夫新婦の濃情なのに刺激されて來た。

『こりや堪らん。みつちやん何處かへ避難しよう』

から云つて兩圓は着物を着て新郎新婦の前へ出た。

『ちよと。済まんがさつき渡した嘻蝦倶樂部からの祝ひの金をあすまでちよと。その借して呉れんか』
『お金は持つてつてもいゝが、今この通いのに貴君どうする氣なの』
『まあ、そのどうするんでもえゝ。ちや、ちよと金を借りとく。やお目出度う永久に睦まじく遣り給へ。みつちやん、ちよと出掛けやう』
『まあ。兩さん大丈夫、もうちき朝なのにねえ』
呆れる新郎新婦を殘し兩圓とみつるとは表の木戸を開けて、闇の中に消えた。
あとは、深夜の森に風が當る音。遠くに汽車の線路を走る音。
一夜が明ける。
お西施と揚ちやんとは甲斐々々しく姉さん冠りして一人は障子に采配なぞかけて居る。一人は筆洗の水をしかへて居る。女といふ奴は男さへ居れば安心して置かれた所の何處にでも巢を作らうとする動物だ。
片一方に母親の下駄を穿き、片一方に草履を穿いたみよ子が例の如くやつて來た。
『みなさん。お起きなさいつて。おみよつけ冷めちまつてよ。まだ起き無いの。お太陽さまでお尻が燒付く時分なのに』
言ひ乍らひよいと見ると、見慣れぬ若いおばさんが二人働いてる。お西施と揚ちやんの方でもみよ子を見付けて椽側へ出て來た。双方の對話が始まる。
『まあ可愛ゆいお孃さんだことあなた何處のお孃さんなの』
『此處の家のお孃さんよ』
『お幾つ』
『六つちゆ』

『何しに入しつたの』

『毬ちやんとてこちやんの朝寢坊起しに。おみよつけ、冷めちまふの』

『さーう。ご親切に有難うよ。今直ぐ起して上げますからね。』

『おばちやん。なーに、何處から來たの』

『おほゝゝゝ。おばちやん離れのお嫁さんよ。築地から來たの』

『いーつ』

『ゆんべ。夜中に』

子供心にも不審に思へたか、みよ子はばた〱と母屋へ驅け戻つた。そして父親を引出して來た。

『何を言つてるんだか』

とのそ〱やつて來た醉亭も驚いた。成程若い女が二人ちやんと働いてる。

『おーい。毬田君にてこ變君！』

『何です、やお早う』

『お早うぢや無い。この淑女諸君はな、な、なんだい』

『昨宵(ゆんべ)結婚があつたんですよ。』

『へえ、そりや何處で』

『この邸うちですよ』

『ちつとも知らなかつた。一體誰れが結婚したんだい』

『えへゝゝゝ。實はね。縁あつて僕も、てこ變氏もこの二人を妻に迎へたんです。親元は貴君も贔屓な松花庵のおやぢですから安心して下さい。そしてどうぞ以後よろしくお見知り置きを』

『こいつあ驚いたな。驚いたがまアお目出度うと言つて置かう。で門がしまつてるのに何處から入つて來たのかい』

『塀を乘り越へて』

『そいつは愈以て亂暴だな。だがこの淑女諸君にそんな輕業が出來るのかい』

『なに、縄梯子がちやんと用意してあるんでさ。貴君あれをちつともご存じないのですか。迂遠千萬だな』

『ちつとも知らない』

『實は縄梯子を拵へてそれを晝は塀の外の欅の洞に隱して置いてあるんでさ。夜締め出しを食ふと塀のあそこの處へ釣を引つかけて乘越して牡丹畑へと下りて來るんでさ』

『本もの丶盜賊だ。でそれはいつ頃から始めた事なのだい。』

『三年許り前からです』

醉亭はやゝ考へて居たが軈てはたと膝を打つた。そして如何にも眞理を發見したらしく言つた。

『成程三年この方牡丹畑の芽の出が惡るいと思つたら。成程。君等が毎晩踐むせいだな』

了

改造時論

講和使の大失態

秘密外交の本尊、舊式官僚の外交はまだしも洗ふ可らざる、大失態を演じて、帝國の地位を九仭の壑底に陥らしむるに至つた。もとより、西園寺以下の使節は、勞働問題を解釋するの能力なく、資本家のお情にて勞働問題が解決が出來るものゝ如く思つて居るのが、抑もの大間違であつた。政府にても、温情主義とかを持して解決するなどと議會に聲明せる點から推して、兩者の間に何等の具體的成案のなかつたことは瞭かである。然しながら、萬事につけて、資本家を主とし、勞働者を從とする舊式の解決案は到底完全なる成果を齎らすことは不可能でもあり、又勞働者の貴重なる血と肉とは何時までも、資本家の懐中を肥す犧牲とはなり得ぬのである。勞働問題がヴェルサイユの會議に上程せられた四月十一日、牧野君の豫告演説の内容なるものは、依然として、資本家萬能の解決案であつて、その根柢は舊時代の主從關係の範圍を出でないものである。勞働力の交換を認容せざる奴隷論である。勞働者にとりて一新紀元を劃せらるべきの時、我講和委員は勞働者の總ての光明を遮止し、その要求を全然拒斥する態度に出でた。日本が生産狀態の幼稚、經濟組織の急變革不可能を絶叫して、列強に了解を求むるのはよいが、主從關係を云爲し、寧ろその美處を誇らんとするが如きは、あまりに我が國情に疎く、またあまりに勞働者を踏みつけにした暴論である。かく舊時代の思想を有する人によりて、代表さるゝ我が國民はエライ災難でもあり、また迷惑でもある。

沈默は間拔の結果

情報によれば、牧野君は我が三講和使が決定した總ての案件に對して、また必らず一室を閉して、靜思三日すると云ふことである。なるほど、帝國の地位に重大なる關係を有することであれば、お念の入つたこと

に越すことはなからふが、それがため、總ての機會を逸したとあつては、聞捨てならぬ事である。殊に日本にとりて、重大關係を有せる、勞働大憲章の成るの日自己の懈怠によりて代表的演說の機を逸したり、他國の演說者に妨げられて、片言隻句の發言をさへなすを得ざりしは、遺憾至極である。これが、牧野君の所謂自重振りとか、間拔け振りとか云ふものであらふが、我等は一場の滑稽事として、冷笑の下に默殺してよいか。これ果して誰の罪であるか。

地方官更迭の是非

古い思想の官僚が、地方長官更迭によりて自己の勢望を擴大し、自派の繩張りを廣げんとしたのは、舊時代のことゝ思つたが、また床次君によつて、少々大規模の改革が行はるゝに至つた。新陳代謝はよいことである。老朽淘汰は希望する所である。しかし馘首せられた古手と、入替つた新手の間に、どれ丈けの人物の相違、思想の懸隔があらう。唯だ新手は年が若いとか元氣であるとか、云ふだけであつて、その頭腦は舊日本で構造された、官僚學校の卒業者のみである。勞働者や、實業家から知事に任用されたものは一人だつて無いではないか。日本の社會組織は急劇に一大變化を來しつゝあるのである。このとき、依然として舊い、小型の行政官を鑄直して、間に合はせをなすが如きは未だ眼紙背に徹せざるものである。世の中はモツト深刻なる改造を叫んでおる。モツトドン底から出でた腹藝を期待して居るのである。更迭せる所謂新進者に勞働問題の勞の字の釋義をなし得るものが果してあるか

一號、二號は總ての方面に於て自重に過ぎた、穩健に過ぎた、もう世の中は赤熱、白熱で進まねば追つ付かなくなつて來た。同人も一倍の元氣を鼓して、總ての問題を深刻に、手强く突進することにする。

▲編輯局より

▲本誌は創刊匆々非常なる歡迎を受け、遂に再版を發行するに至れるは、同人の深く欣びとする所なり、今後號を追ひて面目を一新し、吾人の初志たる「改造」の勢を造り、政治に、文藝に、將た又社會的に活躍せんことを期しつゝあり。

▲第二號に掲載の豫定なりし、三浦青柳江木矢作四博士の論文は頁數不足の爲め止むなく第三號に延期することとなれり、文幸田露伴博士は勢力を『正宗と氏郷の對陣』に注ぎて、本誌の爲めに寄稿せらるゝ筈に付、潤目して其脱稿を俟たん。

▲文壇の重鎭田山花袋氏の長稿已に半ばなり若手の驍將谷崎潤一郎氏は目下本誌の爲め長編の小說執筆中に在り、新裝せる第三號は、蓋し深緑の雜誌界に卓越せるを確信する者也。

▲本號より發行所を變更し、同人自ら其任に膺ることゝなれり、故に今後直接郵送の分も、本社より直送する筈なれば、從來の發行所に御注文の讀者は、本社に其旨申送られ度し。

東京南品川東淺間臺二四六

發行所　改造社

定價

	定價	送料
一册	四十錢	二錢
六册	二圓三十錢	送料共
十二册	四圓五十錢	送料共

増大號は其時々に定價を定む

毎月一回一日發行

大正八年四月二十七日印刷納本
大正八年五月一日發行

東京南品川東淺間臺二四六
編輯兼發行者　横關利藤太

東京市京橋區西紺屋町廿七番地
印刷所　秀英舍

東京南品川東淺間臺二四六
發行所　改造社
電話高輪一一九〇
振替東京八四〇二

大賣捌所
東京堂　上田屋
至誠堂　北隆館
東海堂　良明堂

注意
新刊圖書寄贈廣告其他編輯上に關する用件は凡て改造社へ御申出で下されたく候

(改造第一卷第二號)(大正八年四月二十七日印刷納本、大正八年五月一日發行)

東京秀英舍印刷